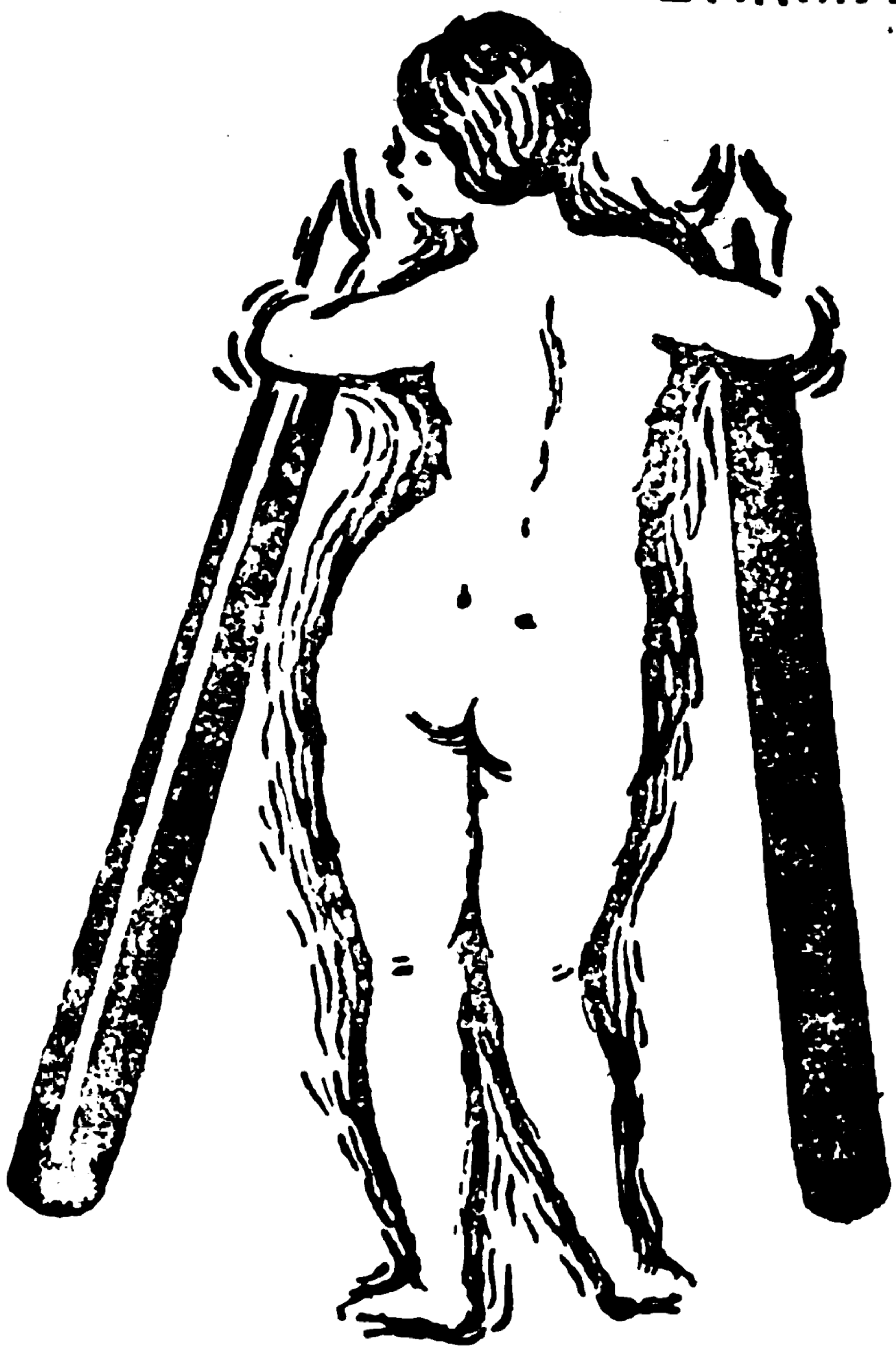
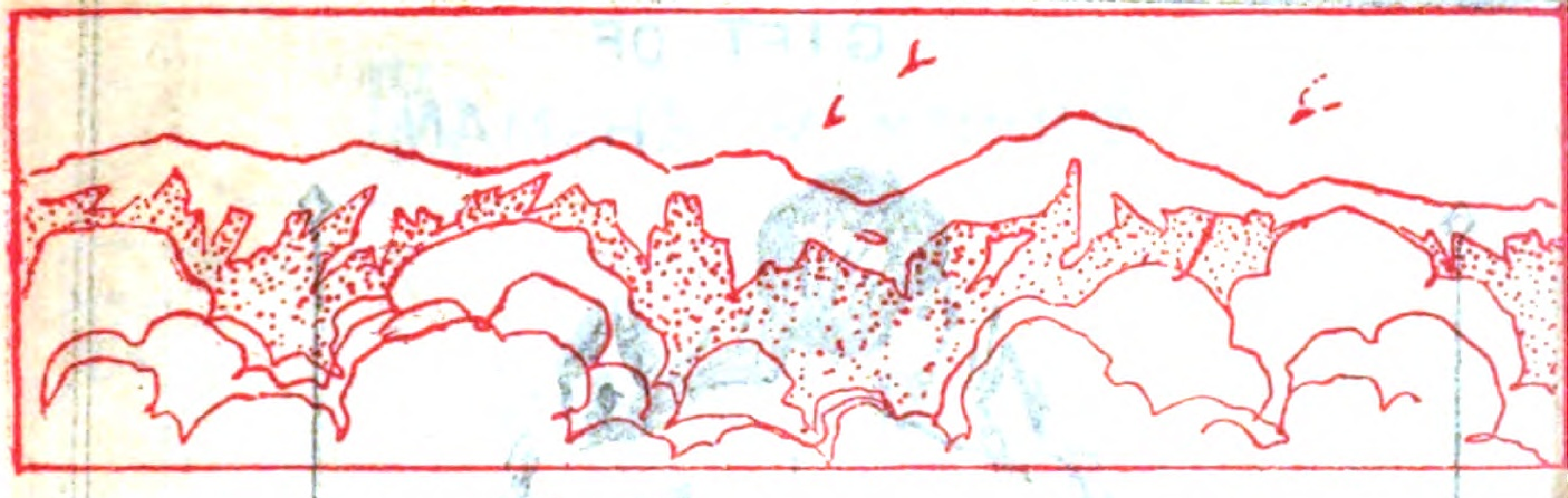
THE KAIZO

改造

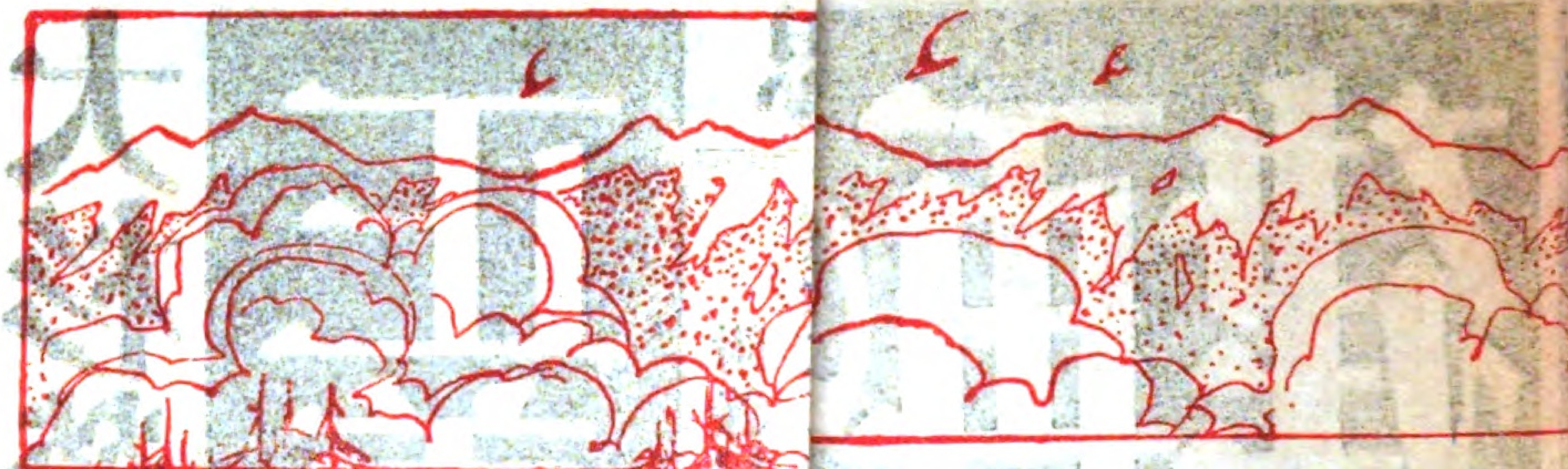
拾月特大号

1921





改造 十月特大號 目次



創作

新生會叢書

（1）
岡邦雄譯
ニウトンからアインスタインまで
◆定價七拾錢　◆十二版發賣
最も理想的なる通俗科學書なり空疎なる科學知識普及の聲高き今日權威ある斯種の書の先驅ならん。

（2）
内山賢次譯
ゴリキイの見たるトルストイ
◆定價八拾五錢　◆三版發賣
ゴリキイの原著『トルストイの思出』の全譯なり。

（3）
慶大教授　高橋誠一郎著
私有財產制度論の變遷
◆定價一圓四拾錢　◆新刊
古くは古代希臘羅馬の思想家より、近くは現代に到る總べてを述べ來れり。

（4）
理學博士　九州工科大學教授　桑木彧雄著
物理學序論
◆定價一圓十錢　◆新刊
目次・出版際して・序・一經驗・二論理・三物理學上の概念・四因果律・五假說・附錄の一參考書解題・補註・附錄の二說明と記載と構成

（5）
カーカープ原著
社會思想の變革
◆定價一圓二十錢　◆新刊
目次　舊經濟的變動・現制度の勃興・社會主義の起原・初期の社會主義・一八四八年の社會主義・ドイツの社會主義・カール・マルクス・國際勞働者協會・一九一四年迄の社會主義の發達・戰前のイギリスに於ける社會主義・無政府主義・サンデイカリズム・組合社會主義・ボルシエビズム・第三國際勞働者協會・戰時中の社會主義・勞働と新社會組織

（6）
法學博士　東京帝國大學法科大學教授　穗積重遠著
國際心のあらはれ
◆定價一圓十錢　◆新刊
グロチウス評傳と、アンデルゼン氏の世界都市の紹介
◆コロタイプ寫眞版四葉挿入

（7）
慶大教授　加田哲二譯
ウイリアム・モリス評傳
◆定價一圓三十錢　◆近刊
◆コロタイプ寫眞版一葉挿入

東京青山原宿一七〇
下出書店
振替東京五五六〇七



最近のアインスタイン氏　（禁無斷轉載）

ウエッブ夫妻著・山川均 荒畑勝三 共譯

勞働組合運動史

定價參圓六拾錢 送料拾八錢

コールは『勞働の世界』の序に於て言つてゐる。『余も亦凡ての勞働組合研究者と同じくウエッブ夫妻の名著に負ふところ甚大である。』その名著こそこの『勞働組合運動史』である。獨逸では如何なる片田舍の組合支部に行つて見てもその文庫に必ず本書の獨逸譯が備へられてゐる事實に徴しても、その重要さは明白である。今や我國で組合運動が自覺的飛躍を試みつゝあるの秋、我々はその故鄕と稱せらるる英國の運動史を研究する必要に迫られてをり、その唯一の指針的研究書は實に本書を措いて他に見ない。

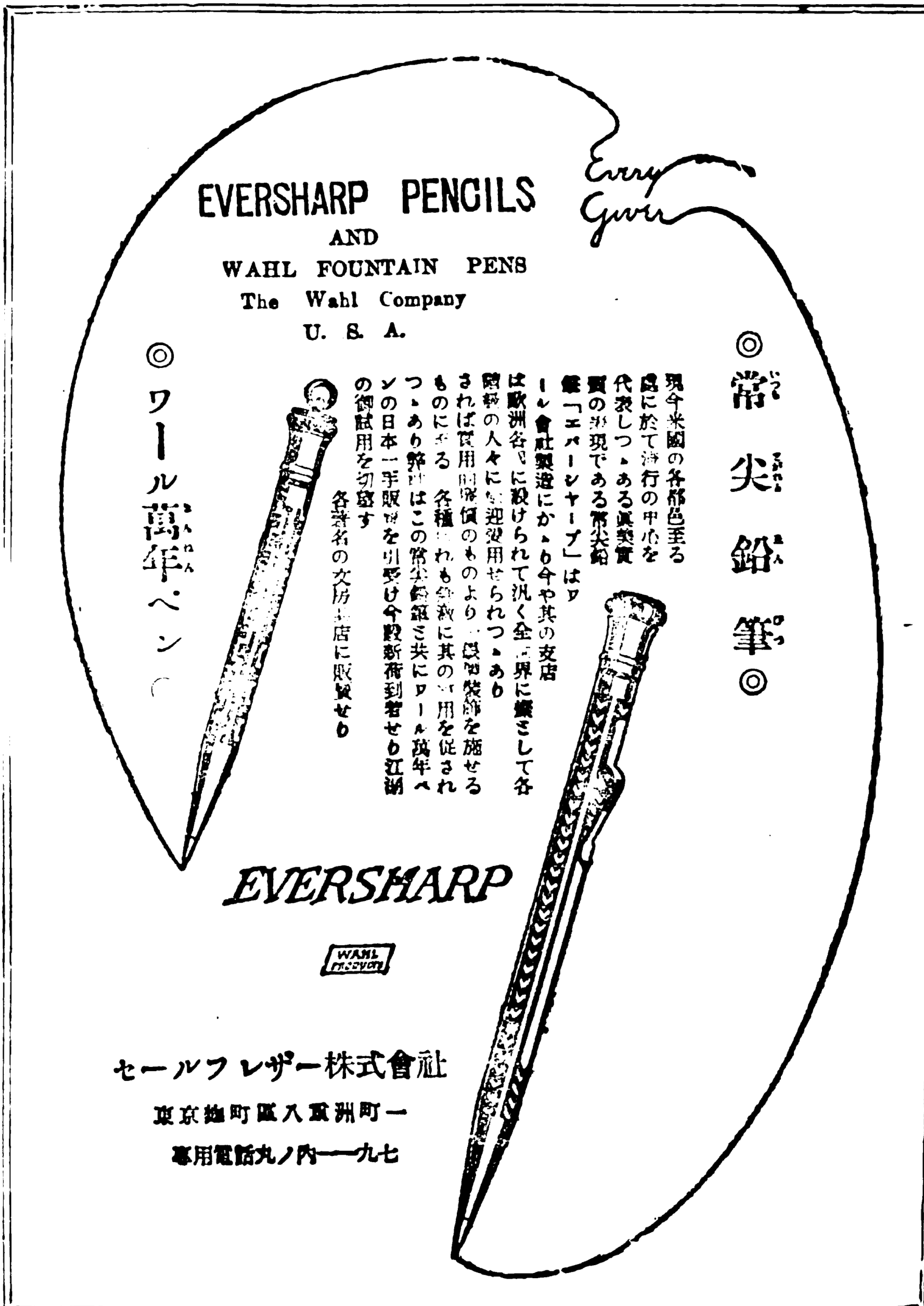
山川均著 社會主義者の社會觀

定價壹圓六拾錢 送料拾錢

山川菊榮著 現代生活と婦人

定價壹圓六拾錢 送料拾錢

東京牛込 神樂町二 叢文閣 振替東京四二八八九 電話番町四八一二



EVERSHARP PENCILS
AND
WAHL FOUNTAIN PENS
The Wahl Company
U. S. A.
◎常尖鉛筆◎
◎ワール萬年ペン
現今米國の各都邑至る處に於て流行の中心を代表しつゝある眞實質の出現である常尖鉛筆「エバーシャープ」はワール會社製造にかゝり今や其の支店は歐洲各國に設けられて汎く全世界に擴さして各階級の人々に歡迎愛用せられつゝあり されば實用的價値のものより美麗裝飾を施せるものに至る 各種いづれも御希望に其の御用を從されつゝあり弊社はこの常尖鉛筆と共にワール萬年ペンの日本一手販賣を引受け今般新荷到着せり江湖の御試用を切望す
各著名の文房具店に販賣せり
EVERSHARP
WAHL PRODUCTS
セールフレザー株式會社
東京麴町區八重洲町一
專用電話丸ノ内一一九七

中澤臨川著

◆四六版函入天金
◆定價金貳圓
◆送料金拾四錢

改造社
東京市芝區櫻田備前町
振替東京四八〇二

嵐の前

好評 拾版

人格の人として、熱情の思想家であつた中澤君の「嵐の前」は本日遂に第十版を發行するに至つた、こんな氣高く戀愛を取扱つた小說が他にあろうか、そしてこんな情熱の迸りが滾々と流れる才筆が又と世にあらうか、そこに描き出だされた情熱の思想家ニイチエの一面が天才的に——純人的に——全紙に躍動してゐる姿は全く臨川天來の筆にあらずんばよく能はざる所である、日本ニイチエ——中澤君の遺稿はこの一篇によつて北斗の星の如く高く光るやうになつた。

法學博士 河上 肇先生著

新刊

唯物史觀研究

菊版	三三六頁
正價	貳圓八拾錢
書留送料	貳拾七錢

此の書は、私が過去二箇年あまりの間に、「經濟論叢」と「社會問題研究」に掲載した論文及び翻譯の中、マルクスの唯物史觀に關係あるもの若干を、寄せ集めて作つたものである。編纂に際しては、全部に亙つて訂正を施し、或る者には少からざる增補を加へ、或る者は全部新たに書き替へた。…………(中略)…………私が此の史觀について初めて物を書いたのは、私の記憶にして間違がなかつたならば、それは明治三十八年「史學雜誌」に於てである。私は又同年、セリグマン教授の著書を翻譯し、「歷史の經濟的說明 新史觀」といふ書名で之を公にした。回顧すれば、それは今から凡そ十六年前のことである。爾來私が此の史觀に關し、又は此の史觀に立脚して筆を執つた論文、隨筆、翻譯の數は、可なりの分量に達してゐるが、稍〻年數を經たものになると、採るに足るべきものは全く無い。だから本書に採錄したのは、盡く大正八年以後に書いたもので、なほ其の總てでも無い。……(著者序文の一節)

發行所 京都市丸太町通寺町東 振替大阪三五二六四番 弘文堂書房



改造十月號

大連會議より華府會議へ

日本の政治家は他所行きの衣物を一枚も持たない、それでお祭騒ぎがあると一家を擧げて、一國を擧げて柄不相應な上衣の新調に狂奔しておるさまはミツトモない。大平洋會議に對する政府の狼狽、舊政治家たちの白黑する眼を見ては全くその感を深くする。大平洋會議には軍閥の巨頭を國民の總代表とし、大連會議には陸軍の一部將を代表として國民は平氣の平左だ、彼等の腦裡には過激派と共產主義との異同も判らねば、民主々義と君主々義の甄別も明確でない、その人が日露通商再開の談判に當るのだからお話にならぬ、我々は政府の非常識を笑ふ前に國民が自己の愚を省みる所あらんことを希ふ。我國民ほど外交に冷淡で政治に無知識の國民は廣い世界に又とない。

だが、英も、佛も極端なる帝國主義を奉ずる國だ、米もそうだ、これ等の人道的被告者たちの目論む——軍備制限——大平洋會議——國際聯盟——そこに何等の權威もなく、何等の價値もない、そこの狸會議は麥酒の氣の抜けたジョージやクレマンソーそれからハーデングで澤山だ、何處を見ても人道的感激はなく、生々とした若々しさがなく時代てふ血も流れず、黑ずんだ油汗もかかず老人の冷水を啜り乍ら疲れ切つた世界を膏藥張りで推通そうとする相談なんだそれで澤山だ。

官製でない靑年達よ、第二の若々しき國民たちよ、我々の肩に打ちかけられたる社會改造の大荷物は、此等血のない耄碌等のすることはどうでもよいとして、自分等は次代に自分の棲むべき清淨な眞實な、世界建設のために努力せねばならぬ。

憫むべき西伯利人、同情すべき支那人、よく問題を生む大平洋、それ等の血の流れておる問題は一として他所行のオベンチヤラでは解決はつかぬ、會議なぞにかけてどうして解決が出來る、國民が一人々々に感激する涙の分量によつてのみ解決が出來るのだ、大困りしておる隣人西伯利を此上にも困らせて、通商を開始してやらぬのは自他の損でそして我國が天下に義を以つて立つ所以でない、華府へ出かける前に近い所からサツパリ片付けてやつたらどんなものだ。

資本家的產業制度の自然的變形



シドニー・ウエッブ

消費者組合とは、主として手で働らく賃金取階級の男女が、自分等の欲する商品や食品などを自分等の手で獲得する爲に拵へた、自發的の、そして自然的の組合であるが、それが世間では兎かく節儉貯蓄の一方法と目されてゐる。組合員は、食料その他の日用品を組合所屬の店で買ひさへすれば、其の少ない收入の中から(外の方法では實際上、迚も望みのない)貯金を拵へる事が出來る。此の組合運動は一八四四年、謂ゆるロッチデールの開拓者達の創設に依つて新たに英國に生れ、其後總ての文明諸國に傳播した者であるが、右に云ふような見方からして、政見を異にする種々樣々の人々から一般的の賞讃を博し、有益にして而も全く無害なる社會改良の一方法と認められてゐる。然るに本論の目的は、

此の組合運動が、賃金取階級の貯金を増加させる爲の、有らゆる方策の價値に比べて、遙かにより大なる重要さを持つてゐる事を說明するに在る。此の運動の明白に目的とする所、及び此の運動の最も善く發達した諸國に於いて次第々々に成就されつゝある所の者は、即ち西部歐洲及び合衆國に行はれてゐる所の、其の產業制度を變形させる事に外ならないのである。

先づ我々をして、消費者組合の何者であるか、及び如何にそれが運用されてゐるかを考へしめよ。ランカシャア州のロッチデールで、廿八人の貧しいフランネルの織工達が、銘々の家庭に入用な雜貨品を卸店から買ふ爲に、一八四四年に苦しい思ひをして何ポンド宛かの金を出しあつたのは、小賣商人の暴利と粗悪品とから逃れる事を第一の望みとしたのだが、其の窮極の目的とする所は組合制度の共同社會を建設するに在つた。彼等が實際に成功したのは、如何なる資本家的の持主等にも屬しないで、實質上、其の賣店で買物をする消費者達に屬する、立派な事業を設立した事である。彼等が此の成功を贏ち得た秘訣は『買取高に對する配當』であつた。標本的消費者組合に在つては、其の必要の資本金は組合員から少しづつ醵出した者であつて、組合員は其株金に對して一定の利率だけを受ける。そして彼等はいつも新らしい加入者を切望してゐるので、幾らでも追加株を額面で發行する。組合の原則は、全く利潤を無くして、品物を實費で供給するに在る。但し實費の中には、必然に店の經營費と、支配人、事務員及び配達夫の賃金と、漏りやローズの損失と、それから資本株に對する一定の利子としての少金額とを含んでゐる。それに、商品を小さく分割して小賣にする場合、其の小量の各品に對し、絶對正確に其の實費のみを豫測して一々割り當てる事は不可能である。そこで組合は組合員及び他の小買のお得意に對して、組合が支拂つた卸賣値段より少し多くを割當てる事になる。英國では實際上、營利事業の雜貨店に於ける價格の水準と、成るべく近接した價格をつける習慣になつてゐる。其の結果は斯うである。何か

用途のない限り、各營業期の終りに在庫品を調べた時、組合は或る餘剩を見出すのが通例である。そしてそれは賣店の經營費を支辨し、株金に對する一定の利子を拂つて、其上に猶ほ幾許かを殘すのである。此の最後の純益が組合總會の決議に依つて、（備品の減損に對する相當の準備と、場合に依り種々の喜捨及び敎育費の贈與とを引去つた後）、主として配當に充てられる。但し其の配當は株主若しくは他の資本家に對するのではなく、店で買物をした總ての人々に對し、而も精密に其の買取高に比例するのである。斯くて此の『買取高に對する配當』は、實際上、割戻し若しくは割引であつて、經驗の示す所に依れば、正にそれだけの金額が買主に對して不必要に賦課されてゐたのである。此の商店は明白に買主の利益の爲に經營されてゐるのであり、何等の利益を望んでゐるのでないから、最後の純益の全部が買主に返還されるのである。そして各人は勿論この配當を意の儘に使用し得るのであるが、經驗の示す所に依れば、それの可なり多くの部分は貯蓄されて、增し株の形式を以て組合自身に投資されたり、貯蓄銀行に預金されたり、家屋や利附債券の買入に充てられたりしてゐる。

そこで貯金を蓄積し投資する事業としてのみ見ても、此の組合運動は（財政家や經濟學者は甚だ輕視してゐるけれども）隨分大きな者になつてゐる。英國だけでも、現在の組合員が四百萬人以上あつて、其の家族を合算すると、全國總人口の三分の一に達してゐる。英國の消費者組合數は（直ぐ後に記す聯合團體と合せて）現に約一千三百個あつて、其の運用する資本は一億ポンド以上に達してゐる。而もそれは彼等が作り出だした貯蓄の一部分に過ぎないものである。又彼等が買取高に對する配當として分配する純益金は一年二千萬ポンド以上である。それに此の消費者組合運動は、右と類似の成績を以て、歐洲諸國に傳播し、其の組合員の總數は四千萬內外だと算定されてゐる。此の數字は卽ち一億五千萬の人口を代表するものである。そして今日

では、南北アメリカ、濠洲、印度、及び南北アフリカにさへ傳播しつゝある。

財政家に取つては、（政治家及び經濟學者に取つても、大抵やはりそうであるが）此の消費者組合運動は幾許の社會的重要をも持たない者と見えてゐた。只、賃銀取の間に儉約の風を奬勵するものとして、更に又、勞働階級を得意先とする小賣商人の利益以上、ヨリ重大な利益を動搖せしめ、若しくば威嚇する事なしに、其の賃金の効果を一層有力ならしめるものとして、賞讃されてゐた。それで今日まで、消費者組合の規模が、最近二三十年間に著るしく、殊に主として英國に於いて、擴大されたといふ事實が、適當の鑑識を受けずに居た。最初の中、其の組合を作つた消費者達は、只だ小賣商人をヌキにする事ばかりを求めてゐた。然るに二十年このかた、彼等は、種々の消費者組合の間に於ける聯合組織に依つて、そこでも矢張り『買取高に對する配當』といふ同じ仕組に依つて、自分等の手で卸賣事業を開始し、從つて問屋や卸賣業者をヌキにし得る事を知つた。斯樣にしてイングランド及スコットランドに順々に形成された卸賣組合は、直ぐに自分等の代理人を他の諸國に送つて、組合員の要求する品物を買ひ、それを直接に組合の倉庫に向けて出荷し、從つて商人や、ブローカーや、コンミッション取や、問屋や、仲繼人を排除しだした。次に彼等は、最大需要のある諸商品を、一ツづゝ次から次へと、自分の工場で製造しだした。そして其の製造業は、麥粉からパン及び菓子に及び皮なめしから各種の靴、馬具、其他の皮具の製作に及び、綿布及び毛布の紡織から殆んど總ての衣服類の製作に及び、植林、採石、及び煉瓦製造から家屋の建築、造作、及び各種家具の生産に及んだ。此の組合經營は實に亦た土地其者にまでも突進した。即ち今日では、グレート・ブリテン及アイルランドに於いて、印度及セイロンに於いて、マニトバ及西アフリカに於いて廣大な土地が組合監督員の下に耕作されてゐる。其の目的は一に、四百萬人の英國組合員と其の家族とが要する所の、小麥及び乳產物、茶及びココア、ゴム及び油植物（の少なくとも一部分）を、資本家的營利事業から

逃れて、自ら生産するに在る。同時に彼等は又、組合の荷物を運送する爲に、自分の船舶を海上に浮べはじめた。猶又彼等は、資本家の銀行に依頼する事を免かれる爲に、自分の銀行部を開設しはじめた。（それが今日では、一年六億ポンドを超過する運轉をしてゐる。）そして之ほどの英國の大發達が、かのロッチデールの開拓者の些やかな小賣店から生じたもので、それが更に歐洲諸國の組合に依つて、それぞれの程度の差異を以て模倣せられ、皆それぞれの卸賣組合を作つて日に日に其の製造を發達させ、皆それぞれに直接の輸入を爲し、更に又、その諸國の卸賣組合が今では二十個以上を數へつゝ、段々と相互の間に直接の關係を持ち、斯くて國際貿易の純粹なる新組合組織を發生せしめてゐる。而もそれが悉く、團結した消費者（今でも大部分、手で働らく賃金取階級の消費者）の幾百萬の手中に管理され、資本家的企業家や財政家の助力も借らず、管理も受けず、其の一切が少しも個人的營利の動因や刺激なしに經營され、つまる所、二百年來、（最小規模の者以外の）産業行爲に對して常に不可缺の刺激物と目されてゐた所の、其の資本家的利得を完全に排除するといふ、明白な原則の上に經營されてゐるのである。

　此の解説に依つて、諸種の共同組合と稱せられる團體に對し、世上に猶ほ一般に行はれてゐる混同が、根本的に間違つてゐる事が分るであらう。共同組合（若しくは産業組合）といふ言葉は、組合員の相互の利益の爲にする各種の團結に適用されて來た。或る國々に於いては、勞働者が自分等の利益の爲に自分等で製造業を營まうとする組合があつたし、又今でもある。それには、資本家的企業者から獨立してゐるのもある。（例へば、一八三一年、パリのフイリップ・ビュシエーに依つて創案され、ルイ・ブランや英國の基督教社會主義から大いに賞讃された、摸範的『自治工場』の如きがそれである。）又それと違ひ、寡慾な資本家と親善關係を持つてゐるのもある。（例へば、種々なる形式の『共同出資組合』『利益分配制度』などがそれである。）又デンマークやアイルランドに於ける如く、小農が銘々の牛乳をバタにする爲に

共同してバタ製造所を設けたり、種子や肥料や農具を共同して購入したりする組合があつたし、又今でもある。更に又(殊に獨逸や印度に於ける如く)、農民若しくは職人が、信用にて資本を共同に借入れ、其組合員をして順番に個人的に資本の融通を受けしむる大規模の組合が、久しい昔からあつたし、又今でもある。これらの生産團體や、バタ製造所や信用銀行は皆な共同組合と呼ばれ、殊に獨逸やデンマーク、アイルランドや印度に於いて、種々の形式を以て大功を奏して來た。然しそれらの目的と趣旨とは、英國に於いて共同組合の十分の九を占めてゐる消費者組合に比べて、正反對を爲してゐる。此の謂ゆる生産組合や、バタ製造組合や、信用組合は、通例生産者(大抵自分の手で働らく生産者)に依つて組織せられ、自分等の利益の爲に其の生産を行ふので、其の結合の全目的は、右の利益を増大し、及び組合員各自が個人的に享樂する其の分前を増大するに在る。消費者組合運動は之に反し、『賣店』及び『卸賣』事業に現はれてゐる通り、利益といふ者を全く排除する事、及び各職業若しくは各産業の生産者に依つて産業を管理するのでなく、消費者自身に依つてそれを管理する事を趣旨目的と爲し、又その事業全部を、少しも利益の爲にせず、只だ消費者の使用(若しくは消費)の爲にのみ經營するのである。此の區別は、よく世間で云ふような、生産と分配との區別ではない。凡そ産業に對して、そういふ區別がつけらるべきものではない。鑛業にしても農業にしても、製造業にしても輸入業にしても、卸賣業にしても小賣業にしても、物質なり勢力なりの、眞實の生産はない、又あり得ない。只そこに發生する者は位置と按排との變化である。總ての場合、生産されるのは只だ効用の増大のみである。効用を産出する一の過程と他の過程との間に、嚴密な區別線を引く事は、實驗上からして不可能である。要するに、今日に於いては『共同組合が生産には失敗したが、分配には成功した』と考へ、又或種の共同組合は最も善く生産に適し、或種は分配に適すると考へるのは、單なる俗説の誤謬である。區別の根本は、消費者の結合と、生産者の結合とに在る。後者は只、組合を作つた勞

働者をして、今日資本家が占めてゐる其の地位に立たしめる事を目的とし、從つて又、營利制度の繼續を目的としてゐる。前者は各種の產業、即ち農業及び鑛業、若しくは製造業及び輸入業から、商品の小賣的分配、及び銀行や保險のような事業に至るまで、總ての經濟的基礎を變化させようとする。彼等が實現させようと企てゝゐる其の變化は、即ち生產機關の資本家的所有及び行使、及び其の結果たる產業の資本家的管理を廢棄し、消費者自身の所有、行使、及び其の結果たる管理を以てそれに代へようとするのである。產業を利益の爲に經營する事の代りに、組合消費者は利益を排除し、其の事業を全く消費者の便宜の爲にのみ經營する。『使用の爲の生產』が『交換の爲の生產』に代るのである。

消費者組合運動の巨大な事業が處理經營されてゐる其の組織方法については、其の組合に屬する勞働階級員の外、何人にもまだよく知られて居ないので、それを稍や詳細に記述する事を許して貰はねばならぬ。事業の單位は、賣店を設置する爲に作られた共同組合である。共同組合は其はじめ大抵いつでも百人ばかりの加入者から成り立ち、それらが新らしい賣店で購買する事を約束し、そして銘々が一ポンドの株の一口若しくば數口を引受ける。其の株金は少しづゝ割拂ひにする事も出來る。斯樣にして集めた小額の資本で、一つの店を借り、一人の支配人を雇ふ。賣品は最初、最も一般的な需要のある日用品に限り、それを冒險的な問屋から買入れるか、或は今日では、組合の執行委員が利口であるなら總て卸賣組合から買入れる。小賣値段は通例、近處に行はれてゐる値段どほりに定める。そして元價以上の超過分が、經費の支辨、設備品の減損補充、準備金の積立、及び最後に配當に充てられる。此の配當が實驗上、組合員に對して非常な引力を持つてゐる。組合員が買物をすれば、如何に小額でも、必ず其の金額を記した買取證の合札を渡される。そして各半季の終りに於いて、支配人及び店番の給料、資本に對する一定の利子、及び他の一切の費用を支拂つた後、其の確定餘剩金が各組合員の買取高に比例して精密に拂ひ戾される。

此の生産費と賣値との差額を買主に拂ひ戻す事が、消費組合と資本家的株式事業とを區別する所以である。英國に於ける消費者組合運動の特色、今日までも此の(『利益』と誤稱されてゐる)餘剩金の分配方法として最も一般に採用されてゐるのは、即ち營業期間に於ける各組合員の買取高に對する配當である。株金に對する配當でなく、此の『買取高に對する配當』の方法を採用した事は、ロッチデールに於ける廿八人のフランネルの織工達が、實に非常な効驗のある妙案を採用したわけで、彼等が思ひもかけずに創設しつゝあつた、後々の此の大組織に對して、其の構成法と、並びに其の經濟的社會的効果とを授けたものである。

消費者組合の構成法及び經營法は最も民主的である。年四回の組合員總會は最高權威である。各員は出資額の多少に係はらず、加入年月の長短に係はらず、年齢に係はらず、又買取高の多少に係はらず、總て一人一票である。執行委員は通例、各四季會、若しくは各半季會に於いて、全部若しくは一部、選擧される。總會は(法律の廣汎なる制限内に於いて)勝手次第の規則を作る事が出來る。若し總會が欲するならば、自ら有らゆる指揮命令を爲し、賣買の仕方や値段についても嚴重な指圖をする事が出來る。然し總會は大抵、一切を執行委員に任せる事の便宜を知り、其の組合經營の委託を受けた人々の決定に對して、批評を加へる事を以て滿足してゐる。此の消費者組合が目下英國中に千三百以上あつて、其中の數個は殆んど百年の齢を重ねてゐるが、其の大部分は三十年から七十年までの齢である。そして今でも毎年、新らしい組合が作られてゐる。但し今日では、合同の傾向が強くて、二百個ばかりの組合は五千人以上の組合員を有し、二十個ばかりの組合は五萬以上十萬以下の組合員を有してゐる。諸組合の販賣年額は、少きは數千ポンドから、多きは五百萬ポンドに達してゐる。それを平均すると、一人一年約四十九ポンドに當つてゐる。組合員の總數は目下(一九二一年)四百五十萬人を越え、賣上總額は一年二億ポンド以上である。

地方的消費者組合は、其の大小に係はらず、自治自制の、社會的商業組織であるが、只そればかりでなく、此の運動の聯合組織に於ける單位であつて、其の聯合組織の活動を通して、國家的重要を有する諸種の活動及び政策を支配してゐる。宣傳上、教育上、及び政治上の目的の爲、それらの地方的組合は消費者同盟を作つて、多大の價値ある教育事業を行ひ、州組織及び郡組織の中に於いて無數の協議會及び公會を開き、消費者組合文書を發行し、そして一年一回の消費者組合大會に對して責任を負ふ。其の大會に於いては、諸種組合の代表者等が一般公衆に對して此の運動の國家的重要を宣明する。

此の運動の二大聯合組織たる、イングランドとスコットランドとの卸賣組合は、更に一層大なる財政的重要を有してゐる。此の二組合は半世紀以上の昔に設立されたもので、最初は聯合した地方的諸組合をして、其の組合員の希望する商品につき、卸賣業者から獨立させる爲であつた。然るに此の二つの商業聯合は、卸賣業から獨立の輸入業に轉じ、輸入業から製造業に轉じた。そして其の遣口は常に、資本家的利得を排除するといふ其の同じ原則の上に立ち、常に最低可能の實費で組合の要求を充たす事を勉め、各營業期の終りに於いて幾らでも純益の殘つただけ、それを買取高に對する配當の形式で、悉く元組合に返還するのである。然るに此の二つの卸賣組合は、更に輸入業と製造業とから段々と農業的生產に轉じた。今や彼等は數千エーカーの土地を所有し耕作してゐる。そしてそれは英國内の諸地方ばかりでなく更にセイロン、インド、西部アフリカ、及びカナダのマニトバまで及んでゐる。其の耕作法は、少しも營利的資本家の干涉を受けず、組合員の消費の爲に最低可能の實費を以て生產する事を唯一の目的と爲し、元組合から需要される、小麥、果物、野菜、木材、茶、ココア、ゴムなどを、年々益々多量に產出してゐる。斯くして英國消費者卸賣組合を組織せる、一千三百個の地方的消費者組合の一つに屬する各勞働者は、一九二〇年に於いて資金運轉總額一億五百萬ポンド

に達し、世界最大の商業組織を爲せる、其の諸種の企業に對して、共同持主の一人となつてゐるのである。彼は自分の麥をカナダで栽培して、それを（或時には自分の船で）英國に輸入し、組合に屬する一ダースばかりの（それの幾つかは英國中で最大である）製粉所の一つでそれを粉と爲し、それを又自分の組合のパン燒所でパンに拵へ、更にそれを自分の小賣組合の配達車で日々自分の家に配達させ、而も其の總てに對して、營利的の農夫や商人や小賣店から利得の形に於いて一錢たりとも道錢を取られる事が無いのである。まだそればかりではない。消費者組合運動は、生産事業と分配事業とから更に銀行事業に及び、又各種の保險事業に及んでゐる。消費者卸賣組合は自分の銀行部を有し、利益を排除するといふ彼の同じ原則に依つてそれを經營し、今では迅速に、各消費者組合ばかりでなく、英國勞働階級の有らゆる團體の銀行になりつつある。そしてその一年の資本運轉額は六億ポンド以上に達してゐる。

此の消費者組合運動は、其の大なる成功、そして又絶えず增大しつゝある其の成功にも係はらず、政治家からも政學や經濟學の教授達からすらも、殆んど注意を拂はれて居ない。共同組合（若しくは産業組合）に關する大抵の書物は前に記した通りの、生産者の種々の組合に對して最大の注意を拂つてゐる。即ち『自治工場』を設立する多數の計畫や、それが發達して利益分配制となり『共同出資制』になつた事や、『農業組合』と稱する種々な形式の農業者團體の事や、共同信用組合の事などがそれである。總てこれらの生産者組合は、只だ貧乏人をして、資本家的産業の利益に對し何程かの分前を得せしめる事を目的としてゐる。消費者組合運動は之に反し、利益を排除し、資本家制度を廢棄しようと勉めてゐる。それ故か、或は他の故か知らぬが、此の運動の異常な進歩、及び其の繼續した財政的成功に對し、どうも適當な注意を拂ふ事を厭がる風が見える。少なくとも此の運動の構成的（憲法的）發達について少しも本氣の研究が遂げられてゐない。

消費者組合は、大にせよ小にせよ、地方的にせよ、聯合的にせよ、定期に開かれる組合員の總會に依つて、常に民主的に支配されてゐる。其の總會では、最新の加入者が、男であれ女であれ、青年であれ老人であれ、又恐らく組合の企業に對して最少の投資をしてゐるに關せず、最舊最富の組合員と同一の發言權（地方的組合では同一の投票權）を持つてゐる。組合が小さい間は、總會は可なり多く行政事務に干與する。但し日々のお極り仕事だけは大抵管理部の委員に任せる。組合員が數萬人に增加し、其の販賣年額が數百萬ポンドに上る時には、經驗ある數人の支配人の下に、男女數百人の有給事務員を雇用する事になるばかりでなく、執行委員の監督的任務や執務方針の決定などが、迚も十人や二十人で、而も他の仕事で自分の生計を支へつゝ夜分の時間だけを組合の仕事に向けると云ふのでは、其の力に及ばなくなつて來る從つて其の委員達を終日組合の爲に働かせて、給料を支拂ふ事になる。或る組合では（例へはバーンスレー組合の如き）現に一人の會長と二人の副會長（獨逸の産業組合の總務部に當るもの）には、定額の俸給を支拂ひ、他の委員達には出席日の日當だけを支拂つてゐる。そこで次の階段は、（イングランドとスコツトランドとの卸賣組合は疾くからそこまで達して居り、ロンドンの造兵廠消費者組合の如き、數個の最大なる地方的組合は今正にそこまで進みつゝあるのだが）執行委員會若しくは管理部を專任者ばかりで組織し、全員に給料を支拂ふ事である。

之と同時に、更に他の發達が生ずる。これは政治學者に取つて特別な興味のある事で、即ち丁度政府の内閣に對比すべき物になつてゐる[illegible]管理部に對して、[illegible]得る爲に、組合の全員から選出した常設の代議團體（若しくば議會）が發生する。リーヅの大消費者組合は殆んど一百個の支店を持ち、其の資本運轉は五百萬ポンドに達してゐるが、今や各支店で極まつて買物をする組合員の中から、三百名の地方代議員を選擧する事になつてゐる。斯樣にして選出された三百人の地方代議員は、其の多くの支店を監督するばかりでなく、又常設代議會として定期に會合し、管

理部にがそれ對して執務方針の說明をすると、代議會は時の論爭問題たる或種の政策の變更を指定する事になつてゐる或種の政策の變更が、組合の全員から決定されるわけに行かないのは、丁度、全國の總選擧人が國會で討議する諸問題を適切に決定し得ないのと同じである。此の原始的な組合デモクラシーの中に、選擧に依る代議會が自然に發生して、それが行政部に勢力を及ぼし、膨大なる選擧人全體の不明瞭な慾求の焦點となると云ふのは、政治學者に取つて頗る興味のある事であらねばならぬ。

又、勞働不安が社會的一般の現象となり、勞働組合運動が盛んに擴大されてゐる今日、此の英國の(及び獨逸でもの)消費者組合運動の內部に於て、組合の資格上、雇主の地位にある、四百萬の株主と、そこに雇用されて種々雜多の業務に服する、男女二十萬の從業人との間に、特殊の關係が發生してゐるのは、頗る注目に値するものである。先づ注意すべきは、利益分配制度が(些細な除外例はあるが)双方の同意に依つて放棄され、從業人は殆んど悉く一定の賃金若しくは月給を支拂はれてゐる。彼等は今ま總て勞働組合を組織してゐる。それが通例、雇用の一條件になつてゐる。賃金其他の諸條件は、完全自由なる團體交涉權に從つて、勞働組合の代表者と消費者組合との間に決定される。そして其の總ての條件は、少なくとも營利事業に行はれてゐる條件と同樣でなければならぬといふ事が、大體に於いて承認されて居り、而も實際に於いては大抵それ以上になつてゐる。それに又、總ての從業員は自分の雇用されてゐる其の消費者組合の株主になる事を奬勵されてゐる。彼等は今日では次第々々に銘々の職場委員若しくは工場委員を作る事になり、組合の執行委員は自由にそれと協議を遂げてゐる。彼等は組合員として執行委員の選擧に加はるので、或る少數の(其の數は增加しつゝあるが)組合に於いては、一人或はそれ以上の從業員が現に執行委員に選出されてゐる。或る數個の組合に於いては、彼等は從業員として從業員の代表者を自分達の間から執行委員會に選出する權利をさへ持つてゐる。總

てこんな遣方で（まだ外にも色々の事があるが）、英國の消費者組合運動は、雇主と雇はれ人との關係を研究する學者に取つて、多大の興味のある者になつてゐる。

所で其の將來は如何。自發的組合の發達する範圍には明かに限度があるに相違ない。又中央政府及び地方政廳もそれに對して相當の干渉をするに相違ない。けれどもそれが爲に、此の自發的消費者組合運動（既に之ほどまでの成功をして、卸賣事業及び小賣事業の外、製造業、鑛業、農業、輸入業、銀行業及び保險業にまで進んでゐる運動）に對し、其の將來の擴大に限度を附しようとするのは、蓋し輕卒な豫言である。此の組合運動は既に英國に於ける食料供給總額の七分の一を取扱ひ、又總人口の三分の一を取扱つてゐる。英國に於ける此の組合の加入者が更に增加を續ける事は確實である。それで今後三十年內に、全人口の三分の二を組合員として包容する事を豫言するのは、さしたる危險でないと思ふ。又（通貨の價格標準に如何なる變化があるにせよ）其の販賣年額が倍加することも豫言が出來る。組合は既に英國に於ける最大の製粉所、最大の靴製造所、及び最大の印刷所を持つてゐる。そして確かに今後三十年內には、其の製造業が巨大な擴張を示すに相違ない。組合は又既に、茶と乾果物との最大な輸入者であり、石鹼では二番目の大製造者である右の形勢に加へて、更に他の廿個國ばかりに於ける、同樣の計畫の卸賣組合の發達を考へると、我々は此の消費者の聯合組織が次第々々に、現在各國の輸出業を吸收する事に成功し、それを全然組合的の消費及び使用の爲にする相互輸入の制度に變形し、結局、營利的の商人、ブローカー、問屋、及び銀行家を廢絕するに至るべき事が、直ぐに頷かれるのである。其他猶ほ如何なる發達を生ずるか、例へば新聞の組合的管理、成年者敎育の組合的組織、及び現存せる富者の別莊の組合的維持などいふ事がどうなるか、又此の自發的組合と、都市自治團體と、中央政府との範圍と職能とが、如何に結合聯絡せられるか、それらは一九五一年（即ち三十年後）の學者に依つて記述されるであらう。

資本增殖の理法と資本主義の崩壞（其一）



福田德三

（一）

雇傭勞働所得と資本所得との融和す可からざる根本的對抗は、他面から見れば、資本各種形態の從屬關係の問題である。而して此關係を究明した資本再生産の理法に關するマルクスの研究は、偉大なる學問的業績である。此の研究によつて、彼は單に資本主義組織の態樣を描出したのみならず、其内に深く潛在する處の甚だ複雜な各種の作用を、鋭き學問刀を以て解剖したのである。若しもフヰジオクラットの徒が、ケネーの『經濟表』を以て、人類文明の大發見なりと

することが、當を得て居るとしたならば、マルクスの資本再生産理法の創説は、少くとも之に匹敵す可き學問上の發見と云ふ可きであつて、兩者の占むる地位は甚だ似寄つたものである。マルクスの此研究を載せた『資本論』の第二卷の後半は、評判されることのみ多くして讀まるゝことの割合に少い『資本論』中でも、亦最も少く讀まるゝ部分であると共に、マルクス一生の學問的事業中の最大なるものの一に屬すと斷言す可きものである。『資本論』の他の部分悉く傳を失ふとしても、若し此部分だけ、何等かの偶然に依つて人間に留ることを得るならば、マルクスが經濟思想史の上に占むる地位は、現に其一切の著作の傳はつて居る今日と、殆んど異る所はなかる可きである。彼の時にまで傳へられたる正統派經濟學は、資本の形成が生産の方向を支配する作用に就て、唯だ資本の形成に充用せられず企業者の手に於て直接消費の用に供せらるゝ享樂財と、資本の形成に充てらる可く勞働者生計の料となる財との對立又は角逐のみを見て居つた。勞銀基金説は斯くして殆んど當然の歸結となつた。マルクスは、此の對立、角逐は斯くの如き淺薄皮相的なものでないことを、其資本再生産論に於て道破して、舊來の謬説に致命傷を與へた。資本の形成の爲めに生産要具作出の必要なること、而して其は『貯蓄』によるの外道なきことは、通説が煩はしいほど反復して說く所である。乍去、生産料と消費料との間に於ける出入推移に立脚する資本再生産の複雜なる作用を明かに示したは、實にマルクスに始まると云つても差支ないのである。マルクス逝いて數十年の今日、猶勞資對抗の現象を、單に資本形成用の勞働者生計料對企業者直接消費用の享樂財の對立を以て說く人の甚だ多い、否、殆んど凡ての議論が、此以外に出でないのは、マルクスに取つては、地下に於て苦笑を禁じ能はない所であらう。殊に社會民主々義を奉ずと稱し、唯物史觀を信ずと稱する學者にして、猶且つ然ることは、苦笑のみでなく、憤慨の種であらうと想像せざるを得ぬ。乍然マルクスの研究は決して完成したものではない、彼は其理論の當然到達す可き結論にまで考へ拔くことを敢てしなかつた、而して後の學者は

其業を繼承するを怠つて居るのみでなく、一讀難解——實は必ずしも左樣ではないが——なる『資本論』第二卷は、其一切をあげて之を高閣に束ねて置く、唯だトウガン、バラノフスキー・ヒルフアーヂング及ローザ・キセンブルグ女史等か、若干歩を進めて思慮を旋らしたに過ぎない。其以外には、社會主義者は勿論のこと、專門の經濟學者も一樣に何も爲さずに放擲して居るのである。

マルクスの資本再生產の理論は、資本增殖の理法と資本社會崩壞の推論とに、其出立點を與へるものであつて、而して、其理論の考察は、先づ資本の形態と循環とに關する研究より入込んで居るのである。『資本論』第二卷の前半は、即ち此研究を收めたもので、而して此兩者合して『資本主義』の根本理法を說いたものである。

(二)

一體『資本主義』と云ふ語は、今日甚だ汎く用られて居るが、抑も『資本主義』とは何を指して云ふかは、『階級』『階級鬪爭』若くは『ブルヂオアジー』、『プロレタリア』等の語に於けると全じ樣に甚だ支離滅裂な見解が行はれて居る。今日の社會の根本病弊は資本主義に在る、資本主義さへ廢止すれば、社會問題の解決、勞働階級の解放は直ちに實現せらるゝなど〵の噴飯す可き耳食論の横行は、『資本主義』とは何を指して云ふかを曖昧にして置く爲めと云はねばなるまい。『資本主義』と云ふ語は、必ずしも久しく用られて居たものではない。『資本制生產』Kapitalistische Produktion と云ふ語は、强て文獻的に詮索して云へば、千八百五年刊行の『經濟學』と云ふ書に於て、獨逸の學者ゾーデンが使用して居る、彼は生產を分類して（一）經濟的生產 Ökonomistische Produktion （二）非經濟的生產 unökonomistische Produktion （三）反經濟的生產 antiökonomistische Produktion とし、（一）の經濟的生產とは、生產力の支出——

生產中における生產者の生計維持に缺く可からざる享樂資料の總量——が、其支用を以つて生產せられた生產物によつて補塡せらるゝ生產を云ふとし、而して此の經濟的生產を更らに二小分して、(一)嚴經濟的 streng ökonomistisch と、(二)資本制的 kapitalistisch とし、嚴經濟的とは、生產の收支が單に適合するに止るものを云ひ、資本制的とは、收が支を超過して、餘剩を生ずる生產を指して云ふので、單に資本を用ゐる生產を指して云ふのでないと明言して居る。(v. Soden, Nazional=Oekonomie. 1805, Bd. I. SS. 62 ff. SS. 148-150) ところが『資本主義』Capitalism と云ふ字を用ゐたのは、恐らく、佛蘭西の社會主義者ルイ・ブランが最も早い一人であらう、即ち彼は其有名な『勞働の組織』中に、バスチアを冷評した一節に此語を用ゐて居る。曰く、

On volt en quoi consiste le sophisme qui sert de base à tous les raisonnements de M. Bastiat. Cesophisme consiste à confonder perpétuellement p' utilite du capital avec ce que j' appellerai le capitalisme, c'est-a-dire l'appropriation du capital par les uns, à l'exclusion des autres "..........." Criez donc. **Vive le capital!** Nous applaudirons, **et nous en** attaquerons avec d'autant plus de vivacité le capitalisme, son ennemi mortel. **Vive la poule aux oeufs** d'or et défendonsla contre qui l'eventre!

(Louis Blanc, **Organisation du travail.** 9. E. Paris. 1850 pp. 161—2)

『バスチア君の凡ての論辯の基礎の役を勉むる詭辯の何なるかは明かである。此詭辯は、資本の利用と、予が『資本主義』と名けんと欲するもの——即ち他人を排して一部のものが、資本を占有することの謂——とを、絶へず混同するを能事とするものである。…………資本萬歲と叫べ、吾人は之に喝采するであらう。が然し其れにも勝る熱心を以て、吾人は資本の不倶戴天の仇敵たる資本主義を攻撃するであらう。黄金の卵を產む鷄は萬歲なれ、而して

吾人をして、鷄を絞殺せんとする者に對して鷄を守護せしめよ！』

卽ち、プランの意味する『資本主義』なるものは、資本を壟斷すること、資本の仇敵、黃金を産む鷄（資本）の絞殺者の謂であつて、今日一般の用法とは、寧ろ全く正反對のものであり、又たゾーデンが資本制と云ふものと著しく異つて居るのである。卽ちマルクス以前に於ては、『資本制生産』『資本主義』の語は、甚だ稀に、而して確定の意義なく使用せられて居たに過ぎない。否、マルクスに至つても『資本主義』なる語は、全く用ゐて居ないのである。カウツキー編纂の『資本論』第一卷の平民版の件名索引は甚だ善く出來て居るものであるが、其中に『資本主義』『資本制生産法』と云ふ複標語を載せ、該當箇所が擧げてあるが、其何れの部分を引照して見ても『資本主義』と云ふ語は之を見出すことは出來ない。『資本制生産』の語のみを見るのである。カウツキーが『資本主義』を『資本制生産法』と複標語としたは、兩者を同義語として取扱つて差支ないものと認めたからであらう。『資本主義』を一の成語として用ゐた經濟學者は、恐らくシエフレが一番初めで且つ有力な人であらう。彼の『資本主義と社會主義』と云ふ書物は、甚だ汎く行はれたもので、此語を普及するに與つて甚だ力があつたが、更らに近時に至つて、此語流行の魁となつたものは、言ふ迄もなく、ゾムバルト——殊に其の『近世資本主義』を以つて——である。此兩人とも甚だ深くマルクスの學問の影響を被つた人であることは架言を要しない。之に反し、マルクスの影響を被らない、又はマルクスを毛嫌する學者は、殆んど全く『資本主義』なる語を用ゐない——但し最近時は一變した——か、又は用ゐても、其使用を喜ばないことを同時に示して居るもの斗りである。殊にシユモラーとリーフマンの兩人は、痛く此語を排斥して居る、就中リーフマンの近業『經濟原論』に於ては、烈しく其用法を攻擊して居るのである。其他ポーレやエーレンベルヒやハルムスやパツソウやの樣な、社會主義者から見れば、資本主義の御用學者たること疑なき學者等は、何れも此語を喜ばないのである。其理由は

極めて簡單明白である。『資本主義』と云ふとは、嚴密な學問上の概念でなく、初めから一種の色彩を帶びた戰鬪の合言葉であること、『ブルヂオアジー』『プロレタリア』と全く同一なのである。殊に一の誹言、罵語として意味を成すもので初めから其れは惡いもの、斥けられねばならぬものと云ふ意を其中に含めて居るのである。ダカラ、『資本主義』攻擊者に取つては、戰ひの合言葉として、此語は甚だ重寶便利でもあり、又た恰當でもあるが、被攻擊者に取つては、此語を使はれることは、甚だ迷惑であり、厄介千萬なのである。從つて前者は、必要のない場合にも此語を濫用し、一知半解の耳食社會問題論者は、其尻馬に乘つて能く其意味も呑込めもせぬに、矢鱈に此使を使つて得々たり、後者は、七面倒な小理屈——例へばパツソウ『資本主義、概念的名義學的研究(??)』一九一八年刊を見よ——を並べて、此語に難癖を付けようとしたり、又は頭から其使用を一切排斥するのである。併し其非難にも相應の論據はある。シエフレが其名著に於て『資本主義』と『社會主義』とを對立する二個の概念として取扱つたことは、學問上容易に承服し得られないことである。何となれば、社會主義には一の理論體系が備はつて居るが、資本主義なるものには其れは甚だ不備である。獨逸否、資本主義と云ふことは、實は主義でも概念でも何んでもないこと、恰も軍國主義と云つたようなものである。獨逸の軍國主義滅さゞる可からずと絕叫した英米の論者に、然らば其滅さざる可からさる『軍國主義』とは、如何なるものであるかと反問したら、明確な說明を與へ得るものは果して幾人あつたであらうか——拙者『經濟學論攷』所收の『小野塚博士の新著を讀む』參考——實は唯だ獨逸を滅せと言ひたいのであるが、其れは人道正義を招牌とする手前としても言ふを憚る所であるから、獨逸の軍國主義若くは軍國主義的獨逸を滅せと、ボカしたものに過ぎない。其の如く資本主義の滅亡を絕叫する多數の人の中には——或は其多くは——金持を退治せよと言ひ度いのが本心ではあるが、其れでは餘り露骨でもあり、又た淺薄にも聞へるから、資本主義を倒せとボカして居るのである。近頃は、其を更らによりハイ

カラに染色して『プルヂオア』を倒せと云ふ、トルストイがレニンの先驅者だなどゝ速斷するフキユトニストなどは、うまい造語が見付つたと言はん斗りに、無茶苦茶に人の口眞似をする。マルクスを地下に起して此有樣を見さしめたら、必ず噴飯或は絶倒するであらう。

(三)

マルクスの資本再生產論を知るには、順序として先づ資本形態及循環の理論を一瞥せねばならぬ。此理論は、其自身に於ては、必ずしもマルクス學說の重要部を占むるものではない、乍去、資本經濟理論の全體から見れば、此の豫備的研究も亦殆んど前人未到の地を開拓したものなのである。資本と云ふ現實なものは決して存せないこと、魚と云ふ現實なものゝ存せないのと同じである、魚は鯛であるか鯉であるか鮒であるかが其現實であつて鯛でも鯉でも何んでもない單なる魚と云ふものは現實にはない、其の如く資本は何かの特殊形態に於てのみ存するもので、何の特殊形態をも持つて居らぬ單なる資本 Kapital schlechthin なるものは現實には存して居らぬのである。少し堅苦しく云へば、第一、資本は必ず各種の發現形態に於て顯はれる——之を知るのが資本形態の研究である——而して第二に、此の各種の發現形態は、相互に連絡融通して居るものであり、又時には——甚だ屢々と云つても宜しい——相互間に從屬關係を持つて居るものである。而して第三に生產行程と再生產行程を通じて、資本は一の循環を爲すものである。此道理を見出したのは——其前にも多少氣の付いた人はあるが——フキジオクラットの開祖たるフランソア、ケネーである。彼が學問上不朽の名を贏ち得たる其の『經濟表』は、實に資本循環行程の大啓示であるのである——三田學會雜誌に三邊金藏教授の『經濟表』に關する有益な論文が載せてある、又た高橋誠一郎教授にもケネー研究の論文がある、全教授著『經濟學

史研究』には、『經濟表』の原文が刷出してある――。玆に奇なる因緣とも云ふ可きは、フキジオクラットから出立した正統派經濟學に、一方其最終の歸結を與へると共に、他方新天地を開いたマルクスの商品資本循環論は、ケネーが一度始めた事業を更らに進めたものであること是れである。正統派經濟學は、ケネーが折角企てた學問上の大事業を平凡化し、唯だ其表面のみを拉らへ來つて、富の生産、分配、消費てふ三分論を立てたジアン、バチスト、セーの舊衣を永く襲踏して、今日現在に至つても、未だ殆んど之を脱出し得ない譯で――拙著『國民經濟原論』を見よ――折角マルクスが提示した新循環論は、殆んど全く之を顧みないのである。

さて、マルクスは、資本の循環を資本の形態と結付けて說いて居る。即ち彼によれば、循環に三種ある、(一)貨幣資本の循環、(二)生産資本の循環(三)商品資本の循環、是れである、而して各循環には、夫々階梯がある。貨幣資本の第一階梯は、資本家が買手として、商品市場及勞働市場に現れ來る是れである、彼の有する貨幣は商品に引換らる、即ち其流通行程は G―W（貨幣―商品）を以て示され得る。第二の階梯は、其買入れた商品が資本家の手に於て生産的に消費せられること是れである、資本家は資本制的生産者となり、其の資本は生産行程を經過する、而して其結果は、生産要素の價値よりもより多き價値を有する商品となつて現はれる、此を P―W'（生産資本―増加した商品）を以て示す。第三の階梯は、資本家が、賣手として再び市場に現れ出づること是れである。彼れの手に在る增加した商品は、增加した貨幣額に換へて賣られる、此流通行程を W'―G'（増加した商品―増加した貨幣）の式を以て示めす。ソコデ三階梯を合せた資本循環の總行程は G―W―P―W'―G'（貨幣―商品―生産資本―増加商品―増加貨幣）と云ふ式を以て言表はされ得る。コレを貨幣資本の循環方式と名ける。生産資本、商品資本に就ても、右と全樣に階梯があるが、其順序は異つて居る。生産資本循環の總行程は、

P—W′—G′—W—P（生産資本——増加商品——増加貨幣——商品——生産資本）

であつて、貨幣資本の循環方式を逆に行くものである。貨幣資本に於ては、貨幣——商品——貨幣（分解すれば貨幣——商品。——商品——貨幣）であるが、生産資本に於ては、商品——貨幣——商品（分解して見れば、商品——貨幣。貨幣——商品）であるのである。コヽデ、マルクスは、單純なる再生産と、擴張再生産の二者を分つて居る（其事は後に説明する）。最後に、商品資本の方式は

W′—G′—W—P—W′（増加商品——増加貨幣——商品——生産資本——増加商品）

であつて、之を前の兩方式に比べるときは、總流通行程が、二個の正反對な階梯を以て、循環を始めるのであつて、第一方式では、流通は生産行程の爲めに中斷せられ、第二方式では、流通の全行程は、二個の相補ひ合ふ階梯を以て、再生産行程の媒介をするのとは、行き方が全く違ふのである。

（四）

此く三つの異つた循環方式がある處からして、マルクスは、資本に三の特殊形態ありと主張する。即ち（一）商品取引資本（二）貨幣取引資本（三）貸借資本是れである。（一）と（二）とを合せて、更らに之を商業資本又は商人資本と名けても差支ない。（第三巻上冊二五〇——三七七頁）

資本は、商品の形を取つて生産行程から脱け出して來て、貨幣に變形せられ換價せられる、貨幣の形にある資本は、生産行程に入る爲めには、商品に變形しようとする。此くの如き商品形態にある資本を、マルクスは、商品資本と名けるのである。一社會に存する一切の資本は、一部は、貨幣に變形せられんと欲しつゝある商品、一部は、商品に變形せ

られんと欲しつゝある貨幣として市場に上る。斯く流通行程に於ける——生産行程に於けると反對に——資本の職分が特定資本の特定なる職分として獨立性を帶ぶるに至るときは、商品資本は化して、商品取引資本となるのである。元來は生産者の手に於て行はる可き商品の貨幣への變形が、特殊なる流通機關の手に委ねられるのは、畢竟するに分業の一種と見る可きものである。商品取引資本が獨立の職分を有する資本の性質を得るのは、二つの理由によるのである。(一)商品の貨幣への變形が、生産者とは異つた別人の手に於て行はれ、其別人とは、一の獨立した商人であつて、從つて、其行ふ變形は、産業資本の他の職分から分立して居る一の獨立なる業務たること、(二)而して其獨立の商人は、貨幣資本を前貸するものであること是れである。此の前貸と云ふ援助がなければ、生産者は、其の商品を貨幣に變形し終るまで——即ち商品を賣つて其代金を受取るまで——彼の再生産行程を中止して待つか、又は、其の生産資本の高と生産業務の規模を縮少して、流通資本の餘力を剩して置かなければならぬのである。資本の一部を前貸して吳れる商人があるからこそ、生産者は、其何れをも爲す必要なく、力一杯に再生産行程を繼續して行くことが出來るのである。トコロが、斯く變形行程を生産者の手から商人の手に移すことは、決して單に人の入れ換たるに止るものではない、茲に重大た變化が起るので、其變化は、經濟上甚だ有利であるのである。即ち(一)此の分業が行はれるときは、生産者たる資本家が、商品賣買てふ商人的職務までも自ら之を行ふ場合に比して、其賣買の爲に用られる資本の額は、小額で事足りることとなるのである。(二)生産者に取つて、其商品の貨幣への變形が遙かに速かに行はれるは勿論のこと、商品資本其ものも、生産者の手に於て行はれるよりも、遙かに早く其變形を完うするのである。(三)商人資本は生産者資本と事異り、其運轉は、一生産業における各生産者資本多數の運轉を意味するのみならず、種々異なつた生産業に於ける多數の資本の運轉を意味するものである。——今日現在云ふ興業資金、ヒルフアーチングの所謂 Finanzkapital (金融資

本）又は、リーフマンに言はせれば、證券資本主義 Effektenkapitalismus とは、此の事である。而して、株式會社の發達は此の（三）の作用を更らに有力有効ならしめるものなることは、讀者直ちに氣が付くことであらう——。凡そ此の三種の重大なる利益がある、併し其れと共に危險も亦た伴ふ。マルクスは、其危險を指摘して云ふ、『近世の信用制度に於ては、商人資本は、社會の總資本の大部分を占めて居る、從つて、既に買つたものを確定的に賣放ひ切つて仕舞はない内に、繰返しゝゝ新たに買入れることが出來る。其結果は、假裝的な需要を作り出すことになる。商人資本は、其獨立性の御蔭によつて、或る程度までは、全く再生產行程の限界から獨立して活動することが出來、從つて再生產行程をして其の限界を飛越さしめるのである。かく商人資本は外面的には獨立して居り、内面的には再生產行程に從屬して居ると云ふことは、終には、内面的連絡が威壓的に——恐慌によつて——再び回復せられる點にまで、再生產行程の擴張を刺戟促進するものである。是れ則ち、恐慌の爆發は直接の消費に應ずる小賣業に於て起らず、卸賣商業と之れに社會の貨幣資本を供給する銀行業とに於て先づ起る所以である』と。（第三卷上册二八八頁）

（五）

貨幣取引資本も亦た循環行程に對して外面的に獨立して居るものである。マルクスは云ふ『貨幣が產業資本の流通行程に於て爲す所の純技術的運動は、一の特殊なる資本の職分として獨立し、其特殊資本は此の特殊職分を、否其れのみを、固有の仕事として營むようになると、此資本は、貨幣取引資本に變形したものである。純粹の形に於ける貨幣商業——即ち信用制度に關係なき——は、商品流通の一方面の技術、即ち貨幣流通と之れから生ずる各種の貨幣職分のみを取扱ふものである。其運動は、再生產行程中にある產業資本の獨立した部分の運動たるに過ぎない。其取り行ふ各

種の仕事は、貨幣其ものの種々異つた用途と、貨幣資本たる形に於て資本が取行ふ職分とから生じ來るものである。資本の一部は、蓄財として絕へず存在して居らねばならぬ。卽ち購買資金、支拂資金用の準備として、其運用を待ちつゝある無爲の貨幣額が其れである。資本の一部は又た絕へず此形を取る可く流れ歸つて來るのである。其の爲めに、金錢の收支、其の記帳等の仕事の外に、準備金の保管と云ふ仕事が必要になり、此仕事は又た一の特別な業務となる。此の獨立の爲めに特別の利益が起る。卽ち貨幣商業は、貨幣流通の技術的作業を媒介し、之を集中し、短縮し、又た單純にする。貨幣商業は決して蓄財を産み出すものではないが、蓄財形成を其經濟的最小限に引付ける爲めの技術的手段を提供するものである。卽ち、購買及支拂資金としての準備高は、各資本家が銘々に之を積立てる場合よりも、貨幣商業が全資本家階級の爲めに積立てゝ置く方が遙かに少額で事足りるのである』と。（同上冊二九九—三〇五頁より摘出）

トコロガ、貸貸資本に到つては、事態が餘程違ふのである。商品取引資本、貨幣取引資本の二者は、循環行程中に活動する資本の代理者として、直接に循環行程に入り込むものであるのに、貨幣資本は全く循環行程以外に立つものである。『資本が其出立點へ復歸することは其の全循環行程に於ける資本の特徵的運動である。貸貸資本特有の點は、此の復歸が外在的で中間媒介の循環行程と全く離れて居ることと之れである。貸貸主たる資本家は、何の對價をも受けないで其の資本を生産資本家に引渡す、卽ち其引渡しは、資本の眞正なる循環行程に少しも關係なき一行爲であつて、生産資本家によつて行はるゝ循環行程の爲めに道開きをなすに止るものである。資本は貨幣としても、商品としても、支出せられるのでなく、——商品と引換に、貨幣の形に於て前拂せられるのでもなく、商品として前渡せらるゝ場合の樣に、貨幣に代へて賣らるゝのでもなく——單に、資本として支出せられるのである。此の貸貸資本の形に於て、資本關係は最極端にして最魔術的なる形態に達するのである。之を表はす方式は、單に G—G'（原譯——直譯した譯語）

で、貨幣が其れ自らを增大する換價行程丈けに止まり、此兩極を仲介する行程は全く缺けて居るのである。卽ち資本本來の出發點たる G—W—G'（貨幣——商品——增殖した貨幣）なる方式が、兩極端丈けに收約せられて G—G' となつて仕舞ふのである。此れは、資本の源泉的一般的方式で、生產行程や流通行程の媒介を待たないで、直接に餘剩價値を產み出す方式である。此方式に於て、資本は其れ自らの增殖たる——筆者註。アリストテレースの『貨幣は貨幣を生む能はず』を正反對に行つて——利子を產み出す神妙不思議なる自發的源泉として現はれるのである』と。（全上册三三一頁以下より拔萃す）

（六）

以上の循環行程論は、マルクス自らは可なり重きを置いて說いて居るが、今日の我々に取つては、其は、資本再生產論、資本各形態の相互從屬の說明への準備として、意義あるもので、循環行程の解剖としては、餘りに煩に過ぎて却つて要領を得さしめない處のあるものである。資本各種形態の相互從屬關係を說いたものとして、今日迄の經濟學に於て格段の重要を有するものは二個の學說である。其第一は、人の知る所の勞銀基金說である、第二は、卽ちマルクスの資本の擴張再生產の理論此れである。

勞銀基金說の說く所の循環行程は、各個資本に就て見たもので、而して各個資本が循環行程の一部より他の部へ移る變化は、必ず自由流通市場に於ける其の形態の變化によるのであると前提して居るのである。卽ち、貨幣資本が商品資本に變形するのも、其反對に商品資本が貨幣資本に變形するのも、必ず常に、自由市場の機關の助けを受けるもので、其助けによつて一の障礙なく圓滿に行はれるものだとするのである。トコロが、マルクスが更らに進んで研究の題目と

した社會全體の資本の流通と再生産とを説明するには、右の如き簡單な推定に基くことは決して許されないのである。何となれば、此説明の中核を形つくるものは、單なる變形、無障礙の推移ではなく、各資本形態間の相互從屬の複雑なる關係であるからである。故にマルクスは云ふ『我々が、資本の價値の生産と生産物價値とを個別的に考察して居る限りは、商品としての生産物の自然形態は全く無關係で、其が機械であらうが、穀物であらうが、鏡であらうが、些も異る所はない。此等形態は單に一の例證に過ぎないし、又た如何なる生産業を例に取つて考察しても少しも差支はないのである。トコロが、社會の總資本と其生産物價値の全體を考察することとなると、此くの如き形式的説明は最早用を爲すに足らなくなる。生産物價値の一部が資本に再形すること、其他の或部分が、資本家と勞働階級の個人的消費に移り行くことは、總資本が生み出す所の生産價値其れ自らの内に於ける運動を形づくるものである。而して、此運動は、單に價値の補充たるに止まらないで、素材補充であり從つて又た社會的生産物の價値構成部分の相互關係によつて條件付けらるゝと同じ様に、其の使用價値、即ち其の素材的態容によつて條件付けられるものである』と。（資本論第二卷三六八頁）

從つて社會の總資本流通と再生産を考察するに方て中核となる問題は、マルクスの語を以て云へば、『生産に於て消費せらるゝ資本は、如何にして、其價値を年々の生産物によつて補塡するか、及び、此補塡運動は、資本家の手に於ける餘剰價値の消費、並に、勞働者の手に於ける勞銀の消費と如何に融化するか』之れである。ソコデ、問題は分れて二となる。即ち（一）單純再生産（二）擴張再生産之れである。『資本論』第二卷の後半部即ち第三篇『社會的總資本の再生産と流通』（自三二四頁至五〇〇頁）は、此兩問題の考究に充てゝあるのである。『此一篇こそ、筆者が、『資本論』中壓卷の作——の少くとも其一——と呼ばんと欲する所のものであつて、而して、資本主義經濟組織、特に雇傭勞働關係の下に於ける、勞資協調、不協調の根本理法に關して、今日までに試みられた個的研究の最高頂を示めすと見る可きものである。

（七）

先づ單純再生産の説明に一瞥を與へよう。社會の全生産は二つの大きな部門に分れる、即ち（一）生産要具の生産（二）消費料の生産是れである。兩部門の各を通じて、之に屬する種々樣々な生産業は相合して一の單位を形づくる、即ち社會には、生産要具生産と云ふ一單位と、消費料生産と云ふ一單位と、此の二つの單位が併立して居る。而して各部門に於て、資本は、二つの部分から成立つて居る、一は可變資本――勞働力――で、他は不變資本――機械、器具、原料、補助原料等――である。從つて、資本の助けによつて各部門に於て生産せられる生産物の價値は、三つの部分から成り立つのである。（一）生産に充用せられた不變資本（之をcの符號で表はす）（二）全じく可變資本（vで表はす）（三）追加せられた餘剩價値（mで表はす）。玆で、マルクスは、説明を簡便にする爲めに、mはvと同量として取扱ひ、從つて、價値増進率m―vを一〇〇%と假定する。ソコデ次の樣な――ニコルソン（Th Revival of Marxism. p. 73.）に言はせれば、冒險小説に能くある海賊が財寶を匿くしてある場所を示めす爲めの地圖や隱語の樣な――算式が成立つ。

1. 生産要具生産の場合

投入資本　4000c＋1000v＝5000

商品生産物（生産せられる生産要具）　4000c＋1000v＋1000m＝6000

2. 消費料生産の場合

投入資本　2000c＋500v＝2500

商品生產物（生產せられる消費料）　$2000c+500v+500m=3000$

右算式を單純再生產、卽ち資本の增殖形成なく、餘剩產物の全部が消費せられる場合に應用して見ると、次の樣な交換經過を見るのである。

（一）500v（勞銀）と 500m（資本家の利潤）は第二部門（消費料生產業）に於ては、共に消費料の形に於て提供せられる。此額は生產總額 3000 中から取出されて、資本家と勞働者との間に交換せられる。

（二）資本家の手に差引殘る 2000 單位の消費料は、資本家は之を充用する方法を知らぬものである、彼の要する所は、消費料ではなく、生產要具である。ソコデ、資本家は、此二〇〇〇單位の消費料を賣り、之に換へて生產要具を買はなければならぬ。其相手方は卽ち第一部門（生產要具生產業）の資本家である。ソコデ生產要具を生產する資本家は二〇〇〇の生產要具を前者に與へ、之に代へて自己の要する 1000 v ＋ 1000 m を受取つて、消費に充てるのである。

（三）かくて、第一部門の生產資本家の手には 6000－2000＝4000 單位の生產要具が殘る。此れは其資本家等が、自己の消費に供す可きものを得る爲めに交換に持出すのである。

此くの如くにして、第一部門の生產物六〇〇〇單位も、第二部門生產物三〇〇〇單位も、共に均しく、絕へず相互に交換せられて居る。但し此れには、第一部門に於て、資本家自らの需要を充たす以上に生產せられる生產要具の形に於ける價値產物は、第二部門に於て充用せられ、消費料の形に於て再生產せられる不變資本に均しいと云ふことを前提として居るのである。其れが均しくなくして、例へば、第一部門の殘餘の方が少ければ、生產要具の或部分は第二部門に於て補塡せられず、反對に其方が多ければ、或部分は少しも利用せられず、換價せられずに捨て置かれなければならぬの

である。兩者が相均しく、資本各形態の按排宜しきを得る場合に於てのみ、資本の流通と再生産は圓滑に進行するのである。

第一部門、第二部門共に、其中には、多數の異なつた種類の産業を包含して居る。然し種類は如何に違つて居ても、資本流通の經過は、其れが爲めに異ることなく、大體に於て右に說明した通りに行はれる。唯だ業の性質に依て、其經過が比較的複雜となるかならぬかの差違があるのである。殊にマルクスは、主として資本家階級のみが消費する奢侈品の生産業と、生活必要品生産業との差異を詳かに考究して居る。（第二卷三七七頁以下、『第二部門に於ける轉換。必要生計料と奢侈料』）此研究のあること等が殆んど――或は全く――知らない金融經濟學者ウヰザースの『貧乏と浪費』等は、言ふまでもなく遜出の家であるが、河上博士が若し、其の一代の名著『貧乏物語』の着想をマルクスの右の研究に立脚せられたなら、必ずしも『貧乏物語』の絶版を急に決行せられる必要はなかつたであらう。誠に惜しいことをしたものである。

（八）

次に擴張再生産の說明を聞かう。擴張再生産とは、所得の一部が消費料に投下せられて消費せらるゝことなく、生産要具を作る爲めに充てられ、從つて生産の擴張に用らるゝ場合を云ふのである。マルクスの資本增殖の理論は、卽ち玆に展開せられて居るので、唯惜いことには、前に言つた如く其研究が半途にして止んで居るのである。

擴張再生産による資本の追加形成は、之に先行する一の別なる生産の存在することを前提する。所得を資本に轉化し之を生産要具の購入用に充當し得るには、其購入す可き生産要具なるものが既に生産せられて居ることを要する。資本に變形せらるゝ所得が、生産要具購入用に充てらる可く消費料購入用から取去られ、從つて、消費料の生産增加を起さ

しめまいとするときは、此く新たに形成せられた資本は、其存在の前提として、消費料の生產が其割合丈け減少せなければならぬは、言ふまでもない。換言すれば、其の生產行程が開始する前に既に、生產要具生產業と消費料生產業との兩生產部門に於ける資本財の單純及び擴張再生產に對する分配が定まつて居るのである。

兩部門の生產業に於て產出した餘剩價値が單純再生產の場合に於けるように、消費料の購入に充てられて全部消費し盡されることなく、一部分は、新資本の形成に充てられ、即ち、生產要具並に勞働者消費料の收得に用らるゝとき——即ち擴張再生產が行はれるとき——は、次のような變化が起るのである。

單純再生產の場合に於ては、第二部門——消費料生產業——は、第一部門の生產業に二〇〇〇單位の消費料——勞働者(v)に一〇〇〇單位、資本家(m)に一〇〇〇單位——を賣り得るものと豫定し得るが、擴張再生產の場合に於ては、第二部門は、資本家利潤(餘剩價値m)の一部分のみを賣却換價し得るに止るのである。反對に、單純再生產の場合では、第一部門は、第一、第二兩部門に於て投下せらるる生產要具丈けを再生產するに過ぎない、然るに擴張再生產の場合では、資本家が資本に轉化しようと定めた其利潤分を、凡て生產要具の形に於て投下し得る丈け餘計に生產しなければならぬのである。此目的を達するには、現在の不變可變兩資本分を單純再生產の場合の樣に按排してはいけない、其按排を變じて、全生產機構の豫定變更に應ずるようにせなければならぬ。即ち生產要具生產業に重く、消費料生產業に輕くせねばならぬのである。此輕重の按排が適當に行はれゝば、年々の生產物の販賣は圓滿に行はれ、資本財、生產要具、勞働者消費料の供給は必要に應じて不足なく、次から次へと翌年度の生產を愈々擴張して行くことが出來るのである。マルクスは甚だ詳細に各個の場合に就て、種々の可能性を指摘して、之を考察し、複雜な現象を、可なり明快に分解說明して居るが、併し、未だ問題の眞の中核にまで突き込んで居らないのである。

各資本家階級間の商品交換、資本家階級と勞働者階級との間の商品交換は、何れも、貨幣の媒介によつて行はれるものである。マルクスは、此媒介の職分を盡す貨幣資本に就ても詳しい考察を試みて居る。ジムメルの『貨幣の哲學』は近來破天荒の研究と云はれて居るが、現實經濟組織の解剖としては、マルクスの此研究に一着を輸せざるを得ない。否兩者相合して、始めて、貨幣經濟の眞相を我々に教ゆるものと云ふ可きであらう。乍去、マルクスは此研究の方に力を傾けた爲めに、擴張再生產論から、當然に生ず可き歸着點まで論究することをしなかつた。殊に過超生產との關係の考察を輕々に取扱つて居る。然るに此考察は、資本主義の崩壊の發展則の說明に是非缺く可からざるものである。マルクスの立場からは勿論のこと、流通經濟の研究の立場から見ても、資本增殖の理法と資本主義の崩壊との關係は、甚だ密接、否不可離、不可斷のものである。マルクスの擴張再生產理論は、此點を明かにする、殆んど唯一の、而して疑もなく少くとも最妥當なる關門を開いたものである。彼は關門は確かに之を突破した、乍併、其れより先、如何なる道を進んで行く可きものなるかを示すこと、甚だ不十分であるのである。

唯物史觀の立場から云へば、資本主義崩壊の必然性、社會主義經濟成立の不可避性を立證する爲めには、資本擴張再生產に立脚する現在の資本主義經濟組織が、或發展階段に達するとき、經濟上共存續が最早不可能となることを十分に說明せなければならぬ。此說明、此立證が學問上に確立するときに於て、始めて社會主義はユートピアの世界から脫出して學問の世界に確固たる立脚地を占めることになる。然らざる限り、社會主義は『世界改良屋の寢夢』たる域を十分に蟬脫したものとは云へず、少くなくとも無政府主義と同じ位な曖昧な存在をしか有さないものと云はなければならぬ

而してマルクスは、此の學問的立證を以て、彼の學問上の最重要の仕事と自信して居たことは疑のない所である。マルクスの擴張再生產理論は實に此仕事の爲めの重大なる努力である。我々は更らに視野を擴張して、此再生產理論を

關門とする資本主義崩壞必然理論を考察して見なければならぬ。其れが爲めには、問題は自ら分れて二となる。第一は資本主義生産行き詰りの理論である。第二は、利潤率漸落の理論である。此二つの問題の考察は又た同時に、流通經濟理論の中堅を責めることになると共に、雇傭所得と資本所得との根本的に融和し難き對抗性の基礎研究とならざるを得ないのである。

（九）

經濟學の通説に於て、一國生産の範圍は、其の消費によつて支配せらるゝとすることは、多くの學者によつて認められる所である。從つて、一國の生産は其の消費の擴張よりも速かに擴張することは、不可能なりとせられて居る。但し其間二派に分れて居る。即ち、リカルドは資本の增殖は、決して消費の減退を來たすものではない、何となれば、增殖した資本は、勞銀として支拂ふ高を增加し、從つて勞働者側の消費を增進するからであると主張する。勞働者の消費は、資本家が其消費を節減して資本を增殖しただけ增加する。唯だ消費當事者の人の入れ代へ丈けであつて、消費の總量には減少を來たさぬと云ふ。之に反對して、マルサス——シスモンヂも亦然り——は、資本の增殖餘りに急速なるときは、生産超過の現象が起り得ると主張する。此場合には、生産物の量は之に對する需要よりも多く、消費し切れないことになると云ふ。乍去、生産の範圍は消費の範圍と相應するもの、相應す可きものであると考へるに至つては、兩派同一である。唯だ一派は、其調和は不斷的、不可破的のものであるとするに反して、一派は、其調和の時に破られ、來さるゝことのあり得ることを認める丈けが、違つた點なのである。近時の經濟學に於て、資本理論研究の第一人者たるボエーム、バヴエルクも亦た次の如く言つて居る。

Das Einkommen eines Volkes ist auf die Dauer identisch mit dem Ertrage seiner Produktion. Ein Jahresring seines Einkommens fällt beiläufig zusammen mit dem Ertrage eines Jahresringes seiner Produktivkräfte. Würde jeder Einzelne im Volk ganz genau sein Jahreseinkommen in Genussmittelform verzehren, so würde ein Genussmittelbegehr entwickelt, der durch das Spiel der Preise die Produktionsunternehmer veranlassen würde, die Produktion so zu lenken, dass in jedem Jahre das Erträgnis eines ganzen Jahresringes von Produktivkräften die Gestalt von Genussmitteln annimmt....... ...... wir sehen also in der Tat einen genauen Zusammenhang zwischen Ersparung und Kapitalbildung. Erspart kein Einzelner, so kann das Volk im ganzen kein Kapital bilden, ... ersparen aber die Einzelnen, so zwingt der veränderte Begehr abermals durch den Impuls der Preise die Unternehmer zu einer veränderten Disposition über die Produktivkräfte. Böhm-Bawerk, Positive Theorie des Kapitales. 3. A. 1909. SS. 197—199.

『一國民の所得は、長期に亘つては、其の生産の收穫と一致するものである。其一ケ年所得高は、概して云へば、其の生産力の一ケ年分の收穫と相均しい。一國民の各員が、其一ケ年所得の全部を悉く享樂品として消費し盡くすときは、其國の消費料需要は膨脹し、其價が騰貴する結果、生産企業者を促して、生産力一ケ年分全部の收穫が、享樂料の形を取るやうに、其生産の方針を變せしめる。…………かくて「我々は、貯蓄と資本形成との間に、一精密な一致が存することを、事實として見る。一國中誰も貯蓄せないときは、其國は一の資本をも形成することは出來ない（何となれば、享樂料消費の大增進は、其價を高めるによつて、生産を强制して、生産力年分の全部の收獲を享樂料たらしむ可く、生産の方向を轉換せしめるから）。之に反し、各員が貯蓄するときは、其需要の變化は、又た價格の變動を惹起するによつて、企業者をして生産力の按排を轉換せしめる』。

レキシスも亦た、年々の生産量、消費量、第一次所得量は、分量的に殆んど合致するものだと主張したとは、バヴエルクが特に右箇所の脚註中に引用して居る所である。

マルクスは其出立點に就ては、經濟學の通説と殆んど一致して居るので、而して、百尺竿頭更らに歩を進めたのである。即ち曰く、資本制生産の限界は資本其れ自らである、資本制生産に對する市場の範圍は、社會的消費の範圍によつて定められる。生産量が消費量以上に增加するときは、生産物の一部は之を賣ること能はず、資本の一部は之を利用すること能はないのである。此場合即ち過超生産が起るのであつて、其繼續する限り資本の一部は無爲無用に晏臥する。資本制生産の發達は、此くの如き過超生産の時期を益々長くする、何故となれば、資本制生産が發達すると、社會の消費は、其擴張甚だ緩慢となり、生産のみ獨り急速に擴張するからである。而して、終には、過超生産は、社會の慢性病となり、資本の增殖大なればなるほど之を利用、換價する可能性は、亦た益々減少し、終に資本制社會は崩壞せざるを得ないこととなると。是れが資本增殖の理法と資本主義の崩壞との關係に就てのマルクスの見解である。而して其出立點は正統經濟學派と同じく、生産、消費の自然的協調論に存するのである。リカルドは、此協調を常住不變と見、從つて、一時的過超生産を考慮に置かず、マルサスは、一時的には過超生産の可能を認めるのであるが、マルクスに至つては更らに歩を進めて、此協調を破壞する過超生産は資本主義の痼疾なりとし、其發達は、此の病を一時的より慢性的に歸せしめ、終に、資本社會の死を將來するものなりとして居るのである。正統學派に追從せず、バヴエルクの業績は認めるが其資本理論を以て窠套を脱却し切らざるものとし——拙著『資本經濟講話』並に之に對する小泉信三教授の三田學會雜誌に於ける批評を見よ——マルクスの擴張再生産の學問上の價値は、十分に之を認めるも、其は未だ問題の核心に突き込まざるものなりとする我等の流通理論は、以上の見解に對して、果して如何なる立場を取るか、是れ筆者が本論次に於て略述せんと欲する所である。(以下嗣出)

勞働者階級の文化的使命と教養

文學博士　米田庄太郎

（一）緒言

夫れ一定の時代に特有のものと認めらる可き文化は、其の時代の社會組織に於て支配階級の地位を占むる社會階級の精神を表現し、發揮するものである。かくて貴族的社會組織の時代特有の文化は貴族的文化、即ち貴族階級の精神を表現し、發揮する文化であり、そうしてブールヂョア社會組織の時代特有の文化、近代特有の文化はブールヂョア文化、即ちブールヂョア階級の精神を表現し、發揮する文化である。然るに今や歐米諸國に於ては勞働者階級が段々に發達して、ブールヂョア階級に對して支配階級の地位を爭ふて來た。又之れに應じて新しき文化の芽が發生しつゝあるのである。されば吾人は現代を以て社會組織の進化の上から見るも、又文化の發達の上から見るも、一の過渡期と見做さねばならぬ。詳しく云へば現代はブールヂョア社會組織が段々に改造され、そうして新しき文化が發生して、社會組織及び文化の發達が新しき時代に移らんとして居る時期である。つまり現代は過渡期、改造期である。然らば此の過渡期、此の改造期は如何にして堅實に其の任務を盡くし、ブールヂョア文化よりも一層高等な或は完全な、新しき文化を發達させることが出來るであらうか。夫れが爲めには、ブールヂョア階級の眞の自覺は勿論重要であるが、併し最も根本的に重要なるは勞働者階級が健實に發達して、よく其の文化的大使命を自覺し、そうして其大使命を成就するに必要なる精神的教養を具へることであると、余は確信して居る。

それで此處に簡單に、其の理由を述べたいと思ふのであるが、附ては先づブールヂョア文化の本質を究明して、其の長所を充分に承認すると同時に又其の短所をよく理解し、そうしてブールヂョア文化以上に、文化が高等なる發達をなす爲めに、勞働者階級が如何なる使命を有するかを考究しなければならぬ。但しブールヂョア階級及び勞働者階級の概念

に付ては、本紙本年一月號及び二月號に於て發表せる拙稿（現代社會の階級分析拙著「現代社會問題の社會學的考察」第一章）を閲讀されたい。

（二）ブールヂョア文化の本質并に長所及び短所

夫れ余の社會學の原理によれば一定の時代特有の文化は、其の時代の社會組織に於て、支配階級の地位を占める社會階級の「精神を表現し、發揮するものであるが今其の支配階級となる社會階級の精神」と云へば、つまり其の階級特有の社會的感覺と、其の社會的感覺によりて促がされ、又之れによりて制約される理性の發達を、意味するものである。（拙著「經濟心理の研究」第二章參考）。余は便宜上かゝる發達をなす理性を、矢張り其の階級特有の社會的理性と稱して置く。されぱブールヂョア社會組織を地盤として、ブールヂョア階級の精神を表現し、發揮する近代文化、即ちブールヂョア文化の本質は、つまりブールヂョア階級の社會的感覺、及び社會的理性を研究することによりて、理解さる可きものである。

ブールヂョア階級特有の社會的感覺、即ち余が特にブールヂョア感覺と稱するは、如何なるものであるか。此處に詳しく論ずる暇はないから、只其の根本的方面を少しく述ぶるに止めるが、余はブールヂョア感覺の中心、或は核心と認む可きものは、余が財産感覺と稱するものであると考へる。但し余の財産感覺と稱するは、つまり財産に對する鋭き感覺や、財産を非常に尊重し、之を以て一切の社會的及び政治勢力の基礎と感ずる念なぞを、意味するのである。尚ほブールヂョア感覺の核心たる財産感覺に於て、殊に根本的に重要なるは、金錢或は貨幣に對する感覺である。されはブールヂョア感覺の核心は貨幣感覺或は金錢感覺で、あると云ふことが出來る。否な此く云ふことによりて、一層率直にブールヂョア感覺の核心を、云ひ表はすことが出來ようと思ふ。そうして此のブールヂョア階級の金錢感覺は、舊ブールヂョア階級即ち町人階級に於ても、餘程發達して居たので、殊に町人階級の實力が大に發達し來れる時代には、彼等の人生觀の根本原理とまでもなつて居たのである。余は我國にありても少なくも既に元祿享保の頃には、町人階級の金錢感覺は大に發達し、彼等か之れを基礎として、彼等特有の人生觀を立てゝ來たと考へるのであるが、左に近松門在衛門世話

淨瑠璃「山崎與次兵衛壽の門松」中にある、淨閑の言葉を引用して之を示して置く。

「侍の子は侍の親が育てゝ武士の道を教ゆるゆえに武士となり、町人の子は町人の親が育てゝ商賣の道を教ゆるゆえに商人となる。侍は利徳を捨て名をもとめ、町人は名をすてゝ利徳を取り金銀をためる。是れが道と申すもの。如何なる大病難病も病には療治種々ある。國法で取らるゝ命には、人參で行水させてもいかな〳〵助からねど、金銀では助かる。命の買はるゝ金銀、大事の寶と云ふ事を與次兵衛めが知たれば、此の難儀は仕出さぬ。何程惜み貯へても死出は帷子一枚とは、此の淨閑も知たれども、死ぬるまで金銀を神佛と尊ぶ。是れが町人の天の道、金の罰の當つた奴、まだ此の上に惜氣もなふ金出して如何なる天罰大難にがな遭ひ居るかと、可愛程猶ほ出しかぬる』云々。

併し此處に舊ブールヂョア階級、即ち町人階級の金錢感覺の發動と、近代ブールヂョア階級の金錢感覺の發動との間に、重要な差異のあることを注意せねばならぬ。町人階級に於て、既に金錢感覺が甚だ強烈であつたことは、右の淨閑の言葉によりても明らかに窺はれるが、しかも町人階級は當代の社會組織に於ては、彼等の生活に種々なる制限を加へられて居た。又彼等の生活は身分の觀念、及び之れに附着する身分相應の生活と云ふ、一定の身分的生活標準の觀念によりて、根本的に規定されて居た。此くて彼等の金錢を獲得し、集積せんとする念、即ち營利心は少なくも原則的には、制限されて居たのである。即ち有限的であつたのである。然るに近代ブールヂョア階級にありては、町人階級の受けたるが如き政治的及び社會的制限は、全く除去されて居る。彼等自身が支配階級の地位に上つて居るのであるから、彼等は上より加へられる何等の制限をも受けず、又傳來の社會的拘束をも全く脫して居る。そうして彼等の社會的及び政治的勢力は、全く貨幣財產に基づき、且つ其の勢力は彼等の獲得し、集積する貨幣財產額の大なるほど、益々增大するのであるから、彼等の營利心即ち貨幣財產を獲得し、集積せんとする念は無限的となつて來た。要するに近代ブールヂョア階級の營利心が、無限的になつて居ると云ふことが舊ブールヂョア階級、即ち町人階級より彼等を區別する根本的一特徵であり、又其の無限的營利心が、彼等の活動及び生活を決定する根本的原動力であるのである。吾人は近代ブールヂョア階級の財產感覺或は金錢感覺が、無限的に強まり、彼等の金錢を獲得し、集積せんとする念、即ち營利心が無限的に

なつて居ることが、彼等の物質的及び精神的生活を支配する根本的原動力であり、隨ふて又ブールヂョア文化の根本的原動力であると、云ふことが出來るのである。

右に述べし如く近代ブールヂョア階級特有の社會的感覺、即ちブールヂョア感覺の核心たる貨幣感覺或は金錢感覺が、無限的となり、金錢を獲得し、集積せんとする念、即ち營利心が無限的となつて居ることが、彼等の根本的一特質であり、又彼等の活動の根本的原動力であると同時に、又金錢の獲得及集積の方法は自から主知主義的或は合理主義的となつて居る。蓋し無限的營利心を充たす爲めに、出來るだけ多く金錢を獲得し、集積せんとするには、其の方法が出來るだけ主知的、合理的とならざるを得ないからである。但し此處に營利の方法の主知主義或は合理主義と云ふは、つまり企業の創設、計畫及び經營等に於て、總て慣習に拘束されず、傳來の道德的思想や、感情に囚はれず、只營利の爲めに有利と考へられる方法のみを工夫し、實行することを云ふのである。

余は右に述べしが如く、近代ブールヂョア階級の精神即ち其の特有の社會的感覺の核心は、無限的金錢感覺及び之れに伴なふ無限的營利心にして、又此の無限的金錢感覺及び無限的營利心に促がされて、先づ彼等の經濟的活動に於て發達する理性は、主知主義或は合理主義であると考へるのであるが、然るに今先づ無限的金錢感覺及び無限的營利心を、哲學的に練り上げて行くと、遂に夫れは眞理も善も美も聖も換言すれば學問も道德も藝術も宗教も、總て結局は營利の手段とし做して、之れに獨立絕對の價値を認めず、又總ての價値を分量的に評價することになり、次に經濟的主知主義或は合理主義を哲學的に練り上げて行くと、夫れはつまり唯物主義に發達するのである。此くてブールヂョア文化は、根本的には經濟的及び合理主義的或は唯物主義的文化であるのである。そしてブールヂョア文化の長所も亦短所も、或は其の優勝性も亦其の劣等性も、共に其根本的に經濟的及び唯物主義的である事に、其因するのである。

今ブールヂョア文化が、根本的に經濟的及び唯物主義的であると云ふとは、先づ此の文化に於て自然の勢力及び物質に關する吾人の知識即ち自然科學並に之れに基づける技術的發明の、未曾有の大發展を招致して居るのである。蓋し無限的營利心を、出來るだけ合理的に充足せんとすることは、自から技術的發明の大なる發達、及び其の基礎たる自然科

學の大なる發達を、促がすからである。そうして此の事はつまり、自然の征服或は自然の支配の、大なる發達を意味するので、若し一派の文化學者の如く、文化の本質を自然の征服或は自然の支配に認むるに於ては、ブールヂョア文化ほど、大なる文化の發達を成就せるものはなく、夫れは最とも勝れたる文化となるのである。尙ほ假令文化の本質を、右の如くに解しない人々にありても、矢張り自然の征服を以て、文化發達の本質的一成分と認めざるを得ないので、ブールヂョア文化は少なくも文化の本質的一方面を、最ともよく發揮するものと云はねばならぬ。そうして將來の文化は、如何に文化の理想的方面を重要視するものであつても、決して自然の征服の方面を輕視す可きものでなく、此の點に於てはブールヂョア文化の成業を繼續し、更に其の一段の發達を圖るものであらねばならぬ。又此くすることによりて、將來の文化は本來理想主義的なるものであるとしても、夫れは貴族的文化の理想主義の如き夢幻的な・非現實的なものではなく、現實に囚はれて唯物主義的とはならないが、しかも常に現實に即し、現實を離れるものとなり得るのである。

更に吾人はブールヂョア文化の優勝を認めねばならぬ方面がある。夫れは卽ち自由主義の發達に關する方面にして、ブールヂョア文化は實に自由主義の發達の途を開き、且つ其の發達を少なくも形式上、或は名目上殆んど大成したので。自由主義はブールヂョア文化の本質的一要素をなすものである。もつとも其の自由主義と云ふは、名目上人間共の物の自由を要求し、主張しながら、本來は只ブールヂョア階級の自由を意味するだけのもの、卽ち階級的自由主義であつて人間的或は人類的に徹底しないものであるが、しかも彼等が貴族階級に對して、自由主義を主張し、彼等の自由主義を獲得する爲めに、大に奮鬪努力しなかつたならば、勞働者階級は、到底自由を要求する機會を、得なかつたであらうと思ふ。尙ほブールヂョア階級は、貴族階級に對して自己の自由を獲得する爲めに、勞働者階級を味方にひきつける必要上、少なくも名目上は彼等と同等なる多くの自由を、勞働者階級にも獲得させたのである。そうして今日勞働者階級の特に要求する勞働の自由も、人間の完全なる自由の發達史から見れば、ブールヂョア階級の自由主義の論理的徹底に外ならないのである。ブールヂョア階級の大活動によりて、自由主義が大に發達するに非らずは、勞働者階級の自由たるものは、全く

問題とならないのである。ブールヂョア階級は自己の自由を完全に獲得する爲めに、其の要求を正當なるものと見せる必要上、只之を人間其の物の自由として理論を立て、且つ勞働者階級を利用したのに外ならないが、しかも其の利用は決して代償を拂はずに行はれたのでなく、勞働者階級に少なくも名目上大なる自由を、與へねばならなかつた。そうして又彼等は勞働者階級に、名目上與へたる自由其の物を巧みに運用して、以て勞働者階級を實際上支配する方法を、工夫せねばならなかつた。此くて彼等は契約の自由を巧みに運用して、以て勞働者階級を實際上支配するに至つたのである。併し既に名目上勞働者階級が、大なる自由を與へられて居る以上は、彼等の知力が段々に發達して、彼等が段々に自覺し其の實力が發達するに至つては、彼等が其の名目上の自由を現實なる自由に轉化し、更に彼等の自由を完成する爲めに勞働の自由を要求するに至るは、當然なる結果である。要するにブールヂョア階級の自由主義、即ち所謂近世自由主義なるものは、少なくも名目上人間の自由の大なる部分を實現したもので、假令實際上では完全に人間の自由を實現しなかつたとしても、しかも人間の自由の發達上、大なる貢献をなせるものであることは、疑はれない其の一大功績である。實にブールヂョア文化の自由主義の方面は文化發達史上の一大貢献であるので、夫れは文化發達史上永久に記臆す可きものである。

尚ほブールヂョア文化は功績或は其の長所を考察するに當つて、終りに吾人の注意せねばならぬことがある。夫れはブールヂョア文化は、文化の高等なる發達の必然的なる一階段にして、ブールヂョア文化の階段を通過せずしては、文化は到底完全な、或は更に高等な發達を成就し得ないものであると、云ふことである。經濟生活及び合理主義、殊に自然科學の著しき發達、即ち自然の征服の著しき發達を、根本條件或は手段となさずしては、文化は到底完全なる或は大に高等なる發達をなし得るものでないので、要するにブールヂョア階級の使命、ブールヂョア文化の使命は、文化の高等なる或は完全なる發達の爲めに、必要缺く可からざる此の根本條件或は手段を、備へることにあるのである。そうして又此の點に注目することによりて、吾人はブールヂョア文化の眞價を理解することが出來るので、夫れはつまり文化の完全なる發達に對して、必要缺く可からざる手段であるが、しかも矢張り手段であつて、目的ではないのである。吾人はブ

ールヂョア文化の手段性質を、觀破することによりて、始めて其の本質をよく理解し、其の眞價を評定することが出來るので、又ブールヂョア階級の文化的使命を、眞に理解することが出來るのである。そうして余が今日のブールヂョア階級に對して、特に要求することは、彼等がよく彼等の文化の本質を意識し、彼等の文化的使命をよく覺ることであつて、ブールヂョア階級の眞の自覺、文化的或は人類的自覺と云ふは、つまり夫れを意味するものであると考へるのである。

却說ブールヂョア文化の本質及び長所は、上に述べしが如きものにして、夫れは人類の文化發達史上、甚だ重大なる意義を有するものであることは、正當に之を理解するものには、疑はれない事實である。しかも經濟的價値を、最高の文化價値であるが如くに解し、又合理主義や唯物主義を、理性の最高の發達の如くに解するに於ては、種々なる弊害の生ずることも亦、否む可からざる事實である。殊にブールヂョア文化の手段的性質を忘れて、夫れが文化の最高目的を實現するものの如くに解するは、大なる謬見である。尙ほ余は此處に自由の文化的眞價に付て少しく述べ、ブールヂョア文化の手段的性質を、更に明らかにして置きたいが、上に述べし如くブールヂョア文化は、自由の發達上大に貢獻せるものにして、吾人は自由主義を以て其の一大特質或は其の本質的一成分とも、見做し得るのである。そうして今日勞働者階級の要求する勞働の自由は、つまりブールヂョア自由主義の連續或は結果に外ならぬものである。併し、人間の自由は、本來手段的性質のもの、或は文化の最高發達の條件に過ぎないものである。自由其の物が夫れ自身に於て、獨立なる價値を有するのでなくして、人間が最高文化價値を實現する一條件である。夫れは最とも重大な、根本的な條件であるが、しかも矢張り條件である。或は手段である。人間の自由は、夫れ自身に於て價値あるのでなく、之れによりて最高文化價値が實現されることによりて、價値あるものとなるのである。自由なる人間が眞、善、美、聖等の絕對的價値を、人生に於て愈々高度に實現するが故にのみ、自由が價値あるものとなるのである。されば自由の本質或は眞價の上から見ても亦、ブールヂョア文化の手段的性質は、明らかに理解されるのである。同時に吾人は又、今日勞働者階級の要求して居る勞働の自由も、矢張り同樣な手段的性質のものであることを忘れてはならぬ。勞働者階級が人間の最後の自由として勞働の自由を要求し、之を獲得すると云ふことは、夫れ自身に於て人間の自由を完成するものとして、

大に意義あることを認め得られるが、しかも勞働者階級の文化的價値は、其の人間の自由を完成することによりて定まるのではなく、夫れによりて如何に最高文化價値を、實現するかによりて定まるのである。尙ほ余は此處に少しく附言して置きたいのは、今日の婦人運動に付てゞある。今日の婦人運動はつまり社會生活の總ての方面に於て、女子が男子と同等なる自由を享有することを、目的とするものである。そうして夫れは女子が、大に文化の發達に貢献する爲めには、必要缺くべからざる條件或は手段である。しかも夫れは矢張り手段に過ぎないので、目的とされるべきものでない。男子と同等なる自由を得たる女子が男子と同等に最高文化價値の實現の爲めに、効果を奏することが、卽ち婦人運動の眞の目的であるべきである。そうして夫れは女子の精神的教養が、今日見るよりも遙かに大なる發達をなすに於て、始めて望み得られることである。余は今日の婦人が此の點をよく理解して、只自由を得るが爲めに努力するだけに止まらず、否な或方面の女子に於て見るが如く、只自由を得るが爲めにのみ狂奔することを避け、健實に其の精神的發達を圖り、自由なる女子が文化の最高發達の爲めに、男子と同等に貢献し得る精神的實力を養ひ、教養を具へることに、大に努力せんことを希望するのである。

（三）勞働者階級の文化的使命

却說ブールヂョア文化の本質、及び其の長所短所は、大略前節に於て述べしが如きものであるとすると、文化が健實に發達を持續するに於ては、次に發達すべき文化は、最高文化價値の高等なる實現其物を、直接の目的となすものであらねばならぬ。そうして余はかゝる文化の發達を準備する任務に、主として當る可きものは勞働者階級であると信じ、此處に勞働者階級の文化的大使命を、認めんとするのである。併し夫れには先づ何故にブールヂョア階級が、あるがまゝでは此の任務に當ることが出來ないかを、論じなければならぬ。勿論此處で此の問題を、詳しく論ずることは出來ないから、只簡單に愚見の要點を述べるだけに止めて置く。

夫れブールヂョア階級特有の、社會的感覺の核心たる財產或は金錢感覺は、近代ブールヂョア階級にありては、さきに述べし如く無限的營利心として發動し、そうして此の無限的營利心を原動力として、近代ブールヂョア階級の大活動

が行なはれ、彼等は無限的營利心を充足する爲めに、無限的に活動して來たのである。更に此の無限的營利心を最ともよく充足する爲めに、彼等に於て理性は先づ經濟的主知主義、或は合理主義として發達したのである。そうして其の無限的營利心と經濟的合理主義との結合によりて、さきに述べしが如く、ブールヂョア文化が發展したのである。此くてブールヂョア文化、卽ち經濟的及び科學的文化は、近代ブールヂョア階級の精神つまり無限的營利心と合理主義との二大勢力の必然的結果として、大なる發達をなせると同時に、右の二大勢力が根本的に他の勢力によりて制限せられ、壓倒されるに非らずは、ブールヂョア文化以上に、文化の發達することは、到底不可能であらうと思はれるのである。そこでブールヂョア階級が更に將來の高等なる文化の發達の爲めに、主導者として活動し得るや否やは、つまり彼等が自から無限的營利心を大に制限し、又經濟的合理主義を適當に制限し得るや否やによりて、定まるものである。併しブールヂョア階級は果して自から無限的營利心及び經濟的合理主義を、適當に制限し得るであらうか。

今近代ブールヂョア階級が、支配階級の地位を占有する以上は、到底自から其の無限的營利心を制限することが、出來まいと思はれる。是れ彼等が無限的營利心を有し、無限的に又合理主義的に活動して、無限に貨幣價値を獲得し、集積することによりて、支配階級の地位を保持し得るので、若し然らずは到底其の地位を保持することが、出來ないからである。昔ブールヂョア階級卽ち町人階級の營利心が、有限的であつたのは、彼等が自から之れに制限を加へたが爲めでなく、彼等は支配階級の地位にあらずして、其の地位にありし他の階級、卽ち貴族階級によりて、上から種々なる拘束を加へられて居たが爲めである。然るに今日のブールヂョア階級は、自から支配階級の地位を占有し、彼等の上に立ちて、彼等に拘束を加へ得る何等の階級をも認めないので、隨つて彼等の營利心に制限を加へ得る如何なる勢力も、存在しないのである。且つ右に述べし如く、彼等は無限的營利心を固持して無限的に、又合理主義的に活動するに於てのみ、彼等の支配階級的地位を保持し得るのである。されば彼等が自から無限營利心及び合理主義的活動に、適當なる制限を加へると云ふことは到底不可能であると思はれる。更に考ふ可きことは、彼等は自から無限的營利心及び合理主義的活動に何等かの制限を加へんとすることは、結局は營利心を全く放棄せねばならぬ破目に陷ると云ふことである。卽ち彼等は自か

ら彼等の無限的營利心に、全く何等の制限をも加へずに、夫れを自由に發動させるか然らずは之を全く放棄せねばならないかの、擇一的立場にあるので、適當に制限を加へると云ふことは、到底不可能であると思はれるのである。そうして此の事は、彼等の代表者たる現代企業家と企業との關係を、研究することによりて理解されるのである。此處に少しく此の問題に付て、論じて置きたいと思ふ。

夫れ近代の資本主義的大企業は、ブールヂョア階級の代表者としての、大企業家の創造せるものである。此くて始めは企業家が企業を支配して居たのである。然るに企業が段々大規摸に發達するに及んで、夫れ自身獨立する存在を有する、一の實在物の如きものとなり、最早企業家が之を左右することが出來ず、却つて之に支配されて來たのである。そうして今では一般に企業家が企業を支配するのでなく、企業が企業家を支配すること丶なつて居るのである。つまり企業家は假令自から營利心に制限を加へんとしても、企業は之を許さないので、若し企業家が強いて之を企だてんには企業は破滅し、随ふて己れ自身も破滅せねばならないのである。さきに米國の産業調査委員會に於て、カーネギーやロックフエラーなぞの同國の大企業家の述べし證言中には、右の點に付て甚だ興味ある事實が示されて居る。要するに、彼等は自から進んで大トラスト、巨大なる企業を發達させたのではなく、つまり企業の存立を保持する必要上、已を得ず之を巨大なるものに、發達させなければならないのである。今日の資本主義的企業は、自から益々增大するか、又は他の合同して巨大なる企業となるにあらずば、他に壓倒されて仕舞ふので、今日の企業家は無限的營利を求めるか、然らずば、總てを失なはなければならない狀態にあるのである。そうして今日の資本主義的企業が此の如き發達をなせる以上、ブールヂョア階級が自から適當に營利心及び合理主義を、制限すると云ふことは、全く不可能となつて居るのである。

今上に述べしが如く、ブールヂョア階級が支配階級の地位を占有し、そして資本主義的企業が企業家を支配する以上ブールヂョア階級は到底自から內部より、其の無限的營利心及び合理主義を、制限することが出來ないとすれば、之れに制限を加へる勢力は、外部から來らねばならぬ。然らば吾人は、かゝる勢力を何處に求む可きか、云ふまでもなく、夫れはブールヂョア階級に對抗する社會階級に於て、求めらる可きである。而して今や貴族階級は全くブールヂョア階級

に同化し、ブールヂョア階級に對抗するものではなく、其の特別なる一部類となつて居るのである。又社會の進化、文化の發達の大勢より考へて、貴族階級がブールヂョア階級に對抗するものとして、復活すると云ふことは、到底望まる可きものでない。然るに今やブールヂョア階級に對抗しつゝ、之れと支配階級の地位を爭はんとする一社會階級が段段發達しつゝある。夫れは即ち勞働者階級である。そうして吾人は此の勞働者階級に於て、ブールヂョア階級を强制して其の無限的營利心及び合理主義を制限させる勢力を、求めねばならないのである。此處に吾人は先づ、勞働者階級の文化的使命を認めねばならぬ。要するにブールヂョア文化の原動力に制限を加へ、文化の更に高等なる發達を準備するのは、實に勞働者階級の一大文化的使命であるのである。

併し此處に大に考ふ可き問題がある。夫れは只ブールヂョア階級の無限的營利心、及び合理主義を制限することだけで、果して文化のブールヂョア文化以上の、高等なる發達、完全なる文化の實現を成就することが、出來るや否やと云ふことである。余は文化がブールヂョア文化以上に發達する爲めに、健實なる順序として、或は一段階として、ブールヂョア階級の無限的營利心及び合理主義を、適當に制限するの必要を認める。併しそれだけで、文化の更に高等なる發達が、成就されるものではないと考へる。而して是れが爲めには、ブールヂョア階級の營利心が、根本的に絶滅されることの必要を認めるのである。併しブールヂョア階級の營利心を根絶すると云ふことは、つまりブールヂョア階級の消滅を意味するのである。是れ營利心はブールヂョア階級特有の社會感覺の核心たる、財産感覺或は金錢感覺の必然的なる發動にして、金錢感覺は無限的營利心として發動して、始めて、其の本質を充分に發揮し、ブールヂョア階級の文化的使命を、完ふせしめたるものであるからである。無限的營利心として發動するにあらずば、金錢感覺は其の社會に及ぼす弊害の小なると同時に又、其の本質及び効果を充分に發揮することが、出來ないのである。されはブールヂョア階級の無限的營利心を制限すると云ふことは、つまりブールヂョア階級の支配的勢力を減弱することを意味し、さらに其の營利心を根絶すると云ふことは、全くブールヂョア階級の消滅を意味するのである。併しブールヂョア階級の消滅と云ふことを、若し、必然的に勞働者階級が努力を以て之を撲滅することを意味するものと解するならば、夫れは大なる謬見である。

プールヂョア階級の消滅と云ふことが、眞に文化の完全なる發達に對して、有意義である爲めには、夫れは社會の階級的差別の全廢を意味す可きもので、決して勞働者階級がプールヂョア階級を征服して、自から支配階級の地位を占有することを、意味す可きものでないのである。何れの階級が支配階級の地位に立ちたればとて、決して完全たる文化の發達を、望むことは出來ないのである。今日のプールヂョア階級と勞働者階級との階級闘爭を以て、つまり勞働者階級がプールヂョア階級を征服して、自から支配階級の地位に上らんとすることであると、解する人があるならば、夫れは大なる謬見であると思はるる。余は此の如くにしては決してプールヂョア文化以上の文化の發達は、望まる可きものでないと考へて居る。要するにプールヂョア階級の消滅は、つまりプールヂョア階級が其の文化的使命を盡くして、完全なる文化の發達に必要缺く可からざる條件或は手段を完成し、そうして其の文化の高等なる發達の地盤としての徹底せる人道的社會の出現を招致すると云ふ意味にて、始めて重大なる意義を有するものとなるのである。されば勞働者階級が段々發達して、先づプールヂョア階級の無限的營利心を制限し、次には更に進んで彼等の營利心を根絶させて、以てプールヂョア階級の消滅を誘致す可き任務を有するものであるが、しかもプールヂョア階級の消滅と云ふことを、已れが之れに代りて支配階級の地位を占有することを意味するものと解してはならぬ。夫れは假令一時的にても、勞働者階級の支配を意味するものと解す可きでない。此くて余は勞働者執政主義或は、プロレタリア執政主義を穩當と認めないのである。

　プロレタリア執政主義とは、つまりプールヂョア社會組織を根本的に破壞して、新しき社會組織を創造する爲めに必要なる一段階として、勞働者階級が一時的に支配階級の地位を占有することを意味するものである。併し余はかゝる方法によりて、眞に徹底せる人間的或は人道的社會組織は決して確立されるもので無いと考へる。而して勞働者階級がかゝる精神にて、今日階級闘爭を行なふ以上は、彼等は到底其の文化的一大使命を成就することは、出來まいと考へるのである。

　夫れプールヂョア革命は武力、即ち暴力を以て成就せられ、そうして彼等が支配階級の地位に上りて、以てプールヂ

ヨア文化を完成したのである、されば次に起るべきものと云はるゝ勞働者革命も、矢張り武力即ち暴力を以て成就せられ、そうして勞働者階級が支配階級の地位に上りて、ブールヂョア文化以上の高等なる文化の發達を完成すべきものであると考へるは、歴史的論理上正當であるが如くに思はれる。併し余は此の如くにしては、勞働者階級は決してブールヂョア文化以上の高等なる文化の發達を導くことは出來ないと信ずるのである。若し勞働者階級の努力によりて發達すべき文化がブールヂョア文化以上に高等なるものである可くば、勞働者階級はブールヂョア階級よりも優秀なる階級として、發達しなければならないのである。隨ふて其のブールヂョア階級を消滅させる方法も亦、ブールヂョア階級が貴族階級を壓倒せる方法と、同じものであつてはならぬ。即ち夫れ以上に勝れたる方法であらねばならぬ。要するに余は暴力的革命によりて、眞に徹底せる人道的な社會組織の確立されることは到底望まれないので、勞働者階級が健實に發達して、眞に徹底せる人道的な社會組織を確立せんとする以上は、彼等は決して暴力的革命を行ふ可きものでないと考へるのである。かのマールクスすら尚ほ理想的社會組織が、勞働者階級の暴力的革命によりて實現されるものの如く考へたのは、是れ彼もまたブールヂョア氣質を十分に脱して居なかつた爲めであらうと思はれる。

然らば勞働者階級が、眞に人道的なる社會組織を確立する爲めに用ゆ可き方法は、如何なるものである可きか。其の方法は一方に於ては、勞働組合、勞働政黨及び其の他の勞働團結の力によりて、ブールヂョア階級の專權を抑制しつゝ、漸次に資本主義的企業の組織の改造を促がし、他方に於ては健實な又優秀な精神的發達によりて、ブールヂョア階級の眞の自覺を促がすことである。要するに勞働者階級の革命は暴力的でなく、精神的である可きである。暴力を以て勝つものは自から又暴力によりて滅さる可きであるが、精神的勝利は永久的である可きである。而して勞働者階級の常に記憶す可きは、今や彼等の遂行しつゝある階級鬪爭は、人類史上最後の階級鬪爭にして、隨つて其の方法は從來の階級鬪爭に於て、用ひられたるものとは本來異なる可きものであると云ふことである。併し勞働者階級は果してかゝる文化的使命を成就する能力を、有つて居るのであらうか、是れ吾人の最後に考究す可き、最大問題であるのである。

（四）勞働者階級の文化可能性と教養の必要

夫れ歐米の或國に於ては、今や勞働者階級の實力は餘程發達し、社會上又政治上重大なる勢力となつて居る。併し其の精神的生活の方面に於ける發達は、余が前節に於て述べしが如き大なる文化的使命を成就するには、今尙ほ甚だ不充分である。されば余がかゝる文化的大使命を勞働者階級に認めんとするを見て、之を學究の空想として一笑に附し去らんとする人々が、あるかも知れない。余も勿論今日其の精神的生活の最とも發達せる、歐米諸國の勞働者階級の一部分に付て考へるも、彼等の今日の精神的生活の發達の程度を以て、前節に述べしが如き、文化的使命を成就し得るに充分であると、認めるものでない。併し余は勞働者階級には、其の文化的使命を盡くすに充分なる精神的發達をなし得る可能性が、具はつて居ると考へるのである。されど夫れと同時に若し勞働者階級が、かゝる可能性を自覺し、且つ之を充分に發達させないで、そうして只數の力のみを濫用して、暴威を振ふに至るならば、夫れは文化の發達、人類の進步の爲めに、決して喜ぶ可きことでない、否な大に憂ふ可きことであると、考へるのである。尙ほ今日の勞働者階級の大なる部分は、また右の文化的大使命を自覺せず、只階級鬪爭にのみ熱中するが如き、傾向あるは事實である。更に過激なる手段によりて、ブールヂョア社會組織を破壞し、勞働者階級の專制を行なはんことを目的とするものも、少なきは事實である。併し余は夫れはまだ、彼等の自覺が足りない爲めであると考へる。殊に彼等はまだよく、勞働者階級の文化的大使命を、理解しないが爲めであると考へて居る。もつとも露西亞に於て見るが如く、勞働者階級の多數がまだ其の文化的使命を覺らない中に、小數の知識階級出身の過激なる指導者に率ひられて、暴力的に革命を遂行する國が、他にも現はれるかも知れない。併しかゝる場合には、假令彼等は暴力的に一時ブールヂョア階級を撲滅したればとて、決して其の復活を妨止することは出來まいし、殊にブールヂョア文化以上に、文化の高等なる發達に導くことは出來まいと思ふ。今日の勞働者階級にありては、其の最とも進步せる部分にありても、尙ほ其の精神的敎養の程度は、其の文化的大使命を遂行するには、充分でないと思はれるのであるから、殊に其の大多數に於ては、とても其の大使命を果たすだけの、精神的敎養は具はつて居ないのであるから、かゝる狀態にある勞働者階級が暴力的にブールヂョア社會組織を破壞することがあらば、夫れは文化の眞の發達の爲めに大に憂ふ可きことであるのである。

余は今日の狀態に於ては、少なくも大體上より見て勞働者階級は、まだ其の文化的大使命を成就するだけの精神的教養を具へて居ないと考へるが、しかも彼等は其の大使命を自覺して、彼等の精神的教養に努力するならば、其の大使命を成就するに適するものとなる可能性を、具へて居ると確信するのである。然らば余は何によつて、彼等にかゝる可能性の具はれることを認めんとするかと云ふに、要するに余は今日に於ても既に、ブールヂョア文化を適當に攝取して、以て夫れ以上に高等なる文化の根本原理となる可きものの芽が、勞働者階級の特有の社會的感覺に於て、又其の社會的感覺に促がされて發達す可き理性に於て、發生しつゝあることが發見されると思ふのである。そうして余は又勞働者階級が、其等の原理の芽を漸次に又健實に發達させることによりて、其の文化的大使命を成就するに適する精神的教養を、完全に具有するに至るであらうと信ずるのである。

此處に余が勞働者階級特有の社會的感覺と稱するものを、詳しく論述することが出來ないから、只其の核心たるものに付て、少しく論ずるに止めるが、要するに余は勞働者階級特有の社會的感覺の核心たるものは、勞働感覺であると考へる。而して余の勞働感覺と云ふは、つまり勞働に對する鋭き感覺、勞働を大に尊重し之を以て人生の最高原理と考へる念等を意味するものである。併し今勞働者階級特有の社會的感覺の核心たる勞働感覺に於て、ブールヂョア文化以上の高等なる文化の一原理を發見せんとするに當つて、大に注意す可き點がある。夫れは勞働者階級特有の社會的感覺の核心としての勞働感覺にありて、其の勞働と云ふは本來筋肉勞働を意味するものであることである。是れは勞働感覺が勞働者階級の社會的感覺として發生するに於ては、當然であるのであるが、しかも吾人はかゝる勞働感覺を以て、直ちに高等なる文化の一原理と見做すことは、出來ないのである。夫れが高等なる文化の一原理となるためには、單に筋肉勞働だけを、勞働と認めるものであつてはならぬ。更に精神的勞働をも包括するもの、否な精神的勞働を筋肉的勞働よりも、其の文化的意義に於て一層高等なる勞働と認める、廣義の勞働を意味するものとならねばならぬ。要するに勞働者階級の勞働感覺が、其の本來の意義よりも一層廣大なる意義の勞働感覺にして發達するに於て、此處に始めて夫れは高等なる文化の一原理となることが出來るのである。又かゝる廣大なる意味に勞働の概念を發達させることによつて、

此處に先づ知識階級が全く勞働者階級中に包括されることになるのである。そうして今や勞働者階級の勞働概念が段々發達して、精神的勞働をも包有するものとなりつゝあると思はれるのである。是れ余は今日の勞働者階級の社會的感覺に於て、既に將來の高等な或は完全な文化の一原理の芽の、發生しつゝあることが、發見されると云ふ所以である。尙ほ勞働の概念が右に述べしが如き發達をなすに於ては、ミハイロウスキーなぞの思想に於て見られる一種の人格說、余が假りに勞働人格說と命名してゐるもの、卽ち人格は勞働によつて發達するものにして、勞働せざる人には人格は發達しないと云ふ說が、正當に樹立され得るのである、さうして又今日勞働者階級間に發生しつゝある勞働に關する諸種の權利觀念は、此の勞働人格說を基礎として確立さる可きものと考へられるのである。ブールヂョア法理學に於ては、財產權を人格に結び付けて確立せんとする企だては、種々なる形態に於て行はれて居るが併しいづれも充分であるとは認められ難い。之れに反して勞働人格說の人格思想からは、勞働權は當然成立するものとして、最とも論理的に確立され得るかと思はれる。

更に勞働者階級の勞働概念が、上に述べしが如き發達をなしつゝあることに、結び付けて注意す可きは、彼等の階級意識の發達である。夫れ今日では歐米諸國に於ては、勞働者階級の階級意識はかなりによく發達して居る。しかし其の階級意識は尙ほ一般には狹義の階級意識である。卽ち勞働者を筋肉勞働者にのみ限りて考へる階級意識である。こうして勞働者階級意識の發生の原因より考へて、夫れが右の如き階級意識として發生し、又今日も尙ほ一般に右の如き階級意識として發達して居るのは、敢て怪むべきものでないことが覺られる。是れ勞働者階級はブールヂョア階級に對立して發達し、こうして其の階級意識はブールヂョア階級との階級鬪爭から、生れたるものであるからである。併し上に論ぜし處によりて察知される如く、かゝる狹義の階級意識を固持する以上は、勞働者階級は到底其の文化的大使命を、果たすことは出來ないので、夫れは先づ精神的勞働をも包有する、廣義の勞働概念に基づいて立てられる、廣義の勞働者階級の階級意識とならねばならないのである。併しそれだけでも尙ほ充分でない。勞働者階級意識は、更に一段の大發展をなさなければならぬ。夫れは卽ち徹底せる人類意識或は人道意識に發達することである。要するに勞働者階級の文

化的大使命の上から考ふれば、彼等の階級意識はブールヂョア階級の消滅を招致するが爲めの一の手段である可きものにして、夫れ自身永久的な意義を有す可きものでないのである。勞働者階級が健實に發達して、ブールヂョア階級の消滅を成就せる上は、夫れは當然眞に徹底せる人類意識、單に人間を人間として相互に意識させ、又人間を人間として相互に結び付ける基礎となる可き、其の意識に化成す可きである。されば狹義の階級意識としての勞働者階級意識は、表面上に於ては一種の階級意識に外ならないが、併し其の深い内面に於ては、廣大なる、眞に徹底せる人類意識に化成す可き可能性を、含有して居なければならないし、又夫れが發達するにつれて、漸次に、其の可能性を實現しなければならないのであるが、余は勞働者階級意識の今日の發達に於て、既に其の傾向は明らかに窺知されると思ふ。さきに述べし如く、今や勞働概念は精神的勞働をも含む廣義のものに發達する傾向は、明らかに認められるのであるが、更に勞働者階級意識は人類意識或は人道意識となる可きものであると論ずる、勞働者思想家も現はれて居るのである。此くて余は今日の勞働者階級意識の發達に於て、將來の高等なる文化の一原理の芽が發見されると考へるのである。そうして此處にも勞働者階級意識が徹底的人類意識に發達する可能性に結び付て、吾人の注意す可き重大なる思想の發達の可能性が發見される。夫はソリダリテ思想―連帶思想である。連帶思想も今日の勞働者階級にありては、尙ほ一般に勞働者階級の連帶と云ふ意味に解されて居る。つまりブールヂョア階級に對抗して、勞働者階級の團結を固める倫理的原理として、立てられて居る。夫れは狹義の勞働者階級意識に對應する或は之れに基づいて發達せる勞働者階級の倫理的原理であるのである。併し勞働者階級意識が、さきに述べしが如き發達をなすに隨ふて、夫れは徹底的なる人類連帶の思想に化成す可きであるので、又今日に於ても既に其の傾向が認められるのである。是れ又余が今日の勞働者階級の連帶思想の發達に於て、將來の高等なる文化の一原理の芽の發生しつゝあることが、發見されると考へる所以である。

終りに余は勞働者階級特有の社會的感覺に促がされて、發達する理由の特質を考究し、此處にも亦將來の高等なる文化の一原理の芽が、發生しつゝあるを指摘したいと思ふ。夫れ勞働者階級の理性の發達は、始めは彼等が其の特有の社會的感覺の本質を、よく理解しなかつたが爲めに、又外部より受けたる影響によりて、其の當然なる方針をはづれて進

行して居た。即ち彼等の理性は合理主義、殊に唯物主義の方針に於て發達して居たのである。そうして彼等は彼等の精神的發達の上に殊に重大なる影響を及ぼせるマールクス派の謬見に囚へられて、合理主義及び唯物主義を以て、彼等特有の理性的發達であるが如くに考へて居た。併しさきにブールヂョア文化に付て述べし處によりて知られる如く、合理主義や唯物主義はブールヂョア階級に於ける、理性發達の特有の方針、即ちブールヂョア理性であるのである。そうして若し勞働者階級に於ける理性の發達も、只合理主義や唯物主義の方針に於てのみ進行するならば、夫れは只ブールヂョア理性の連續に過ぎないものにして、決して勞働者階級特有の理性的發達と、認む可きものではないのである。されば勞働者階級が段々發達し、其の特有の社會的感覺の本質を理解し來るに於ては、到底合理主義や唯物主義を以て滿足し得なくなるのは當然である。此くて第十九世紀の終り頃に至つて、勞働者階級の指導者間に於て、先づ勞働者階級特有の理性的發達の方針が意識されて來た。夫れは卽ち理想主義であるのである。拙著「現代社會問題の社會學的考察」第六章及び「輓近社會思想の研究」上卷參考）併し勞働者階級に於ける理性的發達の特有の方針としての理想主義は、嘗て貴族階級やブールヂョア階級の一部分に於て發達せるが如き、現實を離れた夢幻的な理想主義であり得ない。勞働者階級の生活は、最とも多く現實に密接するものであつて、彼等にありては現實を離れることは到底不可能である。されば彼等の理想主義は現實を離れないで現實に卽するもの、しかも現實に囚はれないものであらねばならぬ。換言すれば現實に卽して、しかも現實に囚はれず、現實を突き拔けて或物を掴み、其の或物を以て現實を改造せんとする。理想主義、卽ち今日の哲學に於て新理想主義と稱せらるるものであらねばならぬ。余はかゝる性質の理想主義が貴族階級の夢幻的理想主義や、ブールヂョア階級の唯物主義に對して、眞に勞働者階級に於ける理性的發達特有の方針である可きものと考へるのである。そうして今や勞働者階級の思想家に於て、かゝる性質の理想主義が段々發達して居るのである。余は勞働者階級の理性がブールヂョア階級の影響や、マールクス派の謬見に囚へられて、唯物主義的に進動して居る以上は、夫れは決して健實なる發達をなすことが出來ず、又將來の高等なる文化の發達に對して、何等貢献する處はあるまいと考へるのである。而して余は新理想主義は將來の高等なる文化の、最とも重大なる根本的一原理である可きものと考へ

るのであるから、今や勞働者階級の理性的發達が、其の特有の社會的自覺の本質に應じて、新理想主義の方針に發達しつゝあることに於て、其の原理の芽の發達を認めんとするのである。

却說以上述べ來りし如く、勞働者階級の精神的生活の今日の發達に於て、既に將來の高等なる文化の根本的諸原理の芽の、發生しつゝあることが、明らかに認められるのであるが、吾人は之れによりて又勞働者階級は其の文化的使命を成就するに必要なる精神的發達を、なし得る可能性を具へて居ることが、明らかに推察し得られると考へるのである。要するに勞働者階級がよく其の文化的使命を覺り、又今日彼等に於て發生しつゝある、將來の高等なる文化の諸原理の芽の意義をよく理解し、そうして其の精神的敎養に意識的に大に努力するならば、彼等は其の文化的使命を充分に成就することが出來ると、余は確信して居るのである。併し彼等が若し右の事を自覺せず、只數の力によりて暴力的に、革命を遂行せんとするならば、其の成功は甚だ疑はしいのみならず、假令成功しても、決して文化の發達の爲めに喜ぶ可きことでない。否な大に憂ふ可きことである。吾人はブールヂョア文化の本質をよく理解し、其の長所を充分に認めると同時に、夫れは決して完全なる文化ではなくして、寧ろ完全なる文化の發達する條件或は手段に外ならぬことを覺り、そうしてブールヂョア文化以上に、完全なる文化の發達することを切望するが故に、かゝる文化の發達に對して重大なる任務を有し、且つ之を遂行する素質を具有するものとして、大に勞働者階級の發達を希望し、歡迎するのである。今や勞働者階級の團結が益々發達し、其の奮鬪的努力によりて、又國家の社會政策の發達によりて、勞働者階級の物質的生活の大に改善されることは、もとより喜ぶ可きことである。併し文化發達の考察上より見れば、夫れは只勞働者階級が其の文化的使命を遂行する爲の條件或は手段に外ならないので、夫れ自身に於て獨立な意義を有するものでない。勞働者階級の物質的生活の改善は彼等の精神的敎養の發達の條件或は手段と見做さる可きものにして、文化發達史上重大なる意義を有することは、勞働者階級が物質的生活の改善を、精神的敎養の發達の爲めに、正當に使用し、夫れによりて以て文化的使命を成就することであるのである。されば余は近來歐米諸國に於て、勞働者の敎育及び修養運動が、大に發達しつゝあることは（拙著「現代社會問題の社會學的考察」參考）、文化の發達上甚だ意義ある傾向であると考へ、又我國の

勞働者階級の指導者が、決して此の傾向を輕視せさらんことを切望する。そうして我國の勞働者階級が特に精神的教養の發達に力を盡くし、歐米諸國の勞働者階級よりも、其の精神的教養に於て一歩さきに進まんことを望むのである。併し夫れに就ては何よりも肝要なるは我國の勞働者階級に於ても、勞働組合や、勞働政黨や、其の他の勞働團結が大に發達し、其等の勞働團體が總て力を合せて、勞働者階級の教育及び修養の爲めに、盡くすことである。要するに勞働者階級の精神的教養の發達によりて、吾人は始めてブールヂョア文化以上に、文化の高等なる發達、完全なる文化の發達を望み得ると同時に、又精神的教養が發達せずして、勞働者階級の勢力の增長することは、文化の發達、人類の眞の進歩の上から考へて、決して喜ぶ可きことではないのである。夫れは或は文化の破滅を誘致する恐れがあると考へるのである。（大正十年八月十九日）

アインシュタイン

理學博士 吉村冬彦

一

此間日本へ立寄つたラッセルが、『今世界中で一番えらい人間はアインシュタインとレニンだ』といふやうな意味の事を誰かに話したさうである。此の『えらい』といふのがどういふ意味のえらいのであるかが聞きたいものであつた。遺憾ながらラッセルの使つた原語を聞き洩らした。

成程二人共に革命家である。唯レニンの仕事は何處迄が成効であるか失敗であるか、恐らく此れは誰にもよく分らないが、アインシュタインの仕事は少くも大部分たしかに成効である。此れに就いては世界中の信用のある學者の最大多數が裏書をして居る。仕事が科學上の事であるだけに其成果は極めて鮮明であり、從つて其れを仕遂げた人の科學者としてのえらさも亦其れだけはつきりして居る。

レニンの仕事は科學でないだけに、其人の其仕事の遂行者としてのえらさは必しも目前の成果のみで計量する事が出來ない。其れに拘らずレニンのえらさは一般の世人に分り易い種類のものである。取扱つて居るものが人間の社會で、使つて居るものが兵隊や金である。いづれも科學的には譯の分らないものであるが、唯世人の生活に直接なものであるだけに、事柄が誰れにも分り易いやうに思はれる。

此に反してアインシュタインの取扱つた對象は抽象された時と空間であつて、使つた道具は數學である。凡てが論理的に明瞭なものであるに拘らず、使つて居る「國語」が世人に親しくない爲に、其國語に熟しない人には容易に食い付けない。それで彼の仕事を正當に理解し、彼のえらさを如實に估價するには、一通りの數學的素養のある人でも一寸骨

が折れる。

到底分らないやうな複雑な事は世人に分り易く、比較的簡單明瞭な事の方が却つて分りにくいといふおかしな結論になる譯であるが。此れは『分る』といふ言葉の意味の使ひ分けである事は勿論である。

アインシュタインの仕事の偉大なものであり、彼の頭腦が飛び離れてえらいといふ事は早くから一部の學者の間には認められて居た。しかし一般世間に持て囃されるやうになつたのは昨今の事である。遠い恒星の光が太陽の近くを通過する際に其れが重力の場の影響の爲に極めて僅か曲るだらうと云ふ、誰れも思ひもかけなかつた事實を、彼の理論の必然の結果として鉛筆のさきで割り出し、それを豫言した。其れが云はゞ敵國の英國の學者の日蝕觀測の結果から或程度迄確かめられたので、事柄は世人の眼に一種のロマンチックな色彩を帶びるやうになつて來た。そして人々は恰も急に天から異人が降つて來たかのやうに驚異の眼を彼の身邊に集注した。

彼の理論、殊に重力に關する新しい理論の實驗的證左は、それがいづれも極めて機微なものであるだけに未だ極度迄完全に確定されたとは云はれないかも知れない。併し萬一將來の實驗や觀測の結果が、彼れの現在の理論に多少でも不利なやうな事があつたとしても、彼れの物理學者としてのえらさには其爲に少しの疵もつかないだらうといふ事は、彼の仕事の道筋を一通りでも見て通つた人の等しく承認しなければならない事であらう。

物理學の基礎になつて居る力學の根本に或る弱點のあると云ふ事は早くから認められて居た。しかし彼以前の多くの學者にはそれをどうしたらいゝかが分らなかつた。或は大多數の人は因襲的の妥協に馴れて別にどうしやうとも思はなかつた。力學の教科書は此の急所に觸れないやうに知らん顏をしてすまして居た。其れでも實用上の多くの問題には實際差支がなかつたのである。處が近代になつて電子などといふものが發見され、あらゆる電磁氣や光熱の現象は此の不思議な物の作用に歸納されるやうになつた。そして此物が特別な條件の下に驚くべき快速度で運動する事も分つて來た。かういふ物の運動に關係した問題に觸れ初めると同時に、今迄そつとして置いた力學の急所がそろ〳〵痛みを感ずるやうになつて來た。ロレンツの如き優れた老大家は疾くから此問題に手を附けて、色々な矛盾の痛みを局部的の手術

で治療しやうとして骨折つて居る間に、此の若い無名の學者は瑞西の特許局の一隅にかくれて、もつと〳〵根本的な大手術を考へて居た。病の根は電磁氣や光よりもつと根本的な時と空間の概念の中に潜伏して居る事に眼をつけた。さうしてその腐りかゝつた、間に合せの時と空間を取つて捨てゝ、新しい健全なものを其代りに植え込んだ。その手術で物理學は一夜に若返つた。そして電磁氣や光に關する理論の多くの病竈はひとりでに奇麗に消滅した。

病源を見付けたのが第一のえらさで、其れを手術した手際は第二のえらさでなければならない。

併し病氣はそれだけではなかつた。第一の手術で『速度の相對性』を片付けると、必然の成行として『重力と加速度の問題』が起つて來た。此の急所の痛みは、他の急所の痛みが消へた爲に一層鋭く感ぜられて來た。しかし此の方の手術は一層面倒なものであつた。第一の手術に使つた在來の道具はもう役に立たなかつた。吾等の祖先から二千年來使ひ馴れたユークリッド幾何學では始末が付かなかつた。其代りになるべき新しい利器を求めて居る彼れの手に觸れたのは、前世紀の中頃に數學者リーマンが、そのやうな應用とは何の關係もなしに、純粋な數學上の理論的の仕事として殘して置いた遺物であつた。此れを錬へ直して造つた新しい鋭利なメスで數千年來人間の腦の中にへばり付いて居た所謂常識的な時空の觀念を悉皆削り取つた。そして其れを切り刻んで新しく組立てた『時空の世界像』を其處に安置した。それで重力の秘密は自明的に解釋されると同時に古い力學の暗礁であつた水星運動の不思議は無理なしに説明され、光と重力の關係に對する驚くべき豫言は的中した。もう一つの豫言はどうなるか分らないが、兎も角も今迄片側だけしか見る事の出來なかつた世界は、此を掌上に置て意の儘に任意の側から觀る事が出來るやうになつた。觀者に關するあらゆる絶對性を打破する事によつて現出された客觀的實在は或意味で却つて絶對なものになつたと云つてもよい。

此の仕事を仕遂げる爲に必要であつた彼の徹底的な自信はあらゆる困難を凌駕させたやうに見える。此れも一つのえらさである。あらゆる直接經驗から來る常識の幻影に惑はされずに純理の道筋を踏んだのは數學といふ器械の御陰であるとしても、全く抽象的な數學の枠に萬象の實世界を寸分の隙間もなく切りはめた鮮かな手際は物理學者としてその非凡なえらさによるものと考へなければならない。

からいふ飛び抜けた頭腦を持つて居て、そして比較的短い年月の間に此れだけの仕事を仕遂げるだけの活力を持つて居る人間の『人』としての生立ちや、日常生活や、環境は多くの人の知り度いと思ふところである。

それで有り合せの手近な材料から知り得られるだけの事を玆に書き並べて此の學者の面影を朧氣にでも紹介して見度いと思ふのである。主な材料はモスコフスキーの著書に據る外はなかつた。要するに素人畫家のスケッチのやうなものだと思つて讀んで貰ひ度いのである。

二

アルベルト、アインシュタインは一八七九年三月の出生である。日本ならば明治十二年卯歳の生れで數へ年四十三になる譯である。生れた場所は南獨逸でドナウの流に沿ふた小都市ウルムである。今の獨逸で一番高いゴチックの寺塔のあるといふ外には格別世界的に誇るべき何物をも有たないらしい此市名は偶然に此の科學者の出現と結び付けられる事になつた。此土地に於ける彼の幼年時代に就て知り得られる事實は遺憾ながら極めて少ない。唯一つの逸話として傳へられて居るのは、彼が五歳の時に、父から一つの羅針盤を見せられた事がある、其時に、何等直接に接觸するもののない磁針が、見えざる力の作用で動くのを見て非常に強い印象を受けたといふ事である。其の時の印象が彼の後年の仕事に或る影響を與へたいといふ事が彼自身の口から傳はつて居る。

丁度此頃、彼の父は家族を擧げてミュンヘンに移轉した。今度の家は前のせまくるしい住居とちがつて廣い庭園に圍まれて居たので、其處で初めて自由に接する事の出來た自然界の印象も彼の生涯には決して無意味ではなかつたに相違ない。

彼れの家族に猶太人種の血が流れて居るといふ事は注目すべき事である。後年の彼れの仕事や、社會人世觀には、此事實と思ひ合せて初めて了解される點が少くないやうに思ふ。其れは兎に角彼がミュンヘンの小學で受けた羅馬カトリックの教義と家庭に於ける猶太教の教義との相對的な矛盾——因襲的な獨斷と獨斷との背馳が彼の幼な心にどのやうな反應を起させたか、此れも本人に聞いて見度い問題である。

此の時代の彼の外觀には何等の鋭い天才の閃きは見へなかつた。ものを云ふ事を覺へるのが普通より遲くて兩親が心配した位で、大きくなつても口重であつた。八九才頃の彼は寧ろ控へ目で、あまり、人好きのしない、獨りぼつちの仲間外れの觀があつた。唯其頃から眞と正義に對する極端な偏執が目に立つた。それで人々は『馬鹿正直（ビーダーマイアー）』といふ渾名を彼に與へた。此の『馬鹿正直』を徹底させたものが今日の彼の仕事にならうとは誰れも夢にも考へなかつた事であらふ。

音樂に對する嗜好は早くから眼覺めて居た。獨りで讃美歌のやうなものを作つて、獨りでこつそり歌つて居たが、恥かしがつて兩親にもそれは隱して聞かせなかつたさうである。腕白な遊戲などから遠ざかつた獨りぼつちの子供の内省的な傾向が此處にも認められる。

後年迄彼れにつきまとつた猶太人に對する迫害（シヨーヴィニスム）は、もう此頃から彼の幼ない心に波風を立て初めたらしい、そして其の不正義に對する反抗心が彼れの性格に何かの痕跡を殘さない譯には行かなかつたらうと思はれる。『猶太人は其の職業上の環境や民族の過去の爲に、人から信用されるといふ經驗に乏しい。此點に關して猶太人の學者に注目して見るがいゝ。彼等は論理といふものに力瘤を入れる。即ち理法によつて他の承諾を强要する。民族的反感から信用したくない人でも、論理の前には屈伏しなければならない事を知つて居るから』から云つたニーチエのにがにがしい言葉が今更に强く吾々の耳に響くやうに思はれる。

彼の學校成績は餘りよくなかつた。特に言語などを器械的に暗記する事の下手な彼れには、當時の軍隊式な詰め込み教育は工合が惡かつた。此れに反して數學的推理の能力は早くから芽を出し初めた。計算は上手でなくても考へ方が非常に巧妙であつた。或時彼の伯父に當る人で、工業技師をして居るヤーコブ、アインシユタインに、代數學とは一體どんなものかと質問した事があつた。其時に伯父さんが『代數といふのは、あれは無精ものゝするずるい計算術である。知らない答をXと名けて、そして其れを知つて居るやうな積りで取扱つてそれと知つて居るものとの關係式を書く。其處から此のXを定めるといふ方法だ』と云つて聞かせた。此の剽輕な、しかし要を得た説明は子供の頭に眠つて居る未知の

代數學を呼び覺すには充分であつた。それから色々の代數の問題はひとりで樂に解けるやうになつた。始めて、幾何學のピタゴラスの定理に打つかつた時にはそれでも三週間頭をひねつたが、おしまひには遂に其證明に成効した。論理的に確實な或物を捕へる喜びはもう此頃から若い頭に澄み渡つて居た。數理に關する彼の所得は學校の教程などゝは無關係に驚くべき速度で進歩した。十五歳の時にはもう大學に入れるだけの實力があるといふ事を係りの教師が宣言した。

併し中等學校を卒業しない内に學校生活が一時中斷するやうになつたといふのは、彼の家族一同が以太利へ移住する事になつたのである。彼等はミランに落着いた。自由の身になつた少年はよく旅行をした。或時は單身でアペニンを越へて漂浪したりした。間もなく彼はチユーリツヒのポリテキニクムへ入學して數學と物理學を修める目的で瑞西へやつて來た。併し國語や記載科學の素養が足りなかつたので、しばらくアーラウの實科中學にはひつて居た。僅に十六歳の少年は既に此時分から『運動體の光學』に眼を付け初めて居たといふ事である。後年世界を驚かした仕事はもう此時から双葉を出し初めて居たのである。

彼の公人としての生涯の望は教員になる事であつた。それでチユリヒのポリテキニクムの師範科のやうな部へ入學して十七歳から廿一歳迄勉强した。卒業後彼を何處かの大學の助手にでも世話しやうとする者もあつたが、國籍や人種の問題が邪魔になつて思はしい口が得られなかつた。併し家庭の經濟は樂でなかつたから、兎も角も自分で働いて食はなければならないので、シヤフハウゼンやベルンで私教師を勤めながら靜に深く物理學を勉强した。可也に貧しい暮しをして居たらしい。其時分の研學の仲間に南露西亞から來て居る女學生があつて、其後一九〇三年に此人と結婚したが數年後に離婚した。ずつと後に從妹のエルゼ、アインシユタインを迎へて幸福な家庭を作つて居るといふ事である。

一九〇一年、瑞典滯在五年の後にチユーリヒの公民權を得てやつと公職に就く資格が出來た。同窓の友グロスマンの周旋で特許局の技師となつて、其處に一九〇二年から一九〇九年迄勤めて居た。彼のやうな抽象に長じた理論家が極めて卑近な發明の審査をやつて居たといふ事は面白い事である。彼自身の言葉によると此の職務にも相當な興味をもつて働いて居たやうである。

一九〇五年になつて彼は永い間の研究の結果を發表し始めた。頭の中に一杯にたまつてゐたものが大河の堤を決したやうな勢で溢れ出した。『物理年鑑』に出した論文だけでも四つで其外に學位論文をも書いた。いづれも立派なものであるが、其中の一つが相對論の元祖と稱せられる『運動せる物體の電氣力學』であつた。獨逸の大家プランクは此論文を見て驚いて此無名の青年に手紙を寄せ、其非凡な着想の成功を祝福した。

ベルンの大學は彼を招かんとして躊躇して居た、やつと彼の椅子が出來ると間もなく、チユーリヒの大學の方で理論物理學の助教授として招聘した。此れが一九〇九年、彼が三十一歳の時である。特許局に隠れて居た足掛八年の地味な平和の生活は恐らく彼に取つては意義の深いものであつたに相違ないが、兎も角も三十一にして彼は立つて始めて本舞臺に乘り出した譯である。一九一一年にはプラーグの正教授に招聘され、一九一二年に再びチユーリヒのポリテキニクムの教授となつた。大戰の始まつた一九一四年の春伯林に移つて其處で仕事を大成したのである。

伯林大學に於ける聽講生の數は從來のレコードを破つて居る、一昨年來急に世間的に有名になつてから新聞雜誌記者は勿論、畫家彫刻家が彼の門に押しよせて肖像を描かせろ胸像を作らしてくれとせがむ。講義をすまして廊下へ出ると學生が押しかけて質問をする。宅へ歸ると世界中の學者や素人から色々の質問や註文の手紙が來て居る。其れに對して一々何とか返事を出さなければならないのである。外國からは講演をしに來てくれと頼まれる。此のやうな要求は研究に熱心な學者としての彼には迷惑なものに相違ないが彼は格別厭な顏をしないで氣永に親切に誰れにでも滿足を與へて居るやうである。

彼の名聲が急に揚る一方で、彼に對する迫害の火の手も高くなつた。猶太人種排斥といふ、日本人には一寸分らない併し多くの獨逸人には分り易い原理に、幾分は別の妙な動機も加はつて一團のアインシユタイン排斥同盟のやうなものが出來た。勿論大多數は物理學者以外の人で隨分如何はしい人も交つて居るやうである。此れが一日伯林のフイルハルモニーで公開の彈劾演説をやつて無闇な惡口を並べた。中に物理學者と名のつく人も一人居て此れは流石に直接の人身攻撃はやらないで相對原理の批判のやうな事を述べたが、其れは殆んど科學的には無價値なものであつた。要するに此演

說會は純粹な惡感情の表現に終つてしまつた。氣の永いアインシュタインも可也不愉快を感じたと見えて、急に伯林を去ると云ひ出した。すると伯林大學に居る屈指の諸大家は一方アインシュタインをなだめると同時に、連名で新聞へ辯明書を出し、彼に對する攻擊の不當な事を正し、彼の科學的貢献の偉大な事を保證した。又アインシュタインは進まなかつたらしいのを、すゝめて自身の辯明書を書かせ、此を同じ新聞に掲げた。其短い文章は例の通りキビ〳〵として極めて要を得て居るのは勿論であるが、其行文の間に卑怯な迫害者に對する苦々しさが滲透して居るやうである。彼に對する同情者は遠方から電報をよこしたりした。其中にはマクスラインハルトの名も交つて居た。

其後ナウハイムで科學者大會のあつた時特に其中の一日を相對論の論評にあてがつた。其時の會場は何となく緊張して居たが當人のアインシュタインは極めて呑氣な顏をして居た。レナードが原理の非難を述べて居る間に、曾てフイルハルモニーで彼の人身攻擊をやつた男が後ろの方の席から拍手をしたりした。併しレナードの急き込んだ質問は、冷靜な、しかも鋭い答辯で輕く受け流された。

レナード『もし實際そんな重力の「場」があるなら、何かもつと見易い（Anschaulich）現象を生じさうなものではないか』

アインシュタイン『見易いとか見易くないとかいふ事は時代と共に變るもので、云はゞ時の函數であります。ガリレーの時代の人には彼の力學は餘程見易くないものだつたでしやう。所謂見易い觀念などと稱するものは、例の『健全な理知』Gesunde Menschenverstand と稱するものと同樣に隨分穴だらけな者かと思ひます』

此返答で聽衆が笑ひ出したと傳へられて居る。此討論は到底相撲にならないで終結した。

今年は米國へ招かれて講演に行つた。其歸りに英國でも講演をやつた。其當時の彼地の新聞は彼の風采と講演ぶりを次のやうに傳へて居る。

『……。一寸見た處では別に堂々とした樣子などはない。中背で、肥つて居て、がつしりして居る。四十三にしてはふけて見える。皮膚は蒼白に黄味を帶び、髮は黑に灰色交りの梳らない團塊である。額には皺、眼のまはりには疲勞の

線條を印して居る。併し眼其れ自身は磁石のやうに牽き付ける眼である。それは夢を見る人の眼であつて、冷い打算的なアカデミツクな眼でない、普通の視覺の奥に隱れた或るものを見透す詩人創造者の眼である。眼の中には異様な光がある。どうしても自分の心の内部に生活して居る人の眼である。』

『彼れが壇上に立つと聽衆はもうすぐに彼の力を感ずる。獨逸語がわかる分らぬは問題でない。兎も角も力强い人に迫る或物を感ずる』

『重大な事柄を話さうとする人にふさはしいやうに、ゆつくりそして一語一句をはつきり句切つて話す。併し少しも氣取つたやうな處はない、謙遜で、引きしまつて居て、そして敏感である。唯話が佳境に入つて來ると多少の身振りを交へる。兩手を組合したり、要點を强める爲に片腕をつき出したり、又指の端を唇に觸れたりする。併し身體は決して動かさない。折々彼の眼が妙な表情をして瞬く事がある。すると獨逸語の分らない人でも皆釣り込まれて笑ひ出す。』

『不思議な、人を牽付ける人柄である。干からびた所謂プロフエツサーとは大分種類がちがつて居る。音樂家とでもいふやうな様子があるが、彼は實際にさうである。數學が出來ると同じ程度にヴアイオリンが出來る。充分な情緒と了解をもつてモザルト、シユーマン、バツハなどを演奏する……』

私が初めてアインシユタインの寫眞を見たのはK君の處でゞあつた。其時に、此の顔は夢を見る藝術家の顔だといふやうな事を話し合つた。處が此の英國の新聞記者も同じやうな事を云つて居るのを見ると此の印象はいくらか共通なものかも知れない。實際彼のやうな破天荒の仕事は、『夢』を見ない種類の人には思付きさうに思はれない。併し唯夢を見るだけでは物にならない。夢の國に論理の橋を掛けたのが彼の仕事であつた。

亞米利加のスロツソンといふ新聞記者のかいた書物の口繪にある寫眞は一寸ちがつた感じを與へる。何處か皮肉な、今にも例の人を笑はせる顔をしさうな處がある。又最近にタイムス週刊の畫報に出た、彼がキングス、カレツヂで講演をして居る横顔も一寸變つて居る。顔面に對して可也大きな角度をして突出た三角形の大きな鼻が眼に付く。

三

アインシユタインは『藝術から受けるやうな精神的幸福は他の方面からはとても得られないものだ』と人に話したさうである。兎も角も彼は藝術を馬鹿にしない種類の科學者である。アインシユタインの藝術方面に於ける趣味の中で最も顯著なものは音樂である。彼の彈くヴイオリンが一人前のものだといふ事は定評であるらしい。可也テヒニークの六ケしいブラームスのものでも鮮かに彈きこなすさうである。技術ばかりでなくて相當な理解をもつた藝術的の演奏が出來るらしい。

それから、子供の時に唱歌をやつたと同じやうに、時々ピアノの鍵盤の前に坐つて即興的のフアンタジーをやるのが人知れぬ樂しみの一つださうである。此の話を聞くと私は何となくボルツマンを思出す。併しボルツマンは陰氣でアインシユタインは明るい。

音樂の中では古典的なものを好むさうである。特にゴチツクの建築に譬へられるバツハのものを彼が好むのは偶然ではないかも知れない。ベートーヴエンの作品でも大きなシンフオニーなどより、寧ろカムマームジークの類を好むといふ事や、シヨパン、シユーマン其他浪漫派の作者や、又ワグナー其他の樂劇に余り同情しない事なども、何となく彼の面目を想像させる。

繪畫には全く無關心ださうである。四元の世界を眺めて居る彼には二元の藝術は或は餘に兒戯に近いかも知れない。萬象を時と空間の要素に切りつめた彼には色彩の美しさなどは余りに空虛な幻に過ぎないかも知れない。

三元的な彫刻には多少の同情がある。特に建築の美には歎美を惜しまないさうである。さう云へば音樂はあらゆる藝術の中で唯一の四元的のものとも云はれない事はない。此藝術には一種の『運動』が本質的なものである。唯其の時と共に運動する『もの』と空間とが物質的でないだけである。

文學にも無關心ではないさうである。唯忙しい彼には澤山色々のものを讀む暇がないのであらう。シエークスピーアを尊敬してゲーテをそれ程に思はないらしい。ドストエフスキー、セルヴンテス、ホーマー、ストリンドベルヒ、ゴツトフリードケラー、※此んな名前が好きな方の側に、ゾラやイプセンなどが好かない方の側に舉げられて居る。此の名

薄な色々の意味で吾々には面白く感ぜられる。

哲學者の仕事に對する態度は想像するに難くない。ロツクやヒユームやカントには多少の耳を借してもヘーゲルやフイヒテは問題にならないらしい。此れはさうありさうな事である。兎に角將來の哲學者は彼から多くを學ばねばなるまい。ショーペンハウアーとニーチエは文學者として推賞するのださうである。併しニーチエはあんまりギラ〳〵して居る（glitzerund）と云つて居る。

※註ゴツトフクードケラーとはどんな人かと思つて小宮氏に聞いて見ると此人（一八一九—一八九〇）は瑞西チユーリツヒの生れで描寫の細かいしかし抒情詩の氣分に富んだ寫實小說家ださうである。

彼が一種の烟霞癖をもつて居る事は少年時代の伊太利旅行から芽を出して居るやうに見える。しかし彼の旅行は單に月並な名所や景色だけを追ふて汽車の中で居眠りする亞類のではなくて、何の目的もなく名もない野に山に海濱に彷徨するのが如きだといふ事である。併し彼がその夢見るやうな眼をして、さういふ處を歩いて居る間に、どんな作用が彼の腦裡に起つて居るかといふ事は誰にも分らない。

勝負事には一切見向かない。蒐集癖も皆無である。學者の中で彼程書物の所有に冷淡な人も少ないと云はれて居る尤も彼のやうな根本的に新しい仕事に參考になる文献の數は比較的極めて少數である事は當然である。所謂オーソリテイは彼自身の頭蓋骨以外には何處にも居ないのである。

彼の日常生活は恐らく質素なものであらふ。學者の中に折々見受けるやうな金錢に無關心な人ではないらしい。彼の著書の飜譯者には印税の分前を要求して來るといふやうな噂も聞いた。多くの日本人には多少變な感じもするが、獨逸人といふ者を知つて居る人には別にそう不思議とは思はれない。特に彼の人種の事を取り立てゝ考へる程の事ではないと思はれる。

夜はよく眠るさうである。神經のいら〳〵した者で、彼のやうな仕事をして、そしてそれが成効に近いたとすれば、可也興奮するにちがひない。勝手に仕事を途中で中止してのんきに安眠す るといふ事は存外六かしい事であるに相違ない。併し彼は適當な時に切り上げて床につく、そして仕事の事は全く忘れて安眠が出來ると彼自身人に話して居る。唯

一番最初の相對原理に取り付いた時だけは流石にさうはゆかなかつた。幾日も喪心者のやうになつて彷徨したと云つて居る。一つは年も若かつたせいでもあらうが、其時の心持は恐らく唯選ばれた極少數の學者藝術家或は宗教家にして始めて味ひ得られる種類のものであつたらう。

四

アインシユタインの人生觀や社會觀は吾々の知りたいと願ふ處である。併し彼自身の筆によらない限り其の一般を窺ふ事は恐らく不可能な事に相違ない。彼の會話の斷片を基にしたジヤーナリストの評論や、又それの下手な受賣りにどれだけの信用が措けるかは疑問である。唯煙の上る處に火があるといふ餘りあてにならない非科學的方則を頼みにして、少しばかりの材料を茲に紹介する。

彼の人間に對する態度は博愛的人道的のものであるらしい。彼の犀利な眼には恐らく人間のあらゆる偏見や痴愚が眼につき過ぎて困るだらうといふ事は想像するに難くない。稀に彼の口から洩れる辛辣な諧謔は明に其れを語るといふものである。弱點を見破る眼にはニーチエと同じ程度かも知れない。併しニーチエを評してギラ／＼して居ると云つた彼は此等の弱點に對して可也氣の永い寛容を示して居る。迫害者に對しては常に受動的であり、教を乞ふ者にはどんな馬鹿な質問にでも眞面目親切に答へて居る。

智能の世界に於ての貴族である彼は社會の一員としては生粋のデモクラットである。國家といふものは、彼に取つては其自身が目的でも何でもない。金の力も無論何でもない。さうかと云つて彼は有りふれの社會主義者でもなければ共産黨でもない。彼の説だと云ふのに據れば、社會の祝福が單に制度をどうして見た處でそれで永久的に得られるものではない。唯銘々の我慾の節制と相互の人間愛によつてのみ理想の社會に到達する事が出來ると思ふのであるらしい。

勿論彼は世界平和の渇望者である。しかし其の平和を得る爲には必しも異種の民族の特徴を滅却しなくてもいゝといふ考ださうである。猶太民族を集合して國土を立てやうといふザイオニズムの主張者としてエもありさうな事である。

桑木理學博士が曾て彼をベルンに尋ねた時に、東洋は東洋で別種の文化が發達して居るのは面白いと云つたやうな事を

話したさうである。此點でも彼は一種のレラチギストであるとも云はれやう。それにしても彼が幼年時代から全盛時代の今日迄に盲目的な不正當なショーギニムズから受けた迫害が如何に彼の思想に影響して居るかは、或は彼自身にも判斷し難い機微な問題であらう。

桑木博士と對話の中に、蒸氣機關が發明されなかつたら人間はもう少し幸福だつたらうと云ふやうな事があつたやうに記臆して居る。又他の人と石炭のエネルギーの問題を論じて居る中に、『假りに同一量の石炭から得られるエネルギーがずつと増したとすれば、現在より多數の人間が生存し得られるかも知れないが、さうなつたとした場合に、其れが以に人類の幸福が増すかどうかそれは疑問である』と云つたとある。唯此れだけの斷片から彼の文化觀を演繹するのは早計であらうが、少くも彼が石炭文明の無條件な謳歌者でない事だけは想像される。少くも彼の頭が鐵と石炭ばかりで詰まつて居ない證據にはなるかと思ふ。

× × × × × × × ×

彼は未だ此れからが働き盛りである。彼が實力の理論で手を廻さなかつた電磁氣は、ワイルによつて彼の一般相對性原理の圏内に併合されたやうである。此れが成効であるとしても、未だ彼の目前には大きな問題が殘されて居る。其れは所謂『素量(クアンタム)』の問題である。此問題にも彼は久しい前から手を付けて居る。今後彼が此れをどう取扱ふかゞ何よりの見ものであらう。エヂントンの云ふ處を聞くと、一般相對原理は殆んど凡ての萬象から絶對性を剝奪した。凡ては觀測者の尺度による。唯一つ取り殘されたものが『作用(アクション)』と稱するものである。此れだけが絶對不變な『純粹の數』である。素量説なるものは取りも直さず此の作用に一定の單位があるといふ宣言に過ぎない。此の『純數』が恐らく或る出來事の『確率(プロバビリテイ)』と結び付けられるものであらうと云つて居る。此に對するアインシユタインの考は不幸にして未だ知る機會を得ない。唯彼が昨年の五月ライデンの大學で述べた講演の終の方に、『素量説として纏められた事實が或は『力の場(フエルド)』の理論に越へ難い限定を與へる事になるかも知れない』と云つて居る。此の謎のやうな言葉の解釋を彼れ自身の口から聞く事の出來る日が來れば、それは物理學の歴史で恐らく最も紀念すべき日の一つになるかも知れない。

クロオツエのマルクス論

井箆節三

「イタリアのベルグソン」ベネデツト・クロオツエは、一八六六年にアキラ州に生れ、ナポリ及びロオマの大學に學び、最近までは無位無冠の學者として而も内外の學界に重きをなしたが一九一八年に至つて元老院議官に擧げられ、次いで一九二〇年七月には公共教育總裁に推された。近頃日本でも彼の名が廣く知られるやうになつたのを機會として、私は彼の「カール・マルクスの歴史的唯物論及經濟學」に依りクロオツェのマルクス論を玆に概說しやうと思ふ。

（一）唯物史觀と歴史哲學

世にはマルクスの唯物史觀を一種の歴史哲學と思ふ者もあるが、マルクスの唯物史觀は決して歴史哲學ではない。それは唯だ歴史に關する哲理の一種たるに過ぎない。

元來歴史哲學といふものは果して可能なものであるかといふに、以前には目的論や形而上學的獨斷論が哲學の方面で有力であつたからこそ、之を史學にも應用して歴史哲學といふやうなものを構成したのではあるが、舊式な目的論や獨斷論は哲學として既に滅亡したのであるから、史學の方面でも舊來の歴史哲學は悉く瓦解する筈で、現に近頃でも歴史哲學と銘打つた著作は出るけれども、其の實は歴史哲學ではなくて、唯だ單に歴史に關する哲理を供給するものに過ぎない。

蓋し歴史哲學が成立し得る如く考へられるのは、歴史の進展する理路が何等かの普遍的概念に歸納し得るといふ考へを前提としての事であるが、歴史に生起する所の事實は、單に其の部分的要素だけに就いて考へると、之を種々の普遍的概念に歸納し得るものであるから、道德哲學とか法律哲學とか藝術哲學とかいふやうなものは成立し得るけれども、之等の部分的要素を悉く統一した全體としての歴史そのもの、歴史の具體的事實に至つては、如何なる普遍的概念にも歸納するとの出來ないもので具體的事實を部分的要素に分解すれば、歴史は破滅してしまふ

のである。

歴史を一定の概念に歸納しやうとすれば「神の攝理」といふやうな觀念で一切の歴史現象を神意の遂行と解釋するか、さもなければ「進化」とか「發展」とかいふやうな概念で歴史を説明するからであるが、「神意」といふやうな舊式な概念では最早歴史を説明し難くなつた。されぱとて歴史の發展を説明するのに「發展」といふ概念を以てするが如きは、嗤ふべきトオトロギイである。しかるに由來實證論者は哲學的に淺薄であるから、「進化」といふやうな概念を正確に取扱ふことを知らない。進化といふやうな概念は、形式的な無内容なものとしてこそ眞理であるのに、實證論者は謬つて之に内容的な意味を持たせる。而も其の意味なるものが舊式な目的論に酷似した迷信である。その證據には、今日「進化」といふ殆ど「神意」とか「攝理」とか言はぬばかりの神異な神祕的な感じを與へる。今日の進化論は一種の目的論である。さういふ舊式な實在論的歴史哲學が今も尙ほ跡を絶たないから、それで歴史に哲學的な批評を加へることが必要なのであつて、マルクスの唯物史觀も亦た其の一種として歴史に哲學的批評を加へたものである。決して新しい歴史哲學を建設しやうとしたものではない。吾々は先づ此の一事を心に牢記することを要する。さもないと謬つて歴史的唯物論と哲學的唯物論とを混同することになる。

（二）唯物史觀と形而上學

世人の熟知する如く、マルクスはヘエゲルの歴史哲學を批評して「ヘエゲルでは歴史が頭で立つて居たが、歴史を足で立たせるには、之を逆にしなくてはならぬ」と言つた。即ちマクルスはヘエゲルの歴史哲學を逆にせよといふものである。此の事からしてマルクスはヘエゲルと正反對の歴史哲學を提唱する者と誤解せられるのであつて、ヘエゲルとマルクスとの實在論を比較すると、ヘエゲルは理念こそ實在の世界だといひ、マルクスは之に反して「理念などは物質世界以外の何物でもない」、理念は單に人間の精神によつて反省せられ翻譯せられた物質に過ぎないといふのであるから、世人はそこから誤解して唯物論的歴史觀は觀念論的歴史觀の否定又は反對だと速斷するのであるが、ヘエゲルの謂ふ理念は人間の觀念ではないから、ヘエゲルの歴史哲學を逆にしたとて、人間の觀念が物質的條件の反映として發生するものだとの説明にはならない。ヘエゲルの歴史哲學を逆にすると、「歴史は唯理的實在の過程でなくて人爲的勢力の體系だ」といふことになるから、唯理的歴史觀の逆は（唯物的歴史觀ではなくて）動的史觀である。

マルクスはヘエゲル派の極左黨に屬したから、勢ひ形而上學的唯物論を奉じた。さうして其の結果は其の歴史觀にも多少の影響を與へたには相違ないが、しかしそれは外來的附加物に過ぎない。社會主義の論客にはランゲが其の「唯物論史」で何故唯物史觀に言及しなかつたかを不思議に思ふ者もあるが、ランゲの取扱つたものは形而上學的唯物論であつて、歴史的唯物論とは本質上何の關係も無いのであるから、ランゲは二者を混同すべく餘りに用意周到であつだ。然るに之を知らない者は、唯物史觀の名に欺かれて、此の兩者を混同する。例へば彼のプレハノフの如きは、社會主義の學者として有名な一人であるが其著「唯物論史研究」の如きは實に愚劣なもので、彼は唯物史觀說を研究するには先づドルバハやヘルエチウスまで溯る必要があるといふので、舊式な唯物論なぞを持出すのであるから、大抵の者は面喰つてしまふ。

社會主義者の中には歴史的唯物論と哲學的唯物論とを混同するのみならず、之を宿命論と混同して安價な豫定調和說に陷る者もあるが、唯物史觀說は決して歴史哲學ではないから、それは唯物論でもなければ宿命論でもない。しからば何か、曰く、それは歴史解釋の一新規準である。

(三) 唯物史觀と社會主義

歴史的唯物論は、歴史哲學に一新先天觀念を加へるものでもなければ、また歴史思想に一新研究方法を與へるものでもない。唯だ單に歴史解釋の一新規準たるに過ぎぬ。社會の形成及び趨異を從來よりも一層善く理會するには謂はゆる社會の經濟的基礎に注目するのが必要だとの說である。(エンゲルスは之を歴史の一新研究方法と解したが、それは誤解であつて、唯物史觀は研究の方法ではなくて規準である)。而も此の規準は歴史解釋の唯一の規準なのではない。材料の一種である。元來歴史とは何であるか。歴史とは史實が口づから語る所を史家が筆記するものではない。史家は材料を選擇して自己の所有する觀念で之を歴史に構成する。マルクスの唯物史觀は經濟といふ要素を歴史解釋の一新材料として攝取したまでのものである。故に唯物史觀は卽ち經濟史觀だといふのは良いが、それは歴史を經濟の方面から考察するといふまでのことで、歴史が悉く經濟の歴史だといふのではない。だから道具だとか器械だとかいふやうな生產機關を「歴史の神」と迷信してはならないのである。

唯物史觀と科學との關係は大體上述の如くであるが、しからば唯物史觀と科學的社會主義との關係は如何といふに、ラブリ

ヨラの如きは、兩者の間に頗る密切な關係があるとて、殆ど兩者を同視して、唯物史觀を否定しては科學的社會主義は成立しないと考へるやうであるが、これは兩者の關係を餘りに誇張したものであつて、前述の如く唯物史觀は形而上學ではないのであるから、何時如何なる社會にも無條件的に適用せられるのではない特殊の場合に特殊の條件で適用せられるのである。さすれば今日唯物史觀が無條件的に眞理である爲には、今日の社會組織は必ずや社會主義に赴く、その以外には行く途が無いと斷定せられなければならない。さういふ特殊の事情では唯物史觀と社會主義とは相卽不離であるに相違ない。けれども右の如き斷定は、斷定そのものとしては薄弱なもので、その斷定が實行せられる爲には、利害の觀念だとか道義の觀念だとかいふものが之に纒綿しなくてはならない。唯物史觀で今後の社會は必ず社會主義に赴くと斷定したところが、利害の觀念とか道義の觀念とかいふものが之に伴はなくては、社會主義は實際の勢力とはならない。故に社會主義の全價が唯物史觀に依據する如く解釋するのは誇張である。

（四）マルクスと倫理道德

しからば唯物史觀と倫理道德との間には、如何なる關係があるかといふに、一體眞理の性質を闡明するのに眞理の起原乃至發達を歷史的に考察するのは確かに一種の便法である。しかし眞理の價値を發生學的にのみ說明しやうとすると、結局循式な相對說や懷疑論に陷らざるを得ない。蓋し發生學的方法では眞理の先天性絕對性を證明することが出來ないからである。若し強いて發生論的に論斷すれば、幾何學的眞理ですら竟には相對的眞理に過ぎなくなるであらう。勿論今日の倫理說はカントやヘルバアトの至上命令說だけでは不完全で、倫理學にも歷史的研究は必要であるが、しかしそれは明白な事實で、現に大抵の倫理學者は之を實行しつゝある。殊にジムメルの如きは其の好適例である。何も社會主義者の專門事業ではない。而も倫理學の根本論では吾々はカントの上には出でない。マルクスは當時の空想的社會主義者が社會問題と道德問題とを混同するのを非難する爲に故意に階級道德や階級理想をこそ罵倒したれ、敢て倫理や道德を無視したのではない。唯物論といふ語は無道德を意味する如く誤解せられ易いが、少くともマルクスは唯物史觀によつて倫理道德を無視したのではない。否、寧ろ理想とか絕對的道德とかいふものを社會主義の必然的要定としなくては、マルクスの學說は成立しない。たとへば「剩餘價値」といふ語は果して善惡正邪の觀念を交へざる純經濟學には於て、言はる

べき語であるが。「資本論」の頁に發露したマルクスの憤慨や諷刺は、果して經濟的思想から出たものであらうか、それとも道德的觀念から出たものであらうか。但だマルクスの「資本論」は倫理書ではなくて經濟書である。ラブリョラも言ふ如く、マルクスは「資本論」によつて資本家の社會を說明はしたが、決して資本家の竊盜を說明したのではない。蓋しマルクスが「資本論」で解決しやうとしたのは倫理問題ではなくて、社會問題である。さうしてマルクスの考へでは、社會問題は社會問題として解決しなくてはならぬ社會に奴隸制度が嚴存するとき、社會組織を改造しないで、徒らに倫理道德の立場から慨嘆したとて無益であつて、此種の道德は無力である。奴隸制度が產業制度に不適當と認められるに及んで、始めて道德の立場から奴隸制度を非難することも有效になる。時代を支配する產業組織が奴隸制度に適合する限り、之に對する道德的非難は無力であり徒勞である。これ即ちマルクスが「道德の無力」を云々した所以であつて、淺々者流は之が爲にマルクスが道德を無視した者の如く誤解するのであるが、マルクスの道德無力說は必ずしも嚴格な絕對道德說と矛盾するものではない。蓋しマルクスは社會を改善するのに其の目的よりも手段に著眼したのである。道德的な立場から資本主義を非難するより經濟的な立場から資本制度を解剖することそ適切な手段だと考へたのである。さうして「善惡の區別は其の目的にのみ屬する。」手段には適否こそあれ善惡はない。即ち手段は道德の立場から論ずべきものではない。マルクスの主眼は手段にある。さうして彼は手段として道德の無力なことを說いたのであつて、目的として道德が無用なことを說いたのではない。故に曰く、マルクスの道德無力說は嚴格な道德絕對說と矛盾するのではない。

それではマルクスは倫理學上では絕對論者であつたか相對論者であつたかといふに、マルクスは倫理學者ではなかつたのであるから、これは重要な問題ではないが、しかしマルクス及びエンゲルスが道德の普遍性を無視したことは確かであるから、若し誰かマルクスの認識論を書かうとすれば、それは書かれるかも知れぬが、マルクスの倫理學を著はさうとしたとて、それは恐らく徒勞であらう。

(五) 唯物史觀と階級鬪爭

「歷史は階級鬪爭である」といふマルクスの說は眞理であるか。歷史が階級鬪爭である爲には、第一に階級が對立すること、第二に階級相互の利害が相反すること、第三に階級各自が利害の相反を意識すること、此の三種の條件を必要とする。即ち歷

史は此の三種の條件が具はつた時にのみ階級鬪爭であるが、さう言つたのでは、「歴史は階級鬪爭である時にのみ階級鬪爭であるといふ滑稽な命題と同じ事になる。また歴史の實際を見るに歴史は必ずしも常に悉く階級鬪爭であつたのではない。何時の時代にも階級と階級との對立はあつたとしても、兩者の利害は必ずしも常に悉く相反したとは限らない。また利害は相反しても、双方の階級が相鬪ふ程までに利害の相反を意識して居るとは限らない。現に社會主義者が現代の無産者に此の自覺を喚起しやうと努力するのも、畢竟無産者が階級的利害の相反を充分に意識して居ないといふことを社會主義者が認めればこそであつて而も社會主義者の此種の努力は必ずしも常に成功しない。(たとへば農民に對しては彼等は未だ成功しない。)

若し夫れ將來階級を絶滅することの可能如何に至つては、未來の社會には階級の對立が無くなると豫言する社會主義者は、少くとも階級を無くするといふことが必ずしも本質的に歴史の發展に必要な事象ではないといふことを承認しなくてはならない。蓋し未來の社會に於て階級が絶滅しても、歴史は絶滅せず依然として存續するものと考へられるからである。若し歴史が悉く常に階級鬪爭の歴史ならば、社會に階級が無くなれば歴史も亦た無くなる筈である。

斯くの如く、「歴史は階級戰爭である」といふが如き部分的な主張を見ても、マルクスの唯物史觀説が唯だ一箇の規準に過ぎない、一種の見方にしか過ぎないといふことが分るのである。

(六)「資本論」の科學的問題

「資本論」は難解書である。蓋しマルクスの「資本論」は經濟社會に對する一種特別な研究である。而も當人のマルクス自身が其事を何時でも十分に自覺して居たとは思はれない。加ふるに其の説明の方法が充分に嚴格でなく、一般的學理もあれば、激烈な論爭もあり、辛辣な諷刺もあり、歴史的叙事もあれば餘談もあり、種々なものが混合してある。「資本論」を最も善く整つた書だなぞといふのは恐らくはロリア一人で、「資本論」は毫も善く整はない、整頓を缺き均衡を失ひ、善良な趣味の法則を冒瀆した惡趣味の著作である。

しからばマルクスの「資本論」は如何なる特質を有するかといふに第一に研究の方法では「資本論」は抽象的研究である。マルクスの研究した「資本家社會」は、歴史的に存在した社會ではない、種々の假定から演繹した社會、一種の觀念的形式的な社會であつて、歴史的現實的な社會ではない。マルクスの研究した結果は現實の社會を理會する爲の参考にはなるけれども

マルクスの假定した社會は現實の社會とは一致しない。何處の世界へ持つて行つても、マルクスの範疇は活きた現實の事實には適合しない。第二に研究の範圍では「資本論」は經濟現象の全般乃至根本を研究したものではない、寧ろ其の研究の範圍を一種特別の經濟制度のみに限つたものである。マルクスの用語で言へば、資本家の社會にのみ行はれる特殊の經濟組織を研究したものである。

しからばマルクスは何の爲に斯くの如き假定的社會の抽象的研究を試みたのであるか。革命家としてのマルクスは到底斯くの如き抽象的學究的な研究に半生の努力を傾倒する人物ではない。しからば彼は何を目的として資本家社會の現象を研究の主題としたのであるか。曰く、マルクスは純然たる經濟學說以外に一箇の命題を假定した。有名な價値と勞働との均等說が其であつて、勞働によつて生産せられた商品の價値は之を生産するに必要な勞働の分量に均しいとの說である。マルクスは此の勞働價値說を彼の資本家社會と比較する爲に半生を「資本論」に捧げたのである。由來マルクスの勞働價値說には賛否の兩說があるが、マルクスの勞働價値說は現實的事實ではなくて理想的典型である。マルクスは勞働價値を價値の典型として要定したのである。それが直ちに資本家社會の商品に該當するといふのではない。資本家社會の商品の價格は此の典型的價値標準と如何なる差異を有するか、それがマルクスの問題である。玆まではマルクスは正しい。その典型的價値は假設であつても、その假設の埒内に議論を限定する限り、マルクスの說は正しい。唯だ其の限界を踰越して假設と現實とを混同すると、そこに始めて誤謬を生ずる。マルクスは此の典型的價値を以て資本家社會の經濟現象を支配する法則となしたが、勞働と價値との均等は法則ではなくて要定である。それはゾムバルトの言ふ如く客觀的事實であるとしても、それは種々の事實の中の一つであつて、それが唯一の事實ではないから、それは全般的法則ではない。勞働の力では生産することの出來ない商品は之を例外とし、勞働の力で生産することの出來る商品だけに限り、且つ經濟社會から種々の要素を抽除して、純然たる勞働社會だけを標準にし、その社會その商品にのみ該當する事實に過ぎない。一般普通の經濟社會には、此種の事實も存在するが、其他の事實も存在する。それは多數の事實の中の一箇の事實である。それは完全な支配力を有する所の事實ではない、多數の諸種の事實によつて制裁せられる事實である。(或人はマルクスの勞働價値說を道德的理想だと解するが、前述の如くマルクスは「資本論」で道德を論じたのではない)。マルクスは彼の想定した勞働社會の事實

を以て資本社會に比較した、その結果が剩餘價値說である。剩餘價値といふ言葉は純經濟學では無意義であるが、マルクスは甲の經濟社會と乙の經濟社會とを對照して兩者の間に於ける價値の差異を剩餘價値と呼んだのである。マルクスが價値と價格とは必ずしも一致しないといふのも亦た之が爲である。更にまた利潤遞減說も之と仝じ事で、固定資本が增加し生產器械が發達すると、勞働社會では勞働の必要が減少するが資本社會では利潤が低下する。斯くの如くマルクスの經濟說はマルクスの理想した社會と「資本家の社會」との對照としては眞理であるが、その假想した社會の爲に彼が要定した所の假說を直ちに現實の社會に適用すると、その結果は誤謬に陷るのである。

(七)　マルキシズムの價値

以上の說明はマルクスの學說の二三に對する解說乃至批判であるが、尙ほ此の外にも論及すべき餘地は甚だ多い。しかし玆には以上に叙べた所の要點を捕捉して置かう。

第一マルクスの經濟學は、之を一般經濟學とは解せず、比較社會經濟學と認め、主として歷史的生活及び社會的生活を問題とするものと考へれば、正當なものである。

第二、マルクスの唯物史觀說は、之に附隨纏綿せる先天的解釋は悉く之を除去し、之を單に歷史解釋の規準の一種と見るべきである。

第三、マルクスの社會政策は純科學的說明では推論が不可能である。社會政策の可否は實際的確信の問題であるが、此點に於てマルクスの社會政策は敢て最高最大なものではない、唯ださう想はれるだけのことである。今日ではマルクスの政策を維持することは彼の學說を維持するよりも一層困難である。

第四、マルクスの思想を反道德的と誤解する如き傳說は宜しく放棄すべきである。



工業主義と國家主義との相互作用

バートランド・ラッセル

工業主義の中には、益々大規模な組織を作つてゆく傾向を自然に喰止める性質はないので、外からの妨害がない限り、これは漸次に全世界を生産及び消費の一つ單位に組織してしまふであらう。産業は動力又は原料の供給に最も便利な地方で經營せられ、農産物は各國共、其國の地味に最も適したものだけを生産することになるであらう。個人は社會のお蔭ばかりでなく、諸國のお蔭で生活するようになり、各國は其生存の爲に要する貨物の一少部分を生産するに止まり、殘餘は外國との貿易に依つて得るであらう。之は、悉く世界主義者であり、且つ工業主義は世界平和の時代を誘致する

ものだと信じてゐた、初期の工業主義者――コブデン及びマンチェスター學派――の理想であつた。

然し世界が今日まで發達し、そして尙發達しつゝあるのは、此方面ではない。工業主義はそれ自身に劣らぬ强大な勢力、即ち國民主義なるものに遭遇し、思はず知らず之を養育するやうなことになつた。そして此國家主義は各國民を、一個の獨立した經濟的單位にしようとする傾向を有してゐるのである。世界が野蠻時代に引戻されようとしてゐるのは、資本主義と社會主義との軋轢よりも、寧ろ國民主義と工業主義との交互作用の故である。國民主義の破壞力にして緩和せられぬ限り、人類は産業組織の全的崩壞を恐れ得まい。此章の主題となつてゐるのは、國民主義と産業主義との紛糾した交互作用である。

國民主義は本能的の根據を有する情熱である、即ち相異れる群と群との對抗若くは所謂群團本能である。其他の大抵の本能と同樣に、此本能は槪して生物學上では有用なものであるが、其生物學的功用の範圍以外にまで出でゝ働き、功用の有無に關する意識なしに作用するものである。工業主義は此本能を最早不用に歸せしめながら、同時に、甚しく之を刺戟した。譬へば、或る新しい食物が採用せられて、それが男子の性的衝動を强めると同時に、婦人に單性生殖をさせるやうになつたとする。此場合には性的本能が增進すると同時に、生物學上では不用に歸したのである。工業主義の影響の下に於ける群團本能も、これと同樣であつた。

群團本能の作用はどの群の生動物に於ても見ることが出來る。同じ群團の仲間は互に一所に居ることを好み、群から離れた羊は、皆の所へ歸れるまで怖れてゐる。他の群團からの闖入者は追放せられるか、又は死刑に處せられる。蟻は、彼等自身の巢に屬せぬ蟻を、その仕事場で發見すると、直ちに殺して了ふ。群團は協同して一定の地方で食物を捜索し其食物を仲間同志で仲善く分配する。即ち、同じ群團の仲間の經濟的關係は、或法則に依つて支配せられてゐるのである。

概して群團の內部には、繁殖期に雌同志の間に雌を得ようとする爭ひがあるのを除けば、爭鬪は無いと云つてもよい。然し若し、群團がそれ自身の財産だと考へてゐる場所に、同種の他の動物が闖入すれば、闖入者は爆撃せられるのが常で、若し彼が生命を全うして逃れ得たなら、幸運である。斯くの如きものが動物の群團本能であつて、人間に於いても同斷である。

人間に於いては、群團本能は極めて强烈であり、其知力の結果、もつと效果のある協力に堪へるので、最も群居的な動物よりも、その效果が多いのである。發達の初期に於いては、それは生物學上甚だ有益なもののである。これあるがために强大な種族は弱小な種族を攻撃し、絶滅し、その食物供給の根源たる土地を領有する。斯くて强大な種族は多くの子孫を殘すことが出來、一層其生物學上の力を增加させることが出來る。アリヤン族、セム族、支那族等の征服人種が、地球の表面の豐饒な部分を獲得し、一時はずつと多數であつたに相違ない所の先住人種に取つて代つたのは、實に斯ような方法に依つたのである。爭鬪と結合との點で劣つてゐる種族は、隣りのより好戰的な種族に殺戮せられたので、右の好結果を得る原因たる群團的結束と群團的爭鬪との本能は、征服者の子孫、少くとも多くの子孫中の優勢な者に傳へられたのである。して見ると、現今の支配人種は久しく續いた淘汰の產物であつて、生存者は常に戰爭に於ける勝利者であり、戰爭の勝利は、主として群團本能の力と殘忍性とに因るのである。形勢は今や全く變化したが、斯ような淘汰の結果、殘された本能の傾向は依然としてゐる。此本能の力は、所謂愛國心とか、公共精神とか、社會の公益に對する獻身とかいふ讚美的の名稱に依つて示される。

どういふ人間の團體が群團本能のための人類の集團を構成するかは、種々の形勢によつて決定される。最も主要な要素は戰爭である。同じ味方となつて戰ふ者は、同一の群團に屬するのである。そこで他の條件が等しいならば、同一國

家の人民は同一群團に屬する傾きがある。然し國家は人爲的の實體であつて、屢々其領域內に相對峙する群團が形成され、永續するのを防ぐ力のないことがある。これは特に同一政府の臣民の間に人種や、言語や、宗教を異にする種族のある場合に起る。瑞西に於けるが如く、時には是等の不統一の諸原因には打克つことも出來るが之は例外である。蘇格蘭人は其土語を保存し、愛蘭人は保存せぬ、然るに蘇格蘭のケルト族の高地人は低地蘇格蘭及び英蘭のアングロ・サクソン族と旨く結合するのに、一方愛蘭人が何故孤立の國民として殘つてゐるかは、容易に解し難い問題である。斯ような例は吾々に、國民的感情の起原は、ある程度までは不明瞭であることを承認せざるを得ざらしめるものである。然し其等は數字的に最も重要な事例ではない。英太利、佛蘭西、獨逸の如き、長い國民的歷史と、言語の統一と、風俗習慣の一致とを有し、尙其上に共同一致して外敵に對して戰ふ習慣を有する同種の大國民は、國民的感情を築き上げるに必要な一切の要素を具備してゐる。國民主義の模範を世界に垂れてゐるのは、英國と佛國とであつて、全世界の國民主義は、此二ヶ國の國民主義の結果である侵略に抵抗せんとする努力のために、普及したような次第である。

國民主義が經濟的動機から起つたものだと想像することは誤つてゐる。勿論世の中には經濟的動機に依つて支持せられる群――例へば追剝の徒黨、又は政黨の領袖の如き――もある。けれども人間が何れの國に附屬すべきかを決定するのは經濟的動機ではない。これは屢々個人の經濟的利益に反して、本能又は情緒によつて決定される。英國人は埃及を富ましたが、而も埃及人の國民主義は、英國人の羈絆を免かることを望んでゐる。墺太利人は、伊太利に附屬して甚しく疲弊して居つたトリエストを富ましたが、而も戰爭前トリエストの住民は伊太利人たらんことを希つた。若し人間が富者となることをのみ望み、又は經濟的動機のみに依つて動かされるものであつたならば、すべて其集團は、追剝の徒黨或は株式會社と同樣であつて、國民的感情に屬する所の熱情的の力を有する筈はない。勿論國家主義の存在

する以上、丁度如何なる人間の欲望をも利用し得ると同じように、之を經濟的の目的に利用することも出來る。玉突屋をし、金を儲ける者もあることはあるが、吾々がすべて個人の經濟的利害によつて導かれるとしたならば、世の中には賭博はないであらう。同様に人の愛國心を煽つておいて金持になる者もあるにはあるが、すべての人が個人の經濟的利益に依つて導かれるとしたならば、世の中に愛國心はないであらう。愛國心は、敏感な人間の行爲を理論的に刺戟する所の、合理的な幸福の追求とは異つて、人間性の不合理な本能的基礎の一部分なのである。

愛國心が本能的だと云つても、それが人爲的な手段に依つて起すことの出來ぬものだと云ふ譯ではない。丁度媒酌人が二人の人間をして戀に陷らせると同様に、老練な政府は、さうでなかつたら全く之を缺いでゐる人間に、國民的感情を起させることが出來る。之が實際よく行はれた何よりの例は亞米利加合衆國である。もとの十三州は元來各々多少の州の愛國心は有してゐたが、集合的の愛國心の發端は、內亂（南北戰爭）に依つて得られたのである。然し此集合的の愛國心は大して強くはなかつた。若し大いに強かつたならば、內亂は起らなかつたに相違ない。亞米利加が愛國心の製造に大勝利を占めたのは、南北戰爭の終末以來のことである。有ゆる種類の外國人が溢れるばかりに流込むので、合衆國の現在の住民の中の僅かに一小部分のみが、リンカーンの死歿當時の生存者の子孫であるにも拘らず、亞米利加は、歐羅巴の最も古く且つ最も同種的な國民に殆ど劣らぬ程度の國民的意識を起し得たのである。亞米利加が戰時中最高級の努力を爲し得たのも、今又世界帝國建設の大望を抱いても、曾て西班牙や佛蘭西や獨逸の世界帝國建設の努力に添うたより以上の成功の希望があるのは、此國民的意識の緊張の結果である。斯様に見事な成功が見られた以上、近代の愛國心を理解したいと思ふ者は、宜しく亞米利加の方法を研究すべきである。

亞米利加は元來他の諸國にない、ある便宜を有してゐたことは爭はれぬ所である。移民の多くは本國に於ける貧困又

は壓迫から逃れて來た、壓迫の亡命者であつて、愛蘭人もあり、伊太利人もあり、南スラブ人もあり、露西亞人もあり、波蘭生れの猶太人もあつた。彼等には、合衆國で不熟練勞働に對して拂はれる最低の賃銀を貰ふのみでも、とにかく虐殺を免れるだけのことが、自由と慰安として映じた。亞米利加は自由の國と稱せられる權威をもち、其政府は宗教の相異や白人種中の種別について差別を設けなかつた。そこで移民には其暴虐を逃れて來た政府を惡むと同じ程度に於いて、亞米利加を好む理由があつたのである。

とは云ふものの、彼等の多くは、學校の感化を除いては政治的意識や亞米利加に對する愛國心は無かつたのである。學校では、兒童は、善良な亞米利加人となれ、澤山の恩惠を受けてゐる國家に對して感謝せよと敎へられた。產業の未だ發達しない地方から來た移民が、亞米利加の物質的文明に感服して、せゝこましい敵意と、下らぬ傳統主義との歐羅巴の舊世界を侮蔑するやうになつたのは當然であつた。すべて之を學校は各々の新時代の兒童に敎へ込んだ。そして既製の愛國者が增加するにつれて、次々と新しい代の者ほど、其父祖の實例と影響とを受けて一層容易に同化するやうになつた。

亞米利加の例は、愛國心の泉源たる本能を訓練し强大にする點に於いて工業主義がどれほど有力であるかを示す一例と爲すことが出來よう。群團本能の作用は、(一)群團內の緊密な協力、(二)群團全體としての意識と局外者に對する意識、及び(三)外部の危險に對する理解とによつて强くなる。此三つの要素は三つとも工業主義によつて激しくされるものである。群團內の緊密な協力に就いては、既に前章に十分述べておいた。群團全體の意識と、局外者に對する意識とは、鐵道や輕易な旅行によつても、大きな經濟的團體によつても、外國人との接觸によつても增加されるが、しかし何よりも、近代世界に於ける二つの最高の國家主義助長者たる、敎育と新聞とによつて增加されるのである。新聞は、少數の

人しか讀まない所では勢力がないので、勿論これは教育の力に俟つ所が多いのである。所で國民的の誇りに訴へぬ新聞を買ふ人は少いから、新聞の國民主義的氣分は、主として商賣上の動機に基くものである。然し教育の國家主義は殆ど全く絶對的本能に基くものである。文明諸國の教育を指圖する人々は殆ど一人も、彼等の祖國の勢力と功績、及び其敵の弱點と失態に就いて嘘八百を青年に教へることが、何等かの有用な目的を達する方法となるかと云ふことを、曾て自身に問うたことはない。恰も貴族が家の誇りを其子供に教へるのが常であつたと同様に、彼等は本能的に此遣方を採つたのである。モンタグ人とキャピュトレット人との爭ひの馬鹿らしいのは云ふまでもないことであるが、然し英國人と獨逸人との爭ひとても、その馬鹿らしさに少しも變りはないのである。

愛國心を促進する上に教育の影響が如何に深いものであるかは、後れた國の農民に接近した人には誰にでも分ることである。無教育の農民の群團本能は、殆ど全く彼自身の部落に局限せられてゐる。其國が戰爭を始めると、政府は一定の行動を採るものであること、卽ち壯丁を動員したり、馬匹を徴發したりするものだと云ふことを、農民は覺悟してゐる。然し斯ような命令に彼が服從する動機は、服從の動機である。經驗が、政府に抵抗するのは危險だと、彼に教へたのである。政府の下す命令の目的如何は、農民には無關係である。進歩した國々の市民のように、彼は其意志を以て戰爭に參加する譯ではない。此相異は殆ど全然、教育が缺けてゐる結果である。歴史も地理も知らない人間は、外國人と絶えず接觸でもしてゐなければ、其國を一個の實在として認識することは出來ないのであるが、此外國人との接觸は、大きな未開帝國の山奥の農民には、思ひもよらぬことである。バルカンの如き諸小國、特に雜多の民族が並存してゐる所では、教育がなくとも力強い愛國心が起り得るものである。何故なれば、常に原始的村民に附物である所の部落的愛國心が、自然に國家的愛國心と結合してゐるからである。隣接し合つてゐる部落は、極めて些細な刺戟によつて何時でも互に打

破らうとする狀態にあつて、そして彼等の領土內では、同人種の他の部落が其自然の同盟者である。敵の居らぬ一同種帝國の內部に於ては、此殘忍と憎惡との心理狀態は、人工的にしか生み出すことが出來ない。之を生み出すことが敎育の目的であり、到る處で敎育は此目的を成就してゐるのである。

外部からの危險に對する認識は、工業主義によつて大に强められるが、これには二つの理由がある。一方に於ては、敎育と新聞とが、現に存在する危險を堀へず警告し、臆病者を脅すために軍國主義者の發明した想像的危險に對する恐怖を募らせる。然し他方に於ては、單なる恐怖ではなく、事實上の危險が、工業主義によつて幾千倍にも增加される。卽ち工業主義は、兵器の破壞性と特に兵器製造に關與する人間とを增加するものである。これは分り切つた、詰らぬことであるが、吾々に關係のあるのは此點ではなく、これが群團本能に及ぼす効果である。戰爭の破壞性が一層大なれば、其恐怖も一層大であり、從つて、國民的感情の緊張も一層大であり、又それ故に戰爭の愛好心もまた一層强大となるのである。そこで、戰爭の害惡が增加すればするほど其好戰的傾向も增加するといふことは、一般的に立言してよいと思はれる。

二

以上吾々は國家主義の源泉たる本能と、工業主義が此本能の作用を援ける刺戟を增大する道筋とを詳論した。今や吾々はそれよりは合理的に取扱へる問題、卽ち工業主義が發達するに作れ、それがどういふ風に、國際間の經濟關係と國民的競爭の爲めの經濟的動機とに影響するかといふ問題に移らなければならぬ。勿論國際的競爭は、先づ諸國民が存在しなければ起らぬもので、其諸國民は（吾々の硏究した通り）本能の產物である。諸國民を經濟的單位として取扱ふには、諸國民を分けた原因である本能を硏究しなければならないので、國際的經濟關係を論ずる前に、先づ群團本能を分

枡して見た譯である。

工業時代の初期、即ち工業的國民が、その內部に同一商品を製造する多くの競爭製造家を包擁してゐる際には、各々の會社と國家との關係は、極めて薄弱なものであつた。工業時代以前に於ては、棉製品の製造家は、外國人と競爭する場合よりも、國內の同業者の競爭を餘計に氣にかけて居つた。外國人との競爭が殆ど無かつた、十九世紀初頭の英國に於いては殊にさうであつた。各人が其競爭者よりも、賢いと自信してゐるので、國家に對しては銘々自由競爭と企業に對する制限の全廢との外、何も求めなかつた。此時代に於いては、すべての國家的境界は商業に對する妨害物であつて、產業は世界主義を助長するものだと考へられてゐた。個々の製造家は第一に其生產物を賣ることを考へてゐる。然し全體としての經濟的過程は、需要を充たすがための貨物の生產にあるのである。農民が彼自身と共家族とを養ふ爲に作物を作つてゐた時代と、再び後世に至つて、國家が國民の需要に應じて分配する爲に貨物を生產する時代に於いては、此經濟的過程は滿足に保たれる。然し此二つの時代の中間に、一人が生產販賣し、他の一人が購入消費する商業時代がある。此時代には、貨物に對する生產者の利害は、彼等が之を賣拂ふや否や直ちに消滅し、それが實際に需要を充たさうが充たすまいが、又は（誰にでも易々と金儲けをさせるほどに多勢ゐる）馬鹿者共が、旨く廣告に吊られて眞個に必要だと考へるにすぎないにせよ、それは生產者に取つては無關係である。商業時代を通じて、生產者の主として考へる所は、賣れるか賣れぬかといふことである。商業と工業的生產方法との結合から起つた、市場に對する要求は、國家主義の新形式を發展させたのである。

市場に對する國民的競爭の時代は、工業主義と國家主義との關係の第二期を代表する。戰爭前に工業國に存在してゐた設備は、とても利潤を得て賣ることは出來ないほどに夥多の商品を生產した。各國內に多數の小會社が分立する時代

は過去つた。最早各國内には二三の大きな有力な會社乃至は唯一つのトラストあるのみといふ有様になつた。是等のトラストの各々に取つては、競爭者が出來る限り寄り付くことの出來ぬ市場をもつといふことが何より重要になつた。内國市場（但し英國を除く）は保護關税によつて確保され、文明諸國の市場は多く之と同様な方法によつて、外國品の侵入を妨げた。そこで競爭は未開國、特に亞弗利加と亞細亞とに集中された。さういふ市場を獲得する最善の方法は、自國の政府に商業に關係ある地域を合併させることであつた。これは、利害關係のある會社に依て左右される猛烈な新聞の論戰の感化の下に、國家主義的理由によつて國民の支持する政府と政府との間の衝突を、必然に惹き起す。此過程の自然の結果が、一九一四年から一九一八年に亘る『大戰』（此名稱は直ぐ適用されなくなるだらうが、吾々は未ださう呼んでゐる）であつた。

大戰は新時代を招き入れた。一般的な破壞の爲に、今や賣ることよりも買ふことの方が一層困難である。商業時代は買手の役割よりも賣手の役割の方に重きを置いてゐた。然るに戰爭中に吾人は反對の狀態を經驗した。店頭で欲しい品物が得られた時に禮を言ふのは、賣る機會を得たのを喜ぶ賣手の方ではなくて、買手であつた。そして小さいこの取引の場合に起つたことは、大きな取引にも、同じことであつた。勿論此狀態は多少一時的ではあつたが、然しそれは亞米利加以外の到る處に、露西亞の共産主義と通ずる施設を行はしめた。國家が必需品の購入と製造とを行ひ、割當制度によつて之を分配する傾向があつた。之は共産主義の經濟上の本質である。それは供給不足の場合の不可避の結果であつて、生活必需品の缺乏してゐる時に、包圍又は其他の場合に方つて、常に採用される所である。西歐に於ける直接の壓迫は緩和されたが、何等かの形で同一の制度が直ぐ復活するに違ひないと想はせる、或る明白な理由がある。

工業的發達の第三期——完全にそこまで到達したのは、露西亞だけであるが——國民が貿易者としてのみでなく生産

的單位に組織される時代である。此時期に於ては、貿易は唯或る明白に必要な商品を得る爲にのみ起るのである。（露西亞の如く）政府が理論によらずに、單に實際の必要によつてこれを促された所では、品物次第で此社會化の時期が異つてゐる。過剩な貨物のある場合、その貨物の取引は引つゞいて行はれるが、貨物の不足方面には、國家の管理といふ新制度が採用される。石油は不足してゐる商品の適例である。石油を有する諸國は之を手離すことを好まぬと同時に、之を有たぬ諸國は買手たることを許されんが爲には大讓歩をすることを厭はぬ。工業主義が其必要とする原料を多く消費すればするほど、他の事物に就いても同様な傾向が現はれる。石炭と鐵とは既に此範疇に屬して居る。此時期は買手同士の間に、少くとも賣手同士の間と等しい競爭を齎らし、斯ようにして商業期の特色たる、生産者に對する消費者越優を破壞する。國際的競爭は今や市場を目的とせずして、原料を目的とする。卽ち、彼等は商人としてゞはなくて、生産者として競爭するのである。工業主義が完全に發展するのは、實に此時期に於いてのみである。其初期の商業的形勢は過去の時代の遺物である。其代表的形態は、例へば初期に於いて農民の家族が協同的に生産した收獲物を消費してゐたように、諸國民が生産者として組織されて、其生產物を市民に分配するようになることである。

全盛時代の工業主義は、未來の時代が何うなるか少しも考へることもなく、世界の自然の資源を容赦なく浪費するものである。今若い人々の一生の中に、原料の缺乏が恐らく合理的に產業を變化し、諸國民をしてもつと眞面目な過剩的でない生産方法を採用させることであらう。或る學者の云ふ所によると、石油や、石炭や、鐵や、其他多くの從來の工業に必要な原料は、是から五十年の中に甚だ乏しくなるさうであるが、兎に角、それを有する諸國民に取つても可なり乏しくなつて、浪費を避けたいと願ふようになるだらうと云ふことは、殆ど確實である。あらゆる資源を狂的に發掘して、ヒステリーのような無茶苦茶な營利戰の中で、ウンザリしてゐる世界の民衆に、これを投資することを目的とする商業

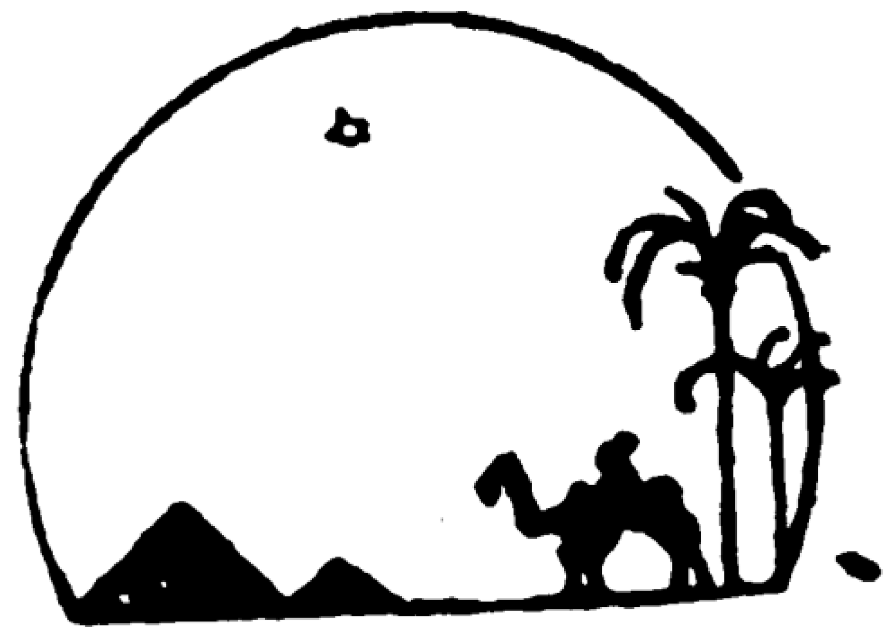
政策に取つては、之は有力な妨害物であらう。新しい工業政策は、國民の資源を取扱ふのに、放蕩者が其收入を取扱ふようにはせずして、思慮ある人が其資本を取扱ふようにするであらう。鑛山を經營するにも、土地を耕作するにも、今日の如く、此一代には過剩の富を、次の代には貧困を、尙其次の代には飢餓を生產するのでなくて、永久的な、生活資と、陸海軍に對する不斷の防禦との目的を以てするであらう。

戰時の防禦は、現今諸國を商業政策から工業政策に驅り立てる最も有力な動機である。封鎖は商業國に對する恐るべき武器であつて、大强國はいづれも生活及び戰爭の必需品に關しては、自足自給たらんことを欲してゐる。將來に於ける石油の供給杜絕は、未來に對する危惧の原因となつて居るが、亞米利加は現在では完全に自給的であつて、此二三年の間に制海權を獲得せんが爲に、迅速な計畫を立てつゝある。英吉利帝國は制海權を保有する間は自給が出來るが、之を失へば最早一日も續かぬ。露西亞は其產業が發達しさへすれば自給が出來るであらう。產業の發達と强大な陸軍とを與へれば、支那も大丈夫である。是等の諸帝國の各々の傾向は、外國貿易の減少を目的とし、平時にも戰時にも缺くべからさるものでない貨物に之を制限することである。單に自己保存の點から、强大國はいづれも私人の利潤を得ることのみを心掛けてゐる資本家が、自國の資源を徒費するのを禁止せさるを得なくなるであらう。それが如何に容易に消耗されるものであるかを一度び人民が覺つたならば、直ちに原料の國有化は避け難くなる。斯くて其時期の到達する以前に對外戰及び國內の勞働爭議が工業的機關を破壞せぬ以上、多少形態の相異はあるとしても、國民的共產主義がすべての大國家に來るべきことは、殆ど確實である。かような結果の來ることは現在の世界の形勢上、有り得べからさることではない。然しそれが實現せられぬならば、原料の國有は、大國家に屬するすべての文明人の自己防衛として、止むを得ぬ手段となるであらう。

大工業國に於いては、可なり一般的に國民的共産主義が現實せられたるものと假定して、さてそれで國民主義の害毒と破壊性とがいくらか減ぜられるであらうか。それは勿論、市場に對する戰爭を少くし、帝國主義に對する動機の一つを破壊するであらう。英國は主として市場として印度を望んだのであつた。若し印度が何處か他の强國に屬してゐるのであつたならば、英國の貨物は關稅によつて驅逐せられたに相違ない。かような帝國を所有したいといふような動機はなくなるかも知れぬ。然し少くとも强さに於いて劣らぬ、他の一つの動機、卽ち價値ある原料を包含する土地を所有したいといふ欲望が之に取つて代るであらう。假に大英國人が共産主義者であると假定しても、現に石油を得んが爲に露西亞と波斯やカウカサスで戰つてゐるのと同一の動機が存在し得るであらう。只今では資本家連中のみの利益になるように見えるが、其時には明かに國民の利益になるのであるから、斯ような一般的戰爭熱を喚起することは、現在よりも遙かに容易である。原料の不足が增加すると共に、之に對する鬪爭は烈しくなり、そして勝利は最も新しい、まだ手のつかぬ資源を有する强國に得られるのである。此强國は其意志を世界に課することが出來、奴隷の大衆の勞働の上に共産主義的の贅澤な生活をすることとか出來るであらう。然し其日が來るまでは、世界が巨大な幾集團——何れも防禦の爲には强いが他の集團を攻擊はせぬ——に組織されぬ限り、國民的共産主義が世界に平和を齎らすことを期待するのは理由のないことである。

共産主義は、勿論理論に於いては國際主義的であるが、然し其國際主義は、單に、資本主義に對する共國際的鬪爭の一時的結果であるらしく見える。共産政府は、露西亞に初めて出現しかけてゐるように、共資本主義の先代によつて示されたものと劣らぬ國民主義を必要とするかも知れぬ。恐らく共産主義は歐羅巴合衆國を作ることが出來るだらう。そしてそれが出來れば、確かに大成功である。又露西亞の共産主義が日本を除いて全亞細亞の連合を作ることも出來るし、且つ

それは前者よりも一層容易なことであらう。然し共產主義が歐羅巴の一團と東亞との連合、又は東亞の一團と歐羅巴との連合を作るだらうとは想像が出來ず、そして右の何れか一つと米國との連合を想像するのは一層困難である。假令それが戰時の防衞の爲のみであらうとも、帝國が益々擴大されて行く傾向が續くことは明瞭である。又商業の衰廢及び潛航艇の發達と共に、海上帝國が不可能となりつゝあることも明瞭である。是等の考察は下の如き境界線の上に、世界を組織することが可能であることを暗示する。合衆國は南北兩亞米利加を支配し、露西亞は亞細亞全體を支配し、露西亞を除く全歐羅巴の一團がヂブラルタル海峽を陸續きにして地中海沿岸と亞弗利加とを支配する。斯ような世になると、防禦戰は容易であるが、侵略的戰は明かに不可能である。斯くて戰爭の習慣は次第に廢れ、諸國民の間の關係は敵意の餘地を與へぬほど些細なものになる。其時代に到達する前に、その狂氣じみたことが自覺せられぬ限り、國家主義によつて恐るべき破壞が行はれるに相違ない。聯合國が獨逸を取扱つたと同じように、亞米利加は日本と英吉利とを取扱ふであらう、そして支那の搾取の爲に露西亞と亞米利加との間には大衝突が起るであらう。又東に於ける露西亞と西に於ける亞米利加との壓迫に依て、西歐は戰爭によつて殘された滑稽な不和を忘れる前に、窮迫のどん底に陷らなければならぬだらうと豫想される。其日の來る時に如何程の文明が殘るかは疑問である。若し政治家の中に常識又は普通の人情が存在するか、又は人民の間に、近代社會に於いては、敵を傷つけることは、同時に自己を傷つけることにすぎないといふ事實に對する、多少の理解さへあつたならば、すべて是等の災害は免かれることが出來るのである。然し現在の世界では、自己の利益よりも憎惡が先に立つてゐるので、破壞の事業が一循環した後に、人々は初めて憎惡に飽きるに過ぎぬだらうといふ恐れがある。愛國心と階級戰爭とは現代の世界に對する二大危險である。物質的進步は人間の相互の殺傷力を增加したが、それに相當する道德的進步がない。曾ては愉快な娛樂であつた戰爭が、今や人種的自殺になつたことを人々が自覺するまで、また彼等が、憎惡の耽溺は、近代的破壞と共に社會生活を不可能にすることを自覺するまで、世界の改革せられる望みはない。必要なのは道德の進步である。人々は寛容と暴力の回避とを學ばねばならぬ、然らされば文明は世界的墮落と災難との中に消え失せるに相違ない。



アインスタイン印象記

理學博士　石原純

アインスタインと云ふ名はいま普ねく世界に廣まつてゆきました。相對性原理とともに彼の名は恐らく不朽に傳はることでせう。私たちの文化の爲めにこの偉きな貢獻をなした斯の人と共に現代に生き、親しく彼の人間性に接することのできる私たちは、そこに得難い機會をもつてゐることに、大きなよろこびを感じてもいゝわけであります。

アインスタインを知ることは、相對性原理のどんなものかを能く理解するものにとりて一層興味おほいことです。あの嚴肅な且つ壯美と云つてよい程な哲理、人間のいろ〳〵な知識が組織だてられて成り立つすべての科學がみんな安住するであらうと思はれる一般的な原理、さう云ふものがどんな頭腦から湧き出たかを想ふことは、この原理を體得するものにとりて意味深いことでさへあると思ひます。その原理を單に普遍的に與へられたものとしてではなく、ひとりの個性をもつた人間に所屬する仕事として見るときに、これらの考察はあらゆる複雜をもつて私たちの思索に資するものでありませう。それはもはや安價な興味ばかりではありますまい。人間の個性と、さうしてそのなかに隱るゝ普遍性との相關に對することがらや、諸屬性の發達とその調和といふやうなことがらに就て、もつと深く考ふべき處であると思ひます。

溫情のこもつた、さうして云ひ知れぬ懷かしみをもつた人として私はアインスタインを印象してゐます。ふさ〳〵としてゐるその頭髮や、豐麗な瞳や、ふつくらした顏だちなどが、みん

な溫和などこかに藝術的な彼の素質を偲ばせます。私はゆたかな潤ひをもつたやうに彼の聲にも耳を傾けました。ユダヤ系の生れであると云ひますけれども、さう云ふ人たちによく見るやうな陰險さの痕を私は彼にいさゝかでも見出すことは出來ませんでした。硬いこはばつた感じや、深い冷たさを彼のなかにもとめることは出來ないのです。彼はよく談話の間に巧みな諧謔や諷語をもまじへます。けれどそこには針のやうな鋭い刺はなくて、たゞ私たちを動搖めかす波狀の響きのみが傳へられるのです。小さなことに關はるかはりにゆつたりとした大局を徐ろにひとり辿つてゆくのが、彼の特質ではないかと私は思ひます。

斯う云ふ印象に基いて私は彼の科學的の論文を讀んでゆきますと、その到る處にまざ／＼と彼のおもかげを見ることが出來ます。彼の議論はその他の獨逸の科學者たちの書くやうにきち／＼と引き緊まつたものではなくて、どこかにゆとりのあるふつくりした氣のするものです。抽象的な原理ばかりを並べる代りに、或る特種な具體的の例證を擧げてこれを一般的に押し擴めると云ふやりかたがよく見られます。そこには謂はゆる隙間があるかも知れません。併しそれだけにまた何となしにそれが藝術的に近づいてゐる感じがします。彼の相對性原理に關する最初の論文を私が讀んだのはそれが出てから三四年後でした。私は丁度大學を卒へたばかりの時でしたが、それを非常におもしろく感動して讀んだのでした。さうして自分の研究の題目をもそこに見出さうとしてゐました。その當時アインスタインの名に殆ど學界の人々にすら知られてゐませんでした。實際彼は其以前には熱力學に關する一二の論文を書いたきりだつたからです。さうしてチューリッヒの大學を出たばかりの若い學者であつたに過ぎないからです。けれども彼の論文はその頃まで混沌としてゐた電氣力學に確かりした基礎を與へました。それに基いた理論がぽつ／＼と種々の人々によりて發展されてゆきました。みんな獨逸にゐる人々ばかりでしたが、私も遠い處には居りましたがそれに附隨して自分の科學上の仕事を始めてまゐりました。私にとりてアインスタインは最も尊崇すべき先輩で

あり、また未知の恩師でもあつたのです。それから二年程經つてから私は、獨逸のスタルク教授からその主宰せる放射學及電子學年報に相對性原理の發展に關する報文を書くやうに依囑されたことがありました。丁度歐洲留學に出かける間際でしたので匆卒にその稿をまとめて送りました。

歐洲に行つて私はアインスタインに親しく接する機會を得ることを自分の最も大きなよろこびの一つに期待して居りました。併し私には性來の羞耻やら獨逸語の不自由さやらがその機會をすぐには實現させやうとしませんでした。私は先づ半年づつを獨逸のミュヘンとベルリンとに過ごしました。ミュヘンではゾムマフェルド教授のもとに居りましたが、そこを立つとき、アインスタイン教授への紹介狀を乞ひましたら、そんなものは必要はなからう、殊に彼のやうな人にはと云ふことでしたのでその儘に何も貰はずにしまひました。翌年の四月に私はチューリッヒに行つてとう〳〵アインスタインに會ふことが出來たのでした。

チューリッヒには州立の大學があつてそこにはやはり相對性原理の研究者として知られてゐるラウエ教授が居ました。その人とは私は以前日本にゐて論文を交換したり、ミュンヘンで能く知り合ひになつてゐたのでよけいに親しい感じがしました。その外に國立の高等工業學校があつて、日本で云へば工科大學でありますが、この方が前の大學よりも大規模で、そのなかに純粹の物理や化學の教室があり、アインスタインはその教授として在任してゐたのです。私はその教室のなかで漸く自分の憧憬してゐた偉人に接することが出來たのでありました。

チューリッヒの都市は私にはいろ〳〵な意味でなつかしい處です。市街は既に海拔四百米ばかりの高さにあるのですが、その東に七百米程の山が立つて居て、その山腹の高い處まで町が續いてゐます。大學や工業學校はその山を大分登つた邊にあるので、そこからは町全體を見おろすことが出來、その市街の南方に數里の長さに續いてゐるチューリッヒ湖の蒼い水や、その向うに遙かに雪を頂いたアルプス連山がずつと見亙せるので、

何とも云へないゝ眺望をもつてゐます。林檎の花の白くしてさいてゐる時分に、山腹をうねつてゐる天文臺街や物理街を歩んで赤煉瓦建の大きな建物のまへに出るとき、私は恍惚と自分を忘れてそこに佇むでゐたことが幾度あつたでせう。

工業學校ははでな赤いろの、併しがつしりとした大きな平たい屋根の建築でした。そこの正面の南向の二階にアインスタインの部屋があつたのです。光線のよくはいる明るいこの部屋のなかで彼はその深い思索を續けてゐたことでせう。大きな卓机のうへには雜然としてたくさんの書籍がいつも置かれてあつたやうです。私は言葉寡なく學術上の問題をたづねました。彼はそれに對するゆたかな考察を私のために親切に說いてくれました。そんな場合の靜かなもの言ひぶりを私はこの上なくうれしく思ひました。彼と向ひあつてゐるときに、私はその隔てのない心に引き入れられずにはゐませんでした。彼はそのとき感じのうへからはどうしてもいかめしい大家でも教授でもなく、只私の親切な話し對手に過ぎないのでした。

工業學校の表には山のうへへ登つてゆく廣い並木道が斜についてゐました。そこから暫くの間は兩側に家もなくて見晴らしのいゝ公園道の樣な趣のある處でした。晝休みときやその後でよくそこを行き歸りながら書物を手に開いて讀んでゐる教授の姿を私は見つけました。春のうち暖かな時候だつたので並木として兩側に立ち繁つてゐるカスタニーの廣い葉が鮮かないろに光つてゐました。帽子も被らずにむざうさに教室から出て來られることが多かつたやうです。或るときはひよつくり私とそこで行き會つていきなり話かけられたこともありました。輻射波の量子說がだいぶ喧ましかつた頃なので、やつぱり輻射は量子的な關係に支配されてゐるよとそんな最初の言葉で口が開かれるのでした。チユーリツヒの空は美くしいぢやないかと春の光のうごいてゆく天空を見あげるとき、教授の眼には遠いはるかな理想がこもつてゐるやうでした。私はあのくり〱とした平和な瞳子をわすれません。さうして私が別れて學校のいりくちの扉を入つてしまふまで、やはりそこの並木道を步みながら讀書してゐる教授の後ろ姿が見かへされました。

獨逸の大學の教授などは一つの教室をもつとかなりな權力を振つてゐるのがあたりまへです。併し私はアインスタインのもとではさう云ふ感じがちつともしませんでした。その年齢の若かつたせいもきつとあるでせう。私たちから見ればあそこらの國の人は一體にふけて見えますので、自分などよりずつと年上に感じてゐましたけれど、まだその時は漸つと三十五六にしかならなかつたのです。けれど一體には威張りたがるやうなことのない彼の性質からでもあつたに違ひありますまい。謂はゆる大家ぶるやうなことなしに、平氣で人に接するといふのが彼の常であつたやうに思ひます。

　四五人の人たちがいつも彼のもとで熱心に研究をしてゐました。理論物理學の指導といふことはかなり難かしいものです。問題の解決のすぐに見つかるやうなものは自分でやつてしまふことになりますし、さうでないものは、大層困難なものかまたはつまらないものに過ぎない問題に就て若い人たちと共同に仕事をしてゐるやうでした。輻射の量子的構成などに就てその頃發表したものもありました。さうして彼れ自身は數學者のグロースマン氏と一緒になつて萬有引力の相對性理論に沒頭してゐたのでした。これが戰爭後になるまで續けられてとう／＼今日の偉大な一般的相對性原理をつくりあげたのです。

　彼のゐた理論物理學の教室では毎週水曜日の夜に談話會を開きました。教室の人々が交互に或る問題について話し合ふのです。これはどこでもやることですが、私がチューリッヒで一つ變つたおもしろいことと感じたのは、その會の終へた後で、みんな集つた人たちが山を降りてチューリッヒ湖畔のカフェーで續いて會合を開くことでした。尤も會合といつてもそれは自由に只ゆきたい人だけがそこまで出かけるだけでしたが、めいめいに好きな飲料を前にして庭園のなかの白い大理石卓を圍みながら、いま迄教室の黒板で議論されたことをもう一度繰返したり、またはその外のいろ／＼な雜談に時を費すのでした。議論に熱したその人たちの間に親しい空氣を漲らせてくると、美くしい灯の光りをも漂はせる程に思ひました。斯う云ふ催しがアインスタイン教授の發案によりてこゝに始まつたものかどうか

私は詳にしません。けれどこの軟らかみのこもつた會合が、難かしい抽象的な物理學理論と相待つてこれに純粋な人間味を附與してゐるといふことに就て、私は興味を感ぜずにはゐなかつたのです。カフエーの庭に於けるたゞ一杯の飲料、そこに或るふさはしさがあるのだと私は思ひました。アインスタイン教授の人格のなかに私ははつきりとこのやうな調和を見出すことが出來るやうに思つたのです。

カフエーに遲くまで話し合つた人たちは相携へてまた山を登つてまゐります。そこに集まる大概の人は山腹の靜かな町々にその住居をもつてゐたからです。湖畔から弧形に連つてゐる並木の深い通り、私たちはその樹蔭を洩れる瓦斯燈の影をふみながらあちこちへ塊まつて歩いてゆくのでした。おほかたは夜深くなつてしんとしたなかに或る人たちの話聲が際立つてたかくきこえたりした。アインスタイン教授を圍んだ一團はいつも半ばよりも後の方にゐたと私は思ひました。路が岐れるたびにだん／＼とその塊りの數が減ります。さうして私たち數人は殆ど最後に、尙ほひとりで高い街の住居へ歸つてゆかれる教授を見おくりながら、横へ曲るのが常でした。暗い山腹の町から遙に灯の映つてゐる湖水を見ながらめい／＼の家へ歸るのにこの上ない滿足をもおぼえました。

瑞西にはいろ／＼の國の人々が雜多に集つてゐます。その意味で瑞西は自由の國であります。社會主義のなかまなども澤山ゐますし、その當時露西亞から亡命したものなど隨分來てゐました。それだけに私たちでさへ外國人といふ差別なしに待遇してくれるので、下宿にゐても教室へいつてもたいへん氣易い處がありました。アインスタインも獨逸生れの人ですが、學生時代からずつと瑞西にゐたやうですし、そこの大學を出てからも中頃墺國ボヘミヤのプラーグ大學の教授に二年ばかり行つてゐた外は、ずつと瑞西にゐてチューリッヒの大學や工業學校やベルンの特許局の技師などになつて過ごして來たのです。さうして自分の國籍も瑞西へ移してしまつてゐました。彼は前にも述べましたやうにユダヤ系の血筋をもつてゐるので、社會思想に於ても自由を憧れてゐるのでありませう。丁度私が瑞西を去つた

後でした。獨逸のベルリンに立てられたカイゼル・ウイルヘルム研究所に彼を招聘し、化學者として有名なもとのファン・ト・ホッフ教授の後任者としてベルリン大學の名譽教授にしやうと云ふ議が起つたとき、彼が瑞西へ國籍を移したことは徴兵遁れのためであつて甚だ不都合だといふ非難があつて、大分問題になつたといふやうな噂さを聞きました。私はその眞僞を知りませんが、ともかく彼の仕事とそれに對する名聲とは一たび之等の非難を壓して彼をベルリンに導いて獨逸學界の中心におくのに充分であつたのです。彼がベルリンに行つて翌年にあの世界戰爭が始まりました、さうして獨逸の大學教授が聯合して對外宣告文を發表したときに、彼はそのなかに署名しなかつた一人でした。それから獨逸帝國が崩壞して共和政に變つたときには之に熱心に賛成してゐたといふことです。戰後になつて偶々獨逸のなかにユダヤ族排斥の聲が烈しく高められて來たとき、彼もその衝になつてゐるといふ噂も聞きました。和蘭のライデン大學に講義に行つてゐたのですが、彼はそれを口實にして一時をそちらへ避けてゐるのだといふことさへ耳にしました。ともかくも彼はこれらの事情から察して自由主義を奉ずるものであることが判るでせう。すべてに囚はれない自由の主張者であつて、始めてあの時間や空間に對する革新的の思想を發展させることが出來たのは、必ずしも考へ難いことではないと思ひます。

彼は相對性原理の說明に附隨して斯んなことを云うたことがあります。「自分はいまこの原理の發見者として獨逸では獨逸生れの人間だと云はれ英國では瑞西の猶太人と云はれてゐるけれど、若し風向が變つて自分が嫌はれ者になつたならそれが丁度逆になつてしまふであらう」と。それが幾ばくもないのに彼ユダヤ人として獨逸で排斥されるやうになつたとしたら、彼がは自分の引例の余りに痛切なのに苦笑しなければならなかつたでせう。さうしてそんなときやはり彼が長く生活してゐた自由の國である瑞西を心なつかしく思つたことであらうとも想像せられます。

アインスタインが講義に行つてゐると云ひました和蘭のライ

デンには、もと有名なローレンツ教授がゐたのでしたが、もう八九年前に退隠して、その後任にはエーレンフェスト教授が理論物理學を擔當してゐます。この人は丁度私がチューリッヒに居つた折にやはりそこへ來られたことがありました。氏はもと哲學を修めた人で物理學の理論の根據に就ていつも鋭い批判を齎らすのでした。チューリッヒへは露西亞人で數學を修めたその妻君と一緒に來てゐて、例の談話會の席上で量子論などに對して盛んに論じ合ひました。談論風發と云つた趣のある人で、アインスタイン教授の醇々と說くのに相對して著しい對照をつくつてゐました。その時分もう一人相對性萬有引力論に就て一方の論者であつた芬蘭のノルドストレーム氏も來合せてゐまして中々賑やかでありました。この人は若い素朴なちよつと超俗的な仙人めいた人間でして、多少言葉の不自由さもあつたためでせうか、始終沈默がちでした。私に向つて萬有引力論者がみんなお互に引かれて集まつて來ましたねなどと笑つて話したこともありました。その後戰時中から續いてこの人も和蘭のライデンに行つて一般的相對論に關する論文をいろ〳〵書いてゐます

が、そんなことから私にはチューリッヒと結び付いてライデンの大學が頭によく浮んで來ます。さうしてそれらの人たちがいつか又處を換へて私たちとも出會ふことがあつたらなどと夢みないでもありません。

アインスタインの學說は恐らくは科學の歷史が始まつて以來、比類のない程、ほんとうに世を驚かすに足りるものでした。たとへ時運がだん〳〵にこれを生むやうに準備されてゆきつゝあつたとは云へ、彼が居なかつたならさう速かにこれ程な根本的な變革が持ち來されたかどうかは疑はしいと思ひます。おほくの學者が從來の大廈の破れを繕ろふために、又はそれを建て増すために、同じやうな煉瓦や材木をもつて來てもとの礎のうへに据ゑ還かうとして苦しむでゐた間に、ひとり彼のみがまるで異つた建築材料を考案して新らしい礎の上にそれを建設しなほさうと企てたのです。こんな大膽のことを彼以外にだれが思ひ切つてなし得たでありませう。運動によつて物體が短縮するといふやうな性質を假定して、それで人々が姑息に[illegible]り[illegible]

かしてゐたうちに、アインスタインはそれをみんなうち壞はしてしまつたのです、さうしてこれまで思ひも及ばなかつた時間や空間の新らしい概念をつくり上げて、それでいかにも自然に說明することが出來たのでした。その後の萬有引力論に至りては更に天來の妙想を私たちのまへに展げて見せてくれたと謂つてもよいでせう。みんな力といふものを實在的なものとして、どうかして實驗上の性質と一致する何ものかを探り出さうと苦しんでゐる間に、彼はひとりそれをとび離れて空間幾何學の微妙な關係のなかに一切の宇宙を認識しやうとしたのでした。私たちは只眼を見張つて暫らくはその落ち着く處を見定めるより外はありませんでした。私は彼に於て眞の超凡的な天才を畏敬せずにはゐられません。

私の眼にうつる限りでは彼はそれ程數學に達者であるとは思はれません。さうして恐らく自分でもそのことを不如意に感じてゐるだらうと想像されます。難かしい數學的の障礙にゆき當ると彼はきつと自分の親しい數學者の友達のところへ行つて相談すると云ふやうなことをしてゐたらしく思はれます。グロースマンと一緒になつて萬有引力論を創めることが出來たことなどはその著しい場合でありませう。けれど彼には數學の複雜な論理を透察するに足るだけの明が具はつてゐるのです。さうしてその論理の大綱を豫察してゆくことが出來るのです。これが自然法則の體系を見いだして理論物理學の基礎を大成してゆくのに必要なことであつたのです。彼の偉大さはこゝに在ると謂つてもよいでせう。

彼の容貌や態度のなかには、對手を衝き刺すやうな鋭敏さは少しも眼立つて感ぜられません。寧ろ彼に會つてゐると、どこかにゆつたりとした大きな、さうしてものを取り逃がさないやうな判きりした性格にうたれるやうに思はれます。これがみんな彼の仕事のうへにもあらはれてゐるのだと私は思ひました。

東洋の文學や思想のことを私はいろ／＼聞かれたこともありました。私たちのちがつた顏いろなどを見てさう云ふものにも彼は興味を感じたのであつたでせう。それに對するもつと突き入つた意見を聴く折があつたら、きつとためになるだらうとも

私は思つてゐます。

アインスタインはいま流行りもの丶やうに人々に傳へられてゐます。相對性原理に關する通俗書は世界の國々で踵をついで出版せられてゐます。なかにも本國の獨逸では一層甚しいので、昨年から今年にかけて出たのが私の數へ得たものだけでも、三十餘種にのぼつてゐます。そのなかにはずゐぶん過激な反駁論さへあるやうでして、ともかく讀書界を騷がせてゐることは大變なものです。さう云ふ人たちの間にアインスタインがめい〳〵どんな風に知られてゆくかは、やはり注視してみたなら、おもしろいことでありませう。

私はアインスタインのことを書かうとして餘りに焦點に觸れることが少なかつたと云ふ感じをもたずにはゐられません。私が實際さう云ふ隔たつた處に立つて彼を印象したに過ぎないからです。さうしてそれはもう八年も前の出來ごとであり、その時分にはこんなことを書かうと云ふ氣もしないで、彼の話なども聞き流してゐたことでした。私はそれらのために却つて彼以外の周圍や自分のことなど無駄な話をこ丶におほく述べすぎたかも知れません。それだけに餘りに朦朧とした印象であることをお詫びしないではゐられないのです。併しさうかと云つてこれ以上に強いて焦點をすぼめることは恐ろしいことです。誰か自分たちのレンズの歪んだ影像をつくらないことを保證し得るでせう。歪んだ空間、それはそれぞれの相對的觀測者にとりて、さながら見た儘の形なのです。各の觀測者は自分の見た歪みを他人に強いてはなりません。只その歪んだ世界のなかから、不變恒存の實在を捉み出さなければなりません。之が正しい批判者の仕事なのです。ひとりのアインスタインを獨逸人であると云ひ、瑞西の猶太人であると云つて、徒らに言ひ爭つてゐてはなりません。どんな見方をされやうとも、不變的な實在としてアインスタインはそこに居ます。私たちは有りの儘の個性的印象のなかから何を採りだしてい丶のでせうか。恐らくは永久に殘された意味深い問題が自然を對象とするが如くに人間を對象として成立つてゐます。さうして相對性と云ふことがやはりこ丶にもその儘移されてい丶のであらうと私は思ひます。



ウエルス會見記

倫敦にて
本社特派員　室伏高信

（一）

エッチ・ヂイ・ウエルスは、私が倫敦にきて、最初に會つた一人であつた。そしてまた私の倫敦生活のうちで、最後に會つた一人であつた。倫敦から伯林へ向けて旅立たうとする前の夜、ウエルスは、私との別れの紀念にとて、彼れの著『文明の救劑』の巻頭に次のような一句を書きつけてくれた『一九二一年七月十三日、室伏高信君とエッチ・ヂイ・ウエルスとは、一大會談を交へた』と。

ウエルスは、この國の多くの文章の人たち、ショウや、ハアデイや、チエスタアトンや、ベロックなぞと同じように、倫敦から何哩か、或は何十哩か隔つた郊外に居を設けてはゐるが、その生活の大半は、倫敦の市内で送つてゐるように見える。ウエストミンスタアに近くこの國の大臣街が並ぶ。英國のホワイトホールは、華盛頓のホワイトハウスのような幽かしさはないにしても、尚ほダウニング街の入口に立つ二人の近衛騎兵の金色燦爛としての粉装は、遺傳的貴族國としての英國の、こゝが蚪斗の街だといふことを語つてゐる。そのホワイトホールには、私の知つてゐる範圍では、少くとも二人の文章の人が住んでゐる。一人はアーノルド・ベンネットであり、他はエッチ・ヂイ・ウエルスである。ウエルスのホテルは、このホワイトホルの一角に聳えて、綠葉を隔ててテームス河に臨むでゐる。このホテルは、この界隈でも目につくほどに宏壯なもので、私の訪れた時は、丁度シツコモアの葉が、庭内に綠翠を漾はして、河邊の風凉しく室内に流れてゐた。一方議事堂の大時計臺が見

える。他方には倫敦橋が手にとるように水に映つてゐる。このホテルは三階で、ウエルスの三つの室を、彼れの書齋に宛て丶ゐる。椅子も卓子も、贅澤を盡してゐるのに比べると、彼れの書架は小さくもあり、質素でもあれ、地理學や、人類學や、歴史なぞの雜書が、數段に並むでゐるだけである。この室こそ彼れの多くのユトピアの書かれたところであり、また私が最初に彼れを訪ふたのは、彼れの新らしいユトピアとしての『文明の救濟』が書かれつ丶あつた時であつた。

ウエルスは、普通の英國人よりは餘程脊が高く、また脊の高い人によく見るように彼れもまた稍や背がかゞむで見える。黄茶色の口髭を奇麗に刈りこむで、瀟洒とした背廣服を着て、無造作に立ち、無造作に坐し、無造作に話すところ、流石に『カール・マルクスの髯剃り』を考へる人ほどあつて、風采擧措、清洒を極めてゐる。彼れは既に歳六十になつてはゐるが、その小さい二つの眼は、小供のような無邪氣さと、羊のような平和さと、そして蜃氣樓のような夢幻の色とを示してゐる。その夢幻の色から、『タイム・マシン』以來限りなき夢幻が生れ出たのであらう。

（二）

『偉人（グレートマン）、ウエルス』――といつたのはバーナード・ショウであるそうである。『偉人』といふ言葉が、この人に當嵌まるかどうかを私は知らない。否、私自身は、こうした言葉に常に反感をもつてゐるといふことを匿くすことはできないのである。が、少くとも英語國民の間では、ウエルスの名は『偉人』の名のように扱はれてゐるかに見える。彼れの『歴史の梗概は二十萬からの讀者をもつたそうである。一九一〇年に彼れの一書『新マキアベリー』が、一九一四年に『世界解放』が、また一九一七年に『神、見えざる王』が論壇に狂風を起したように、彼れの『歴史の梗概』は今に尚ほ論壇の最も華々しい題材となつてゐる。アメリカの一大學では、ウエルスの一論文を之がために、特にその學術雜誌の發行部數を數萬部増刷した旨を廣告した。彼れの著書は、英語國民の間では、市場を支配するの力をもつてゐるとのことである。この意味からいふと、彼れは慥に『偉人、ウエルス』であるかもしれない。

（三）

話が佳境に入ると、少し急込むで、イエース、〱、〱と三度づゝ繰返すのがこの『偉人、ウエルス』の癖であつた。だがそのイエース、〱、〱は、獨逸人の『ヤア〱』のような非音樂的な音調ではなくして、如何にも相手方の話に心から共鳴したといふように――また實際そうなのだらう――いふべからざる快感を與へる。そうかと思ふと、また時々はその羊のやうな眼を、ぢつと据えて、一、二分間も默つて考へこむこともある。そうした默想の續いた後には、また必つと落付いた口調で、彼れの文章に見るような美しい言葉で話し出すのが常である。『闇影のうちに、偉大なる時代の曙を想ふことができる』。彼れはよく時代の闇影を見る。鋭き批評家の眼をもつて。そしてまたその闇影のうちに、來るべき偉大なる時代の曙を見る。豐かなるユトピアンの才能をもつて。

彼れは昨年の秋、カメネフに招かれてソヴヰエツト・ロシアを旅行した。彼れの『闇影のロシア』は寧ろ『光明のロシア』である。限りなき荒廢のうちにあつて、新ロシアを再建しつゝあるボルシエヴヰキの努力こそ、彼れの全卷を貫いてゐる、光である。然り、彼れは荒廢のロシア、廢滅のペトログラードのうちに、尚ほ新世界の曙光を見出さないではゐなかつたのである。しかし『カール・マルクスの髭剃り』を考へてゐるウエルスは、彼れ自らの記るしてゐるとほり、マルクス派共産主義者でもなければ、またソヴヰエツト・ロシアの盲目的の讃仰者でもない。彼れはデニキン、コルチヤク、セミヨノフ等の一派を、『匪徒』だといつて罵倒してゐるとともに、またモスコウを新パレスタインと思ふて、こゝに巡禮の旅をなしつゝある多くの渇仰的マルキストのように、ソヴヰエツト・ロシアの一切を讃美すべく旅したのでもなかつた。

私とウエルスとは、二、三の雜談を交へてから、先づロシアについて話し合つた。私たちの會話を通じてのウエルスのロシア觀は、彼の著書において見たよりも、稍や悲觀的に見えた。

彼れはラツセルのロシア觀にまで及んだ。『ラツセルは私の親友の一人である。彼れはロシアをよく觀た。その美點と、そして弱點とを。』と、ウエルスはこういつた。そこへ『弱點』といふとこ

ろに力を入れた。『私が昨年ロシアを旅行した時には、ペトログラードには尙ほ電車が通つてゐた、が近頃ロシアの科學者の一團が倫敦へ、書物の仕入れにきたので話して見ると、それももうばつたりと止つた。ロシアの狀態は、惡化から惡化へと落ちてゆく。昨年の秋には、一磅が一萬五千に當つてゐたが、それも今日では一磅が二十萬留に當るやうになつた！』ウエルスは投げるやうにこういつた。彼れは瀕死の境にある親友の病態を語るやうに、ソヴヰエット・ロシアの病態を語つた。

しかしわがエッチ・ヂイ・ウエルスは、闇影のうちに偉大なる時代の曙光を見ることを、常に忘れはしなかつた。彼れはこの惡化から惡化への、ソヴヰエット・ロシアの現狀を前にして、尙ほそこに來るべき新文明の生れることを信じてゐた。彼れは前にも述べたとほり、決してマルクス派共產主義の信仰者でもなく、また如何なる階級の獨裁政治の主張者でもないが、彼れはよくロシアに、ボルシエヴヰズムの免れることのできないことを知つてゐた。『あの無智なロシア人、あの無敎育のロシアの農民に、所詮、獨裁政治のほかはない、ザーの獨裁政治か、貴族の獨裁政治か、レーニンの獨裁政治か、それよりほかにロシアを統治する方法はありえない』。彼れはこういふ立場からロシアのボルシエヴヰズムを觀てゐた。またこういふ立場からボルシエヴヰズムの同情者であつた。

從つてウエルスの立場は主義としてのボルシエヴヰズムの反對者といふことになる。何となればボルシエヴヰズムは、獨りロシアの特種狀態に對してだけではなしに、勞働階級獨裁政治の世界的妥當性を要求してゐるのに對し、ウエルスはロシアの特種條件のうへに、そのボルシエヴヰズムを是認してゐるに過ぎないからである。私はこういつて反問した。ウエルスはもとより私の解說の無條件の同意者であつた。『イエース、〱、〱』と、例のとほりに三度ほどイエースを繰返してから、彼れはロシアと西歐との比較について詳らかに語つた。『普通のロシア人は、歐羅巴とは、西歐のことをいふのだと信じてゐる』と。ウエルスはも一度ロシアを旅行した時のことを思出して、そして次のように結論した。『西歐諸國のように、敎育の發達したところでは、マルクス主義は不可能である』と。彼れはこう

いつて、獨裁政治といふ言葉の代りに、またはボルシエヴヰズムといふ言葉の代りに『マルクス主義』といふ言葉を用ゐた。

で私は話を　マルクス主義とボルシエヴヰズムとの關係に移した。そして私たちは自然にレニン對カウツキーの論爭にまで觸れた。ウエルスはこの點において全くレニンの側にゐた。『カウツキーは稍や改説した』と、彼れは無造作にこう結んだ。そこで私はもつと話を詳細の點に進めたかつたが、この時ウエルスの顏には幾らか當惑らしい色が見えた。私もウエルス――その『歴史の梗概』のような大著においてさへ、マルクスを說くこと甚だ簡單であるウエルスと、この點についての話を詳細の點まで進めることの賢明でないことを知つたから、私は直ぐと話題を轉じようとした。そして彼れの『闇影のロシア』のうちに、『カール・マルクスの鬚剃り』といふ一句のあるのを思出したから、私は戲談半分にこういふた『カール・マルクスの鬚は何時お剃りですか?』と。するとウエルスは、如何にも戲談、そして會心の戲談だといつたように、その大きな身體を揺らせるほど笑つて、『チョーク、〳〵!』と吹き出すように答へて、また笑つた。

(四)

彼れは明日を見ることに急がしい、と誰れかゞいつたとほり、ウエルスはホワイトホールの一隅から常に新らたなる明日を夢みつゝある。『パル・マール・ギヤゼツト』に筆をとり初めて以來既に約三十年、彼れは常に新らたなる明日を追ふてきた。その最も新らたなる『明日』として、最近には彼れの『世界國』が生れた。

世界國の理想は、必ずしもウエルスに始まつたのではなく、多くの昔からのコスモポリタンの思想のうちに、人々は既に世界國の理想を見出すことができたであらう。だが早くから科學の專門學校に學んだウエルスは、世界國のユトピアを書きながらも、ニはトーマス・モーアのように單なる夢でもなく、ウヰリアム・モリスのそれのような暗示でもなく、もつと實際的であるといふこと、『近づきつゝある『現實』であるところに、彼れのユトピアの特質を見るであらう。『近代ユトピア』を見ても、『ニユウ・ウワールド・フオア・オレルド』を見ても、彼れは常に明日

を考へてゐるとともに、また常に明日以後を夢みてゐるのではない。『開發は既になされた。種子は地中にある。開發された地上に、地中の種子に培つて、新らしき明日を見出そうとするのが、ウエルスの世界國であつた。彼れの世界國は、突如としてこの世界に生れてきたのでもなく、またはシエレイや、ゴドウヰンや、スウヰンバーンや、トーマス・ペーンなぞのような世界主義から直接に生れたのでもない。彼れが私に語つたところによると、そは大英帝國の、現實の事實の觀察から生れ、そして長い間、彼れの胸中に成長して來た思想の果實であつた。

　科學的空想家としての彼れ、『空中戰爭』の著者としての彼れは、科學の發達、從つて人間の物質力の増大とともに、戰爭の慘害がこれに從つて増大してゆくことについての、明瞭な想像を畫く。彼れに從へば、次の戰爭は、一九一四——一八年の世界戰爭よりも、その破壞力において遙に迅速でもあり、大規模でもあり、空中の爆彈によつて、小都市の代りに、陣營から數千哩も隔つた地方にまで、その恐るべき破壞力を及ぼすことができるであらう。從つて此増大された人間の破壞力に伴つて、人類の社會的または政治的思想を再整することなくしては、若しくは人間の喧嘩好きを統制することなくしては、人類の前には、墮落のほかに、何の望みもない。少くともわれ〱の科學的及産業的功業を喪失する野蠻時代の標準へと落されてしまうであらう。ウエルスは世界の將來について、こういふ想像を抱いてゐる。この恐るべき世界の將來を前にして、彼れは彼れの世界國のヴヰジョンを畫く。そして『われ〱はヴヰジョンを創造しなくてはならぬ』と、彼れはいふ。

　無論、われ〱の前に、既に國際聯盟があるにしても、限られた國家と、與へられざる權力と、從つて第二流の政治家の遊戯的討論會であるに過ぎない國際聯盟に對して、明日を見る凡ての人と同じく、ウエルスもまた何の望をも屬してはゐない。たゞに望を屬してゐないばかりではなしに、彼れに從へば、國際聯盟は、『無いより惡るい（ウワース、ザン、ナッシング）』、然り、ウワース、ザン、ナッシングである。何となればそは熱しつゝある世界主義的仰望に對して、たゞ幻滅の悲哀を與へるに過ぎないからであると。

（五）

多くの國旗の代りに一つの國旗、多くの最高權の代りに一つの主權、多くの國民の代りに一つの國民、それがウエルスの世界國の中心思想である。從つてそは第一に包括的な大國家である。亞細亞も、亞弗利加も、歐羅巴も、亞米利加も、乃至は濠洲も、地理的、人種的、宗教的、民族的の、一切の區別を超越し、在來の國境を撤廢して、渾然たる世界國の國旗のもとに、一國民として融合せしめようとすることである。ウエルスの言葉でいふと、そは全人類の世界國 World State of all Mankind である。しかしその世界國は、曾つてシーザーや、アレキサンダアや、ナポレオンや、タメルランや、ジンキスカンや、そして近くはカイザーが、または英國の帝國主義が夢みるような、世界的征服ではなくして、新らたなる世界的共和國 World Commonwealth の建設である。これが第二の特質である、それからして第三にこの世界國の特質は、それ自體主權の主體であるといふことである。卽ち國際聯盟なぞのような、主權を具有しない一つの同盟または聯合ではなくして、それ自身が、それ自身に主權を固有して、世界を統治する權力の主體であるといふことである。從つて第四に、この世界國のもとにおいては、この世界國のほかに獨立の國家といふものはなくなるのであつて、また從つてそは國際主義のうへに立つのではなく、純然たる世界主義のうへに立つのである。だからこの世界國においては國家間の外交がなくなつてくる。戰爭がなくなつてくる。陸海軍大臣の代りに『平和大臣』ができてくる。世界的交通通信大臣がある。世界的産業大臣、衛生大臣、教育管理大臣、勞働大臣があり、また世界共通の通貨はできる。そしてウエルスに從へば、教育大臣は、世界國では最も重要な地位を占める。『雄辯』は必要がなくなつてくる。政黨もなくしてしまいたいといふのがウエルスの理想である。

で、こういふ理想が實現されるはどうかと誰も心配するに相違ない。がウエルスは次のように答へる、世界國の思想は宣傳しなくてはならぬ。でなくては人類の前途は野蠻時代への墮落があるのみであると。またいふ、開發は既になされた、種子は地中にある。世界國は『近づきつゝある現實』であると。

(六)

世界國が、『近づきつゝある現實』であるか、または思想は宣

傳しなくてはならないかどうか、については、私は、ウエルスの書物に書かれてゐる以外に、彼れから求めようとはしなかつた。私たちの會話は、世界の輪廓が彼れによつて大體に畫かれた後に、世界國の性質にと入つていつた。そして私は先づ次のような問を試みて見た、『國家の規模が多きくなればなるほど權力の需要が增大することはないか？』と。私は無論この問によつて、權力禍の增大を暗示したのであつた。ウエルスはこれを否定した。否定も根據は、世界國が一つの事務國 Business State であつて、戰爭もなく外交もなく、その國家の主たる任務が、平和的であり、文化的であるから、といふの點に歸着した。で私はこゝでラミロ・デ・マエツの名を擧げた。そして世界國は職分の原理のうへに立つか、と私は更に問ふて見た。

ウエルスは『イエース、フアンクション！』といひながら、マエツのことを思出したやうに、そうしてまた一東洋人からマエツ――あまり著名でもない人の名が說かれたのに幾らか意外に感じたらしい態度を示して、急に彼れの話を東洋の方へと轉じた。私は支那または印度の青年と屢々會ふことがある。また日本人とも。東洋人が常に新しい問題に注意を拂つてゐることは驚くべきことである。『新文明は東洋からくるかも知れない』と、彼は實際にそう思つてゐるやうな眼で、私を見た。私はこゝでタゴールの話をした。タゴールが伯林で講演したところが、ウエルスの說と一致してゐると話した。そして私は附け加へていふた。支那と印度とは、立派な歷史と文化とをもつてゐるから、この二大國の將來に、私たちは多くの期待をもつことができるにしても、日本のやうな摸倣國で、彼れ自身の文化がないし、そのうへに政治が思想の自由を破壞しつゝあるところに、私は多くの文化的期待をもつことができないと。するとウエルスは私の言葉を遮つて『日本人は敏捷で、怜悧で、自發力は乏しいにしても、』と、日本人を賞めたのか、罵しつたのか、半々の程度で批評して、それから、支那人、印度人の特質に及んだ。『印度人はあまりに神祕的である』と、ウエルスは彼の結論を與へた。

私たちはこゝで東洋文明と神祕主義との關係について短い意見の交換をしてから、話題を元に戻して、再職分の原理と世界

國との關係について語り合つた。『マエツ、然り、マエツのことは私もよく知つてゐる。彼れの職分論は國家理論のうへに大なる寄與である』といひながら、ウエルスは彼れの世界國も、職分國である、と無造作に職分論をとり入れた。私は意外に思ふた。ウエルスはコレクチヴヰズムの主張者であり、そして職分論は、このコレクチヴヰズムに對する反抗として生れたものと解すべきであるからである。そこで私は職分論はフエービアン一派、または、エッチ・ヂイ・ウエルスに對する『反抗（レボルト）』ではないかと反問した。ウエルスは幾らか當惑したらしい様子を見せながら、『フエービアン社會主義はあまりに事務的である』といふて、彼れ自身のコレクチヴヰズムとフエービアニズムとの間に嚴然たる線を引いた。私は何年か前のエッチ・ヂイ・ウエルス及バーナード・ショウ對チエスタアトン及ベロックの古るい論戰を思ひ出さざるをえなかつた。そしてウエルスのコレクチヴヰズムが動搖し始めたなといふことを心に思はずにはゐられなかつたが、この點には私は話を進めなかつた。そして最後に私は英國の現狀について二、三ウエルスの說明を求めてから、堅い握手を交して室を出た

『英國の勞働運動は、指導者がない。時代は大指導者を求めてゐる。彼等は臆病である！』ウエルスは英國勞働運動の指導者を批評してこういふた。『彼等は臆病である！』といふ言葉、ほんとうにそう思つてゐるらしいウエルスの言葉が、一番深く、强く、私の印象に殘つてゐる。



米國人に與ふ

慶大教授　野口米次郎

米國人足下、君の偉大な浪漫主義はもともと氣位高い純な英國人の血から繼承したもので、いつも無邪氣で、また健康であるが、地理上の孤立（如何にも君の國は大きな孤立だ）で撫育されたが爲め、君は少くも過去に於ては、世界最大な『滿足の權化』と成つて仕舞つた。君は樂天主義を亂用し過ぎる場合があるが、それは物質的にもまた精神的にも驚くべき君の資源が自然に然らしめる所であらう。かゝる場合に君は他に對して、いつも保護者の態度を氣取りすぎる。勿論その態度も墮落の一種類には相違無いが、極めて愛すべく興味あるものであることはいふまでも無い。時として君は夢想者であるが、必ずしも君の夢は深いとはいへない。それと同時に、君は宣傳者であるが、君は自分の宣傳を信用し過ぎるの傾向がある。されども君は、何んな事情のもとでも、利己的淫逸の餌食と成らない點は我我を敬服せしめるに充分である。また君が任意に創造した生活は矛盾の生活そのものであるが、その生活の上を活歩する君の態度の莊重さを眺めると、我我は君に何程でも敬意を拂ふものである。實以て君の生活は矛盾である、驚くべき矛盾である。君の國人の代表者一名を詩人のなかゝら撰むとすると、すぐ我我の念頭に浮ぶのは例のウヰトマンだが、この男は偉大な矛盾の人格だ、夢想者と宣傳者の最も興味ある混合物だ。如何にも君の國にふさはしい詩人だ。この詩人の詩に、『僕は米大陸を解體せざらしめ、僕は太陽が嘗て照らせる最も壯麗な人種を作り、僕は僚友の愛で、僚友の終身の愛で、神聖な磁性ある陸土を作りたい』の言葉がある。如何にも夢想者の言葉である。又宣傳者らしい言葉である。エマソンもまたウヰトマンと同型の人であらう。エマソンは、ホームスが、『暮斯敦の州廳は太陽系の轂即ち中心だ』と云つてのけた放言を是認して居る。

この種の樂天主義乃至浪漫主義は、祭日氣分のトプシタビド

ムの派出な衣裳で顯はれても、または神學者の威嚴ある黑い外袍で顯はれても、單に君の自個崇拜の一表現と見ては間違つて居るであらう。僕は君の態度を抒情氣分としては受取らない。なぜなら、君の態度のなかには明白に一種の叙事詩的迷信の脈が滾々と流れて居る。實際、君の國位エピカルな國が何處にあるであらうか。僕が君の樂天主義を迷信としたならば、僕は確に誤つて居るであらう。君の樂天主義は、實現的事實の聖な光の刺戟を受けて、壯大な信仰の領域にまで達して居る。有らゆる信仰の人のやうに、君もまた衝動的である。僕は君は決して抒情的國民で無いと繰返す。抒情的國民はしばしば無責任でもあり、自分自身を誤解することを喜ぶ場合が少くない。君のやうな衝動的國民は、頼まれもしないのに他人の責任まで自分の双肩に擔上げて、外面的理由でもつべこべ語られると、もうそれで滿足して人の勘定まで拂つて良い氣分に成つて仕舞ふものだ。こうゆう行爲は、論理的には不賢明ではあるけれども、確に賞讃に價すべきものと僕は思つて居る。弱點があるとしてはその弱點は如何にも暗示的であると云はねばならない。我我日本人で、一旦抒情詩的情調が何物かに阻害せられて、無意味に躊躇したりまた時には野卑な行爲さへ敢へてする場合には、その理由を、我我日本人が起つて居る位置や情況の貧弱に發見するであらう。然し君は米國人として、君が持つて居る樂天主義の信仰（ある意味では迷信とさへいふことが出來るが）に對して、多大の感謝を拂つて然るべきであらう。それに依つて、君は力強く恐れず時には愚かな舉動さへ平氣で遣つてのけることが出來るといふものだ。實に、愚かな舉動が出來る位幸福なものは無い。君はそういう幸福な人間の最大なるものだといへる。君は世界中の一番結構な國民だと思つて居るであらう。その態度は心理的に考察すると、丁度人生の苦痛疑惑を全然知らない富豪の一粒種の態度に比較することが出來る。少くも今日まで、君は人生の痛ましい經驗を知らねばならないほど不幸で無つたといふことを考へると、實に我我日本人は君が羨しくてたまら無いのである。

　ある文學者は、滿足といふ言葉を無智文盲の一特質と了解して居る。僕はこの言葉を君に使つて居るが、それは決して僕の氣六つかしい僻性からで無く、君が支配し得て居る眞實に幸福な事情を明白ならしめたい希望からである。君は無智文盲で世界が渡れる。君は滿足といふ福々しい笑を顏にたゝへて世間が通れる。學問なんざ君には不必要だ。學問は貧乏人のすべきものだ。君は嘗て世界地圖を見たことがあるか。恐く世界地圖も君には不必要であらう。何ぜなら、君のほうから全世界を發見

に行かなくても、全世界が君の方へ運つて來るからである。今日の米國人は、昔の米國人のやうに狹量でない。ソロウといふ男は、『北極の有らゆる現象さへ彈丸黑子の一村落コンコルドに發見せられる』と偉大な自慢を語つて居る。五十年前の米國人は今日の米國人で無い。然し、君のやうに廣く世界を旅行してしかも旅行した場所の知識何物を得ずして歸家する人間は他にあるまい。我米國人は、他國を旅行するにも自分の圖書室や食堂や應接間を擔ぎ込んで、そして歸へる時にはまたぞろ其等を擔ぎかへる。一寸皮肉にいふと、君に對する旅行の愉快は、取りもなほさず他の國に米國を發見せんとする一點に歸するのだ。如何に米國文明が他國に入りこみつゝあるかを見んために君は外國旅行するのだといふことが出來やう。君は日本人のやうに知識を泥棒するため外國へは行かない。また君の頭腦は堂々と環境を支配するほど固定して居る。一言でいふと、君の頭腦は我我日本人の云ふとは異つて、デリケートで無い受動的で無い。從つて君は他國の現實に對しても冷やかな見知らぬ人であり得ることが出來る。いつも自分を忘れずに富豪の一粒種に屬する氣位を維持する爲め人一倍の身錢を切らねばならぬことは自然のことであるが、その爲め君は旅行地のどこへ行つても北國人の倫理を圓だして歩く。日本の如きも以前は、物質的希望が冷やかな不自然の禁慾主義で工合よく制止されて來たものだが、米國流のチップなどが何程日本人の道德を腐敗せしめたか知れない。布哇を墮落させたものは、米國の宣教師と米國人のチップだといふことだ。また倫敦の倫理を墮落せしめたものは米國式の新聞とチップに外ならない。そして我我の日本も、このチップと活動寫眞の爲めにその倫理觀念を毎日墮落しつゝあるのだ。

米國人足下、僕は今この飾氣のない正直な米國觀を公にするに當つて、君の寛恕を切に乞ふ。『寛恕』といふ言葉は君の嫌い特質の一だと僕は信じて居る。僕はしばしば君が、無言で品位あるヒユモアをたゝへて寛恕の祝福を淬筆に散布した實例を見て居るものである『ヒユモア』といふ言葉もまた君の國人の尊い特質の一だ。君を動物に譬へたならば、さし詰め諧謔と機智で輝く小な眼を持つて居る巨體の象だ。象のやうに悠々と君は人生の大道を歩いて居る。然るに聞く所に依ると、君は近來、歴史的に尊重して來た例の言論の自由を一方ならず破壞して居るといふことだ。これは實に遺憾の極である。ある人に聞くと、米國に自由の言論無しといふことだ。僕はそれほどまでとは信じない。然しそれも君が、反省的態度を捨てゝ衝動的情調に捕はれた結果であるかも知れない。今日の君は如何なる場合に於

ても衝動的である。

もう一度僕は君が世界地圖に對して無智であるといふ問題に歸りたい。僕は最初日淸戰爭前に渡米したが、その頃日本と支那との區別を君は殆ど知らなかつた。また日露戰爭當時に於てすら、君は世界地圖から小い日本を指摘することが出來なかつた。今日でも僕は君の日本に對する知識が何程進んで居るかを疑ふ。日米關係も、華盛頓と東京に於ける兩國政府の交際に止まつて、まだまだ日米兩國民の眞實た交際とまで進んで居らないことを遺憾に思ふ。君のあやしげな世界地圖上の知識で、全世界の外交を君が論じやうとするのだから、君位危險でもありまた滑稽な男はあるまい。

僕は宇宙の黃金色した中心を握つて產れたと思つて居る莫斯敎人の信仰は正當だと思ふのである。君は足を踏出して他國を發見する必要が無く、有らゆる世界は、丁度砂糖を追ふ蟻のやうに、君の周圍に集つて來るといふことは動かぬ事實だ。歐洲からも、亞細亞からも、血氣盛んな年の若い野心家は我も我もと君の富んだ領土へ入りこむ。君が人種平等を否定するといつて、怒るものがあるがそれは怒る方が無理だ。君が破れた着物を着て居る移民に對して、傲者の態度を取るからとて、誰が君を攻撃出來やうぞ。成程君、が無邪氣の樂天家となりすまして居るのは缺點には相違ないが、それも他人がかれこれ云ふ問題ではない。僕は、君が如何に輕るがると、しかも立派な態度で君の樂天主義を搾いて行くかを見ると賞讃せざるを得ないものである。若し日本が君のやうに樂天家となつたならば、それこそ國の最後と云はねばなるまい。

恐く君は、若し僕が君の文明なるものは畢竟田舍文明に外ならない、君の文化は田舍趣味で色彩されて居ると云つたならばむきになつて怒るであらう、また怒らぬまでも君は不愉快に感ずるであらう。然し僕が田舍文明で意味する所のものは、決して君が思ふ程輕蔑すべきもので無い。所謂プロビンシアリズムの眞精神の力で、國は墮落から逃れることが出來て、また人間の箇性も產れながらの眞色彩を失はずにすむのである。プロビンシアリズムは尊いものだ。田舍文明を發揮する所に、國の箇性が燦然と光輝を放つのである。今日の日本が在來の田舍文明を失つて居る實際を見て、何んなに僕は遺憾に思ふか知れない。なまじ世界文明を齧つたばかりで、日本は尊い過去の田舍文明を棒に振つて仕舞つた。實際東京なども、紐育でいへばブルクリン位、倫敦でいへばブリキストン位の資格を得たいばかりに、大江戸の過去を葬つて仕舞つた。僕は米國が田舍文明を維持して居るといふことは中々結構なことで、それが卽ち米國の偉

大な生命だとも思ふ。

エマソンは千八百三十七年、今より八十三年も以前だ、ハーバード大學で『亞米利加の學者』と題した一講演をした。今日の批評家は、この講演は米國學界獨立の鐘聲だと云つて居る位著名な講演でなるが、僕からいはせると、この講演もプロビンシアリズムの一主張と見て初めて價値があると思ふ。エマソン自身にしても、世界的哲理を説いた積りではあつたらうけれども、彼に强烈な田舍趣味があつたればこそ、我我は彼を米國の文學者として尊頂するのだ。また歐羅巴に於けるウヰトマンの名聲も、プロビンシアリズムで肯定された理想的宇宙觀の上に懸つて居る。ブレツト・ハート或はヘンリー・ジエムスが英國で生活して死んだといふ事實は、米國が母國に拂つた敬意の一種と見ることが出來やう。マーク・トウエンは田舍文士の優なるものであつたと云へる。プロビンシアリズムを全然取除いたならば、トウエンに何物が果して殘るであらうといひたい。つい近頃死んだハウエルスにしても、彼の眞實の價値は、彼特有の一地方的文學の上にあると考へられる。桑港を太平洋岸の巴里たらしめたいと加州人は主張すると聞いては居るが、何故に桑港は巴里とならなければならぬか。そんな理は由何處にも無いぢやないか。桑港は桑港で結構だ。また市俄古を英國のマンチエスターと一所に見やうとする論者は天下の愚物だ。近頃流行の自由詩にしても、歐洲の新文學を田舍式の熱心で肯定するだけならば、何等の害は無いであらうけれども。若しそれ以上に走つた時は、それこそ米國人といふ本然の權利に對して冒瀆罪を行ふものと云はねばなるまい。米國文學の將來は注目するに價する。まだまだ眞實なる意味でのデレタンチズムが行はれて居るから進歩の路は開かれて居る。所謂商賣人文士で支配された文學界位悲しむべきものは有るまい。作家の眞生命は、素人文士をやめて悲しむべき黑人作家となつた時に亡びて仕舞ふのを例とする。文學の問題ばかりで無く、君米國人の生活の上で何處を見ても偉大な印象を人に與へる所以は、君が素人であるといふ一言に懸つて居る。君は人間としても素人人間だと云へる何をやらしても君は素人で始終する。金を貰ひうけるにも素人の力で遣つてのけるし、また金を素人らしく費やして仕舞ふ。君は學者としても素人ならば、書生としても素人書生だ。だが、この素人といふ位尊いものは無いのだ。外交社會で素人外交家ほど恐しいものは無いさうだ。君が即ち素人外交家だ。近く華盛頓で開催せられる會合で、君の素人外交家たる本領は充分發揮せられることであらう。日本といはず世界各國が、君の素人外交に接するとたぢたぢの有様だ。君はデレタンチズムの力で、

世界の古い外交をある點まで救助した。所謂神聖なる濟度を實行したといへる。君は實に偉大だ。僕は君のデレタンチズムに對して大きな敬意を拂ふに何等の躊躇を持たない。僕は君に向つて脫帽するものである。

米國の普通教育は最も安い入札者の手で支配されて居るとある人が語つて居る。安い入札者といふのは女のことを指して居る。成程君の國の女は雜誌やチュウインング・ガムの爲めに頭腦を害されて居る。そして高い給金を要求する男子を教育界から追出したといふ觀がある。然し女で支配されて居る米國の普通教育界でも、日本の夫れに比較したならば十倍も優れて居るといへる。日本の教育界とは何ぞやといふ一問題を與へるとする。人は答へて半死半生の人間の避難場だと云ふであらう。身體が強くて精神の強い青年は日本では教育界に職を求めないことに成つて居る。今日本の教育界を見渡すと、ぐぢやぐぢや盗りして居る澤山の教師は、云はゞ外國語の蓄音器たるに過ぎない。それでも外國語が滿足に發音出來るなら結構だ。人間として他人の思想で生きて居るもの位憐れむべきものはあるまい。日本の教育者が即ちそれだ。西洋文明に支配されて仕舞つて居る頭腦に、何うして自分の意見を立てる餘裕があらう。ころゆう僕自身も、それ等の憐れむべき人間の一見本に過ぎない。

安い給金の女が支配する米國の教育組織に澤山の欠點がある。文明を婦人化して、女崇拜の宗教を若い人間の頭に注ぎこむといふことは、確に欠點の大なるものであらう。米國の文明が婦人化して居るからして最高文明であるといふ說に、僕は必すしも反對するもので無い。また米國婦人の力ある精神が、無反省で無修養で、たゞ金錢慾にかられる男子の手で墮落の路を急がんとする國の俗惡をある程度まで防禦して居るといふ事實に對しても、僕は決して盲目で無い。

世界何處へ行つて見ても、女崇拜のあるものが實行されて居らぬ所は有るまい。英國人は宛も自由を崇拜するやうな態度で女を崇拜する。ある批評家はその態度が縱恣自在な所から人間の顏式だといつて居る。獨逸人は冷やかな打算で女を崇拜して勝手道具視して居る。獨逸人に對する女は決して贅澤品で無く必用品となつて居る。佛蘭西人と日本人はどうかといふに、抒情氣分で女を取扱ふ結果として、慘忍らしく見せかけることが女に對する禮義だとさへ考へて居るらしく思はれる場合が多い。然し何れの國民でも、君の國民のやうに宗教的信仰で女を崇拜するものは無い。どうして米國に、女崇拜教が最初行はれるに至つて、それが實際的行爲として尊重せられて來たかといふことは確に研究に價すると思ふ。だが今日では、女崇拜も宗

教としてはその最初の意味を失つて居る。人間が酒を飲み或は煙草を喫するやうに、等しく一習慣の程度まで頽落して仕舞つて居る。勿論、それが最初の宗教的權威を失つたとしても、一習慣としての女崇拜は時には愉快な習慣たるを失はない。然し如何なる習慣でも、餘り永續すると遂には無意味無感覺になり終るやうに、米國の女崇拜も坊主の念佛と大差無くなつた。恐く君は米國人として、女崇拜の缺點も罪惡も見ることが出來まい。それは極めて自然である。實際、黄白何れたるを問はず米國の新聞皆な擧げて女崇拜を裏書して居るのだから、米國人として君が無批判でそれを贊同して居るのに何等の不思議はない。

新聞の表面から見ると、米國の新聞中でも紐育の新聞はきは立つて女崇拜者である。市俄古の新聞もその點では紐育のそれに劣つては居るまい。太平洋岸の桑港の新聞も女崇拜教の爲め線香を焚いて居る。もとより太西洋岸地方に於ける女崇拜の熱が太平洋岸地方に比して一層高いといふことに就いては、其處に有力な心理的理由が存在して居る。僕は君に對して、女を赤裸な現實で調査せよの、また女崇拜教は過去の遺物としてのみ價値があるから寶物殿へでも入れて仕舞へと助言するものでも無い。また人生の苦痛を知らない、無邪氣で單純な、君特有の理想論もあつて女崇拜教を捨てるに忍びなからう。それから、第一、女崇拜を除く事となると、君の婦人的文明の眞精神が奪はれることになつて、黄金の偶像を盜まれた空虚の一殿堂に過ぎないことに成るであらう。然し僕は君が歐洲大戰爭に參加した時、如何なる精神的變化を君が演ずるであらうかと興味の眼で僕は君を眺めざるを得なかつた。君の文明は男性化するかも知れないとも思つた。また、さうなると君の爲め祝賀すべきことゝも思つた。戰爭の苦痛が君の力を適當に整理したならば、君は必ずや嚴肅になり思想深くなり眞面目になるであらうとも思つた。君の樂天主義は莊重に成るであらう。若しさう成つたならば、君の一進歩だとも思つた。兎に角、君は樂天主義の假裝を捨てゝ、種々複雜な倫理問題の荊棘を開拓して賢明な一路を辿らねばならぬ時代に、君は入りつゝあるものと思つた。君は樂天主義をして眞實自覺せしめ、米國對世界の實際的比較を研究すべき時代に入つたものと思つた。大戰爭が終つた今日から後を振返つて見たら、何んな結果になつたか。僕自身としては君に對する期待は全然裏切られて仕舞つて居る。君は戰爭から何物も學ばなかつたのである。君の頭腦は他から何物も學ぶことが出來ないやうに作られて居る。また、君は何も學ぶ必要が無いほど天下無比に幸福な地位に起つて居るのである。

米國人足下、君の國民として初期時代は隨分苦しいものであつた。爭鬪的な大自然と戰ひその上にインデアンといふ敵があつた。そういふ場合に樂天家の體面を維持するといふことは、確に勇氣ある行爲であつたであらう。また、樂天主義に籠城することは、精神的墮落から自分を援助する一番賢明な方法であつたであらう。然し、僕が君の眞實なる危險は君の樂天主義其物以外に無い、實際君の富有な資源で無意味に撫育せられ獎勵された樂天主義位危險なものは無いといふ理由は、樂天主義が多くの場合皮相的である爲め人間道德の眞發展を阻害して仕舞ふといふ點にあるのである。實に君の樂天主義は過去に於ても、しばしば人生に對する君の觀念や力を薄弱ならしめたものである。樂天主義は人生の避くべからざる現實境に起つて初めて、その眞價を發揮し得るものと僕は信じて居る。歐洲大戰爭は君の樂天主義を力强め、整理する一大機會であつた。然るに君はこの機會を善用することが出來なかつた。依然として、君は今日でも樂天主義といふ微溫湯につかかつて不徹底な夢を弄して居るやうに見受けられる。

米國人足下、僕は繰返して云ふ、君の米國文明は婦人的であると。然しそれは君の文明が薄弱なるまたは美術的（エピキユリアン）であるといふ意味ぢやない。日本の如きは世界の果で、英語でいへば this side of nowhere に地位して、世界の文化進步と直接交涉を持つて居ない。然し君の國も圖體こそ大いけれども、太洋中に浮いて居る悠々たる氷山の國だ。他の世界との文明的交涉もつい近頃の出來事だ。僕は已に、君の浪漫主義は君の婦人的文明によく調和したものであるといふことは說いて居る。君にして君の衝動的情熱の本性が破壞せられざる限り、君が非現實的であり、また非科學的であるのは極めて自然の數と云はねばならぬと僕は思つて居る。然し僕が君を非科學的だと呼ぶと、僕の言葉を批評し或は否定するもので無いとも限らない。そういふ批評家は重もに、男子の力で創造せられた君の肉體的表象のみを見て君を批判せんとするのである。だが僕の意見としては、君の物質的進步は何等の理解無く、君の精神的婦人文明と同一の屋根の下で共同生活を營んで居ると思ふ。前にいつた如く、君の文明は弱いけれども最高のものだが、不運の眞試驗でためされない間はその眞價は未定である。物質的と精神的兩方面が共同生活して居る結果、君は矛盾混合の一現象と顯はれて居る。僕は如何なる國でも、君の國のやうに、異つた二箇のものを力强い呼吸で組付けて斯くも驚くべく又不可思議に見へ得ることが出來まいと思ふ。實に君は驚くべき國である、また神祕不可思議の國でもある。殊に驚嘆すべき點は、君の矛盾が十中の八

丸まで、如何にも自然で心地良げに見える所だ。然し今僕が、君の精神的文明と物質的進歩との間に理解が無いといふことは、結局君の國の男子と女子との間に充分な理解が無いといふことにも成る。男女相互の理解といふ點から觀察すると、僕の見る所に依ると、英國の方が君の國より遙に幸運であると云はねばなるまい。米國には離婚數が世界第一で、又未婚者の數も他國以上であるといふ事實は、少くも僕の意見をある程度まで裏書して居るといふことが出來やう。君の國の男女はその眼を異つた方面に向けて居ると云つても、僕はそう間違つて居ないであらう。然し彼等が遂に同歸着點に會合するとしたならば、それは彼等が早晩神經衰弱に等しく罹るといふことを意味するのである。確に神經衰弱は文明病である。そして君の國民位この病氣に罹り易いものは無い。

君の國の女が神經衰弱に罹るのは、その衝動的生活が完全に滿されないからである。而して君の國の男がこの病氣を得るのは、二六時中休憩なき勞働の結果と見ねばなるまい。實に米國の男子の勞働は不合理不自然である。そしてこの勞働病に捕へられたが最後、宛も章魚にすひ付かれた如く人はその自由を失つて仕舞ふ。米國に於ける男子の勞働熱は如何にも決定的であり恐るべきものである。彼等は一生この勞働を廢止することが出來ない。若し突然勞働を廢したならば、丁度阿片吸飲者が阿片をやめたやうなもので、一生ぶらぶらと何事をするにも不適當に終らねばなるまいと思ふ。米國男子の勞働の習慣は國の大問題の一だ。君の國の婦人の懶惰生活と等しく國家の健康狀態を害する社會の大問題に相違ない。米國では男女共に、人生の眞實なる意味を理解して居らぬと云はねばならぬ。今日この問題を議論するには時には遲れては居るけれども、それに觸れないよりは、何んとかその救濟の路を講じた方が良からうぢやあるまいか。

十五六年前には歐洲の貧乏華族が米國の女を誘惑にせつせつと遣つて來たものだ。或は今日でもこの種の演劇が、米國各地の交際社會で演ぜられて居るであらう。年の若い女はさること乍ら、女の母親が第一に、華奢な指先と綺麗な髭のみの所有者である歐羅巴の貴族の嘆美者となつて仕舞ふのだから仕方が無い。またこれ等感傷的の母親以前に、米國の新聞が已に非常な嘆美者であるのだ。僕思ふに、君の國の女は君の國の男に對しては、遙に修養があり又文明的である。君の女なくして、誰が米國の美術を保護するか。君の女なくして、誰が米國の文學を進めるか。君の女なくして、誰が米國の舞臺を維持するか。米國の文化は女の支配權に屬して居るといつても決して過言では

あるまい。

米國の男子は女子に劣つて居る。修養が不足して居る。また談話家でない。米國の男子は宣敎師が當分流行の宣傳者（プロパガンデイスト）たることが出來やうけれども、理智的な談話家たるには眞實の修養を持つて居らない。この點でも米國の女子の愛を仕配するに不充分であると云はねばならぬ。結局、これも環境と敎育の罪とも云へる。

米國人足下、君の國の男子以上に談話家としての資格が無いものは日本人だ。四十になるまで無言の行を命ぜられて居る日本の女は不自然だが、男子が談話の愉快を了解して來たのはつい近頃のことである。若し日本の男子が歐羅巴の貴族の青年の如く、輕快な談話家であつて應接室に於ける米國の女の相手が出來たならば、日米親善の好結果はずつとの昔に擧げられて居たかも知れない。米國に於ける日本人は、應接室の隅を滿たす無言の金佛の役目を果すに止まつて居る。英語が日本位流行して、しかもその結果の不滿足な國は外にはあるまい。實際、日本人は外國語の上では下手も下手この上もない下手である。言葉さへ滿足に語り得無い日本人の沈默を黃金だと珍重した時代が米國にあつた。然しそれは過去のことだ。今日では日本人の沈默は奸策である虛僞であると非難されて居る。心に思つても口に語り得ない身の不幸まで、これは假面をかぶつた役者の仕事だと難癖付けて居る。親愛なる米國人足下、僕は君に愛せられた時代もあつた。然しそれは過去のことだ。十五六年以前のことだ。

日本人位、君に接し乍ら、それでも君を十分理解しない國民は少いかも知れぬ。口を開けば日本人は、君の國を『自由の國』と稱讃する。昔は兎も角、君の國に果して自由ありや否や問題である。『自由の國』といふよりは、君の國は衝動的情調の國である。この情調を多くの場合、感傷的に取扱つて居るのを僕は遺憾とするものであるが、不思議に君が未來の理想がいつも君を感傷の墮落から救出して居る。君の衝動的情調の驚くべきもので、君は時代の變化希望もその情調から了解して居る。僕は今君の國に眞實なる意味で、自由の國といふことを許さなかつた。實際米國に於ける自由といふ二字は、不純な利功主義乃至危險な妥協と間違られて居る場合が澤山ある。

米國人足下、君の情調主義は君をして簡單明瞭に、時代の眞理を透察せしめて、適當な所置を君に採らしめて居る。君はそれに對して感謝せねばならぬ。僕は君の情調を嘆美するものである。僕は君を理智の國民とは決して受取らない。君は何處までも情調の發動で進退する。君の情調が動いて君は歐羅巴の大

戰爭に參加した。昔のことをいへば、日露戰爭當時、宛も自分自ら露西亞と戰爭でもして居るかのやうに、日本を應援して日本軍の勝利毎に狂氣せんばかりの有樣であつたことも、君の潑溂たる情調の衝動に期せねばならない。又それ以前に、ペルリが軍艦を引率して日本の戶を敲いたのも、物質的打算からであつたといふよりは寧ろ詩的情調にかられたものと僕は了解したいのだ。實際は、ペルリは日本を奪つて仕舞ふ覺悟で來たものかも知れないが、日本を奪はうとしなかつた所を見ると、僕は君の倫理觀念に多大の敬意を拂ふものである。まだまだ僕は君の道德に信賴することが出來ると斷言するものである。日本は澤山の感謝を君の國に拂はねばならぬ義務を持つて居る。

我我日本人は今日でも、タウンセント・ハリスやヘボンや乃至はクリフヰス諸君の德を稱讚して居る。これ等の米國人は廣い双肩に米國主義を擔つて來て、民主的人道主義を開けなかつた日本人の頭腦に注入したものだ。今日我我の文化の進步は彼等に負ふ所が多いといふことは云ふまでも無い。日本に對する米國はインスパイラーで、その仕事は空前絕後のものと評することさへ出來る。我我は英國のミルやスペンサーやバツクル等に負ふ所もとより多いのではあるが、米國人に負ふ所はこれ以上であるといふことが出來やう。僕一個としても、中學時代に習つた米國の讀本から、何程米國の自由とか理想とかを學んだか知れない。僕はパーレー萬國史を讀んだものだが、この書物の作家はたれあらうホーソーン其人であつた。僕はどの位この歷史を愛讀したであらうか、今日でもその當時の心持が隨時に追憶することが出來る。ロングフエローの一小詩、人生の歌、『藝術は長く、時はすぎ行く』といふ言葉を持つた一章は、恐らく僕が讀んだ英語の詩の最初のものゝ一であつたであらう。

米國人足下、君は柔和な母親の心で我我を撫育して吳れた。母親の心には感傷主義と理想とが自由に織込まれて居るのを最上とするが、君の日本に對する母親的態度もそういふものであつた。我我が國民としての靑年時代に入つて、我我の個性が發達するに從つて時々母親なる君の心を喜ばせなくなつたことは事實である。我我自身も時に執拗であり又時には善良で無かつたであらう。又物質上にも精神上にも、米國の態度は門派(セクタリアン)的でもあり又傍若無人的でもあつたと批評することが出來ると僕は思ふ。今に限らず我我はいつでも、自己辯護の言葉を弄するもので無い。況んや米國に對してその行爲を非難するものでないことはいふまでも無い。たゞ我我の希望する所は、日本の米國に對する態度に昔も今も不變である。米國が我我に與へた過去の甘やかな記憶を追想しては喜んで居る。この愉快な記憶を持

つた日本人の心が何うして米國を敵とすることが出來やうぞ。こういつたからとて、僕は君に阿るもので無いが、僕は普通の日本人一倍に日米親善を希望するかも知れない。世間が知る如く。僕は年の若い時代から、君の國で生活を營み、文學者としての出發は君の奬勵によつたものである。僕は多年の經驗から君の長短共に理解して居ると信ずる。この書簡で隨分正直に赤裸に語つたから、君の機嫌を損じたかも知れない。然しそれは僕が偽らざる意見を何物よりも以上に尊重するからである。日米關係上、今日の如く澤山の誤報が白晝横行しては、將來の成行必ずしも幸福ではあるまい。率直な意見の交換が最も必要である。

　感傷的で理想的な母親の心は終生忙はしいものだ。そういふ母親の心を持つた米國は、年を取つて行く結果として漸次日本が離れて行きつゝあるから、愛撫の目的物を支那に發見したやうに思はれる。それは結構な事であるに相違無い。我我日本人も支那に於ける米國の仕事に賛成したい、また出來るならこの正義の仕事の上に力を盡したい。

　米國人足下、僕は日本が生長した國であるといふ假定のもとに、君に左の詩一篇を贈る。

『星が星と歌ふを聞け、
眞實の心が眞實の心と語るゝ聞け。
勇敢な男子二人會する場合には、
南も無ければ北も無い。
東をして西を祝福せしめよ。
眞實な男子二人歡ふ場合には、
愛の誓言あるのみだ。

我等は死の人間で無く、生の人間だ。
我等は日光と戰鬪を取扱ひ、
暗黒と涙を知らない。
我等の心は朝日の歌ゝうとふ。
我等の足は光明の路を歩む。
力強い男子二人會する場合には、
眞實に對する戰鬪の一世界あるのみだ。
歡呼の聲を擧げやう。

我等は太洋中の太洋を双腕で握り、
我等二人で東西の兩世界を守護す。
我等は同じ星の同じ歌を聞き、
同じ空へ同じ祈禱をさゝげ、
同じ運命の海を共に帆走る。
眞實な男子二人此處に會す‥‥
東をして西を祝福せしめよ！』

Before that stage can be reached, terrible havoc must be wrought by nationalism, unless man can be aroused to a realization that it is a madness. It is to be expected that America will treat Japan and the British Empire as the Allies treated Germany; that there will then be a great contest between Russia and America for the exploitation of China; and that Western Europe will have to descend to the very depths of misery before it is led, through the peril of pressure from Russia in the east and America in the west, to forget the ridiculous enmities left by the war. How much will remain of civilization when that day comes is very doubtful. All these disasters could be averted if there existed among statesmen any common sense or common humanity, or among peoples any understanding of the fact that in the modern world one can only injure one's enemies by injuring oneself. But the world is in a mood in which hatred outweighs self-interest, and it is to be feared that men will only grow weary of hatred after the whole cycle of ruin has worked itself out. Patriotism and the class-war are the two great dangers to the world in the present age. Material progress has increased men's power of injuring one another, and there has been no correlative moral progress. Until men realize that warfare, which was once a pleasant pastime, has now become race suicide; until they realize that the indulgence of hatred makes social life impossible with modern powers of destruction, there can be no hope for the world. It is moral progress that is needed; men must learn toleration and the avoidance of violence, or civilization must perish in universal degradation and misery.

exploited resources. This Power will be able to impose its will upon the world, and to live in communistic luxury on the labour of vast populations of slaves. But until that day comes, there seems no reason to expect that national communism will bring peace to the world, unless the world becomes organized into huge blocks, each strong for defence but unable to attack one of the other blocks successfully.

Communism is, of course, in theory international, but its internationalism seems to be merely a transitory effect of its worldwide struggle with capitalism. A communist government, as is beginning to appear in Russia, may acquire just as much nationalism as was shown by its capitalistic predecessor. It would be possible, perhaps, for communism to generate a United States of Europe, which would be undoubtedly a great achievement. It would also be possible, and probably easier, for Russian communism to produce a union of all Asia with the exception of Japan. But it is difficult to imagine communism producing a union of a European block with Eastern Asia, or of an Asiatic block with Western Europe; and it is still more difficult to imagine a union of either with the United States. It is clear that the tendency to increase in the size of empires must continue, if only for the sake of defence in war. It is clear also that, with the decay of commerce and the development of the submarine, maritime empires are becoming impossible. These considerations suggest the possibility of an organization of the world on some such lines as these: The United States dominating all North & South America; Russia dominating the whole of Asia; a block of all Europe except Russia dominating the Mediterranean and Africa by closing the Straits of Gibraltar. In such a world, defensive war might be easy and offensive war obviously impossible. The habit of war might then gradually die out, and the relations between different States might become so slight and trivial as to give no grounds for hostility.

and a strong army. The tendency of each of these empires will be to aim at minimizing foreign trade, and to confine it to goods which are not indispensable either in peace or war. From sheer self-preservation, every great nation will be compelled to put a stop to the wasteful use of its resources by capitalists who care only for private profit. The nationalization of raw materials is inevitable as soon as people come to realize how easily they may be exhausted. Thus in one form or another, national communism is nearly certain to come in all great States, unless, before that stage is reached, external wars and internal labour conflicts cause the whole industrial machine to break down. This result is by no means improbable in the present temper of the world; but if it is not brought about, State ownership of raw materials will be an inevitable measure of self-protection on the part of all civilized populations of great States.

Assuming national communism pretty generally realized among great industrial nations, will it have any effect in diminishing the virulence and destructiveness of nationalism? It will, of course, diminish wars for markets, and destroy one of the motives for imperialism. The British have valued India chiefly as a market; if India belonged to any other Power, British goods would be excluded by a tariff. This motive for desiring empire would cease. But another, at least as powerful, would take its place, namely the desire to own the places which contain valuable raw material. If Great Britain were communist, there would exist the same motive as at present for fighting Russia in Persia and the Caucasus, namely oil. It would, in fact, be far easier than it is at present to rouse popular enthusiasm for such a war, since it would then be obviously in the national interest, whereas now it appears to be only in the interests of a gang of capitalists. With the increasing shortage of raw materials, the fight for them will grow keener, and victory will lie with the Power which has the last un-

Industrialism in its hey-day is being extraordinarily wasteful of the natural resources of the world, taking no thought whatever for future generations. It is probable that, within the lifetime of those who are now young, scarcity of raw materials will radically transform industry, and compel nations to adopt less frantic and excessive methods of production. Some authorities assert that oil, coal, iron and many other hitherto necessary materials of industrialism, will have grown very scarce fifty years hence ; in any case, it is nearly certain that they will have grown sufficiently scarce for those nations which possess them to be anxious to avoid waste. This will be a powerful check to the commercial outlook, which aims at developing all resources feverishly and dumping them upon a reluctant world in a hysterical get-rich-quick campaign. The new industrial outlook will treat a nation's resources as a prudent man treats his capital, not as a spendthrift treats his income. Mines will be worked and land will be cultivated, not, as now, to produce excessive wealth in the present generation, poverty in the next, and starvation in the third, but with a view to providing a continuous livelihood, as well as a continuous defence against armies and navies.

Defence in war is, at present, the most powerful motive driving nations from the commercial to the true industrial outlook. The blockade has been shown to be such a terrible weapon against a trading nation that every great nation now wishes to be self-subsistent as regards the necessaries of life and of war. America is at present completely self-subsistent, though the prospective exhaustion of the oil supplies causes anxiety for the future, and is producing a swift attempt to seize naval supremacy during the next few years. The British Empire is self-subsistent so long as command of the seas is retained, but not a day longer. Russia will be self-subsistent as soon as her industry is developed. China could be, given industrial development

of shortage in supplies, and has always been adopted in sieges and other occasions when the necessaries of life were very scarce. Although the immediate pressure has been relaxed in Western Europe, there are certain broad reasons which make it probable that, in some form or other, the same system must soon reappear.

The third stage in industrial development, which has so far only been completely reached in Russia, is when a nation is organized as a producing unit, not primarily as a trader. In this stage, trade occurs only for the obtaining of some definite needed commodity. Where the Government is not actuated by theory (as in Russia) but merely by practical, exigencies, this stage will be reached at different times as regards different commodities. The commercial stage will persist as regards goods of which there is a surplus, while the new system will be adopted as regards those of which there is a shortage. Oil is a good example of a commodity of which there is a shortage. Nations which possess oil are not anxious to part with it, whereas those which have none are willing to make great concessions in order to be allowed to become purchasers. As industrialism more and more exhausts the raw materials which it requires, a similar tendency will show itself as regards other things. Coal and iron are already in this category, This stage brings competition among buyers at least equal to that between sellers, and thus destroys the economic superiority of the consumer to the producer, which characterizes the commercial epoch. Competition between nations now is not for markets, but for raw materials; that is to say, they compete as producers, not as traders. It is only with this stage that industrialism becomes fully developed. Its earlier commercial phase is a legacy from the past; its typical form is that in which nations are organized as producers, distributing their product among their citizens, as, at an earlies stage, a peasant's family consume the crops which they have jointly produced.

the plant existing in the industrial nations was sufficient to produce more of many commodities than could be sold at a profit. The stage of many small separate firms in each country had passed; there were a few large dominant firms, or even only a single Trust, in each country. To each of these it became vitally important to secure a market from which their rivals were as far as possible excluded. The home market (except in the United Kingdom) was secured by protective tariffs; the markets of developed foreign countries were largely closed by the same method. Hence the struggle became concentrated on the undeveloped countries, especially in Africa and Asia. The best way to capture such a market was to induce one's government to annex the territory concerned. This led necessarily to conflicts between the governments, supported by their peoples for nationalistic reasons, under the influence of a vigorous Press campaign inspired by the firms whose interests were involved. The natural outcome of this process was the war of 1914—1918—The Great War as we still call it, though this name will soon cease to be applicable.

The Great War has ushered in a new epoch. Owing to the general destruction, it is now more difficult to buy than to sell. The commercial epoch depended upon greater eagerness on the part of the seller than on that of the buyer. During the war, we had experience of the opposite state of affair. In shopping, it was the purchaser who was grateful when the required article was forthcoming, not the shopkeeper who was glad of the chance to sell. And what applied to small transactions applied also to large ones. This state of affairs was, of course, in part temporary, but it produced everywhere, except in America, some part of the effect which led to Russian Communism. There was a tendency for the State to undertake the purchase or manufacture of necessaries, and to distribute them on a system of rationing. This is the economic essence of communism. It is an inevitable result

nations as economic units.

In the early stages of industry, when an industrial nation contains many competing manufacturers of the same commodity, the connection of each individual firm with the State is very slight. As in the pre-industrial era, a man who makes (say) cotton goods is more conscious of the rivals in his own country who also make cotton goods than he is of the competition of foreigners. This was especially the case in England in the early 19th century, when foreign competition hardly existed. Since each man believes himself cleverer than his rivals, each asks nothing of the State except free competiton and removal of all restrictions on enterprise. At this stage, it is thought that industry will make for internationalism, since all national barriers are hindrances to commerce. The individual manufacturer is concerned primarily with *selling* his produce. The economic process as a whole consists in the production of goods to satisfy needs. It exists in its integral form when a peasant grows crops to nourish himself and his family, and again, at a later stage, when a State produces goods to be distributed among the citizens according to their needs. But between these two stages lies the commercial epoch, when one man produces and sells, while another buys and consumes. Throughout this epoch, the interest of the producer in the goods ceases as soon as they are sold; it is a matter of indifference to the producer whether they really satisfy a need, or are only so well advertized that foolish people (who are sufficiently numerous to make anybody's fortune) think they will satisfy a need. Throughout the commercial stage, the chief concern of the producer is for a market. The need for markets has developed a new form of nationalism, arising out of the combination of commerce with industrial methods of production.

The stage of national competition for markets represents the second stage in the relations of industrialism and nationalism. Before the war,

the interior of large homogeneous empires, where no enemy is visible, this state of ferocity and hatred can only be produced artificially. The purpose of education is to produce it; and everywhere education is successful in its purpose.

Apprehension of external dangers is greatly increased by industrialism, for two reasons. On the one hand, education and the Press increase the awareness of dangers that do exist, and the fear of imaginary dangers invented by militarists to terrify poltroons. But on the other hand, the actual dangers, not only the fears of them, are multiplied a thousandfold by industrialism, which increases the destructiveness of weapons of war, and the proportion of the population that can be set apart for making and wielding them. This is a commonplace; it is not this, but its effect upon herd-instinct, that we are concerned with. The destructiveness of war being greater, the fear of it is greater; therefore the intensity of national feeling is greater; and therefore the likelihood of war is greater. It may therefore be laid down as a general proposition that whatever increases the harmfulness of war also increases its likelihood.

II.

So far, we have been concerned with the instinct out of which nationalism grows, and with the way in which industrialism increases the stimuli to the operation of this instinct. We have now to pass to a less irrational theme, namely the way in which industrialism, as it develops, affects the economic relations between nations and the economic motives for national rivalry. It is of course obvious that rivalry between nations could not exist unless nations existed, and nations (as we have seen) are a product of instinct. Therefore our analysis of the operation of herd-instinct had to precede the discussion of the economic relations between nations, since it is presupposed in treating

pride. But the nationalism of education is due almost entirely to sheer instinct. Hardly any of those who direct the education of civilized countries have ever asked themselves whether any useful purpose is served by teaching the young a lot of ridiculous nonsense about the power and merits of their own country, and the weakness and demerits of its enemies. They have adopted this course instinctively exactly as aristocrats used to teach family pride to their children. We can see the absurdity of the quarrels of Montagues and Capulets, but the quarrel of English and Germans was every bit as absurd.

How profound is the influence of education in promoting nationalism is made evident to any one who comes in contact with the peasantry of a backward country. The herd instinct of an uneducated peasant is almost entirely confined to his own village. When his country goes to war, he is aware that the authorities do certain things, such as mobilizing the young men, requisitioning horses, and so on. But his motive in complying with such orders is the motive of obedience: experience has shown that it is dangerous to resist the autheritles. Their purpose in giving orders does not concern the peasant; he does not cooperate in the war with his will, as the citizen of an advanced country does. The difference is almost entirely due to lack of education. A man who knows no history or geography cannot conceive his nation as an entity unless he is in constant contact with foreigners, which will not be the case with the peasant in the interior of a large undeveloped empire. In small countries, such as the Balkans, intense patriotism is possible without education, especially where villages of different nationalities exist side by side. For in that case village patriotism, always easy to primitive villagers, is naturally combined with national patriotism. Neighbouring villages are in a state of feud, ready to destroy each other on the slightest provocation; and in their feuds other villages of th same race are their natural allies. But in

government did not discriminate among different religions or different varieties of the white race. The immigrants had therefore as much reason to think well of America as they had to think ill of the governments from whose tyranny they had fled.

Nevertheless, most of them would have remained without political consciousness or American patriotism but for the influence of the schools In the schools, the children were taught to be good Americans, and to feel gratitude to the country from which they derived so many benefits. Coming from industrially undeveloped regions, their imaginations were impressed by the material civilization of America, and they were easily led to despise the old world of Europe, with its cramped hatreds and absurd traditionalisms. All this the schools taught to each new generation of children; and as the number of already manufactured patriots increased, each new generation became easier to assimilate through the contagion and example of their predecessors.

The case of America may serve as an example of the effect that industrialism has had in training and intensifying the instinct out of which patriotism arises. The operation of herd-instinct is intensified by (a) closeness of cooperation within the herd, (b) consciousness of the herd as a whole, and of outsiders, (c) apprehension of external dangers. All these three factors are heightened by industrialism. As regards closeness of cooperation within the herd, we have said enough in previous chapters. Consciousness of the herd as a whole, and of outsiders, is increased by railways and easy travel, by large economic groups, by contact with foreigners, but above all by education and the Press, which are the two supreme promoters of nationalism in the modern world. The Press is, of course, dependent upon education, since it has little power where only a minority can read The nationalistic tone of the Press is due mainly to commercial motives, since few people will buy a newspaper that dose not minister to their national

happiness which theoretically inspires the actions of sensible men.

But in saying that patriotism is instinctive we are not saying that it cannot be generated by artificial means. Just as a match-maker can cause two people to fall in love with each other, so a skilful government can produce national feeling in those who would otherwise be destitute of it. The supreme example of success in this practice is the United States. The original thirteen States had each some State patriotism, but only acquired the beginnings of collective patriotism through the War of Independence. This collective patriotism, however, was not very strong, since, if it had been, the Civil War could not have taken place. It is since the end of the Civil War that America has achieved her great triumphs in the manufacture of patriotism. In spite of an overwhelming influx of foreigners of all sorts, so that only a small proportion of the present inhabitants of the United States are descended from people living there at the time of Lincoln's death, it has yet been found possible to produce a degree of national consciousness hardly inferior to that of the oldest and most homogeneous nations of Europe. It was this intensity of national consciousness that enabled America to put forth a first-class effort in the war, and is enabling her now to make a bid for world-empire with more hope of success than attended the previous efforts of Spain or France or Germany. In view of such a remarkable achievement, those who wish to understand modern patriotism will do well to study America's methods.

It must be confessed that America had certain advantages which are denied to other nations. The immigrants were mostly destitute refugees, fleeing from poverty or oppression in their own countries—Irish, Italians, Southern Slavs, Russian and Polish Jews, and so forth. To them, safety from pogroms, with even the lowest wages paid to unskilled labour in the United States, represented freedom and comfort. America had the prestige of being called the Land of Liberty, and its

to admit that the genesis of national feeling is in some degree obscure. But they are not numerically the most important cases. The great homogeneous nations, such as England, France & Germany, which have a long national history, identity of language, and similarity of manners and customs, as well as the habit of fighting in common against external enemies, have all the elements combined that go to make up national feeling. It was especially England and France that set the example of nationalism to the world; and from them it spread to other nations, chiefly in the endeavour to resist the aggressions which their nationalism had inspired.

It is a mistake to suppose that nationalism is generated by an economic motive. There are groups that are held together by economic motives—for example, a gang of brigands, or the leaders of a political party. But it is not economic motives that determine what nation a man shall belong to; this is determined by instinct or sentiment, often in opposition to economic self-interest. The British have enriched Egypt, yet Egyptian nationalism wants to be rid of them. The Austrians enriched Trieste, which is greatly impoverished by belonging to Italy; yet the inhabitants of Trieste wished, before the war, to become Italian. If men only wished to grow rich, or were actuated solely by economic motives, all their groupings would be like gangs of brigands or joint-stock companies, and would not have the passionate strength that belongs to national feeling. Of course, since nationalism exists, it is possible to exploit it for economic ends, just as it is possible to exploit any other human desire. Some men make money out of keeping gaming tables, but there would be no gambling if we were all guided by economic self-interest. Similarly some men grow rich by pandering to patriotism, but there would be no patriotism if all were guided by economic self-interest. Patriotism is part of the irrational instinctive foundation of human nature, not part of that rational pursuit of

and to increase its biological strength still further. It was in this way that the conquering races, such as the Aryans, the Semites, and the Chinese acquired the fertile parts of the earth's surface, and replaced the older races which must have been at one time far more numerous. The instinct of herd-solidarity and herd-pugnacity which produced these agreeable consequences was transmitted to the descendants of the conquerors, or at any rate to the more successful among the descendants, since those who became less pugnacious and cohesive were in their turn slain by their more bellicose neighbors. Thus the dominant races of the present day are the outcome of a long series of selections, the survivors being on each occasion the conquerors in war, and conquest in war being mainly due to the strength and ferocity of herd-instinct. The instinctive disposition thus selected remains, though the circumstances are now wholly changed. The strength of the instinct is shown by the laudatory names we give to it, such as patriotism, public spirit, devotion to the good of the community, etc.

Various circumstances determine what collection of human beings constitutes a man's herd for purposes of herd-instinct. The main factor always is war . those who fight on the same side are the same herd. Hence, other things being equal, members of the same State tend to belong to the same herd. But the State is an artificial entity, and is often powerless to prevent the formation or perpetuation of rival herds within its borders. This happens especially when there are different races, languages and religions among the subjects of the same government. Sometimes these causes of disunion can be overcome, as in Switzerland, but this is exceptional. It is difficult to say why the Celtic highlanders of Scotland have been successfully incorporated with the Anglo-Saxons of lowland Scotland and England, while the Irish have remained a separate nation, although the highlanders preserved their native language while the Irish did not. Such cases compel us

rivalry between different groups, or herd-instinct as it is called. This instinct, like most others, has on the whole been biologically useful, but persists quite regardless of its biological utility, and operates independently of any consciousness of utility. Industrialism has rendered this instinct no longer useful, and has at the same time immensely stimulated it. To take an analogy: suppose some new diet were adopted which simultaneously strengthened men's sexual impulses and rendered women capable of parthenogenesis; we should then have the sexual instinct at once increased and rendered biologically useless. So it has been with herd-instinct under the influence of industrialism.

The operation of herd-instinct may be seen in any gregarious species of animals. Members of the same herd like to be together; a sheep separated from the flock is unhappy until it can return. Intruders from another herd are expelled or put to death : ants kill any ant not belonging to their own nest, if it is found in their preserves. The herd jointly exploits a certain region for food, and adopts peaceable means of distributing the food among its members. That is to say, the economic relations of members of the same herd are regulated by law. Broadly speaking, there is no fighting within the herd except between males for possession of the females at the breeding season. But if a foreign animal of the same species intrudes into any place which the herd regards as its own property, the intruder is attacked, and is fortunate if it escapes with its life. Such is the herd instinct in animals, and such it is in man.

In man the herd instinct is very strong, and more effective than with most gregarious animals, because his intelligence facilitates more effective cooperation. In early stages, it is of great biological utility. It leads a stronger tribe to attack a weaker one, exterminate it, and appropriate the land from which its food supply was derived. The stronger tribe is thus enabled to leave a larger number of descendents,

IV INTERACTIONS OF INDUSTRIALISM AND NATIONALISM.

By Prof. Bertrand Russell

Industrialism, if it stood alone, would organize the whole world gradually as one producing and consuming unit, since it contains within itself no inherent limitation of the tendency to large-scale organizations. Industry would be practised in the regions most convenient from the proximity of power or raw materials; the soil would be utilized, in each country, only for the crops which that country could produce best. The dependence of individuals upon the community would extend to nations: each country would produce only a small part of the commodities required for its subsistence, and would acquire the remainder by trading with other countries. This was the ideal of the early industrialists—Cobden and the Manchester School—who were all of them internationalists, and believed that industrialism would introduce a reign of universal peace.

But it is not in this direction that the world has developed or is developing. Industrialism has encountered and unintentionally fostered a force as powerful as itself, namely nationalism, which has tended more and more to make each nation an independent economic unit. It is through the interactions of nationalism and industrialism, even more than through the conflict of capitalism and socialism, that the world is being driven back into barbarism. Unless the destructive effects of nationalism can be mitigated, there seems little hope for mankind except in a total collapse of the industrial system. The rather intricate effects which nationalism and industrialism have had upon each other are the theme of the present chapter.

Nationalism is a passion which has an instinctive root, namely

themselves their own representatives to the Committee of Management. In all these ways, and in many others, the experience of the British Co-operative Movement is of great interest to students of the relation between employers and employed.

And what of the Future? Though the sphere of Voluntary Co-operation has, plainly, certain limits, and though the National and Local Governments have also their parts to play, he would be a rash prophet who should assign limits to the possible extension of the consumers' voluntary Co-operative Movement, which has already successfully entered, in addition to wholesale and retail trading, on manufacture, mining, farming, importing, banking and insurance. It already handles one-seventh of the entire food supply of Great Britain, and deals with one-third of the population. That its membership in Great Britain will go on increasing is certain; and there is little risk in prophesying that, within another generation, it will have two-thirds of the whole population within its ranks; and that (whatever happens to the level of prices in currency) its annual trade will have doubled in quantity. It already runs the largest flour mill, the largest boot factory and the largest printing establishment in the Kingdom; and will certainly, within a generation, enormously extend its manufacturing enterprises. It is already the largest importer of tea and dried fruits, and the second largest maker of soap. With the growth, in a score of other countires, of Co-operative Wholesale societies on a similar plan, we may presently see the federated associations of consumers successfully absorbing more and more of what is at present the export trade of their several countries, by transforming it into a system of reciprocal imports conducted entirely for Co-operative consumption and use, to the supplanting of the profitmaking merchant, broker, dealer and banker. What other developments may energe—such as the Co-operative control of the newspaper press, the Co-operative organisation of adult education, and the Co-operative maintenance of the existing country mansions of the wealthy—and how the spheres and functions of the voluntary Co operative society, the Municipality and the National Government will be co-ordinated—we must leave to be described by the student of 1951.

issues, which the aggregate membership is as unable to decide as the whole electorate of the nation is unable effectively to decide the questions dealt with in the House of Commons. This spontaneous evolution, in the primitive Co-operative Democracy, of an elected Representative Assembly, influencing the executive, and focussing the inarticulate desires of an unwieldly electorate ought to be of interest to political students.

No less important, in view of the universal prevalence of "Labour Unrest", and the wide spread of Trade Unionism, is the relation which is being worked out in the British (and also in the German) Co-operative Movement between the four million shareholding members, who are in their corporate capacity employers, with the two hundred thousand workers of both sexes, all grades, and most varied occupations who are employed. We note that these are now almost invariably at fixed wages or salaries, schemes of profitsharing having been, with trivial exceptions, abandoned by common consent. They are now all organized in Trade Unions, this being usually made a condition of their employment. The wages and other conditions are determined after full and free Collective Bargaining between the representatives of the employees'. Trade Unions and those of the societies; it being generally recognised that all the conditions must be at least as good as—in practice they are usually better than—those prevailing in profitmaking industry. In addition all the employees are encouraged to become themselves shareholding members of the societies in which they are employed. They are coming now more and more to have their own Works Committees or Shop Committees, with which the Committee of Management freely confers. They vote as members for that Committee; and in a small but increasing number of societies one or more employees are actually elected by the membership to that Committee. In a few societies the employees have been accorded the right, as employees, to elect among

day by day routine on a committee of management. When the society finds its membership getting into tens of thousands, and its annual sales into millions of pounds sterling, not only does it come to employ a salaried staff of hundreds of men and women, under experienced managers, but also it finds even the supervisory work of the executive committee, and its decisions on policy, transcend the power of a dozen or a score of members who are engaged in earning their own livelihood, and can give only their evening hours to the society's business. There comes a tendency, accordingly, to secure the full time of these committee men, and to pay them salaries for their work. Some societies (such as that of Barnsley) now pay substantial salaries to a president and two vice-presidents (corresponding to the "Voretand" of the German Co-operative society), whilst paying only fees for attendances to other members of the committee. The next stage, which the English and Scottish Wholesale Societies have long reached, and into which some of the largest local societies (such as the Royal Arsenal Co-operative Society in London) are now passing, is to have the whole executive committee or board of directors made up of "full-timers", each receiving a salary.

Along with this comes another development, of special interest to Political Science students, in the emergence of a standing Representative Assembly, or Parliament, chosen by the whole body of members, in order that it may more effectually control what has become equivalent to a Cabinet of Ministers. The great Leeds Co-operative Society, which has nearly a hundred branches, and an annual turnover amounting to five million pounds sterling, now provides for the election, by the members habitually purchasing at each branch, of three hunderd Local Representatives. The three huudred "Locals" thus chosen not only supervise their several branches, but meet regularly as a standing Representative Assembly, to which the Board of Directors explains its policy, and from which now emanate some of the changes of policy on controversial

farmer, merchant or shopkeeper. And this is not all. From producing and distributing the Co-operative Movement has gone on to banking and every kind of insurance. The C. W. S. has its own banking department, conducted on the same principle of eliminating profit, which is rapidly becoming the bank of not only every Co-operative society, but also all the English working-class organizations, with an annual turnover amounting to more than six hundred million pounds.

The consumers' Co-operative Movement, notwithstanding its great and ever-increasing success, has received little attention from statesmen and politicians, and even from professors of Political Science and Economics. Most of the books on Co-operation give most attention to the various associations of producers which have already been mentioned—to the successions of attempts to form "Self-governing workshops", with their development into schemes of profitsharing and "copartnership", to the different forms of combination among agriculturalists styled "Agricultural Co-operation", and to Co-operative Credit Societies. All these associations of producers aim merely at enabling poor men to get some share of the profits of Capitalist industry. The consumers' Co-operative Movement, by contrast, seeks to eliminate profit, and to supersede the Capitalist system. Whether for this or other reason, there seems to be some reluctance to give adequate attention to its extraordinary progress and continued financial success. Least of all has any serious study been made of its interesting constitutional developments.

The Consumers' Co-operative society, small or large, local or federal, is always democratically governed by the regularly held general meetings of its members, in which the newest recruit, man or woman, young or aged, having perhaps the smallest investment in the enterprise, has equal voice (and in the local societies) equal vote with the oldest and richest member. So long as the society remains small, the members' meeting takes no little part in the administration, though it always devolves the

rations of the Movement, the English and Scottish Co-operative Wholesale Societies. These were started more than half a century ago, primarily in order to enable the federated local societies to make themselves independent of the wholesale traders in the commodities which their members desired. From wholesale trading the two business federations passed to importing on their own account, and from importing to manufacturing; awlays on the same principle of eliminating capitalist profit, seeking always the supply of Co-operative requirements at the lowest possible cost, and returning to the constituent societies whatever net surplus remained at the end of each accounting period in the form of "dividend" on the purchases made by the several societies. From importing and manufacturing the two Wholesale societies have passed increasingly to agricultural production. They now own and cultivate many thousands of acres of land, not only in different parts of Great Britain, but also in Ceylon, India, West Africa and Manitoba (Canada) which are being cultivated, without the intervention of any profitmaking capitalist, with the sole object of producing, at the lowest possible cost, for consumption by co-operators, an ever-increasing proportion of the wheat, fruit, vegetables, timber, tea, cocoa and indiarubber annually called for by the demand from the constituent societies. Thus, every English workman who is a member of one of the 1200 local Co-operative societies united in the English Co-operative Wholesale Society is a partner in the varied enterprises, having an aggregate turnover of 105 million pounds sterling in 1920, of what is the most extensive commercial business in the world. He is growing his own wheat in Canada; importing it into England sometimes in his own ships; grinding it at one of the dozen Co-operative flourmills, some of which are the very largest in England; making it into bread at his own Co-operative bakery; and getting it delivered to his cottage by the daily delivery cart of his own retail society—all without yielding a penny of toll in the shape of profit to the profitmaking

age, and whatever the amount of his purchases. The executive committee is elected usually, in whole or in part, at every quarterly or half-yearly meeting. The members' meeting can make what rules it pleases (within the wide limits of the law). It may, if it chooses, itself make all the appointments, and give peremptory instructions as to trading or prices. But it is commonly wise enough to leave all the matters to the committee and to content itself with criticising the decisions of those to whom it entrusts the management of the society. Of these consumers' Co-operative Societies there are now over 1300 in Great Britain, a few of them nearly a hundred years old, but most of them between thirty and seventy years old, whilst new ones are still established each year. The tendency to amalgamation is, however, now strong; and there are a couple of hundred societies exceeding 5000 in membership, whilst a score have between fifty and a hundred thousand members. Their annual sales range from a few thousands of pounds up to five million pounds; and they average about £ 49 per member per annum. The total membership now (1921) exceeds four and a half millions, and the aggregate retail sales are over two hundred millions per annum.

The local Co-operative society, small or large, is not merely an autonomous, self-contained social and commercial organisation. It is also a unit in the federal organisations of the Movement, through the operations of which it controls operations and policy of national importance. For propagandist, educational and political purposes the local Co-operative societies unite in the Co-operative Union, which conducts a large amount of valuable educational work; holds in its district and sectional organisation innumerable conferences and meetings; publishes Co-operative literature; and is responsible for the annual Co-operative Congress, at which representatives of the various societies demonstrate to the public the national importance of their Movement.

Of greater financial importance are the two great business fede-

to take one or more shares of a pound each, which they may pay for by small instalments. With the exiguous capital thus furnished, a shop is rented and a manager is engaged. The stock is at first limited to the articles of grocery in most universal demand, which are obtained either from enterprising wholesale dealers, or, at the present day, if the committee is wise, entirely from the Co-operative Wholesale Society Retail prices are usually fixed at those ruling in the neighbour-hood, the excess over wholesale rates serving to cover the expenses allow for depreciation of plant, provide a reserve fund, and finally supply the "dividend", which experience proves to be such an attraction to the members. On making any purchases, however small, the customer receives a duplicate check or voucher, stating its amount. At the end of each half-year the ascertained surplus is, after payment of the salaries of the manager and shop assistants, of a fixed interest on capital, and of all other expenses, returned to the members in exact proportion to their purchases.

It is this returning to the purchasers of the margin between the cost of production and the price paid that distinguishes the consumers' Co-operative society from capitalist joint-stock trading. In the British Co-operative Movement the characteristic, and even to this day the most generally adopted method for this distribution of the surplus, misnamed "profit", is by a dividend upon the amount of each member's purchases during the period of the account. In adopting this "dividend on purchases", as contrasted with dividend on share capital, the twenty-eight flannel weavers of Rochdale hit upon a device of extraordinary potency, affecting alike the constitution and the economic and social results of the vast organisation that they were unwittingly founding.

The constitution and management of the Co-operative society is most democratic. The quarterly members' meeting is supreme. Each member has but one vote, whatever the amount of his capital, whatever his

importing, wholesaling or retailing, there is, and can be, no actual production of either matter or force. All that takes place is a change in position or grouping. What is produced is, in all cases, nothing but an increase in utility. Practical experience finds it impossible to draw any sharp or rigid line between one set of processes productive of utility and another set. It is, in short, nowadays merely a vulgar error to suppose that "Co-operation has failed in production but succeeded in distribution;" or that one form of Co-operative society is best adapted for production and another form for distribution. The essential distinction is between associations of consumers and associations of producers. The latter aim only at putting the associated workers in the position now occupied by the capitalists, and at a continuance of the system of profit-making. The former seek to change the economic basis of every kind of industry, from agriculture and mining, or from manufacture and importation, to the retail distribution of commodities and the performance of such services as banking and insurance. The change that they attempt to bring about is the supersession of the capitalist ownership and direction of the means of production, and the consequent capitalist control of industry, by ownership and direction, and consequent control, by the consumers themselves. Instead of industry being carried on for profit, the associated consumers eliminate profit, and conduct their enterprises solely for the advantage of the consumers. "Production for use" supersedes "production for exchange."

The organisation by which the enormous business of the consumers' Co-operative Movement is managed and controlled is still so unfamiliar to any but its working-class members that a somewhat detailed description must be pardoned. The unit is the Co-operative society, established for the purpose of starting a "store" or general shop. A Co-operative society is an association which usually begins by the recruiting of about a hundred members, who promise to deal at the new store, and

1831, and greatly favoured by Louis Blanc and the English Christian Socialists); or else in friendly union with self-subordinating capitalists (as in the various forms of "industrial copartnership", or agreements for profitsharing). There have been, and there still are, (as in Denmark and Ireland) associations of peasant agriculturalists or small farmers, either for the joint conduct of creameries converting their milk into butter, or for the joint purchasing of seeds, fertilisers and agricultural machinery. Moreover, there have long been, and there still are (especially in Germany and India) great and extensive associations of peasants or industrial craftsmen, who combine in order jointly to procure, for one after another of their members, the capital on credit which each one of them would individually be able to obtain. These "Productive Associations", "Creameries" and "Credit Banks" are called Co operative, and they have, notably in Germany and Denmark, Ireland and India, in one or other of their forms, been of the greatest use. But their object and purpose is diametrically opposed to that of the associations of consumers who constitute in Great Britain nine-tenths of Co-operation. The so-called Productive Associations, Creameries and Co-operative Credit Banks are normally composed of producers, usually themselves manual working producers, who carry on production for their own profit, and whose whole object in combining is to increase that profit, and the share in it enjoyed by each member individually. The consumers' Co-operative Movements, on the contrary, manifested in the "Store" and the "Wholesale", has for its object and purpose the total elimination of profit, and the assumption of control over industry, not by the producers in each craft or industry, but by the consumers themselves, for whose use or consumption, and not for profit at all, the whole enterprise is carried on. The distinction is not, as used often to be assumed, between "production" and "distribution". No such distinction can be drawn in industry. Whether in mining or agriculture, manufacturing or

and cocoa, the rubber and the oilkernels required by the four million British Co-operators and their families. Meanwhile they were getting their own ships on the sea, in which to transport their Co-operative cargoes; and establishing their own banking department (which now has a turnover exceeding six hundred million pounds a year), in order to free themselves from reliance on the capitalist bankers. And all this British development from the humble retail store of the Rochdale Pioneers is being imitated in different degrees by the Co-operators in the various European countries, who are all getting their own Co-operative Wholesale Societies, and increasingly developing their own manufactures, and their own direct importing; whilst these several national Co-operative Wholesale Societies now more than a score in number, are coming more and more to have direct relations with each other, thus affording a new and purely Co-operative organisation of international trade—all in the hands, and under the control of the millions of associated consumers, still predominantly of the manual working wage-earning class; all without the aid and beyond the control of the capitalist entrepreneur and financier; all conducted without the motive or stimulus of individual profitmaking, and, indeed, on the avowed principle of completely eliminating the capitalist profit which has, for a couple of centuries, been usually considered an indispensable stimulus to the conduct of industry on any but the smallest scale.

It will be seen from this analysis that the still common confusion between what are styled different forms of Co-operation is essentially misleading. The word "Co-operative" has been applied to all sorts of combinations for the mutual advantage of the members. They have been, in various countries, and there still are, associations of workmen seeking to conduct their own manufacturing industry for their own profit, either independently of a capitalist entrepreneur (as in the typical "self-governing workshop," originated by Phillippe Buchez of Paris in

of little social importance; praiseworthy, indeed, as promoting thrift among the wage earners, and even as making their wages go further, without disturbing or menacing any interest more important than that of the small shopkeepers catering for working-class custom. What has not been adequately appreciated is the extension which has been given to the scope of consumers' Co-operation, notably within the past two or three decades, and as yet principally in Great Britain. At first, the associated consumers sought only to dispense with the retail shopkeeper. Within twenty years, however, they found that, by federal organisation among the several Co-operative societies, on exactly the same plan of "dividend on purchases" they could set up for themselves in the wholesale business, and so dispense with the wholesale warehousekeeper and dealer. The Co-operative wholesale Societies thus formed in England and Scotland respectively presently began to send their own agents to other countries to buy what their members required, and to ship these goods direct to the Co-operative warehouses, thus eliminating merchants, brokers, commission agents, factors and intermediate dealers. They then started manufacturing, in their own factories, one after another of the commodities which they found in greatest demand, from flour to bread and confectionery; from the tanning of hides to the making of every kind of boots and shoes, saddlery and other leather goods; from spinning and weaving cotton and woollen fabrics to the making up of nearly every article of clothing; from the growing of timber, the quarrying of stone and the making of bricks, to the erection and equipment of buildings and the production of household furniture of every description. Co-operation was pushed, in fact, right back to the land itself; and extensive areas are now cultivated under Co-operative committees in Great Britain and Ireland, India and Ceylon, Manitoba and West Africa, for the express purpose of producing, free from any capitalist profit, part at least of the wheat and dairy produce, the tea

purchases at the store, and in exact proportion to their purchases. Thus, the "dividend on purchases" is, in effect, a rebate or discount, equal to what experience has shown to have been unnecessarily charged to the customers. As the business has avowedly been conducted for their benefit, without any desire to make profit, the whole final net surplus is restored to them. Each person may, of course, use his "dividend" as he pleases, but experience shows that a considerable proportion of it is "saved" and invested either in the Co-operative society itself, in the form of increased share capital; or by deposit in a savings bank, or by purchase of house property or interest-yielding securities.

Now, regarded merely as an enterprise in which savings have been accumulated and invested, the Co-operative Movement has, with very little notice by financiers or economists, become a big thing. In the United Kingdom alone it has now over four million members, representing with their families about one-third of the entire population. The British Co-operative societies, now about 1300 in number, together with their federal developments presently to be described, administer capital to the amount of more than a hundred million pounds, which represents only a part of the savings that they have effected. They supply goods to themselves to the value of more than two hundred million pounds a year. The net surplus that they distribute among themselves as dividend on purchases amounts to more than twenty million pounds a year. Moreover, the consumers' Co-operative Movement has spread, with analogous results, to every country in Europe, where the total number of members is estimated to be somewhere in the neighbourhood of forty millions, representing a population of perhaps 150 millions. It is spreading in North and South America; in Australia; in India; and even in the North and South of Africa.

To the financier, as indeed usually to the Statesman and the Economist, the consumers' Co-operative Movement has seemed a matter

retail shopkeeper, but aimed ultimately at establishing the Co-operative Commonwealth. What they succeeded in doing was in founding a flourishing business, belonging not to any group of capitalist proprietors, but, in effect, to the customers who made their purchases at the store. The device by which they made their success was the "dividend on purchases." In the typical Co-operative society the necessary capital is subscribed in small sums by the members, who receive on their shares only a fixed rate of interest, and who are always eager to admit newcomers to membership, additional shares being issued at par to any extent. The principle of the society is to dispense altogether with profit, and to supply goods at bare cost. But cost necessarily includes the expenses of carrying on the store, the wages of the manager and the clerks and carmen, the constant losses by leakage and depreciation, and the small item for fixed interest on the share capital. Moreover, when commodities have to be divided into small parcels for retail distribution, it is impossible to foresee with absolute precision what must be charged for each tiny quantity in order merely to cover the actual cost of the whole. Hence the Co-operative society has to charge to its members and to other retail customers something more than the wholesale price which it has paid. In great Britain, in fact, it habitually fixes its prices as nearly as possible at the level of those charged by the profitmaking grocers. The result is that, unless something has gone wrong, at the end of each trading period, when it takes stock, the Co-operative society normally finds itself with a surplus, which not only covers the whole expense of conducting the store, and pays the fixed rate of interest on the share capital, but also leaves something over. This final net surplus, the member's meeting decides to appropriate (after proper provision for depreciation, and possibly some votes to charities and some grants for education) chiefly, as "dividend"—not to the share-holders or other capitalists, but to all those who have made

THE CONSUMERS' CO-OPERATIVE MOVEMENT IN GREAT BRITAIN.

By Sidney Webb.

Consumers' Co-operation, that is to say the voluntary and spontaneous association of men and women, belonging principally to the class of manual-working wage earners, for the purpose of procuring for themselves the commodities and services that they desire, has been frequently described as a method of thrift. Co-operators find themselves able, merely by purchasing their food and other household requisites at the "Store" belonging to themselves to accumulate a fund of savings from their narrow incomes which would otherwise be practically beyond their reach. Viewed in this light, the Co-operative Movement, which had its new birth in England with the establishment of the Rochdale Pioneers in 1844, and has since spread to every civilized country, has received universal praise from persons of the most diverse political opinions as a beneficent and entirely harmless method of Social Reform. The purpose of this article is to explain that the Co-operative Movement is of much greater importance than could be claimed for any expedient for increasing the savings of the wage-earning population. What it avowedly aims at, and what in the countries in which it is most highly developed it is gradually accomplishing, is nothing less than a transformation of the system under which industry is conducted in Western Europe and the United States.

Let us first consider what a Co-operative society is, and how it works. The 28 poor flannel-weavers of Rochdale in Lancashire, who in 1844 painfully subscribed a few pounds in order to buy from the wholesale dealer the groceries needed by their households, wished primarily to free themselves from the extortions and adulterations of the

自叙傳

大杉榮

一

赤旗事件でやられて、東京監獄から千葉監獄へ連れて行かれた、二日目か三日目かの朝だつた。はじめての運動に、一緒に行つた仲間の人人が、中庭へ引き出された。半星形に立ちならんだ建物と建物との間の、可なり廣いあき地に石炭殼を一面にしきつめた、草一本生えてゐない殺風景な庭だ。

受持の看守部長が名簿をひろげて、一列にならんでゐる皆んなの顔と其の名簿とを、しばらくの間見くらべてゐた。が、やがて急に眉をしかめて、幾度も幾度も僕の顔と名簿とを引きくらべながら、何にか考へてゐるやうだつた。

『お前は大杉東と云ふのゝ何にかゝね。』

部長はちよつと顔をしやくつて、少し鼻にかゝつた東北辯で尋ねた。

名簿には、僕の名の右肩に、『東長男』とある事に知れきつてゐる。それをわざ〳〵かう云つて聞くのは、いづれ父を知つてゐる男に違ひない。其の三十幾つかの年恰好や、監獄の役人としては珍しい快活さや、殊に其の僕に親しみのある言葉の調子で、僕はすぐにどこかの聯隊で下士官でもやつてゐたのかなと思つた。

『先生、親爺の名と僕の前科何犯とをくらべて見て、驚いてる



最近の大杉榮氏

んだな。』

僕はさう思ひながら、返事のかはりにたゞにや〳〵笑つてゐた。それに、こんなところで父を知つてゐる人間に會ふのは、少々きまりも惡るかつたのだ。

『東と云ふ人を知らんのかね。あの軍人の大杉東だ。』

部長は不審さうに重ねて又尋ねた。

『知らないどこの話しぢやない。それや大杉君の親爺さんですよ。』

それでもまだ僕がたゞにや〳〵して默つてゐるので、とう〳〵堺君が横あいから答へてくれた。

『ふうん、やつぱりさうか……あの人が大隊長で、僕はその部下にゐた事があるんだが……あの精神家の息子かね……』

部長はちよつとの間感慨無量と云つたやうた風で、ひとり言のやうに云つてゐたが、やがて自分に歸つたやうになつて、

『其の東と云ふ人は第二師團で有名な精神家だつたんだ。其の人の息子がどうして又こんなところへはいるやうになつたんだか……』

と繰りかへすやうに附け加へた。

此の精神家と云ふのは、軍隊での一種の通り言葉で、忠君とか愛國とかの謂はゆる軍人精神のおかたまりを指すのであつた。十分尊敬の意味は含まれてゐるんだが、しかし又、戰術がへただとか融通がきかないとか云ふそしりの意味もない事はなかつた。

僕が陸軍の幼年學校から退學させられて家に歸つた時にも、

『お父さんはあんなに音なしい方だのに……』

と、よくいろんな人に不思議がられた。そして其のたびに、僕の家の事をもつとよく知つてゐるらしい誰れかゞ、

『それや、あなたはお母さんをよく知らないからですよ。』

と僕のために辯解してくれた。

實際僕は父に似てゐるのか、母に似てゐるのか、よく知らない。尤も顏は母によく似てゐたらしい。

『そんなによく似てゐるんですかね。でも私、こんないやな鼻ぢやないわ。』

母はよく僕の鼻をつねつては、人にかう云つてゐた。

母は綺麗だつた。鼻も、僕のやうに曲つた低いのではなく、まつすぐに筋の通つた、高い、いゝ鼻だつた。

父が近衞の少尉になつた時、大隊長の山田と云ふのが、自分の細君の妹のために婿選びをした。そして二人候補者が出來たのだが、遂に父の手にそれが落ちたのださうだ。

其の當時母は山田の家にゐた。なか〳〵のお轉婆娘で、よく山田の出勤を待つてゐる馬に乘つては、門内を走らして遊んでゐたものださうだ。

『此の母方のお祖父さんと云ふのが面白い人だつたんださうですね。大阪で米はんにいろいろ聞いたんだが、あんまり面白いんですつかり忘れちやつた。が、兄さんなんかは此のお祖父さんの血を受けてゐるのかも知れないね。』

いつか次弟の伸といろ〳〵近親のものゝ話しをした時、弟がかう云つて、切りに折があつたら米はん（從兄）に其の話を聞いて見るように勸めた。

それまで僕は、母方の親戚では、山田の伯母と、其のすぐ次ぎの妹の米はんのお母さんと、それからお祖母さんとだけしか知らなかつた。そして此のお祖父さんに就いては、何んにも聞いた事もなく、又考へて見た事もなかつた。お祖母さんが妙に下品な人だつたので、母の家と云ふのも、ろくな家ぢやなかつたらう位にしか考へてゐなかつた。

それに此の米はんが大阪の或る同志と知つてゐて、其の同志との間によく僕の話しをすると云ふ事も聞いてゐたので、多少なつかしくも思つてゐた折だつた。で、其の翌年であつたか、もう二三年前になるが、大阪へ行つたついでにしばらく目で米はんを訪ねて見た。米はんはお祖母さんの家を繼いで、淀屋橋の近くで靴屋をしてゐた。僕はちようど二十年目で米はんと會つた。

『僕誰れだか分る？』

僕は店にゐた米はんにいきなり聲をかけた。尾行をまいて行

つたので、店のものに僕が誰れだかが分つても面白くないと思つたからでもあつた。

『分らんでどうするものか。そんな目はうちの一族のほかにはどこにもないよ。』

米はんは僕よりももつと大きな目を見はりながら、大げさにかう云つて、奥へ導いて行つた。

お祖父さんは楠井力松と云つた。和歌山の湊七曲りと云ふところにあつた、可なり大きな造り酒屋だつたさうだ。子供の時から腕力人にすぐれて、悪戯がはげしく、十二の時に藩の指南番伊達何んとか云ふ人に見出されて、其の弟子となつて、十八で免許皆傳を貰つた。剣道、柔道、槍術、馬術、行くとして可ならざるはなく、殊に柔道は其の最も得意とするところであつたさうだ。後、其の指南番の後見のもとに、町道場を開いて、門弟五百人、内弟子百人あまりも養つてゐた。身の丈六尺四寸目方四十貫と云ふ大男で、三十三で死んだのだが、其の時でも三十五貫あまりあつたさうだ。

『或時、多分お祭りの時だつたらうと思ふが、何んでもない事にまで侍と町人との待遇があんまり違ふと云ふので怒り出してとうとう大勢の侍を相手に大喧嘩をやつて、それ以來いつも侍を敵にしては町人のために氣を吐いてゐたんださうだ。そしてそんな事で、とう／＼家をつぶして了つたんだね。』

お祖父さんに就いての米はんの話は、隨分長くもあり、又雄辯でもあつた。が、僕もやはり弟と同じやうに、それがあんまり面白いんで大がいは忘れて了つた。

父の家は、名古屋を距る西に四里、津島と云ふ町の近くの、越治村大字宇治と云ふのにあつた。今では、其の越治村が隣り村と合併して、神守村となつてゐる。父の家は代々其の宇治の庄屋を勤めてゐたらしい。

大杉と云ふ姓も、邸内に大きな杉の木があつて、何んとか云ふ殿様が鷹狩りか何にかの折に立ちよられて、『大きな杉ぢやなあ』と御感遊ばされたとか云ふところから、それを苗字にしたのださうだ。あんまり當てにはならない話だが。そして今でもまだ、街道から目印になるやうな、大きな杉の木がそこに立つ

てゐる。

父が日清戰爭で留守の間に、宇治のお祖父さんが死んだと云ふので、一日無理に學校を休ませられた事があつた。が、此のお祖父さんに就いては、權九郎とか權七郎とか云ふ名のほかには、何んにも聞いた覺えがない。

淸洲の近くにゐた丹羽何んとか云ふ老人が、此のお祖父さんの弟で、少しは名のある國學者だつたやうに聞いてゐる。其の片身の硯や水入れが家にあつた。そして僕が十五の時、幼年學校にはいるんで名古屋へ行つた時、第一に此の老人に會ふようにと父から云ひつけられて行つた。

父には二人兄があつた。長兄は猪と云つて、宇治の家を繼いで、村長などをやつてゐた。次ぎのは一昌と云つて、名古屋にゐたが、そして僕が幼年學校にゐた間は隨分世話にもなつたが何にをしてゐたのか僕には分らなかつた。折々裁判所へ出かけて行くらしいので、僕は高利貸かなとも思つてゐた。

お祖父さんにはどの位財産があつたのか知らないが、其の死ぬ時に、此の二人の伯父と父との間にそれが分配されたらしい。そして父の分は猪伯父が管理してゐたのだが、伯父がいろんな事業に手を出して失敗して、自分のは勿論父の分までも無くして了つた。

『あれがあれば、お前達二人や三人の學資位は樂に出るんだつたがね。』

母はよくかう云つては愚痴つてゐた。

多分そんな事からだらうと思ふが、父は猪伯父の事をあまり面白く思つてゐなかつたらしい。一昌伯父に就いてもやはり同じやうだつた。

そして父や母がほんとうに親戚らしくつき會つてゐたのは、山田の伯母一家だけらしかつた。そして又、僕が多少の影響を受けてゐるのも、此の山田一家からだけらしい。僕の名の榮と云ふのも、此の伯母の名のよみを取つたものだ。

しかし肉親と云ふものはさすがに爭はれない。猪伯父も一昌伯父も吃つた。丹羽の老人も吃つたやうだ。父も少し吃つた。

そして僕が又吃りだ。

二

父には學歷はまるでなかつた。

たゞ子供の時から本を讀むのが好きで、丹羽の老人のところから本を借りて來ては讀んでゐた。そして其の土地の習慣で、三男の父は一時お寺にはいつて坊主になつてゐた。が、西南戰爭が始まつて、始めて青雲の志を抱いて、お寺を逃げ出して上京した。

そして先づ教導團にはいつて、一たん下士官になつて、更に又勉強して士官學校にはいつた。

父は少尉になると間もなく母と結婚して、丸龜の聯隊へやられた。そしてそこで僕が生れた。

町の名も番地も知らない。戸籍には明治十八年五月十七日生とあるが、實際は一月十七日ださうだ。當時尉官は殆んど結婚を禁ぜられてゐたやうなもので、結婚すると三百圓の保證金を納めなければならなかつた。父はそれが出來ないで、母の姙娠が確定するまで結婚屆が出せなかつたのださうだ。そしてそれと順送りに僕の出生屆も遲れたのださうだ。

が、父は又すぐに近衞に歸つた。

そして僕が五つの時に、父と母とは三人の子供をかゝへて、越後の新發田に轉任させられた。父は此の新發田に其後十四五年もくすぶつて了つた。僕も十五までそこで育つた。從つて僕の故郷と云ふのは殆んど此の新發田であり、そして僕の思出も殆んど此の新發田に始まるのだ。

尤も其の以前東京にゐた時の事も少しは記憶してゐる。

家は番町のどこかにあつた。門の兩側に二軒家があつて、父の家は其の奥にあつた。そして門のそばのどちらかの家に、たしかお米さんと云ふ名の、僕より一つ年上の女の子があつた。僕は其のお米さんと大仲好しだつた。

お米さんはもう幼稚園へ行つてゐた。僕はまだだつた。お米さんは學校で唱歌を敎はつて來ては、家へ歸つて大きな聲でそれをおさらへした。歌を何んにも知らない僕はそれが癪にさはつて堪らなかつた。そして向うで何にか歌ひ出すたびに、僕はせい一杯の聲で、たゞ

雨こん／＼
雪こん／＼

とだけ、幾度も繰りかへしては怒鳴りつゞけてゐた。

が、五つの春から、僕も幼稚園に行くようになつた。そして毎日お米さんと手をひいて、富士見小學校へ通つた。

しかし、其の幼稚園が果して富士見小學校附屬のであつたかどうかは、實は斷言する事が出來ないんだ。たゞ、いつかふいと其の前を通つたら、どうも見覺えがあるので、中にはいつて見た。するとそれが長い間僕の頭の中にあつた幼稚園其儘なんだ。で、僕はそれが此の富士見小學校附屬のだと、ひとりで決めて了つたのだ。

此の幼稚園での事は殆んど何んにも覺えてゐない。たゞ、一度女の先生に叱られて、其の顏に唾をひつかけてやつた事があるやうに思ふが、これは其後母が話したのを覺えてゐるのかも知れない。

唾では、其後も一度、小學校の女の先生にひつかけて泣かした事があつた。

父が勤めてゐた聯隊は青山練兵場の奥の方にあつた。父は折々週番で歸つて來なかつた。或日、多分其の週番が三日目四日目と進んで大ぶさびしくなつた頃だらう、例のお米さんを連れ出して窃つと青山に出かけて行つた。練兵場にはいつた頃に、お米さんはもう歩けないと云つて泣き出す。そこへ犬が吠えついて來て僕も泣き出す。しまひには二人で抱き合つて聲を限りに泣いてゐた。そして通りかかつた兵隊になだめられて、漸く父のところへ連れて行かれた。

新發田の聯隊へ送られるのは、多くは何にかのしくじりがあつて、島ながしにされるのだと聞いた事があつた。新發田ばかりではない。遠い地方の田舍へやられるのは、多くはさうであつたのかも知れない。

もう餘程後の事であるが、家に大勢士官が集まつた。父は其の士官等に、山田の伯父から送つて來た葉卷をご馳走した。し

かし其のお客の中で、此の葉卷を滿足に吸つたものは殆んど一人もなかつた。皆んな太い方を口へ持つて行つて、とがつた先きにマッチの火をつけようとした。新發田と云ふのはそんな田舍だつたのだ。

　しかし僕は父が何んの失態で新發田へ逐ひやられたのか知らない。週番で宮城につめてゐた時、何にかの際に馬から跳ね飛ばされて、お濠の中に落つこちて、泥まみれになつて上つて來たそれを陛下がご覽になつて『猿ちや、猿ちや』と笑ひ興せられた事があつたさうだ。しかしこれは父の光榮であつて、決して失態ではなかつたらう。實際父はちよつと猿のやうな顏をしてゐた。

か、とにかく父は新發田に逐ひやられたのだ。

　父は、やはり同じ近衞から新發田へやられるもう一人の士官と一緒に、東京を出た。僕は其の旅の中で、碓氷峠を通る時の事だけを覺えてゐる。碓氷峠にはまだアプト式の鐵道も布かれてなかつた。そして其の海拔幾千尺か幾里かの峠を、僕等は二臺のガタ馬車で走つた。一臺には父の同僚の家族が乘つてゐた。親子三人のやうだつた。もう一臺には僕等が乘つてゐた。父と母とは各々一人づゝの妹を抱きかゝえてゐた。僕は一人でしつかりと何にかにしがみついてゐた。折々馬車が倒れさうに搖れる。下を見ると、幾十丈だか知れない深い谷底に、濃い霧が立ちこめてゐる。僕は幾度膽を冷やしたか知れない。

　僕は此の自叙傳を書く準備をしに、最近に、二十年目で新發田へ行つて見た。其の間には、もう十幾年か前に鐵道がかゝつて、そこに停車場も出來てゐる。殆んど面目一新と云ふ程に變つてゐるだらうと期待して行つた。そして殆んどどこもかも、まるで二十年前其儘なのに驚かされた。

　停車場の附近が變つてゐる事は論はない。そして僕はそこを出るとすぐ、また新しい華奢な監獄のやうな製糸場が並んでゐるのを見て、こゝにもやはり産業革命の波が押しよせたなとすぐ感じた。しかしそれは嘘だつた。其後町のどこを歩いて見ても、其の製糸場以外には、工場らしい工場一つ見つけ出す事は

出來なかつた。新發田の町はやはり依然たる兵隊町だつた。兵隊のお蔭で漸く食つてゐる町だつた。

製糸場は大倉喜八郎個人のもので、大倉製糸場の看板をさげてゐた。そしてこれは喜八郎の營利心を滿足させるためよりも、寧ろ其の虚榮心のためのものであるやうだ。喜八郎は新發田に生れた。何にかで失敗して、近所ぢうに借金を殘して、天秤棒一本持つて夜逃げしたんださうだ。が、あの通りの大富豪になり、殊には男爵になるに及んで、其の郷里に此の製糸場と、其のすぐそばの諏訪神社の境内に自分の銅像を立てたのであつた。

けれども、こゝにもやはり、道徳的にはもう資本家主義が漲れて來てゐた。喜八郎が自分の銅像を自分で建てる事は喜八郎一人の勝手だ。しかし此の喜八郎の肖像が、麗々しく小學校の講堂にまで飾つてあるのだ。

父の家は十幾軒か引越して歩いた。そして其の中で三四軒火事で燒けたほかには、殆んど皆な昔しの儘で殘つてゐた。僕は其の家の前を、殆んど其の引越し順に、一々廻つて見た。

最初の家は燒けて無かつた。しかし此の家に就いては何んの記憶もなかつた。

其の次ぎの家も燒けて無かつた。小學校へは此の家から通ひ出したのだから、七つか八つまでの頃だと思ふ。隣りに大川津と云ふ大工がゐて、そこに僕よりも一つ二つ年上の男の子と、やはり其の位年下の女の子とゐた。僕は其の二人と友達だつた。

が、僕がそこで思ひ出したのは、此の二人の友達の事ではなかつた。それは、もう一人の、そこから四五丁離れたところにゐた女の友達の事だつた。此の友達の事は、こんごも多分幾度も出て來るだらうと思ふが、かりに光子さんと名づけて置く。

光子さんとは學校で同じ級だつた。僕は何んとなく光子さんが好きで仕方がなかつた。しかしお互の家に交際があるのではなし、近所でもなし、ちよつと近づきになる方法がなかつた。そして學校では、ぶつかりさへすれば、何にかの仕方で意地惡るをしてゐた。

或日僕は、家にゐて、急に光子さんの顏が見たくて堪らなくたつた。そしてそこにゐた大川津の妹の顏をいきなり毆りつけ

て、其の頭にさしてゐた朱塗りの櫛をぬき取つて、それをしつかと握つたまゝ、光子さんの家の方へ駈けていつた。光子さんはうまく家の前で遊んでゐた。僕は握つてゐた櫛をそこへほうりつけて、一目散に又逃げて歸つた。

三番目の家は、三の丸と云ふ町のつき當りの、小學校のすぐそばであつた。學校は改築されてすつかり變つてゐたが、其の家はもう大ぶ打ち傾きながらも三十年前其儘の面影を保つてゐた。

僕はしばらく門前にたゝずんで、玄關のすぐ左りの一室の窓を見つめてゐた。それが僕の室だつたのだ。

窓の障子はとり拂はれてゐて、其の奥の茶の間までも見えた。此の茶の間と僕の室との間にも障子があつた筈なのだ。そして僕の思出は此の障子一つに集まつた。

何にをしたのかは忘れた。が、多分マッチで何にか悪戯をしてゐたのだらう。母にうんと叱られて、其の口惜しまぎれに、障子に火をつけた。障子は一度にパアと燃えあがつた。母は大聲をあげて女中を呼んだ。そして二人であはてゝ障子を押し倒して消して了つた。

此の家から道を距てたすぐ前は、尋常四年の時の教室だつた僕は其の教室のあつたあたりを慄えるやうにして眺めた。

受持の先生が島と云つた。まだ二十歳前後だつたのだらう。ちんちくりんの癖に、いつも妙に口もとを引きしめて、意地悪るさうに目を光らして、竹の根の鞭で机の上をばちばち鳴らしてゐた。何にかと云ふとすぐにそれで打つのだつた。僕は殆んど毎日のやうに此の鞭の下に立ちすくんだ。そして僕は、其の事情はよく覺えてゐないが、此の先生のお蔭で算術が嫌ひになつたやうな氣がする。

其後五六年して僕が幼年學校にゐた頃、暑中休暇に、ふと道で東京で此の先生と出つくはした事があつた。昔しと同じやうに口もとを引きしめて意地悪るさうな目つきはしてゐたが、僕よりもずつと背の低い、みすぼらしい風をした、小僧のやうな書生だつた。

此の學校の先生で覺えてゐるのは、もう一人、齋藤と云ふもうい〻加減な年の先生だつた。二年か三年の時の先生だ。いつも大きな口をあけてげら〳〵笑ひながら、いやに目尻をさげて女の生徒とばかり遊んでゐる先生だつた。よくいやがる光子さんなどを抱きかゝえては、キヤツ〳〵と云はしてゐた。

そして何にか惡戯をすると、きつと其の罰に、女の生徒の敎室に立たした。敎壇の上にあがらして、一杯に水を盛つた茶碗を兩手に持たして、皆んなの方に向かして立たした。僕は先生の方から見えないのを幸いに、いつも舌を出したり目をむいたりして皆んなをからかつてゐた。

此の敎室の向うに敎員室があつて、其の又向うに物置きの土藏があつた。僕は其の敎員室に幾度とめ置きを食つたか知れない。そして時々は其の眞暗な土藏の中にも押しこまれた。そこには古い机や椅子が積み重ねられてあつた。だん〳〵目が馴れて來ると、鼠が其の間をちよろ〳〵するのがよく見えた。あんまり長く置かれると、退屈して、よくそこに糞をたれてやつた。

が、生徒の面倒をよく見てくれたのは、それらの先生ではなくつて小使だつた。背の低い、いつもにこ〳〵したのと、背の高い、でこぼこの恐い顔のと、二人ゐた。二人とも、ひまがあると、小使室で、大きな爐の中の大きな鐵瓶の前で、網をすいてゐた。僕はよく先生に叱られては此の小使室へあまへに行つた。そして小使の云ふ事は僕もよく聞いた。

三

かうして僕は毎日學校で先生に叱られたり罰せられたりしてゐた間に、家でゝも又始終母に折檻されてゐた。母の一日の仕事の主な一つは、僕を怒鳴りつけたり打つたりする事であるやうだつた。

母の聲は大きかつた。そして其の大きな聲で始終何にか云つてゐた。母を訪ねて來る客は、大がい門前まで來るまでに、母がゐるかゐないか分ると云ふ程だつた。其の大きな聲を一そう大きくして怒鳴りつけるのだ。そして其の叱りかたも實に無茶だつた。

「又叱る。」

生來の叱りの僕をつかまへて、叱るたびにかう云つて叱りつ

けるのだ。せつかちの母は、僕がぱち〳〵瞬きしながら口をもぐ〳〵させてゐるのを、默つて見てゐる事が出來なかつたのだ。そして『たたたた……』とでも吃り出さうものなら、もうどうしても辛棒が出來なかつたのだ。そして此の『ゝ吃つた』ばかりで、横つ面をぴしやんとやられた事が幾度あつたか知れない。

『榮。』

と大きな聲で呼ばれると、僕はきつと又何にかの惡戯が知れたんだらうと思つて、おづおづしながら出て行つた。

『箒を持つておいで。』

母は重ねて又怒鳴つた。僕は仕方なしに臺所から長い竹の柄のついた箒を持つて行つた。

『ほんとに此の子は馬鹿なんですよ。箒を持つて來いと云ふといつも打たれる事が分つてゐながら、ちやんと持つて來るんですもの。そして早く逃げればいゝのに。其の箒をふりあげてもぼんやりして突つ立つてゐるんでせう。猶癪にさはつて打たない譯には行かないぢやありませんか。』

母 僕の頭をなでながら、やはり軍人の細君の、仲好しの谷さんに云つた。

『でも、箒はあんまりひどいわ。』

谷のお母さんもやはり家の母と同じやうに大勢の子持だつた。そしてやはりよく其の子供を打つた。しかし母に此の抗議をする資格は十分にあつたのだ。

『それや、ひどいとは思ひますがね。もうかう大きくなつちや、手で打つんではこつちの手が痛いばかしですからね。』

谷のお母さんは、優しい目で『でも、ひどいわね』と云ふ意味を僕に見せながら、それでもやはりこれには同感してゐたやうだつた。そして話はお互の子供の腕白さに移つて行つた。

が、僕は母の云ふ此の『馬鹿なんですよ。』に少々得意でゐた。そして腹の中で窃かにかう思つてゐた。

『箒だつてそんなに痛かないや。それに打たれるからつて逃げる奴があるかい。』

父はちつとも叱らなかつた。

『あなたがそんなだから、子供がちつとも云ふ事を聞かないんですよ。』

母はよく父を歯がゆがつて責めた。そして日曜で父が家にゐる時には、今日こそは是非叱つて下さいと迫つた。

『今日は日曜だからな、あしたうんと叱つてやらう…………うん、さうか、又喧嘩をしたのか…………何に、勝つた？…………うん、それやえらい、でかした、でかした…………』

父は母が迫れば迫る程呑氣だつた。

母はたべ物に隨分氣むづかしかつた。殊に飯にはやかましかつた。

『僕のもめつかちだよ。』

母が飯の小言を云ふと、僕もすぐそれについて雷同した。

『心が曲つてゐると、めつかちのご飯が行くんだ。お父さんのなんか、それやおいしい、いゝご飯だ。』

僕は父がかう云ふんで、ほんとうかしらと思つて、無理に父の茶碗の飯を食つて見た。しかしそれは、勿論、やはりめつかちだつた。

父はこんな風で、女中等にも小言一つ云つた事がなかつた。

父は家の事も子供の事もすつかり母に任しきりにしてゐたのだ。それで、小言も云はない代りに、家の事や子供等とはまるで沒交渉でゐたのだ。朝早く隊へ出て、夕方歸つて來て、夜は大がい自分の室で何にか讀むか書くかしてゐた。で、子供等は朝飯と夕飯の時のほかは、めつたに父と一緒の事はなかつた。

それでも父は僕を軍人に仕こむ事だけは忘れなかつたやうだ。父が日清戰爭に行く前の事だから、僕がまだ九つか十の時だ。父は毎日他の士官等と一緒に、家のすぐ前の練兵場の射的場で、ピストルの稽古をした。それにはきつと僕を連れて行つた。そして僕にもピストルの擊ちかたを敎へて擊たして見た。

僕が父の馬に乘るのを覺えたのも、やはり其の頃の事だつた。

又、其の日淸戰爭から歸つて來てからは、一里ばかりある大寶寺と云ふ、ほんとうの實彈射擊をやる射的場へ連れて行つた。そしてそこでは、ピウ／＼頭の上へ彈丸が飛んで來る、的の下の穴の中へ連れて行かれた。

十四か五の時には刀劍の見かたを敎はつた。刀屋が刀を持つて來ると、僕もきつと其の席に出しやばつてゐた。そして無銘の新刀を一本買つて、藁の中に竹を入れて束ねたのを試し斬りをやらされた。スパリ／＼と氣持よく斬れた。

幼年學校にはいつてからは、暑中休暇に是非一度、佐渡へ地圖をとりに連れて行くと云つてゐたが、これは父の方にひまがなくつて果されなかつた。そして一二度、一二泊の近村への演習に連れて行かれた。

それと、幼年學校にはいる前に父からドイツ語を少し敎はつたほかには、僕は子供の時の父との親しい交渉をあまり覺えてゐない。

日淸戰爭前には、僕の家は、今云つた練兵場に沿ふた、片田町と云ふのにあつた。四番目の家だ。これも燒けて無かつた。其頃の僕の遊び場は練兵場だつた。

射的場と兵營のお濠との間に障害物があつた。これは、二三百米突ばかりの間に、灌木の藪や、石垣や、濠や、獨木橋や、木柵などをならべ立てたもので、それを兵隊が競走するのだつた。僕はそこで毎日猿のやうに、藪を飛び、濠を越え、橋を渡つて遊んでゐた。兵隊が競走してゐるそばへ行つて、それと一緖に走り出しても、大がいは僕が先登だつた。それが飽きると、と云ふよりも寧ろ、もう夕方近くなつて兵隊が皆な隊に歸ると、僕はよく射的場の彈丸をほりに行つた。

大寶寺の方の彈丸は鉛の細長いのだつたが、こゝのは丸かつた。昔の單發銃のだから隨分大きかつた。僕はそれを四十も五十も拾つて來ては、それを溶かして、いろんな形をこしらへて喜んでゐた。

此の彈丸をほる事は一つの冒險だつた。時々衞兵が見廻りに來た。衞兵でない兵隊もよくそこを通つた。で、普通は、夜暗くなつてからでなければ取りに行かなかつたのだ。

が、僕の此の例を見て、仲間が大ぶ増えた。そして其の仲間等は、僕が一緒にゐれば見つかつて捕まつても大事はないと思つたのか、いつも僕を誘つては取りに行つた。僕は此の仲間の中にはいつて妙な事を發見した。それは、皆んなの彈丸を一つにまとめて、ジャン拳で番をきめて、どこかへそれを賣りに行くのだつた。そして歸りには何にかの菓子を買つて來た。僕も一度其の仲間入りをした。尤もジャン拳だけは遁れた。そしてそれがどうした譯だつたか、其の一度きりで僕は又仲間はづれになつて了つた。此の仲間と云ふのは、町はづれの、ちよつと貧民窟と云つたやうなところの子供等だつた。

此の家の裏に廣い竹藪があつた。栗だの、柿だの、梨だの、梅だの、いろんな果物の木もあつた。

そして其の竹藪には、孟宗のほかに、細い、其の竹の子をおもちやにしてポン／＼吹いて鳴らす竹があつた。やはりどうかした拍子に急に會ひたくなつて、僕は一度、其の竹の子を持つて光子さんのところへ行つた事があつた。

しかし此の竹藪はそんな優しい事ばかりには使はれなかつた。

新發田は新發田町と云ふのと、新發田本村と云ふのと二つに分れてゐた。町と云ふのは昔の町人町で、本村と云ふのは侍屋敷のあつたところだ。今でもやはりさうだが、其の當時もやはり大體さうなつてゐた。小學校も尋常小學校は別々にあつた。そして此の町と本村では、風俗にも氣風にも、大ぶ違ふところがあつた。

町の子が練兵場に遊びに來ると、彼等は障害物も何にも出來ないので僕等はよく彼等をからかつたり苛めたりした。こんな事がいろ／＼と重なつて、とう／＼町の子と僕等との長い間解けなかつた大喧嘩となつた。

僕等の方は十二三の子が十人程ゐた。士官の子は僕一人で。あとは皆な土地の子だつた。そして僕は十で一番年下だつた。町の方は二十人位から三十人位までゐた。年はやはり十二三が多いのだが、十四五のも三四人まじつてゐた。

戰爭は大がい片田町から町の方の仲町と云ふのに通ずる竹町で行はれた。いつも向うから押しよせて來るので、僕等はそれを竹町の入口で防いだのだつた。竹町と云ふのは、割りに道はゞも廣く、それに兩側に家がごくまばらだつたので、暗默の間にそこを戰場ときめて了つたのだ。

僕は家の竹藪から手頃の竹を切つて來て皆んなに渡した。手ぶらで來た敵は、それでもう第一戰で負けて了つた。

次ぎには彼等もやはり竹竿を持つて來た。しかしそれは、多くは、長い間物ほしに使つたのや、或はどこかの古い垣根から引つこぬいて來たのだつた。接戰がはじまつて、兩方でパチ〳〵叩き合つてゐるうちに、彼等の竹竿は皆なめちやくちやに折れて了つた。

二度とも僕は一番先登にゐたんだが、向ふでもやはり二度とも同じ奴が先登にゐた。そいつは仲町の隣りの下町の、或る豆腐やの小僧で、頭に大きな禿があるので、それを隱すためにちよん髷を結つてゐた もう十五六になつてゐたんだらうが、喧嘩がばかに好きで、一錢か二錢かで喧嘩を買つて歩くと云ふ男だつた。此の時にもやはり幾らか出して敵の仲間に入れて貰つたのだ。僕はそいつが氣味が惡いのと同時に、憎らしくつて堪らなかつた。で、どうかしてそいつを取つちめてやらうと思つてゐた。

三度目の時は石合戰だつた。兩方で懷にうんと小石をつめこんで、遠くからそれを投げ合つては進んで行つた。どうしたのか、敵の方が早く彈丸がなくなつて、そろ〳〵尻ごみしはじめた。僕はどし〳〵詰めよせて行つた。敵は總敗北になつた。が、ちよん髷先生たゞ一人、ふみ止まつてゐて動かない。とう〳〵皆んなでそいつをおつ捕へて、さん〳〵に蹴つたり打つたりして、そばのお濠の中へほうりなげて、凱歌をあげて引きあげた。

四

僕はこんな喧嘩に夢中になつてゐる間に、益々殺伐なそして殘忍な氣性を養つて行つたらしい。何んにもしない犬や猫を、見つけ次第になぐり殺した。そして或日、例の障害物のところで、其時には殊更に殘忍な殺しかたをしたやうに思ふが、とに

かく一疋の猫をなぶり殺しのやうにして家に歸つた。自分でも何んだか氣持が惡くつて、夕飯もろくに食はずに寢て了つた。

母は何んの事とも知らずに、心配して僕の枕もとにゐた。大ぶ熱もあつたんださうだ。夜なかに、ふいと僕が起きあがつた。母はびつくりして見守つてゐた。すると僕が妙な手つきをして、『にやあ』と一と聲鳴いたんださうだ。母はすぐにすべての事が分つた。

『ほんとうに氣味が惡いの何んのつて、私あんな事は生れて始めてでしたわ。でも私、猫の精なんかに負けちや大變だと思つて、一生懸命になつて力んで、「馬鹿ッ」と怒鳴ると一緒に平つ手でうんと頬ぺたを毆つてやつたんです。すると、それでもまだ妙な手つきをしたまゝ、目をまんまるく光らしてゐるんでせう。私もう堪らなくなつて、もう一度「意氣地なし、そんな弱い事で猫などを殺す奴があるか、馬鹿ッ」と怒鳴つて、又頬ぺたを一つ、ほんとうに力一杯に毆つてやつたんです。それで、其儘横になつて、ぐう〳〵寢て了まひしたがね。ほんとうに私、あんなに心配した事はありませんでしたよ。』

母はよくかう云つて其時の事を人に話した。そして僕は、其時以來、犬や猫を殺さないようになつた。

やはり片田町の其の家にゐた時の事だ。

正月に下士官が大勢遊びに來た。父はしばらく其のお相手をしてゐたが、やがて奥の自分の室にはいつて寢て了つた。父は酒が飲めないんで、少しでも飲むとすぐに寢て了ふんだつた。

下士官等はまだ長い間座敷で飲んでゐた。が、其のうちに、誰れか一人が『副官がゐないぞ』と怒鳴り出した。

『怪しからん、どこへ逃げた。』

『引きずつて來い。』

『來なけれやこれで打ち殺してやる。』

へべれけに醉つた四五人の曹長共が、長い劍を拔いて立ちあがつた。僕は其の次ぎの室で、母や女中と一緒に、どうなる事かと思つてはら〳〵して聞いてゐた。

『奥さん、副官をどこへ隱した？』

曹長共は其の間の襖を開けて母に迫つて來た。僕は母にびつ

たりと寄り添つてゐた。女中は青くなつて慄えてゐた。

『どこへも隠しやしません。宿も又どこへも逃げかくれはしません。さあ、私がご案内しますからこちらへいらつしやい。宿は自分の室でちやんと寝てゐるんです。』

母はから云ひながら突つ立つて、

『榮、お前も一緒においで。』

と僕の手をとつて、さつさと父の室の方へ行つた。そしてそこの襖を開けて、

『さあ、皆さん、此の通りこゝに寝てゐるんです。突くなり斬るなり、どうなりともお勝手になさい。』

と、きめつけた。僕も母の此の元氣に勢ひを得て、どいつでも眞つさきに此の室へはいつて來る奴に飛びついてやらうと、小さな握拳をかためて身構へてゐた。

が、曹長共は母のけん幕に飲まれて、うしろの方から一人逃げ二人逃げして、とう〳〵皆んな逃げ出して了つた。そして匆々にして歸つて了つた。

翌日、其の下士官共が一人づゝあやまりに來た。僕は母と一緒に玄關に出て、其の悄氣かへつた様子を見て、痛快でもあり又可笑しくて堪らなかつた。

父が日清戰爭で出征するとすぐ、竹町とは反對の方の片田町の隣りの、西ケ輪と云ふ町に引越した。齋藤と云ふ洋服屋の裏の小さな家だつた。そして父がまだ宇品で御用船の出帆を待つてゐる間に、母に男の子が生れた。父から「イサムトナヲツケロ」と電報が來た。三の丸では次弟が生れた。片田町では三番目の妹が生れた。そして、これで僕は三人の妹と二人の弟との五人の兄きとなつた。母は此の六人の子と一人の女中と都合八人で、二階一間下三間の、庭も何んにもない小さな家にひつこんだのだ。片田町の家は七間か八間あつた。そして出來るだけの儉約をして貯金を始めた。

母は假名のほかは書けないので、手紙の上封は皆な僕が書かされた。中味も、父と山田の伯母へやるのゝほかは、大がい僕が書かされた。母が口で云ふのを候文になをして書くんだが、

まだ學校で教はらないやうな用事ばかりなので閉口した。母は隨分もどかしながらも、其の出來あがるのを喜んで、自慢で人に見せてゐた。しかし僕は、それよりも、よそから來る手紙を母に讀んで聞かせる方が、よほど得意だつた。

或日僕は學校から歸つて來た。そしていつもの通り『たゞ今』と云つて家にはいつた。が、それと同時に僕はすぐハッと思つた。母と馬丁のおかみさんと女中と、それにもう一人誰れだつたか男と、長い手紙を前にひろげて、皆んなでおろ〳〵泣いてゐた。僕はきつと父に何にかの異狀があつたのだと思つた。僕は泣きさうになつて母の膝のところへ飛んで行つた。

『今お父さんからお手紙が來たの。大變な激戰でね、お父さんのお馬が四つも大砲の彈丸に當つて死んだんですつて。』

母は僕をしつかりと抱きしめて、赤く腫れあがつた大きな目からぼろ〳〵涙を流して、其の手紙の內容をざつと話してくれた。

場所は威海衛だ。父の大隊は海上に二艘日本の軍艦が浮んでゐるので、安心して海岸の方へ廻つて行つた。すると其の軍艦が急に日章旗をおろして砲擊を始めた。それが鎭遠定遠だとか云ふ事だつた。父の大隊は驚いて逃げだした。するとこんどは其の逃げ出すさきの丘の方から、味方の軍隊が盛んに鐵砲を打ち出した。多分、日本の軍艦から砲擊されるんだから敵の軍隊だらうと思つたんだらう、と云ふ事だつた。父の大隊は敵と味方とに挾みうちされて進退きはまつた。

大隊の副官であつた父は、すぐに大隊長と相談して、其の味方の軍隊まで傳令に行つた。敵の砲彈は益々花火のやうに散る。味方からの彈丸も益々霰のやうに飛んで來る。父は其の間を二人の騎兵を連れて駈けて行つた。が、其の一人はすぐに倒れて了つた。そして父の馬も又續いて倒れて了つた。父は仕方なしにもう一人の騎兵をそこに殘して、其の馬を借りて又駈け出して行つた。

『それで首尾よく任務は果したんださうだがね。可哀さうにお馬は、お腹と足と四つも彈丸を受けて、其の場で死んで了つたんですとさ。お父さんのお身代りをしたんだわね。』

母はから云つて又大きな涙をぽろ／＼と流した。馬丁のかみさんも女中も又一緒になつて泣いた。しかし僕は、あの馬が父の身代りをしてくれたのかと思ふと、何んだかから非常に勇ましいやうな氣がして、どうしても泣けなかつた。

父が凱旋して來てから、或日家で、其の當時の同じ大隊の士官連が集まつて酒を飲んだ事があつた。

「奥さん、此の男が其時に即死の電報のあつた男ですがね。其の筈ですよ。今でもまだこんな大きな創が殘つてゐるんですからね。』

もう大ぶ酒がまはつた頃に、一人の士官がもう一人の士官の肩を叩いて云つた。そして、

『おい、貴様はだかになれ。何に、構ふもんか、名譽の負傷だね、奥さん。』

と云ひながら、無理に其の士官をはだかにさせて了つた。酒に醉つて眞赤になつてゐる背中の、左の肩から右の腋の下にかけて、大きな創あとの溝がほれてゐた。

『此の通り、腕が半分うまつて了うんですからな。』

最初の士官が腕を延ばして、それを其の溝の中へ當てがつて見せた。實際其の腕は半分創あとの中にうまつてゐた。

さすがの母も『まあ』と云つたきり顔をそむけてゐた。僕も少し氣味が惡るかつた。

父の馬も此の士官と同じやうに、一旦即死を傳へられた後に生き返つて、ちんばになつて歸つて來た。父は母と相談して、生涯飼ひ殺しにしたいと云つてゐたが、さうも出來ないものと見えて其後拂下げになつて了つた。

父は此の功で金鵄勳章を貰つた。

僕は今まであちこちの父の家が燒けて無くなつてゐたと書いて來た。それは、やはり此の日清戰爭で留守の間に、與茂七火事と云ふ大きな火事があつたのだ。

幾月頃か忘れたが、もう薄ら寒くなつてからの事のやうに思ふ。或る夜、十一時頃に、火事が起きた。僕のゐた西ヶ輪は新發田の殆んど西の端で、其の火もとは殆んど東の端だつた。で、一時間ばかりは、家で其の火の手のあがるのを見てゐた。

だ、火は容易に消えさうもなかつた。益々火の手が大きくなつて近所へ燃え移つて行くやうだつた。

僕はすぐ走つて見に行つた。そして一時間か二時間あちこちで見物してゐた。或時には火のすぐそばまで行つて見た。と云ふよりも寧ろ、火にすぐそばまで追つかけられて來た。火事場から四町も五町も遠くで見てゐたつもりなのに、うつかりしてゐるうちにもう火がすぐそばまで來てゐた。火焔の舌が屋根を甜めるやうにして走つて來るのだ。そして、僕は、さうかうしてゐるうちに、火事場へ走つて行く人は殆んどなくなつて、火事場の方から逃げて來る人ばかりなのに氣がついた。

長い間天氣が續いて、薄い板の木つ葉屋根がそり返へる程に乾ききつてゐた。火は此の屋根の上を傳つて、あちこちの道に分れて、しかもそれが皆な飛ぶやうにして走り廻るのだ。遂には消防夫すらも逃げて歸つた。

僕もあはてゝ家の方へ走つた。そして二三丁行つた頃に、今まで其のそばで見てゐた鬼子母神と云ふ寺に火のついたのを見た。茅ぶきの大きな屋根だ。それが其の屋根一ぱいの大きな火の柱になつて燃え出した。

火はまだ僕の家からは七八町のところにあつた。しかし僕はもう當然それが僕の家まで燃えて來るものと思つた。僕は家に歸つてすぐ母に荷物を出すようにと云つた。近所でももう皆な荷ごしらへにかゝつてゐたのだ。

『見つともないからそんなにあはてるんぢやない。』

母はかう云つてなか／＼應じない。しかし火の手はだん／＼近づいて來る。僕はもう一時間としないうちにきつと火がこゝまで來ると思つた。そして母にせめては荷ごしらへでもするように迫つた。

『荷物は近所で皆な出して了つてからでも間に合ひます。あんまり急いで、あとで笑はれるやうな事があつてはいけません。まあ、もう少しそこで見てゐらつしやい。』

母はかう云ひながら、しかし女中には何にか云ひつけてゐたやうだつた。そしてしばらくして僕を呼んだ。

『もういよ／＼あぶないから、お前は子供を皆んなつれて立ちのいておくれ。練兵場の眞ん中の、あの銀杏の木のところね。

あそこにじつとしてゐるんだよ。いゝかい、決してほかへは行かないようにね。』

母はふろしき包みを一つ僕に持たしてから云つた。そしてすぐの妹に一番下の弟をおんぶさした。

西ケ輪を眞つすぐに行けば、三四丁でもう練兵場の入口なのだ。練兵場にはもうぼつ〳〵荷物が持ちこまれてあつた。僕等は母の云ひつけ通り銀杏の木の下を占領した。

此の銀杏の木は前に云つた射的場ともとの僕の家の間にあつた。そして其の家にはやはり軍人の秋山と云ふのが住んでゐた。母は其の『秋山さんの伯母さんに皆んなが銀杏の木の下にゐる事を知らしてお置き』と注意してあつた。

秋山家ではのん氣でゐた。裏は廣し、近所は離れてゐるし、どんな事があつても大丈夫だと安心してゐた。が、僕が其の家を出て銀杏の木の下に歸るか歸らないうちに、僕は大きな火の玉のやうなものがそこの屋根へ落ちたのを見た。そしてアッと思つてゐるうちに、それがパッと燃えあがつた。

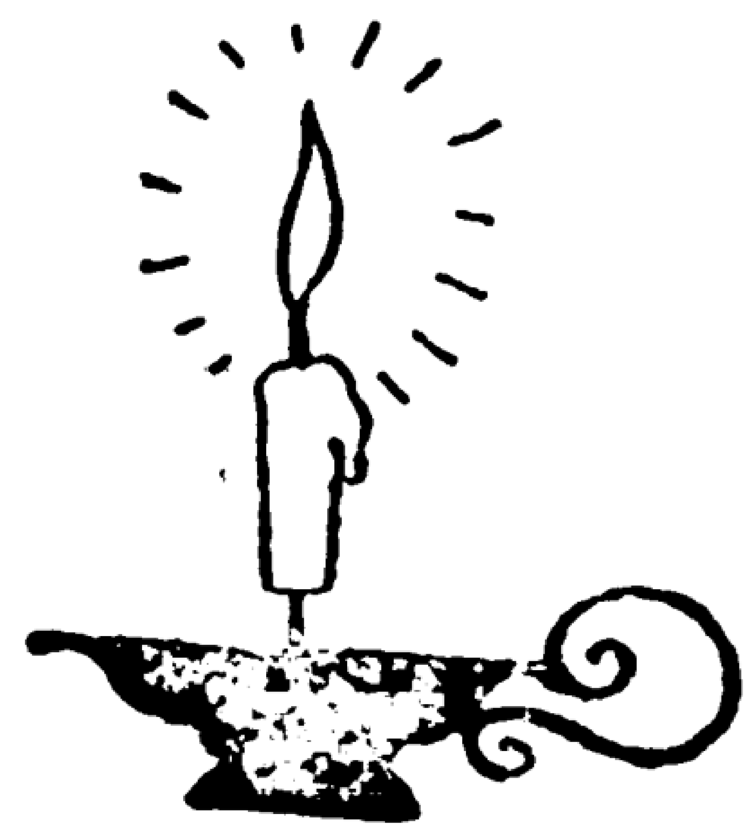
母と女中が少しばかりの荷物を持つてやつて來た。僕は布團にくるまつて寢て了つた。

火は翌朝頃まで續いて、新發田の謂はゆる町の殆んど全部と本村の一部分の、二千五百戸ばかりを燒いて了つた。

與茂七火事と云ふのは、其の幾十年か前にも一度あつたんだそうだ。與茂七と云ふのが無實の罪でひどい拷問にあつて殺されて了つた。其のたゝりなんださうだ。そして現に、今云つた秋山家の家は、當時其の拷問をした役人の一人の家だつたさうだ。それで近所は皆な燒け殘つたのに、特に其の家だけが燒けたいだそうだ。僕の見た火の玉と云ふのもほかに見たと云ふ人が大勢あつた。ほかにもまだ、大ぶあちこちにさう云つた家があつた。そしてそれは、秋山家をはじめ殆んど皆な、大きな茅ぶきの古い家だつた。僕のゐた其の家のあとは、いまだに、まだ家も出來ずに廣いあき地になつてゐる。

大倉喜八郎の銅像が立つてゐる諏訪神社の境内に、與茂七神社と云ふ小さな社がある。これは其後與茂七を祀つたものだ。

（つゞく）



塵紙にかきつけし歌

—監房にて—

賀川豊彦

眞夜中の　一時は鳴りぬ　二時きゝぬ
醒めたる　我は　獄の虫とる

監房は　思つたよりも　かまびすし
隣の室は　いとど賑はし

看守等の　心めでたや　朝顔を
鐵窓つたひ　植えしゆかしさ

猿のよう　両手をのばし　柵いだき
外見る子らの　心悲しや

右に向き　左に廻り　あちこちと
獄屋の中を　我は歩めり

わが友は　監房の戸口に　額あて
よよとぞ泣きぬ　眼もあてられぬほど

監房に　一杯の水　うくるとき
人のなさけの　ありがたきかな

冥想の　その折々の　身のたるみ
疲れ果てたる　このみぞ憎き

朝夕に　數度居直り　わが神よ
千歳の磐よと　强く祈れり

南なる窓よりもるゝ　太陽は
その輝きを　かくさざりけり

たゞ一人　獄の內に　友を得ぬ
蝿とり蜘蛛は　そのひとりなり

いつまでも　いつまでたつも　離ざるは
監房の窓を　よぎる夏雲

折々は雜巾絞り　床をふく
我を顧み　ひとりほゝえむ

僧房の　その生活に　似たるかな
我とみ神と　二人にしあれば

薄明の　それにも似たる　わが心
祈れる時の　白日の空

三年も　五年も　此處に置かれても
神捨てざれば　うきことはなし

電燈の光は鈍し　本はなし
閉じたる眼には　灯の用もなし

監獄の　みかげの垣の　夏日うけ
きらめく時の　美しいこと

一坪五勺　ひろくもあらぬ獨房を
ぐるぐる廻る室内の旅

獨房の中を　ぐるぐる廻りつゝ
塵紙とりて　文字を書く我

獄屋まで　もりくる響　ハンマーと
川崎の笛の　悄くもあるかな

夕ぐれに　牢の高壁打越えて
子らの呼ぶ聲　うれしげにみゆ

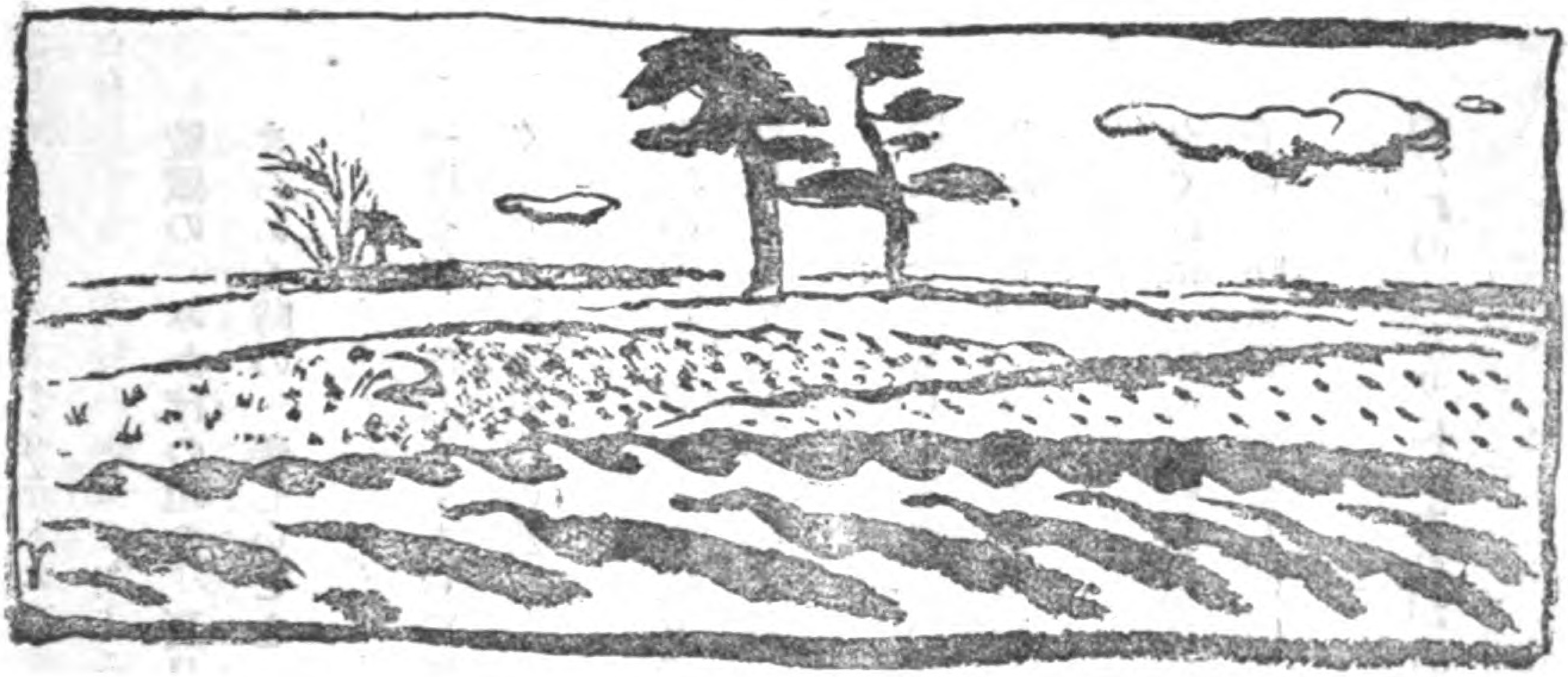
「だれのとなりに　たれが居る」聲打ち揃へ
呼ぶ聲に　我は牢屋を忘れてありぬ

雑巾を　硝子にあてゝ　顔みれば
わが口髭は　ものになりけり

暑ければ　差入の扇　ばたつかせ
夜の目もねずに　風を送りぬ

ひまなれば　水もてあそび　顔洗ひ
腕つきこみて　ひとり戯る

——一九二一・八・七



ホワイト・ファング（白牙）

Jack London 著
堺利彦 譯

二　囚はれの身

ホワイト・ファングはそれから日々無數の經驗を積み重ねた。キチが棒に繋がれてゐる期間、彼はキャンプ中を走りまわつて、研究し、調査し、學問した。彼は速かに人間動物のする事を色々と知り得たが、其親しみは決して輕蔑を生まなかつた。彼が人間を知れば知るほど、人間は益々其の優勝を證し、益々其の神秘を現はし、益々大きく其の神々しさを寫し出だした。

人間は屢々、自分の神樣が放り棄てられ、其の祭壇が崩れ落ちるといふ悲みを持つが、人間の足元に這ひまつはる狼と荒犬とに取つては、そういふ悲みは曾て無かつた。人間の神樣は目に見えぬ物、推量の作り物であり、現實の外殼を胡麻化す空想の雲霧であり、斯くありたしと望む善と力との幽靈であり、自我を心靈界に移した不思議の發生物であるが、それとは違ひ、人間の火に降伏した狼と荒犬とは、自分の神樣を生きた肉の中に、即ち觸覺に感ずる實體を持ち、地上に空間を占め、そし

て其の目的の成就と其の存在との爲に時間を要する、生きた肉の中に發見する。斯樣の神樣に對する信仰には、何等の努力も必要でない。如何なる意志の努力も、斯樣な神樣に對して不信仰を生じさせる事は出來ない。又この神樣から逃げる事はどうしても出來ない。現にそれは、手に棍棒を持ち、恐ろしい力を貯へ、癇癪持で、怒りつぽくて、そして又柔しくて、二本の後ろ足で目の前に立つてゐる。卽ちそれは、引裂けば血の出る肉、他の肉と同じように食へば旨い肉に包みこまれた、神であり、不思議であり、力である。

ホワイト・フアングに取つても正に其の通りであつた。人間動物は、見違へる事の出來ない、そして逃げる事の出來ない神樣であつた。母のキチが自分の名を呼ばれた其の一聲で、彼等に忠順を捧げたと同じように、彼も矢張り忠順を捧げはじめてゐた。彼は疑ふべからさる人間の特權として、自分を勝手にする事を彼等に許した。彼等が歩いてゐれば、彼は其の道をよけた。彼等が呼べば、彼は行つた。彼等が威嚇すれば、彼はヒレふした。彼等が去れと命令すれば、彼は急いで逃げた。なぜと云ふに、彼等の意向の背後には、其の意向を强制すべき力があつた。卽ち害を與へる力があつた。打撲と棍棒との中に發現する力、石投げと鞭打ちとの中に發現する力があつた。

總ての犬が彼等の所有に屬してゐると同じく、彼も矢張り彼等の所有に屬した。彼れの行動は彼等の命令する儘であつた。彼れの身體は彼等がチョウチヤクし、踏みにじり、或は寬恕する儘であつた。彼が速かに其の心に銘じた敎訓は正に斯くの如きものであつた。然しそれは、彼れの本性の中に强烈であり優勢である氣分と相反するので、彼には隨分つらい事であつた。從つて彼はそれを學ぶ事を好まなかつたが、我れ知らず、いつの間にか、それを好む事を學んでゐた。これは自分の運命を他人の手に置く事、卽ち生活の責任の轉嫁であつた。そこに自然の償ひがついてゐた。他人に寄りかゝる事は、獨りで立つよりも常に容易である。

然し此の、身心共に人間動物に捧げる事が、總て一日の中に起つたのでは無かつた。彼は其の野性の遺傳と、蠻地の記憶とを、直ちに棄て去るに堪へなかつた。或る時々には、森のふちに忍んで行つて、遙かの彼方から彼に呼びかけてゐる何者かに耳を傾けた事もあつた。そしていつでも、そわ／＼と氣持わるく歸つて來て、キチのそばに坐つてジレ／＼した小聲で泣きながら、物を問ふような熱心な舌先で母の顏を甞めてゐた。

ホワイト・フアングは速かにキャンプの物事を呑み込んでしまつた。肉や魚が彼等の食物として投げ與へられた時、彼は年

取つた犬共の不正と貪婪とを知つた。彼は又、男達がヨリ公平である事、子供達がヨリ殘酷である事、そして女達がヨリ親切で、ヨリ多くの場合、肉や骨の切れを彼に投げてくれる事を知つた。それから半成長の小犬等の母親に對して二三回の冒險をやつた後、彼はいつでもそういふ母親達に構はず、出來るだけ彼等と遠ざかり、若し彼等が來るのを見ればそれを避けるが上策だといふ事を心得た。

然るに彼れの生活の憂ひはリプ・リプであつた。リプ・リプは自分のヨリ大なる事と、ヨリ強い事と、年長とを恃みにして、特にホワイト・フアングを迫害の目的物に擇んだのであつた。ホワイト・フアングは固より喜んで應戰したが、迚も叶はなかつた。敵は餘りに大きかつた。リプ・リプは彼に取つて夢の惡魔となつた。彼が母のそばを離れて出かけると、此の意地惡がいつでも必ずやつて來て、彼れの跡をつけ、唸りかゝり、追ひすがり、そして近處に人間のゐないスキを覘つては、彼に跳りかゝつて戰鬪を迫るのであつた。リプ・リプはキツト勝つので、面白くて堪らなかつた。彼れの生活上、それが主要の樂しみとなつた。從つてそれがホワイト・フアングの主要な苦しみとなつた。

然し其の結果はホワイト・フアングを凹ます事にはならなかつた。彼は多くの負傷を蒙り、そしていつも負けてはゐたが、彼れの精神は依然として屈從しなかつた。所が、そこに一つの惡い結果が生じた。彼は怨みぶかくなり、又氣むづかしくなつた。彼れの氣質は固より獰猛であつたが、其の獰猛が此の絕えざる迫害の爲に一層甚だしくなつた。無邪氣な、戲むれ好な、小犬としての彼れの一面は、殆んど現はれなくなつた。彼はキャンプの中の他の小犬と、曾て戲むれた事もなく、フザけた事もなかつた。リプ・リプがそれを許さないのであつた。若しホワイト・フアングが彼等のそばに行くと、リプ・リプが直ぐ彼に襲かかり、彼をいぢめ、彼を懲らし、彼と戰ひ、結局、彼を追ひにがしてしまふのであつた。

斯ういふ事の結果は、ホワイト・フアングから小犬の氣質の大部分を奪ひ去り、年の割にませた身の持方をさせるようになつた。彼れの精力は遊戲に依つて外に發散される事がないので、自然にナイコウして心的作用を發達させた。彼はズルクなつた。彼はズルの方法を考へこんで、獨りで暇をつぶす事があつた。彼はキャンプ犬共の一般の食事時に、肉や魚の分前にあづかる事を妨げられるので、非常に敏捷な泥棒になつた。彼は自分で食物を徵發せねばならなかつた。そして旨くそれをやつた。尤も折々は、其の結果として、かみさん達にヤツつけられた。彼

は又、キャンプの間を忍びあるいて、巧みにどこで何が行はれてゐるかを知り、有らゆる事を見及び聞き、そしてそれに依つて推論して、アノ執念ぶかい迫害を避ける方法手段を、上手に案出する事を覺えた。

まだ迫害の初めの頃、彼は初めて一度本當の、巧妙な、大策略をやつて、それで初めて復讐の快味を知つた。キチがまだ狼共と一緒にゐた時、人間のキャンプから犬共をおびきよせて殺したが、ホワイト・フアングは今、稍やそれに似た遣方で、リプ・リプをおびきよせてキチの復讐の顎にかけた。ホワイト・フアングはリプ・リプの前に退却しつゝ、キャンプ中のあちこちの天幕の、中や外や廻りを縫つて、間接に逃げあるいた。彼は走る事が上手で、同じ程の大きさの、如何なる小犬よりも早かつた。從つてリプ・リプよりも早かつた。けれども此の駈けくらでは、彼は最上の早さを出さなかつた。彼は僅かに追ひつかれないだけにして、只だ一歩だけ追跡者の前に走つてゐた。

リプ・リプは此の駈けくらに昂奮して、殊に敵が絶えず近く目の前に在るのに昂奮して、用心と場所柄とを忘れてしまつた。彼が其の場所柄を思ひだした時には、モウ晩かつた。或キャンプのまわりを全速力で突進して、彼はキチが縛り棒の果に寢てゐる、其の眞前に飛びだして來た。彼は驚愕の悲鳴を一つ擧げたが其の時にはもうキチの懲罰の兩顎が彼れの上に締まつてゐた。キチは繋がれてゐたけれども、リプ・リプは容易に彼女から逃れる事が出來なかつた。彼女は彼を横さまに轉がして、逃げる事の出來ないようにしておいて、幾度も幾度も牙で彼を嚙み裂いた。

彼はヤットの事で彼女の足元から轉がりだし、心身共に傷を受けて、ショゲ返つて僅かに起きあがつた。彼れの毛は、彼女の歯が嚙みついた所だけ、からだ中のあちこち、房になつて拔けあがつてゐた。彼は起きあがつた所に立つたまゝ、其の口を開いて、長い、悲しげな、小犬の泣聲を發した。然るに其の泣聲さへも終る事を許されなかつた。丁度、其の最中、ホワイト・フアングが跳りこんで、リプ・リプの後ろ足に其の歯を喰ひ入れた。リプ・リプにはモウ全く鬪ふ元氣がなかつた。彼は見苦しくも逃げだした。そして敵は彼れの踵に追ひ迫つて、彼れの天幕に走りつくまでのべつに彼を惱ました。こゝでかみさん達が初めて彼れの加勢に出て來た。そしてホワイト・フアングの惡魔の荒れ狂ひが、石ころの一齊射撃でヤットのこと追ひ拂はれた。

兎かくする中、キチがもう逃げる氣遣ひはないと灰色狸が判斷して、或日彼女を解き放した。ホワイト・フアングは母の自由

になつたのを大變に喜んだ。彼は嬉しそうにして、彼女と一緒にキャンプの中を歩きまわつた。そして彼が彼女のそばに居る間はリプ・リプが敬意の距離を保つてゐた。ホワイト・ファングが彼に對して、毛を逆立てたり、足を堅く踏みしめて見せたりしても、彼は其の挑戰を無視してゐた。彼も馬鹿でなかつた。如何に復讐はやりたくても、彼はホワイト・ファングが獨りでゐる處を見つけるまで待つ事を知つてゐた。

其日の後ほど、キチとホワイト・ファングは、キャンプに續いてゐる森の端まで行つてゐた。ホワイト・ファングが一歩々々、母をそこまで導びいたのであつた。そして今、彼女が立止まつた時、彼はモット遠く彼女を誘ひ出さうとした。あの川、あの洞穴、あの靜かな森が彼に呼びかけてゐた。彼は彼女と一緒に行きたいのであつた。彼は五あし六あし走つて行つて、そこで立止まつて振返つた。彼女は動かなかつた。彼は口說くような泣き聲を出した。そしてふざけた身振りで小藪の中を、チョコ〱と出たりハイつたりした。次に彼は母の處に走り戻つて、其の顏を甞めて、そして又走つて行つた。それでも彼女はまだ動かなかつた。彼は立止まつて、其の全身の身振りに決意と熱心とを示しながら、ジット彼女を見つめてゐたが、彼女がうしろを向いてキャンプを見返した時、彼れの其の身振も次第に消えた。

此の打開いた野の中には、何かしら彼を呼んでゐる者があつた。彼れの母もそれを聞いてゐた。けれども彼女は又、他の一層高い呼び聲、即ち火と人との呼び聲を聞いてゐた。其の呼び聲は、有らゆる動物の中で、只だ狼ばかりに、(狼と、其の兄弟なる荒犬とばかりに)、聞かされた呼び聲であつた。

キチは向き直つて、そろ〱キャンプの方に刻み足で戻つて行つた。棒の物質的束縛よりも、キャンプのほだしの方が彼女に取つて一層强かつた。目には見えないが、神々の隱微な力が矢張り彼女を摑んで、放さないのであつた。ホワイト・ファングは樺の木の蔭に据つて、低い聲で泣いてゐた。松の强い香をりや、色々な幽かな木の香が空中に漲つて、それが彼に、今の囚はれの時代以前の、昔しの自由な生活を思ひ出させた。けれども彼はまだ半成長の子狼であつた。人間の呼聲よりも、荒地の呼聲よりも、母の呼聲が一層强く彼に響いた。彼は其の短かい生涯の總ての時間、母にたよつて來たのである。獨立の時代はまだ將來に屬してゐた。それで彼は起きあがつて、なさけなそうにキャンプの方に走り戻つたが、其の途にも、一二度は立止まつて坐りこみ、森の奥からまだ響いて來る其の呼び聲を聞いて泣いてゐた。

自然の荒地でも、母と子と一緒にゐる時期は短かいが、人間の世界では、それが一[illegible]の場合もそれであつた。灰色狸は三鷲に負債があつた。三鷲は今、マッケンジー川を逆登つて、大奴隷湖の方へ旅行する事になつてゐた。そこで一筋の赤い布と、一枚の熊の皮と、廿發の彈藥と、それからキチとが、其の負債のかたに拂はれた。ホワイト・ファングは、母が三鷲の丸木舟に乘せられたのを見て、それについて行かうとした。所が、三鷲の一となぐりで、彼は陸に突き戻された。そして舟は漕ぎはなれた。ホワイト・ファングは水の中に飛びこんで、灰色狸が返れ返れと呼ぶ其の鋭どい聲も耳に入れず、舟を追うて泳いで行つた。彼は人間をすらも、神をすらも無視した。母を失ふといふ恐怖がそれほどに强かつた。

けれども神は其の云ふ事を聞かせずには置かない。灰色狸は怒りだして、丸木舟を水に浮かべて其の跡を追ひかけた。彼はホワイト・ファングに追ひついた時、手を差しのべて其の首筋を摑み、水の中から引きずりあげた。彼はホワイト・ファングを直ぐに舟の底に置かなかつた。片手に奴をぶらさげたまゝ、片手で折檻をやりだした。如何にも嚴しい折檻であつた。彼れの手は太かつた。一と打でも隨分こたへるのだが、彼はそれを續けさまに食らはせた。

今度は右側から、次には左側から、雨のように降される打擲[illegible]ホワイト・ファングは一[illegible]仕掛の振子のように、前後にブラブラと揺れてゐた。彼れの心中に溢れだした感情は色々であつた。最初は只ビックリしてゐた。次に暫く恐怖が起つて、ナグリつけられる度にキャン／＼と啼いた。所が、直ぐ其あとから憤怒が起つて來た。彼れの自由の本性が頭をもたげて、荒びる神に面と向つて、其の齒をむきだして恐れげもなく唸りつけた。それは然し、神をして一層荒びさせるに役立つた。打擲はヨリ早く、ヨリ强く、ヨリ手ひどくやつて來た。

灰色狸はナグリつゞけ。ホワイト・ファングは唸りつゞけた。然しそれがいつまでも續くわけはなかつた。どちらかゞ負けるより外はなかつた。卽ちホワイト・ファングが負けた。恐怖が再び彼れの心中に漲りわたつた。彼は今はじめて本統に人間の手に掛つたのであつた。これまでに折々、棒や石で打たれた其の經驗は、今のに比べると、寧ろ撫でられた位であつた。彼は全く降參してキャン／＼啼きだした。暫くは、一つブタれると、一つ啼くのであつたが、恐怖の度が增して戰慄となり、遂には押間のリズムに外れて、只のべつにキャン／＼、キャン／＼と啼きつゞけてゐた。

灰色狸は遂に其の手をとめた。ホワイト・ファングはグタリと

ぶらさがつたまゝで泣きつゞけてゐた。それで主人も滿足したと見えて、無雜作に彼を舟の底に放りこんだ。その間に舟は川下の方に流されてゐた。灰色狸はカイを取りあげた。ホワイト・ファングが其の邪魔になつたので、足で荒つぽく蹴りのけた。其の瞬間、ホワイト・ファングの自由の本性が再び閃きだして、鹿皮の靴をはいた其の足に嚙みついた。

ホワイト・ファングがこれまでにナグられたのは、今度のナグられる方に比べて見ると、何んでもなかつた。灰色狸の怒り方はひどかつた。ホワイト・ファングの驚き方もひどかつた。今度は手ばかりでなく、堅い木製のカイでなぐられた。そして再び舟の底に放りこまれた時、彼れの小さい體はそこもこゝも傷だらけになつてゐた。灰色狸は再び、そして今度は態と、彼を蹴りつけた。ホワイト・ファングは其の足に對する攻擊を繰返さなかつた。彼はこゝで又、自分が囚はれの身だといふ教訓を學んだのであつた。如何な事情、如何なる場合であらうとも、自分の主君たる神樣を嚙んではならないのであつた。主君の身體は神聖で、彼如き者の齒で汚さるべきではなかつた。それは明らかに罪惡中の罪惡であり、斷じて許す事も見逃がす事も出來ない事であつた。

丸木舟が岸に着いた時、ホワイト・ファングはうめきながらジツトして、灰色狸の意向を行つてゐた。灰色狸の意向は彼を上陸させるに在つた。彼は岸に放りあげられて烈しく横腹を打ち更に其の傷を痛くした。彼はブルブル震へながら起きあがり、スイン、スインとうめきながら立つてゐた。先程から此の樣子を川岸でジツト見てゐたリプ・リプが、ここでホワイト・ファングに跳りかかり、打ち仆して嚙みついた。ホワイト・ファングは今ま自分を防禦するには、餘りに元氣が無くなつてゐた。それで若し棄てゝ置かれたら餘ほどのヒドイ目に會ふ筈であつたのだが、そこに灰色狸の片足が突き出されて、烈しくリプ・リプを空中に蹴りあげたので、リプ・リプは十フイートあまりも向ふの地上にドシーンと落ちた。これが人間動物の公正なサバキであつた。ホワイト・ファングは自分の其のみじめな場合にも係はらず、いさゝか有難いといふ氣持を經驗した。彼は灰色狸のうしろについて、ビツコを引きながら從順に、村を通つて天幕に戻つて來た。そしてホワイト・ファングは更に斯ういふ事を學び知つた。刑罰の權は神が特に自分の手に收めてゐる者であつて、自分の下に在る他の低級な動物には決して行使させないのであつた。

其の夜、世間が靜かになつた時、ホワイト・ファングは母の事を思ひだして獨りで悲しんだ。其の悲しみの聲が餘り高かつた

ので、灰色狸の目を覺させて又ナグられた。それから以後、神達が近くにある時には、彼は堪へ忍んでゐた。けれども時々は、獨りで森の端までさまよひでゝ、そこで大きな聲を出して泣きウメきながら、思ふさま心の悲しみを漏らしてゐた。

此の時期の間、彼はアノ古巣の洞穴と、アノ小川との記憶に引かされて、再び蠻地に逃げ返りたい氣持がしてゐた。けれども母の記憶が彼を引きとめた。人間達が幾度も狩に出かけては戻つて來るのを見ると、母もいつかは此の村に戻つて來るだらう。それで彼は矢張り囚はれの身となつて母を待つてゐた。然し其の囚はれは必ずしも不幸ばかりではなかつた。面白い事も隨分あつた。絶えず何事か起つてゐた。此の神樣達のする不思議な事には際限がなかつた。そして彼はいつもそれを見るのを樂しみにしてゐた。それに彼は又、段々と灰色狸に對する仕向け方を學んで來た。服從、少しの假借もない嚴酷な服從、それが彼れの强要される所であつた。其の代り、彼は毆打を免かれ、其の生存を寬恕された。

それればかりではない、灰色狸が時として自ら彼に肉の一キレを投げ與へ、そして他の犬共にそれを食はれないように、防禦して與れる事もあつた。其の肉の一キレには實に値打があつた。それは女の手から貰ふ十キレの肉よりも、妙な風に有難かつた。灰色狸は曾て撫でたりサスつたりして與れる事はなかつた。だが、其の有難さは、恐らく彼れの手のおもさ、恐らく彼れの公正、恐らく彼れのムキダシの力、又恐らくそれらの者の總てが、ホワイト・ファングに影響した爲であつたらう。兎にかくホワイト・ファングと其のむづかしい主人との間に、或る親しみの情緒が結ばれかけてゐた。

いつの間にか知らず知らず、遠まわしの中に、そして又、棒や石や手のひらの力に依つて、ホワイト・ファングの囚はれの鎖が、段々締めつけられてゐた。狼が初め人間の火に近づく事の出來た其の性質は、卽ち又その後の發達を可能にする性質であつた。其の性質は今ホワイト・ファングの心中に發達しつゝあつた。そしてキャンプ生活が、厭な事ばかりでありながら、實は絶えず窃かに好きな者になりつゝあつた。然しホワイト・ファングはそれを覺つてゐなかつた。彼は只、キチを失つた悲しみと、其の歸りを待つ事と、昔しの自由な生活に對するヒモじいようなアコガレとを知つてゐるだけであつた。

三　のけ者

リプ・リプが毎日同じような造口を續けて行くので、ホワイト・ファングは其の天賦より以上、一層イケなくなり、一層猙獰

にたつた。野蠻性は彼れの本質の一部であつたが、斯樣にして發達した其の野蠻性は彼れの本質を超越してゐた。彼は人間動物の間にさへイケナイ奴といふ評判を取つた。何かキャンプの中に混雜があり、騷動があり、喧嘩があり爭鬪があり、若しくは肉の片が無くなつたと云つて女房達が怒鳴る事などのあつた時いつでも屹度ホワイト・フアングがそれに掛りあつて居り、而も大抵々の事の起りになつて居た。人々は彼れの行ひの原因など檢べはしなかつた。彼等は只だ結果を見た。そして其の結果が善くなかつた。彼はコソ泥であり、窃盜であり、性惡であり、攪亂者であつた。そして怒り立つた女房達が彼れの顏を見つめて、彼を狼と罵り、仕樣のない奴と罵り、どうせ碌な目に遭ひはしないと罵る時、彼は其の女房達に目を配つて、今にも何か飛道具を放りつけられたら、急いで飛びのかうと身構へてゐた。

彼は此の賑かなキャンプの眞中で、全くノケ者になつてゐた。小犬共は皆なリプ・リプについてゐた。ホワイト・フアングと彼等との間には違ふ所があつた。恐らく彼等は、彼れの野性を感知して、一般の家畜犬が狼に對して持つ其の敵意を、彼に對して本能的に持つてゐたらしい。何しろ彼等はリプ・リプと一緒になつて彼を迫害した。そして一度宣戰した以上、その宣戰を繼續すべき十分の理由が彼等にあつた。彼等は一疋殘らず、絕間なしに彼れの齒を受けてゐた。彼はいつでも受けるよりはヨリ多くを與へるだけの手柄を示してゐた。單身の格鬪ならば、彼は敵の多くを負かす事が出來たのだが、其の單身格鬪が禁じられてゐた。若し單身格鬪が始まりかけると、それを合圖にしてキャンプ中の總ての小犬が皆な走つて來て、彼れの上に飛びかゝるのであつた。

此の全群的迫害から彼は二つの重要な事を學んだ。即ち彼に對する群集的戰鬪の中に於いて如何に自分の身を守るべきか、及び一疋の犬に對して、最短時間の中に、最大量の損害を如何にして與ふべきか。凡そ敵群の間に在つては、足を踏みしめる事が即ち生命を保つ所以であるので、彼は先づ善くそれを學んだ。彼は足を踏みしめる技倆に於いて、丸で猫のようになつた。どうかすると、大きな犬も彼にブッつかつて、其の重い體の力で、彼を後ろに突き飛ばしたり横に刎ね飛ばしたりする事もあつたが、彼は其の突き飛ばされ、刎ね飛ばされる度毎に、或は空中に、或は地上に身をそらし、そしていつでも必ず足を下にして大地を踏みしめる用意をしてゐた。

犬共が戰ふ時には、いつでも宣戰に移る前の豫備行爲として唸る事、毛を逆立てる事、四つ足を突張つて踏んばたがる事などがある。然るにホワイト・フアングは其の豫備行爲を省略する

事を學んだ。猶豫は彼に取つて、總ての小犬の襲來を意味してゐた。彼は迅速に自分の仕事を果して、そして逃げねばならぬのであつた。そこで彼は何等の意志表示をしない事を學んだ。彼は即時に、豫告なしに、敵が準備をする暇のない中に、急に飛びかゝつて嚙みつき食ひさくのであつた。斯して彼は、迅速にして重大なる損害を敵に與へる方法を學んだ、彼は又、不意打の價値を學んだ。凡そ犬が不意打を食はされて、何が何やら分らない中に、肩先を食ひさかれたり、耳をズダズダに嚙みきられたりするのは、既に半分負けいくさである。

それに、犬を不意打にして轉がす事は極めて容易である。そして、そういふ風に轉がされた犬は、必ず暫くの間、其の柔かい喉首、即ち生命にかゝはる急所を晒らすのである。ホワイトファングは其の急所を知つてゐた。それは彼が、狼の狩獵生活から直接に遺傳された知識であつた。そこでホワイト・ファングが此の不意打の襲擊を加へる時の方法は斯うであつた。先づ獨りで居る小犬を見つける。次にそれを不意折して突つ轉ばすそして終りに其の柔かい喉に自分の齒を食ひこませる。

けれどもまだ十分成長してゐないので、彼れの顎は其の喉攻擊を致命的にするほど、それほど大きくもなく、それほど強くもなかつた。然し喉に烈傷を持つた幾疋もの小犬がキャンプの中をうろついてゐるのは、即ち實にホワイト・ファングの殺意の片見であつた。とう〳〵或日、彼は一疋の敵が森のへりに獨りで居るのを見つけて、幾度も幾度もそれを轉がしては喉を攻擊しつゝ、遂に大動脈を切つて其の命を奪つた。サア其の晩、大騷ぎが起つた。彼は見つけられたのであつた。そして其の新聞が死んだ犬の主人に傳へられたのであつた。すると女房達は、これまで肉を盜まれた事を皆な一時に思ひだした。そこで灰色狸は大勢の怒鳴り聲に包圍された。けれども彼は斷乎として天幕の戶を閉め、其の中に犯罪者をかくまひ、同族人が口々に復讐を要求するのを拒絕した。

ホワイト・ファングは人にも犬にも憎まれた。彼れの發育時代に於ける此の期間中、彼は曾て一瞬間の安全をも知らなかつた有らゆる犬の齒、有らゆる人の手が彼に逆らつてゐた。彼は常に、同類からは唸りを以て、神々からは罵りと石とを以て迎へられた。彼は一刻の油斷もない生活をしてゐた。絕えず氣を張りつめて、スワと云へば攻擊すべく、イツ攻擊されても驚かず、そして又不意な思ひがけぬ道具に對しても用心を忘れず、或は齒を閃めかして飛び入るべく、或は威嚇の唸りを以て飛びのくべく、早急にそして冷靜に行動する準備を整へてゐた。

唸ると云へば、彼はキャンプ中で、老若いづれの犬よりも、

ヨリ猛烈に唸るのであつた。一體、唸りの目的は警告と威嚇とに在るので、如何なる場合にそれを發すべきかを知るには、判斷力の必要がある。ホワイト・フアングは如何にそれを發し、又いつそれを發すべきかを心得てゐた。彼れの唸りの中には、有らゆる惡性と毒性と獰猛とが具象されてゐた。鼻は痙攣の連續に依つて鋸齒狀を呈し、毛は逆立て回歸的の波動を生じ、舌は赤い蛇のように飛び出しては又引込み、耳は平らにひれふし、目は憎惡に輝き、唇はうしろに引きつり、牙は露出して唾を滴らせ、彼は之に依つて殆んど總ての來襲者をたぢろかせる事が出來た。其たぢろきの暫らくのスキが、彼に取つては、自己の行動を思慮し決定すべき大切な時間であつた。所が、其たぢろきが繼續して、敵が遂に全く襲撃を中止する事も度々あつた。斯くて彼が大きな犬の前に立つて、其唸りの爲に名譽の退却をやり得た事も、一度や二度では無かつた。

彼は斯樣に小犬の群からノケ物にされながら、其の兇暴な戰法と、顯著な能率とに依つて、却つて小犬の群をして彼に對する迫害の代價を拂はせた。彼が小犬の群と一緒に走る事を許されない結果は、其の群の一疋たりとも群を離れて走る事が出來ないといふ、奇妙な事態を發生させた。ホワイト・フアングがこれを許さないのであつた。彼れの不意打と待伏との怖さに、小犬等は獨りで走る事を恐れてゐた。リプ・リプだけを例外として、彼等は皆な自分で拵へた其の恐ろしい敵に對して、共同防衞の爲に一塊りになる事を餘儀なくされた。若し獨りで川岸に行く小犬があれば、それは即ち死んだ小犬を意味してゐた。さもなければ、待伏の子狼に襲撃されて、恐怖の悲鳴を擧げて逃げ戻り、キャンプ中を驚かせる小犬を意味してゐた。

けれども、小犬等が一緒に塊まつて居らねばならぬといふ事を十分承知した後にも、ホワイト・フアングの復讐は猶ほ止まなかつた。彼は小犬等が獨りでゐるのを見つけた時だけ彼等を襲撃し、小犬等は又、大勢群がつてゐる時だけ彼を襲撃した。それで彼等が彼れの姿をチラとでも見つけると、直ぐに皆が一齊に彼を追ひかけたが、そういふ場合、彼れの足の早さが、いつでも彼を安全に逃げのびさせた。所が、其の追撃の場合、群を拔いて獨り走る犬こそ災難。ホワイト・フアングは不意に向き直つて、其の先頭の追撃者に食つて掛り、全群が追ひつく前に散々そやつを噛みつける術を知つてゐた。彼等は毎度繰返して此の手に乘つた。ナゼといふに、犬共は一旦總追撃に掛つた以上、其の昂奮の爲に我を忘れがちであるが、ホワイト・フアングは一度も我を忘れた事がなかつた。彼は走りながらチョイ／＼後ろの方を盗み見て、若し仲間をはづれて進みでる熱心過

きた追撃者があれば、何ん時でも直ぐに向き直つてこれに食つて掛るのであつた。

續て小犬等には戯れが必要であるが、此の狀勢の下に於いては、彼等は此のいくさ事の中に戯れを求めてゐた。そこでホワイト・フアングの狩立が彼等の主なる遊戯となつた。但し之は命がけの遊戯であり、又あらゆる場合、眞劍の遊戯であつた。然るにホワイト・フアングとしては、一番足が早いので、どこでも冒險をやる事を恐れなかつた。彼が徒らに母の歸りを待つてゐた其の頃、小犬の群をおびきだして、近邊の森の中に盛んな驅けくらをやつた事も幾度かあつた。然るに犬の群はいつでも極まつて彼を見失つた。群の騒々しい物音と、其の叫び聲とは、群の在りかを彼に知らせたが、彼は只ひとり、ビロードのような足で、極靜かに、先祖の父母のやる通りに、木立の中の影法のように走つてゐた。それに又、彼は他の犬共に比べて一層直接に蠻地と結びつけられてゐた。從つて彼は一層よく、蠻地の秘密と戰術とを心得てゐた。彼れの得意な計略は、流れ川の中に足跡を消して、まかれた敵が呆れ惑うて自分のまわりに吠え立てて居るのを聞きながら、直ぐ近くの藪の中にジツト寢てゐる事であつた。

同類と人間とに悩まれ、屈せず撓ます、絶えず戰を挑まれては自分からも亦た不斷の戰鬪を仕向けるので、彼れの發育は迅速であり、又た片寄つてゐた。斯ういふ地盤の上に親切とか愛情とかの花が咲く筈がなかつた。彼はそういふ者の、極幽かな閃めきを持つてゐなかつた。彼れの學んだ法則は、只だ強い者に服從し、弱い者を壓伏する事であつた。灰色狸は神であつたそして強かつた。故にホワイト・フアングは彼に服從した。然るに自分より若い、或は小い犬は弱かつた。即ち殺すべき者であつた。彼れの發育は力の方面に向けられた。絶えず傷害を與へられる（甚だしきは殺される。）危險に對抗する爲に、彼れの掠取力と防衛力とは、異常な發達を遂げた。彼は他の犬共に比べて運動がヨリ敏捷となつた。足がヨリ早くなつた。ヨリ狡猾になり、ヨリ執念ぶかくなつた。鐵のような肉と筋とがヨリしなやかに、ヨリ細くなつた。ヨリ辛抱づよく、ヨリ殘忍に、ヨリ獰猛に、そしてヨリ利口になつた。彼は斯ういふ色々な者にならざるを得なかつた。さもなくば自分の生命を保つ事が出來す、此の敵意に充ちた環境の中に立つて生存する事が出來ないのであつた。



自傳 (4)

片山潜

桑港を中心として

それは明治十七年の十一月末か、十二月始め頃であつたらふか、サンパブロー號が桑港の埠頭に錨を下ろすと、僕は胸の高鳴るを覺えた。僕の汚たならしい靴は、蹌踉として大陸の土を踏んだ。其の日の午後馬車でメソヂストミッションに向つた。安からぬ大陸の第一夜。其のエム・イー・ミッションの印象は素晴らしく奇態なものであつた。ミッションは支那人ミッションの床下を借りて巣喰つて居た、宮川某が日本人の傳道師で、宮川は美しい妻君を鼻の先きに吊ら下げていた。廣田、高木、辻某と呼ばれた男が、エム・イー・ミッションの首領株であつて、彼等は桑港に於ける日本人初期の移民上りであり、船乘りからモグリ的に上陸したものばがりで、廣田の如きは祈禱の度毎に、自分の向上せる境遇を感謝して止まなかつた。そこで僕に妙な感じを與へたことは信徒等が食事や祈禱會の賑ひや教授を終つてからする祈禱そのものの怪しい聲である。いかにもコンモンセンスの持ち合はせの無い人間かなぞのやうに、愚にも付かぬ泣き事や、女々しい繰り言を、腹の底から絞り出すやうな奇聲で訴える。恰度乞食が饑えを裝ふて門先きに立つたやうに、それも短ければまだ我慢もなるが、長々しくやられるので、僕は笑ふにも笑はれず、こんなに困つた事は無い。當代の奇人根本正は屢々ミッションへやつてきた、僕は根本正に日本語で話し掛けると。彼れは英語で答へた。僕には分らない。傍の日本人が通辯をしてくれたのでやつと分つたが、チト氣が變らしいので、人に尋ねると、その人の返事が面白い。彼は英語自慢狂

といふ賴サ、自分がホプキンスアカデミーに居ることを自慢して、吾れこそ英語の名人だからとて、英語ばかり使つてゐると云ふことであつた。英語の解せない同胞の僕の英語を使つて得意がるとは、彼れもくだらぬ奴人かと僕は思つた。

× × × × × ×

當時の僕の境遇は實にプレカリオウスであつた、嚢中一文も無い。例のメキシコ弗一個は兩替して六十仙になつたが、之れは數日を出でずして使つた。矢野はその遠緣にあたる林某（當時桑港唯一の日本雜貨店『一番』に賣り子を勤む）の世話で下宿に移つたが、僕は二三週間排徊に通ひ詰めたが、英語が分らぬので容易に口は出來ず、やつと十二月二十日になつて一週二弗五十仙の働き口をさがして吳れたので、吉野といふ男に連れられて、吉野の通辯でともかく住み込むことに決つた。當家は主婦と二三歳の少女と下女の三人家內の二階住ひであつた。頗る親切な人達ちで、下女は手眞似足眞似で、踊るやうにして仕事を教え込んでくれた。食事も少女と同じときにつくつてくれた。僕の仕事は皿を洗ひ、部屋の掃除をし、ウエーターをすることがすべてゞあつた。仕事も樂であり僕は此處に滿足した。由來吾々が異境に彷徨ふと言語が通じない、人情風俗に暗らいといふとから誰れでも子供々々しくなる。幼稚になる。殊に強く現れるのは依賴心の増長することである。之れは故新島襄氏の傳（アルフツエス・ハーデー氏著）を讀んでもよく分る。新島氏は船中でスタツキングス洗へと命ぜられたので、その船員を一刀兩斷にせんと憤慨したといふことである。

氏がハーデー夫妻に救はれてその家庭に住み、アンドウヴァーに學びアムハーストに學ぶに及んで、子供らしくなつたことが、其の通信書に依つて明らかに看取される。

× × × × × ×

僕は廿五才で、しかも岡鹿門の塾や森歐村の塾に遊び、悲憤慷慨の士を以て任じ、『死を怖るゝ者は共に談ずるに足らず』とか『生死是在天』と、泡を飛ばして壯語して來た丈けに、メキシコ弗一個で平然たるものであつた。しかし人間は境遇に支配される。環境は人を作る。新社會、新境遇に投げ込まれるとそこで新らしい衣を着なければならぬ。さすがの僕も紀州人田中鶴吉の甘言に乘せられて滿足してゐた皿洗ひを止めて暇をとつた。後で知つたことであるが、田中は僕を出してをいて、その後へ自分の友人を住み込ませたのであつた、それが田中のスキームであつた。その頃の事を僕は『渡米案內』といふ明治三十四年八月に出版した僕の本に次ぎのやうに書いてある。

扨余は余の米國に於ける勞働の小學を尙早に、而かも輕卒

に退校して始めて離業者となる、それで、再び美以教會（イムイー、ミッション）に來り、一時衣食したが、一週間斗りすると、當時の財方は頻りに食泊料の催促をなす、余は前日中儲けたる金は上陸當時に當教會に借りたる食泊料に支拂ひたる故に今や無一物となつたが故に、此マイザル的催促に堪へかね或る勞働者の會に行き其會長千葉某に事情を述べて金五弗を借り受け支拂を濟まして美以教會にグードバイを告げ、全く桑港ゴロツキ社會の仲間に這入つた。

さて、數日此社會に出入して働き口を尋ね、一二の所に行くも追ひ出され、今や一錢の蓄へさへなく或日は、もう饑餓を感じ、止なく桂庵に居合せたる或る人に十仙を借りパンを買ふて食し一時を凌いだ。幸に其日、一週三弗の所に行き働くこと三日目に不幸にも一種の熱病に罹つた、それが深夜の事とて獨り床内にありて生死覺束なきかと煩悶した、余が耶蘇の神を求めたるは、此夜病床に在りし時を以つて始めだ、翌朝は働けないとて辭し去る、三日間の賃銀を要求したが、桂庵は支拂ひたる故を以て與へずと拒絶されて、又々路頭の人となつた。余は此時に始めて何かを悟つた、爾後は充分の成算なくしては如何に困難なる働き口も之を去る可からず、如何に仕事が六ケ敷いとて、亦主人が不親切だとて、自己生活の成算なくては斷じて現在の地位を捨る可からずと、是れ余がかかる困難に依つて得たる玉條であつて、それを在米十三年間確守した、それが爲め當初の如く口糊に道なく饑餓に迫まられたることは殆んどなかつた。

金十仙のパンは尚ほよく余の命を二日間支へた、けれども借り食ひは繼續すべからず、余は、一ケ月十弗で桑港より約四十哩ある、サンラフエールと云ふ一小村の家塾の皿洗ひ、掃除番、熟僕兼給仕人となつて行つた。此塾には一人の先生(獨身者)と一人の助教師でそれに十數人の生徒があつた。讀者は余が斯塾に入りたるを以つて、仕合と思ふだろうが、事實はそうでない、此塾のメトルン、兼下女及びクツクなるギンナンと云へる五十斗りの婦人は、實に余を奴隷の如く酷役したる婦人だ、朝は五時前に呼び起し、夜は八時迄絶へ間なく、勞働をなさしめた、口の悪るきことは無智の愚民を責むる悪役吏よりも酷で、そして全く非理であつた、余は毎朝、朝飯の用意を爲し、當校舍の掃除、點火(冬なりし故に)をなし、尚ほ學生等の寢床を整へ、歸つて朝飯のウエーターをなし、終つて皿洗ひ、室内の掃除及洗濯をなす、尚ほ時には大掃除を爲し又窓を拭く、終日一分時間も休息する暇もない、余は無情無慈なる糠利悪魔のやうな彼女を思ひ浮べるとき思はず

慄とする、だがその時より遙かに困難なる、而かも激烈なる仕事を爲したることがある、しかし此家塾にたての如く、酸酷味を覺えたことはない、余は此處に働くこと二ケ月にして(當時イサカのコルネル大學に居つた岩崎清吉から余を激勵する一書を受取つた)意を決して再び桑港に歸つたのであつた。歸桑して桂庵に行けば、一週三弗半の働き口があつた、それは桑港下町の片端にあつた大工の老棟領の家、アイルランド人の家庭であつた。

×××××

この家族は富めるにあらざるも、安樂に暮してゐて、余に對してもなか／＼の親切をつくしてくれる、彼のサンラフエールにて鬼婆に使はれたる後であつたから余はこの家庭に滿足して八ケ月間勞働して、渡米の際借金したる金額を悉皆支拂ひ、尙ほ一着の古服をさえ求めた。(余は記憶す、當時矢野美造に支拂ひたる二十五弗は殆んど倍額の日本金二十五圓に當りたるを)然るに余が渡米當時、少なからざる盡力にあづかり、そして余の渡米の債主矢野美造なる人の望みに應じ、彼を大工の內に住み込ませて、余は再び、五六十哩あるボノマと云へる所に在る、宿屋兼酒屋へ雇はれて行つた、一ケ月二十弗の月給にて勞働の急激なることサンラフエールの非に劣らざるも、身體は强健にて、而かも旣に多少の經驗を有せし故に、左程の苦痛も感ぜなかつた。此宿屋は山中に在りて、ハンタースの遊獵の往復の途次に止宿する爲めに近在の農家の便宜の爲と設けられたものであつて、見渡す所一面の山野、三四の農家以外は牧場と山林、全く山間僻地である、約二ケ月位すると、前記の矢野美造なる者より、報じて歸國する故に面會したいと云ふて來た、それで余は此家を辭して桑港に歸つた。

×××××

——『渡米案內』は——小冊子ながら僕にとつては——勞働の記念塔——である。古ぼけた頁を繰つて行くと苦しい樂しい錯雜した追憶が胸一杯に擴がる。アイルランド人の宿屋の妻君が、非常に働き手であつたことも、僕の記憶に鮮やかである。毎日クツクをする、月曜には洗濯をする、客の扱ひに出る、何んでも彼でも妻君が切り廻はしてゐた。僕が不馴れのために仕事が捗らないと、妻君は傍らで火のしの手をも休めず、『大枚二十弗の月給を取り乍ら、そんなに鈍くては駄目だと口汚たなく僕の後ろから浴びせ掛ける、僕は殆んど堪えられぬ思ひがして熱汗をタラ／＼流して自から奮發した、時に白衣を火のしで焦がすと妻君の怒聲が用捨なく僕の頭上に爆發する。

一番苦しいのは月曜日の仕事である。朝は四時頃から床を蹴つて起きる、洗濯をする、洗濯物は洗つても洗つても後から續いた。午後三時頃になるとさすがに忍耐を誇りとする僕も參る。普通の日でも起床が五時、夜の仕事を終へてベットへ下がるのが十時、寢るのは僅々七時間であつて、それでもナショナルリーダーの第四卷を讀まんとして、字引と首引きしたのであるが、一向に進境しない。此の宿屋には離れ家があつて、そこにも客が居た。前には廣い庭が拡ひていた。庭には熟し切つた賽銅子が累々と光つていた、僕はよく之を切ることを命せられた。此の時ばかりは實に愉快を感じた。甘まさうなのは僕の口へ放り込み、籠にはクズばかりを入れてをいた。しかし籠が一杯になるより僕の腹の方が前に一杯になつた、地獄で佛とは此の時のことであらう。

それから桑港に歸ると矢野は既に待ち受けてゐた。矢野は僕の所持金を捲き上げるつもりで、態々僕を働き口から呼び返へしたのであつた。が、愚鈍な僕はそれをすら悟らず、矢野の歸國に色々と骨折つた。當時僕の友人に石川といふ人造林檎酒釀造會社に働いている男が居た。石川は賢しこく、馬車の御者から釀造の手傳ひをして出世した男である。僕は自分で瓶を買つて彼れから一ガロン餘のサイダーを貰ひ、それを矢野に與えた、その頃の思ひ出の糸を手繰ると、僕は憤慨の禁じ難いものがある。僕はその人を責め無い、其の金を惜しまない、『渡米案內』には斯う書いてある。

此の送別の際、余は矢野に米貨六十弗を托した。內三十弗は、此歸國に際し入用なりとの事で之を貸し與へ、殘金三十弗は余が貧乏なる國元の老母へ送金し呉れられるよう態々と矢野に依賴した、（矢野は歸國の友に關屋某があつた、關屋は柴田某と共に、例の一番なる桑港第一の日本雜貨店に働いて居たのであつた、矢野と關屋とは歸後宿屋を營業するとか何とか云つて居つた。）然るに矢野よりは横濱より安着の一片ハガキを送りたるのみ、亦一信なく、該金六十弗と共に行衛知れずとなつた、余は敢て該六十金を惜む者でない、矢野が斯くまでも不德に墮落し果てたるを惜んだり、そして余が老母に送りたる三十弗の金が矢野に横領されて屆かざりしは百年の遺憾なるを地團太踏んだ。これ余の渡米後、嘗めたる第一の苦い經驗である、此外は金十五弗を在桑人新井某に貸し、遂に取られたり。（約束の期日に至り、新井某云く、拂ふ考へで持つて來たがパンツのポケットに穴があつて失ふたりと、當時新井某は賭博と女買に耽つて居たことを發見して、僕は再び催促せず、後屢々彼を見たが何時も風體良からず墮落の

底に沈みつつあるを見た。）しかし、斯數十の金は、余に貴重なる一事を教へた、他でない、余は爾後一切交際せざるの良策なることを、殊に金錢上に於ては決して何人とも關係してはならないことを、之れが爲めに余は却つて多くの良友を得たるも、余は常に孤獨の身を持つて異境に行き又學問するを勸めた。

× × × × × ×

矢野は、かくてゴールデン灣頭の白波を濁して立つた。そこで僕は又もや職を失つたのであるが、桑港に踏み止まつて猶太人の家庭に働くこととなつた。仕事はあまり困難でなく、又やかまし家でもなかつたが、約一週間ばかりすると、或る夜の出來事である。客間の柱時計が無くなつた。疑ひは僕の頭上に落ちた。僕はもとより言葉がよく通じないから僕の足元を明るくすることが出來ない。猶太人の主人にしても直接僕が盜んだとまでは疑ひを深くした譯でもなからふ。僕が戸締を充分にしなかつたためか、僕が他所から他人を連れ込んで盜ませたとでも疑つて見たものか、其の日から働くことを拒んだ。僕は又もや街路へ投げ出された。街路に迷ひ、鼻を鳴らす犬のやうに、僕は神經を尖らせて仕事を探がし歩るいた。恰度そのとき犬が棒に突き當つたやうに僕は見知り越しの或る日本人に出逢つた。此の人はアラメダから歸つたのである、月の給金廿五弗でクックをしていたがあまり良い口でもないから止めて來たとその日本人は云つた。『其の口を僕に呉れろ』『僕を連れて行つて紹介してくれ』と僕は頼んだ、そのかわり五弗をやることにして其の晩彼れとアラメダに行き主婦に掛け合ひ、僕はクックが充分出來ないから月二十弗で好い、是非使つてくれと頼むと主婦は快諾した。今度の主人はヂョーヂ・プラムマと云つて船舶に食料品を供給することを仕事にしていた、プラムマは毎朝桑港へ通つていた。若夫婦に子供三人、子守女一人の家族であつて、僕は慣れない手附きでクックの稽古を始めた、が味が惡るくとも、少々の失敗があつても、前のクックより五弗安いのだから、主人は苦情を云はない、妻君は僕に教へてくれようとしたが、妻君自からもよく知らないが爲めに、時には二人してケチンの破れるやうな大騷ぎをやりながらクックしたこともあつた。

子守女はアイルランド人でスカイラークの近郷に住んだものと云つていた。寢床を整へ、子供の食事を調理し、守りをするのが彼の女の毎日の仕事であつた。僕は主人等の食後獨りボツネンとケチンで食つた。月曜には洗濯をする、それを週間中に火のしを掛ける、日曜には大概來客で賑やつた。かくて一年の月日が流れて行つた。長いやうで短く、短いやうで長くも感じ

たアラメダの生活に於て、僕の一身の方針に向つて、多大の影響を及ぼしたことが一つある。それは僕にとつて、今も強い記憶を殘す耶蘇教の生活がそれである。渡米した頃の僕そのものは、山出しの男であり、愚鈍であり、朴訥漢であつた。隨分と在桑日本人學生から馬鹿にされたものである。僕はあまりに其れを知り過ぎていた。

アラメダの追憶

アラメダには桑港から十六分ばかりで達する。蒸汽船が織るやうに通つてゐる。桑港市外の住居地として桑港や王府の發展をよそに、昔の姿でアラメダは殘つてゐる。アラメダの追憶は僕にとつてなつかしいものゝ一つである。クツクの初稽古もアラメダなら、英語の手ほどきもアラメダであり、天の一角に耶蘇を發見したのもアラメダである。宗教方面に僕の知識慾を開ひたのもアラメダである。其の頃アラメダに居た人で、少しく名を舉げたのは神田佐一郎といふユニテリアンの日本へ輸入者である。今は紀州へ引込んで銀行屋で納まつてゐると聞いた。神田は有名なマイザー佐治實然坊主の親友であつた。青森縣人の佐藤といふ男は歸朝後青森の縣會議長になつた。日光中禪寺湖畔にホテルを開ひている酒巻正太郎も仲間であつて、桑港ケチン奉公歸朝者組の成功者と目される。其他神田神保町で家具屋をしている服部も同じくアラメダの産である。

× × × × × ×

僕の主人ジョールヂ、ラウマー氏は、桑港の膨脹と共に發展して今は問屋業を營んでゐる。山出しの朴訥漢の僕は、支那ミツションの厄介になつて英語を習ひ始めた。グツドモーニングの程度であつた、ミツションの主婦フレーザーはデツプりと肥つた親切な婦人であつた。茲に閑居していたホイト博士（八十ばかりの爺いさん）は幽靈のやうに痩せ細つた娘を持つていた。痩せた娘は日本に親切であつた。ホイト博士は曾つてテンネツシー州ナリーヴヒル大學の教授であつた緣故から、僕は幽靈のやうな女史から書を貰つて、其の後になりテンネツシー州へ旅立つた。これは千八百八十八年の春であつた。其の前に僕が既に耶蘇の信者であつたことは云ふまでもあるまい。僕は教會に屬するに當り、順序より云へば長老教會へ這入るのが當然であつたが、僕は特に好んで組合に屬した。組合には學校が多くあり、組合派に屬する學者も多かつたからである。神田佐一郎氏の斡旋でアラメダの第一組合教會に屬してゐた。僕は耶蘇教徒になつても熱したこともなく、冷めたこともなかつた。マンドヴアー神學校に學んだときには聖書を八ツ裂きにして研究もしたが、耶蘇に對して變つた感情も持たなかつた。最初から

僕は耶蘇を神と思はなかつたからでもあらう。しかし耶蘇の生涯は僕に幾多の感激と力とを與へてゐる。靜寂なアラメダにも時には嵐があつた、長州人の高橋欽太といふ友人があつた、もう一人山脇といふ數學の名人で鐵道院に奉職した立派な男も居た、がそこに波紋が渦卷いた、――その渦卷き――。僕は、伊深博士の妻君の行動を潔白だと云ひ切ることが出來なかつた。それは山脇を僕がよく知つていたが爲めでもあらう。しかし、その事はノースフヒールトで今の伊深博士夫人當時の山脇夫人との會談の機會に讓つて、玆ではアラメダの生活を急いで、王府ホプキンスアカデミー入學のことに及び度い。僕の方針は先づ金を貯めて、それから學校生活をするといふ點に目標をいてゐた。從つてスクールボーイを望ます、いつもハードウオークにぶつかつて行つた。貯金も四五百弗に達した。しかし其れ以上は容易にたまりさうもない。少し英語が解つてきたので勉强がしたくて矢も楯も耐らない。そこで方針を變えて、學校生活をすることとになり、教會の牧師スカッター氏の紹介で、ホプキンスアカデミーに入學した。恰度明治三十年一月のことであつた。僕の瞳は希望に燃え、僕の胸は歡喜に波打つた『渡米案内』には斯う書いてある。

アラメダ市の隣りなるオークランド市に在るホプキンスアカデミーに入學した、余が自活の勞働は一日三回校長の一家族の食事の給仕を爲すにあつた、ホプキンスアカデミーは組合教會派に屬する中學校にして特に大學豫備校として設けられたるものだ、であるから其生徒は多くは資產ある家の子弟だ、余が入學したのは一月にして學年の中途であつた、余は英文典、修辭學、代數、希臘語及び羅典語と同時に始めた、余の英語力はと云ば微々たるものゝ僅かにアラメダ支那ミッションの夜校で數ヶ月學びたるに止まる、大膽と云へば大膽、亂暴と云へば亂暴である、余は當時身體强健なりし故、專心一意學問に從事した、そして學年の終りには余が當期研究せしすべての科目を及第した、夏季休暇には再びアラメダに來たりて、一週三弗五十仙にて勞働に從事した、そして秋季の學業始まるや、余は再びホプキンスアカデミーに歸つて、學年を始めた、當時同校に一人の日本人で九州熊本の人大野某があつた、彼は昨年卒業した根本正(少年禁酒專門の根本正)の後に來り、同一給仕をして勉强を爲しつゝあつた、此外に太平洋神學校(アカデミーの隣り)に今一人の日本人神學生小崎成章(有名の小崎弘道の令弟)も在學した、この學期始めに僕がアラメダにて友交をなした、高橋欽太(後年東京靑年會の幹事)を校長に紹介して入學せしめた。

余や頑愚にして交際を知らず、故に生徒間殆んど一人も交がない、余は日夜勉學に怠りなく、孜々としてグリーキ及びラテンのルーツを研鑽した、然るに彼等生徒は余を愚弄するにケテーの異名を以つてした、英語でケテーは猫だ、そして余が名を英語にて綴れば片はケテーなり、故に彼等生徒は戯れに余を猫視して頻りに余を呼ぶにケテー々々を以つて余をなぶつた。余は朴訥にして彼等青年をあしらふの術を知らず、彼等の無禮を怒る、怒れば怒る程一層ケテー……を浴せかけた。余は日々の科業を忠實に爲したるに、交際もせず、又彼等と少しも談笑を交へさりし故に彼等はよいことにして余を益愚弄し、嘲罵するに至つた、然れども、余の言語は尚ほ不完全、且つ不自由であつたから辯論を以つて彼等に抗するとは出來ない、時には腕力に訴へて彼等の蔑辱に酬ゐたとがあつた、されど多勢の彼等は益々余を愚弄して已まない、余は終に斷然同年十二月の休暇を期として同校を辭し去つた、然るに余は當時既に余が貯蓄せる資金を使ひ果し、嚢中殆んど一金を餘さず、余は直ちにクックの仕事を求め桑港を去る。數十哩のロースゲトスと云ふ一小村のホテルに行き、クックとなり、一日一弗の給金を得た、當地は當時、尚ほ依然たる田舍村にして別に見るべきものなく、又日本人も居らず、只一人の邦人農夫働き居れり、彼の名は一ノ井正典と云ひ、村老の言を信じて營々として働く、彼は云く此村老はスタンフヲードの友人だ、今にスタンフヲードが大學校を設立したらば頼んで入學さしてやると之を賴みに今精々働いて居ると。此一ノ井正典は後年齒科醫となり歸朝して神田邊にて開業して居る。

メリーヴイル大學に入る

ロースゲトスに働いた時は冬の最中であつたが、氣候は頗るマイルドであつた。暇のある時、(午後食事が濟み晩飯の用意を爲る迄はクックの暇な時間である)は野外を歩るき廻つた。其所らには製氷場が一個と數個の商店があるのみであつて野園にはヲレンヂ畑が大部分を占め、梨園もあつた、一ケ年の學校生活は僕をしてクックとして働くに不自由なきに至り、大に安心する事が出來た。

余はロースゲトス村のホテルに働くこと數十日此處に東行の旅費を整へて、一先づ桑港に歸り、二三の知友に余東行の意志を告げ、アラメダに來り、舊夜學校の教師ホイト孃に依つて紹介狀を得て、イーストテンネフシー州メリーヴイル市に在るメリーヴイル大學に行くことに決した。

余は桑港を去つて將にロッキー山を越えんとするに當り、

後のアカデミーの余を愚弄したる學生等に接するを好まず、故に心ならずも、余を一方ならず引き立てたる教師等に面會せず、東行した、時は既に冬であつたからユニヲンパシフヒツク鐵道を取り、雪中を行くこと五日間にしてシカゴが達したるは早朝であつた、然るに汽車の連絡を失し、終日中央停車場に待ちくたびれた、余は場所に馴れざる故と北米の旅行に不案内なる故に、一日停車場で馬鹿を見たのだ、夕景に至り汽車に乘じケンタツキー州ルイスヴイルに向つて發した、余は地理に不案内なると、桑港にて日本人の汽車周旋人の手に依り切符を求めたが爲め不都合にも當ルイスヴイル迄の切符を買ひ與へたる爲め、當市に來て見ればテンネツシー州のメリーヴイルは尚ほ數百哩の遠地にあることを知つた、そして余の嚢中には僅々一弗餘の金を有するのみであつた。

始め余が桑港を發するや、メリーヴイルはルイスヴイルを去る遠からず一弗もあれば、汽車賃足れり、若し足らざれば、麵包をカヂりても徒行するも可ならんと、然るに當地は尚ほ雪地を覆ひ、步行に困難なるは云ふまでもなく、如何にして金策をなさんと先づ當市の基督教青年會の某幹事に面談して其理由を述べ先方へ行かば金を送り返へすべければ、若干金を借用したしと賴みたるもすげなくはねつけられた、再び停車場に歸り、今度は停車場の切符賣掛りに相談せしに余が困難せるを察して數弗を貸し與へて呉れた。茲に漸く目的地迄の乘車切符を求むるを得た。余は抵當として余が所持せし書籍數部を預け其厚意を謝して去る。

翌朝イーストテンネツシー州ノツクスヴイル市に着いた、メリーヴイルは此處を去る僅々十六哩であるが汽車一日一回、朝メリーヴイルを發して晩にメリーヴイルに歸るのである、余は又々此ノツクスヴイルに終日停車場の住人となつた、愈夕景になつて汽車はメリーヴイルにに向つて發した。

メリーヴイルは舊奴隷州の一小村落にして頗る田舍じみたる所、住民は甚だ不活潑にし其擧動行爲も亦桑港などの人民に比して甚だしく遲鈍に見へた、そして其風習は保守頑强にして黑人を嫌蔑するは一種の天性かと疑はるゝ程である。

余は當地着の晩は一大學教授の家に泊る、食後、教授は二十年以前に發行されたる百科全書を引き出して日本の事を見て、余に種々の質問を放つ、余は二十年前の日本と今日の日本とは稍進步せることを告げた、メリーヴイルに來たりたる日本人は余を以つて始めとする、故に當地の人々は種々樣々の質問を余に向つてなした、中には『日本人は何時迄人肉を喰ひたるや』と云ふが如き愚なる質問を發するもの さ へ あつ

た。

當校に來りても、亦學年の中途なるを以つて、余は豫備校の最高年に入り、僅々半ヶ年にして卒業した。最初、余が當地にて働きたる家庭は家族十三人にて家内の仕事頗る多き家庭であつた、余は、此處より數丁を歩行して大學校に通つた、仕事多き爲めに、屢、教授時間に遲れて行つたこともあつて非常に困難を感じたものだ、之が爲め種々苦心の末、斷然獨立をなして自炊して勉學を爲すことゝし、百方仕事を探がして生活を支持した、當時學生の勞働賃銀は一時間十二仙五厘で、無論、當地は物價安く、生活費も亦安くて自炊すれば。一週一弗もあれば澤山であつた、されども仕事を得るは容易なことではなかつた。

余は夏季休暇中も大學寄宿舍に在りて勉強をなし、或る時は學友の勸めにより彼等と共に其鄕里に行つた、一日、朝早く起きて馬車に乘り、例のスモーキーマウンテンの麓に行つた、農家が其處此處に點在して、そして各家には、牸牛、馬、豚、羊、山羊及鷄などを飼つて居た、余は此の質素なる家庭に遊ぶこと數日、又近村の彼等の親族又は知友の家に馬を驅つて遊びに行つた、最も余に取つて奇異の經驗を爲したるは、此の家に來り翌朝學友に雪隱の所在を尋ねたら納屋の裏手を指すまゝに余はそこに行つたが見當らず、更に聞きたるに何處か其處等でやるべしとの意を洩らした、所が余が始むると豚と羊先生が早速やつて余のお尻を窺ふには少しく閉口した。當洲の人民は、殊に田舍の人々は、未だ近世の文明の風波にもまれない故に、極めて質朴である、しかも殊に旅人には誰彼の區別なく親切を極めた、余は屢彼の米國古代の家屋建築法として有名な丸太小屋（ログキャビン）に住まへる貧農民の家庭を訪問して快談を爲したこともある。

數日この田舍學の山腹の農村の家庭に厚遇を受けて充分の靜養を爲し、愈々歸る事となつた。學友は馬で送らふかと云つたが僕は僕の健脚を誇つて徒歩で歸ることを主張した。

翌朝、早起して（農家の朝は早いから）愈々學友の家を辭したのは僅かに五時頃であつた。僕は生來旅行が好きだが、同じ所へ二度行く趣味を持たない。同じ道を歸るを欲しない。そこで僕は學友に計つて新に歸路を求めた、一番便利な歸り道は一先づ此處よりノックスヴイルの市外へ出て、其處よりメリーヴイルに歸るがよからふとの事で、僕は此路を選んだ。山家からノックスヴイル迄は降り坂であつた。僕は非常に愉快を感じつゝ僕の誇りとする健脚を振つて下つた。ノックスヴイル迄は約二十哩もあつた。田舍道の二十哩は決して近くはない。そして

そこに着いたのは正午頃であつた。ノックスヴイルからメリーヴイル迄は汽車で十六哩だから、近道の鐵道を失敬することにした。ノックスヴイルの進んで來ると鐵橋を渡りかけた、始めは何でもなく進んだが半ばに來て下を見ると、千仭の谷のやうに、濁水が渦卷いてゐる、足が震へ出したが後を見ると、もう大分來てゐる、引返えすにも容易でなく、終に意を決して、渡つたが、今でもこの恐ろしい經驗を忘れない。由來僕は冒險を好まない、又爲した經驗はないが、此鐵橋の四ツバイ渡り位のものであらう。

下り坂の二十哩は朝でもあり、又數日の休養で元氣が旺盛であつたから何とも感じなかつた、が上り坂の十六哩は仲々であつた。それでも數哩は馬車乘を無論ロハでしたが、夕方メリーヴイルに着いた頃は餘程足が勞れて居た、其れでも僕の長路をしたのは之が第一番である、併し僕は幸にして今日迄その健足を失つていない。僕が腹を決めて早道をしやうとする時は一種違つた歩るき方をする、其は決して大足に歩るかない、極く小足にあるく、早く小足にあるく、此間胸を張つて近頃は下腹に力を入れて歩るく、今迄の如く早く勞れないのは下腹に力を入れて歩るく所以であらうと思ふ。

尚メリーヴイル大學生活の一斑を渡米案内から拔萃することにする。

余は大學寄宿舍内で或る時は四五人の學生を集めて食事倶樂部を組織し、其のクックを爲して獨立生活を營んだことがある。當大學は男生徒と女生徒とに向つて各廣大なる寄宿舍を有し、其ベースメント（最下階）は各十數個の臺所炊事場を備へあり、何れもストーヴとテーブルトを備へあり、寄宿生徒等は自由に之れを使用し得る故に、多くの農家の子弟等は自己が勞働の結果なる穀類、及野菜類を持參し來り、自炊して大學校へは只其月謝を納むるのみで勉強が出來るのである。故にメリーヴイル大學は極めて平民主義の大學である。無論北米南部諸州の文化程度は北部に比しては遙かに低級であるから、メリーヴイル大學の學科も從つて高くはない。先づ北米で云へば第四五流に在る大學ならんか、然れども隨分立派なる學生が出て居て社會に頭角を現したものも少なくない、蓋し人物養成の點に於ては他の有名の大學と大差はない。

由來メリーヴイル大學は北部有志家の寄附に依つて其の建設を見たものである、北部の有志家は黑人と貧白人教育の爲めに寄附を申出でたものである。それで嫌やながら黑人にも入學を拒むことが出來ない、何時も一二名の黑人は在學してゐる。大

學は主として地方子弟の高等教育と福音傳導を目的とするが爲めに教授中にも外國傳道師を勤めた人々が居た。或教師はトルコより又或教師はメキシコより歸つたものであつたから此語に通じ、之れを教へてくれた。

僕は此處へ來ても亦ホプキンスアカデミーに在つてしたやうに高橋欽太氏をホプキンスから呼び迎えた。僕は高橋欽太君と共に勉強し、且つ此冬は當校へ始めてフートボールを輸入して學生等にフートボールで遊ぶことを紹介した、高橋君は一兩年內に當大學の呼者となりフートボールのキャップタンとしてボールを盛んに練習し他校へ押掛けて競技を試みるなど又夏季休暇中は或夏場のホテルに行きウエーターを爲し學生等の隊長として勢力があつた。卒業後は大學校學生基督教青年會館の設立を發起し自ら大學校の代表者として全米國に寄附金募集の遊說を爲し成功した人である。歸朝後在京青年會幹事となり。間もなく病氣に罹り暫らく靜養の爲め鄕里長州に歸省し、或は英語を鄕里の子弟に教へて居たが遂〻に天國へ歸つた。僕は千八百八十九年の夏時を待つて當校を辭し、アイヲワ州グリンネル大學へ轉校した。僕は宗派より云へば組合派である。然るにメリーヴイル大學は長老派に屬し、しかも頗る頑固な信仰の大學であつた。（つゞく）

新刊紹介

□未能力者の仲間（武者小路實篤）外に桃色の女、或日の事、AとB、母親の心配を含む、脚本叢書（定價金壹圓、新潮社發行）

□黎明（佐藤紅綠著）現實生活の都感より離れて、眞の精神文明を建設する、黎明はかうした思索の結果として生れた小說らしい（定價一圓六十錢、新潮社發行）

□雨を呼ぶ樹（小川未明著）氏の創作小說二十二篇を蒐む、（定價、金二圓、牛込、矢來町四、南北社）

□阿武隈心中（久米正雄著）その構想力の旺んなる、その會話の輕快なる、我國劇作家中傑出せる氏の戲曲集である、外五篇を含む（定價貳圓 新潮社發行）

□梢の巣にて（山村暮鳥著）數多の詩を蒐めたるもの、純眞な心持が盛られてある（定價壹圓八拾錢、叢文閣發行）

□へぼ胡瓜（岡本一平著）外に、指一本、忙しき時は汽車、を含む、氏の諧謔亦味はひ盡きず（定價金貳圓、本鄕區駒込坂下町四十八大日本雄辯會發行）

□寫古路豐後掾（清見陸郎著）外四篇の戲曲を集む（定價金一圓五十錢、麴町區、有樂町一丁目、杉山書店發行）

□青年（ドストエフスキー原著、米川正夫譯）靈と肉の分裂に惱む不幸な性格の持主を描く、暗澹の氣身に迫るを覺ゆ（定價金貳圓、新潮社發行）

□ユウディット（ヘッベル原著、中島清譯）彼の狂瀾怒濤期に於ける生活の苦鬪から生れた長篇也。（定價九拾錢、新潮社發行）



近代流行現象物語

門馬直衛

一、流行の意味

經濟界の動搖が染色界や機業界に深い關係を持つてゐることは勿論であるが、其の爲めに流行界に及ぼす影響も尠くはない。然し世間が如何に不景氣であると云つても、流行そのものの歩調は決して同じ所に停滯してゐない。時は常に新らしい流行を編み出してゐる。そして流行は春よりも秋に殊に著しく衣服其他の裝飾品に現はれて來る。隨つて秋になると人々は流行を注意するのである。流行とは何であるか。これに對する答として一般に引用されるのは美學者フイツシエルの定義である。（Vischer, F, Mode und Cynismus）。彼に依ると『流行とは其の時々に適用される諸文化形態の總體に對する總括概念である』。この定義は少しく抽象的で難解の樣ではあるが、社會現象としての流行を適切に云ひ表はしてゐると思ふ。今秋の婦人衣裳の摸樣は草花式の圖案式のものや島原模樣の變化したものださうである。私共が流行と云ふ時に直に思ひ浮かべるのは衣服殊に婦人衣服の色、模樣、裁縫等の流行であるが、然し流行は決して是等に限つてはゐない。靴にも帽子にも手袋にも肌着にも家屋にも家具にも遊戯にも皆流行がある。日本の讀書界は輕佻浮薄であるとはよく聞く非難であるが、日本ばかりではなくて至る所に於て學界、思想界、藝術界にも流行はその威を逞うしてゐる。フイツシエルは是等一切の流行を概括した定義を下したのである。

そして又流行は効用を主としてゐないで、單に一時的に多くの人の精神を支配するものである。萬年筆や目醒時計が一般的に廣まつてゐるけれども流行とならないのは、その効用に依るのである。煖爐の敷物には流行があつても浴場の敷物には流行がないのもその効用に依るのである（Ross, Social Psychology, P. 94）。

二、流行の要素

今秋流行の衣裳の色合は納戸系統のものだそうである。色合の流行と云ふことは、多数の人がその色合の着物を揃へて被ると云ふことと、その色合は永續しないで翌年又は次の交際季節若しくは同年内又は同一季節内に於てさへ、別の色合の着物が今迄のものの代りに採用されると云ふこととの二つの意味を含んでゐる。單に色合ばかりではなくて一般に流行には二つの要素が含まれてゐる。趣味の一致と其の變化とが是である。最近文壇に於ては長編小説が流行した。多くの讀者は憑き物がしたやうに爭つて之を讀み、若し之を讀まなければ文學は談ずることが出來ないと思つてゐた。作家も亦同じく憑き物がしたやうに爭つて之を書いた。そして或る期間——それは極めて短かい時間である——が經過すると、今度は讀者も作家も共に憑き物が落ちたやうに之を捨てて別の物に走るやうになつた。これが流行の常であり、この機運に巧に乘ずるものが流行の寵兒である。それで流行には餘り重要な價値を認めることは出來ないのである。若し流行と云ふことがなかつたら人の趣味は今よりも遙かに複雜多岐である、又今よりも遙かに安固持續的であるに相違ない。流行は多數人の精神を支配して一時的に同一物を要求せしめ、且つ個々人が單獨にするよりは遙かに速く物に倦きさせる。この趣味の統一と變化とは人間生活の各方面に亘つて行はれるのであるが、最も多くの場合に於てはこの趣味の統一と變化とは、需要及び供給の統一及び變化となつて今日の經濟生活と極めて密接な關係に結び付けられてゐるのである。

三、流行の動機

人が流行を追ふ動機は何であるか、私はロッスが云つたやうに流行は主として自己標彰と模倣とから起るものであらうと思ふ。(Ross op. cit. P. 94ff)

自己標彰心と云ふのは換言すれば他人に依つて認識されたいと云ふ欲望であつて、これを積極的にしては卓越の欲望であり消極的にしては儕輩に後れたくないと云ふ欲望である。この心は普通人には誰にも存するも　であつて、單獨に現はれることもあるし、又他の欲望と結び付いて現はれることもある。中でも裝飾物に對する欲望は、この心の純然たる發動と見ることが出來る。そしてこれは決して文明國人にのみ特有なものではなくて未開野蠻人に就ても亦全く同じである。野蠻人が屢々衣食の必要までも忘れて裝飾品を求めることは今迄幾回となく聞かされたところである。然しこの心が他の欲望と結び付いて働く場合が甚だ多いことは最も注意しなければならない。例へば衣服に對する欲望と此被認識欲とが結合して働く場合が考へて見

るに、この場合は甚だ顯著であり非常である、と云ふよりも寧ろ、衣服欲が被認識欲と結合しないで單獨に現はれると云ふことは殆んど絶無だと云つてもいゝ程である。人が衣服を着る時に、單に衣服に依る保温快適と云ふことばかりを問題にして、體裁外見と云ふことを全然顧みないと云ふことは、極めて稀な例外の場合だけである。必らずしも衣裳の美を他人に誇示すると云ふまでには行かなくとも、外見上見苦しくない相當の身なりをしやうと云ふことは、多くの人が普通に心得てゐることである。否、保温快適と云ふことそれ自身さへも、體裁外見の爲めに求められる場合が甚だ多いことは私共が日常目撃してゐる所である。近頃は毛皮が中流以上の家庭に仲々流行してゐる。如何にも毛皮は慥かに暖を保つに適してゐるが、唯だそれ丈けであつたら毛皮は今日の如く盛に流行はしなかつたらう。毛皮を用ふる者はそれに依つて自分の地位、身分、富裕の程度等を表示してゐるのである。若し毛皮がそれ等を表示しないとしたら今現に毛皮を着用してゐる階級の毛皮に對する需要は、確かに今よりも余程減退するに相違ない。其他食物に對する欲望に就ても又同じである。食物は決して常に唯だ營養又は美味の爲めにのみ攝取されてゐるのではない。饗宴と云ふことは多數人が集まつて食物を消費することに外ならないのであるが、この場合に若しも食物が單に營養又は美味の爲めにのみ消費されるとしたら、饗宴の性質は今日のそれとは全く異つてくるに相違ない。三鞭酒は慥かに芳醇であるが、これと同時にそれ以外の飲料はたゞ不體裁だとして用ひないことも事實である。

以上は單に衣食の欲に就て云つたのに過ぎないのであるが、これと同樣のことは殆んど他の凡ての欲望に就ても云ひ得るのである。私共が普通に生活必需品と云つてゐるものも、實は單に生命の維持の爲め、又は生理上絶對的に必要不可缺のものを意味するのではなくて、或る一つの社會、階級又は身分に普通に相應た生活に必要なもの丶意味なのである。この相應な生活と云ふ中には既に自己標彰の要求があるのである。

次に流行には模倣の動機がある。模倣心も亦一般的に人間に存するものである。珍らしいからと云つて模倣することもあり刺戟を欲し新らしいものを求むるので模倣することもある。模倣は單獨に流行を起すこともあるが多くの場合はこれを先の被認識欲とが同時に働らいて流行の動機となるのである。俳優はよく流行の淵源になると云はれてゐる。然し彼自身は別に流行を作り出す目的があるのではない。たゞ自分の顔や姿が好く見えるやうに努めてゐるに過ぎないのである。そしてその容姿が美的に見えるので多くの人はそれを眞似て、自分も美的に認識

されたいと云ふことになり、かくて俳優の衣服や髮の格好等が模倣されて流行するのである。

斯くの如く流行には被認識欲と模倣心とが最も重要なる動機をなしてゐることは、各の流行現象に就て觀察すれば直に了解することが出來るのである。

四、流行の歴史

流行は何時頃から起つたかは今の私には餘り明確ではない。一八一四年熱烈なる獨逸詩人アルントは、獨逸人が佛蘭西趣味から脱却すべきことを要求する檄文を出してゐる。その中で彼は『一の國民が衰頹して支那人の如く無氣力とならない所では流行は必らず道義と併び存しなければならない。然し流行は道義の支配を受くべきものである。流行が道義の上に置かれることは不可、甚だ不可である』と云つてゐる。同樣の見地から流行を非難することは、何もアルントに始まつたことでもなく又無論彼を以つて終つたことでもない。ユリウス、レッシングに依れば流行は何れの世紀にも働らいてゐたそうであつて、既にスパルタの立法、ホラス、ジユエナルの諷刺の中にも流行に對する同樣な非難が表はされてゐる。

『流行』と云ふ文字は、恐らくは易經上經の『品物流行』、又は左傳僖公十三年の『天災流行。國家代有』と云ふことから起つたものではあるまいかと思はれる。勿論その意味及び內容は今日の『流行』とは異つてゐるのである。

これ等大古いことは姑く措いて、十五世紀の伊太利都市（J. Burckhardt, Kultur der R naissance, 3 Aufl, S. III ff）や、十六、七世紀の北歐の諸都市（B. L. Hartmannus, Der a la mode-ten'el etc）に於ては既に明かに流行の現象 認められるのである（Sombart, D r Moderne Kapitalismu 2Bd, S 331）我が國に於ては流行現象は既に江戸時代、殊に元祿時代には明かに認められるのである。（一代男、一代女、二代男、若風俗等參照）然し乍ら今日の如くに流行が偉大なる勢力を逞うし、經濟生活の根本に重大なる影響を與へるやうになつたのは西洋では十九世紀に始まり、我が國では更にもつと後のことである。

今日の流行と昔の流行とは果して何れの點が異つてゐるか、これに就ては次の三點を擧げ得ると思ふ。（Sombart, a, a, O. S. 332 ff. Ross, op. cit. P 106.)

第一に今日の流行の支配を受ける物品の數が非常に增加した。カラー、雨傘、洋杖、名刺、化粧品其他の日用品の殆んど全部が流行の支配を受けてゐることは云ふまでもない。そして其等の物品が私共の生活に直接に必要な程度が低ければ低い程

それ丈け又流行の支配を受ける度も強いのである。

第二に流行が一般的になつた、換言すれば同じ流行の支配を受ける人間の範圍が甚だしく擴大せられた。勿論文藝復興期にも流行はあつた。然しそれは主として伊太利の諸都市中の各階級に限られてゐて、(Bruckhardt, a, a, O. S. 113)。それ以外の社會全般には及ばなかつた。けれども今日に於ては流行の支配する範圍は地域的にも階級的にも擴がつて、全文明諸國のあらゆる階級の人々にまで及んでゐる。丸善の店員に聞くまでもなく西洋の流行專門の雜誌は一般に讀まれ、巴里の婦人の服裝や米國の活動俳優のスタイル等は、極東の日本にまで流行してゐるのは明かな事實である。

第三に流行變遷の度が劇甚になつた。昔は一の流行が一時代を通して續いた。嘗て巴里を中心として貴婦人等が顏に絹布又は紙等の小片を貼り付けて飾としたことがある。この顏貼 Patching は一世紀間を通じて流行したのであつた。其他にも數十年又は數ケ年續けて同一物が流行した例は珍らしくはない。ところが今日に於ては流行變遷の度は極めて劇甚になつて來た。歐洲に於て男子の流行の創始者とも云はれた英國の皇太子プリンス、オブ、ウエールスが、若し時計を持つことを忘れてオペラハウスに行つて、彼の胸に鎖がないことが知れると、その劇場内の凡べての人の時計の鎖は、第一番目の幕が下りるまでには人々の胸から悉く消えてゐるのである。(Ross, op. cit. p. 106)。それ程ではなくとも今日の歐洲に於ては婦人服裝の流行が一交際季節内に四回、若しくは五回も變るのは普通のことになつてゐる。男子でも同じことで日本でも近頃はモーニング、コートが流行して來て、フロックは餘り見ないやうになつたが、西洋に於て流行に遲れないやうにするにはモーニングの型を少くとも年に四回は改めなければならないさうである。我國に於て先年某の大禮が行はれた時、老壯各年齡の人々が參列した。ところが其の時には凡そ一八六〇年頃から一九一〇年頃に至るまでのあらゆる型のシルクハットが陳列されて、同じく參列した外國人を驚かしたと云ふことである。これは我國人に不案内な洋裝のことであるから姑く措いて、我國特有の一般服裝に就ては歐洲に於けると同じく流行は常に速かに變遷してゐることは事實である。そして其の變遷の度が次第に益々急激になりつゝあることも亦、明かな事實である。

五、流行の社會的條件

近代的流行現象が起つたのは十九世紀以後のことであることは既に述べた通りである。十九世紀以後は資本主義的商業主義の旺盛な時代である。現代の流行を了解する爲めには、それと

十九世紀以後の資本主義的商業制度との關係を知らなければならない。何が故に現代の流行は資本主義と共に發達したか、流行の社會的條件は何であるか。私は流行の社會的條件として次の四つを擧げることが出來ると思ふ。

第一に社會の交通が頻繁であることである。交通が頻繁になつてゐると多くの人の生活が接近し來る。隨つてそれ等の人々の趣味は統一され易くなり、又甚だしく神經質にもなり、模倣心も強く働らく。即ち近代的流行が起るのである。交通の種類は多いが茲には殊に精神的方面の交通が問題となる。その中で重なるものは新聞、雜誌殊に流行雜誌（日本には未だ流行專門の雜誌はないやうである、それの役目を果たしてゐるのは主として婦人雜誌である）、旅行、社交等である。そしてこれ等の精神的の交通は又物質的の交通に基づき、物質的の交通は近世資本主義的商業制度に伴ふものであることは云ふまでもない。中世期封建制度の特色は、各地方が地理的にも政治的にも又階級的にも分裂孤立してゐることであつた。各地方及び各階級は互に他と接觸し交通することが不可能又は恥辱とされてゐた。そして各その生活樣式が一定してゐて他を模倣することは出來なかつた。然るに封建制度に代つた資本主義的商業制度は、世界のあらゆる地方とあらゆる階級とに出入し交通交際することを可能ならしめたのである。かくて商業制度の確立と共に近代的流行も亦勃興したのである。

第二に階級心理である。資本主義の制度は社會に二つの階級を對立せしめた。上層の特權階級と下層の平民階級とである。凡そ社會に階級の別が出來て以來、上層の階級に屬する者は何等かの手段に依つて自己が上層の階級に屬する事實を誇示しやうとし、これに對して下層に屬する者は又何等かの方法を以つて自己が下層に屬してゐない外見を作るやうに努めることは、常に變りない事實である。かくて商店の番頭手代は紳士の容儀を學び、下婢は主婦と同じやうな服裝をすることを以つて最上の誇とし、長屋の娘が金満家の令孃に似た衣服を着ることを無上の光榮とするやうな事實を生じて來る。そこで利に敏い企業家や商人は狡猾にも、下層階級のこの心的要求に巧に應ずるやうな商品を製造して賣り出すのである。ところが是等の商品の製造は近代の生産技術を以てすれば極めて容易なことである。かくて所謂擬ひ物は盛に製造せらるることになるのである。即ち上層階級で一の新流行が起ると、各種の報道機關に依つてそれが直ちに社會一般に傳はり、そして又速かに下層階級ではそれを遙かに安價に模倣することになる。上層階級でダイア入の金指環が流行すると下層階級では人造ダイア入の人造金の指環

が流行するのはこの一例である。然るに又かくの如く速かに安價模造品が造られると云ふことは、それ自身直ちに其の流行の廢れる原因となるのである。思ふに上層の階級は自分の屬する階級に特有な流行を持つてゐて他の追隨を許さない所に自己標彰の誇を感ずるのであるから、其の流行が若し下層の階級に依つて、速かに而も安價に模倣されたことが知れた瞬間には既にその流行の魅力を失つて仕舞ふのである。そこで上層の者は直ちに別の新流行を迎へなければならなくなる。然し又新流行が起れば下層の者は直ちに模倣する。上層の者は又再びこの追隨から逃れなければならない。そして發明すれば其の度毎に模倣される。其の速度は生産技術、交通技術の發達と共に愈々其の急を加へて行く。かくて無限に新しい物に對する競爭、間斷なき趣味の變化、消費及び生産の變轉循環が起るのである。現に大デパートメント、ストーアに於ては、社交界に於ける或る流行が其の頂上をや丶過ぎた頃を見計らつて、之を大規模に製造業者に注文し低廉に仕入れて低廉に賣り出すのだそうである。そうすると流行の服裝をしやうと云ふ渇望はあり乍らも資力が不如意の爲めに果たすことが出來ないでゐた婦人は、爭つてこの『新流行品』を佛蘭西ならばボン、マルシエーとかルウヴルとか云ふやうな店で購求するのである。然し其の時は上層階級に於ては既に其の流行は廢れて、別な新奇なものが求められてゐるのである。第三に大量生産であり、第四に企業家競爭であるが、これ等の二つに就ては後で述べることにする。

六、流行の淵原

ゾンバルトの郷里は獨逸の田舍の小都市でレスラウである。一九〇〇年の五旬祭週 Pfingst=woche のある日のこと、彼はその呉服店の販賣部に這入つて見た。其處には其の年の暮から翌年にかけて着らるべき冬着の新型が陳列してあつた。これが其の地方に於ける冬の流行となるのである。その新型は如何にして出來るかと云ふと、其の店の圖案家に依つて考案されたものもないではないが、主としてマンハイマアとかロンソルテンとか云ふ伯林の大呉服店から輸入されたものである。そして伯林に於ける其の新型は、勿論伯林で發明されたものもあるが、大部分はその前の冬に巴里から仕入れて來た標本に依るものである。巴里には斯うした新型の意匠を賣ることを專門にしてゐる特別の商人 Maisons des echautillo.ueur がある。而も彼等は自ら新流行を作り出すのではなくて、『流行の最後の中心』からそれを得て來るのである。『流行の最後の中心』と云ふのは、所謂交際社會と『半交際社會』(花柳界)とを顧客とする巴里の第一流の裁縫師(以前には十余人位だつたそうである)

のことである。即ち新流行は此處で創造されるのである。そして此の場合にも意匠等に就て顧客の指圖を受けることは殆んどない。詰り顧客はこの裁縫師の人形かモデルの役目を演ずるに過ぎないのである。とにかく彼等は一の新型を工夫すれば先づ第一に所謂名妓に、その次には女優にそれを着せるのである。先年死んだ名女優レジヤン夫人の如きはヅウセエ Doucet と云ふ呉服店の傀儡だつたそうである。かくて今度はオトイエの春秋の競馬とかオペラとか其他の交際の機會を俟つて世間に流行するのである。そして或る年の新流行は一年か二年の後に獨逸ロシア邊境に及ぶのである。

然しこの場合に於て裁縫師も亦全然他の拘束を受けないで、一人で新流行を案出する譯ではない。彼等は幾多の材料を使用して始めてその仕事を行ふことが出來るのであるが、それ等の材料は彼等の手に達するまでには既に夫れ〲各種の製造行程を經て　てゐるものであつて、既にそれ〲の『流行』が成立してゐるものである。裁縫師はそれ等の材料を各種の工場から供給されたまゝに採用して、そこから出發して自分の製作に取り掛るのであつて、彼等自身でその材料の流行を支配することは殆んどない。更に又これ等の材料生産品そのものの流行は圖案家が工夫するのであるが、製造家はその圖案を自家專屬の圖案家に工夫させることもあり、他から買ふこともある。或は又製造家間の組合の決議に依つて一定の圖案を採用することもある斯くの如く新流行創造の根本動力となるものは資本的企業家であつて、多數の一般消費者は新流行發生の上には極めて微々たる影響しか與へることが出來ないのである。婦人の流行は巴里男子は倫敦からと云ふ諺がある。巴里の名妓や英國の貴族などは新流行の創造者だと云はれてゐるが、實は彼等は單に新流行の媒介者であり、傳達者であるに過ぎないのである。

以上は主としてゾンバルトの記述に從つて巴里に於ける婦人服流行の淵源を述べたのに過ぎない (Sombart, a, a, O. s. 335 ff)。然し乍ら同樣の原則は何處の資本主義的國家に於ても行はれてゐる。そして我國に於ける新流行も原則として同じ徑路に依つて發生するのだと聞いてゐる。例へば戰前には獨逸から盛に輸入してゐた染料が戰爭中に輸入されなくなつた時には織物業者は成るべく染料を多く用ひない白色系統のものを新流行として賣り出したことがある。

單に衣服ばかりではなくて其他多くの日用品を始めとして、流行遊戯も、流行學者も、流行作家も皆企業的資本家が製造するものであつて、決して消費者として一般多數人が作り出すものでないのである。

七、流行と資本主義的社會制度

流行現象を經濟學的に觀察すれば、新流行を創造する者は資本的企業家であつて、一般消費者は決してこれを作るものではないことは、上述した所に依つて明かな事實であるが、果して何が故に然るかと云ふことを了解するには、既に述べた流行の社會的條件二つの外に、第三と第四との條件を知らなければならない。流行の社會的條件の第三は大量生產であり、第四は企業家競爭である。

大量生產は近代資本主義制度の一の特徵であることは云ふまでもない。現時の資本主義制度が未だ發達しない以前には、工業的生產は原則として小規模なる手工業の形式で經營されてゐた。然るに現代に於ては生產は原則として工場制度に依つて、復雜なる分業に由り精巧なる機械を利用して經營されてゐる。其の結果は云ふまでもなく生產物の激增である。生產物の激增と云ふのは要するに同種同型の貨物の巨大なる數量が生產されることに他ならない。随つて工場生產は各個人別々の各種の趣味に適應するやうに形狀や色彩其他の條件を一々異にする貨物を製造する力は持つてゐないのである。然し乍ら流行は前述したやうに一方に於ては需要の統一である。そして需要の統一は資本的大量生產によく適合してゐることは明かな事實である。若し各人が流行の支配を受けないで各自獨特の固有な趣味を發揮して、これに適ふ物を要求したなら、今日の生產工業がそれに應ずることは殆んど不可能である。今日のやうに凡べての人が流行の威力を恐れて只管に流行の命ずる所に随つて同じ模様の着物を着、同じ形の帽子を冠り、同じ色の靴下をはき、同じことを論じた本を讀み、同じ作家が同じ様なことを書いた雜誌を買つて呉れることは、それ等の流行の製造者の立場から見れば慥かに便利とする所である。

次に企業家競爭も亦近代資本主義制度の一の特徵である。生產者でも商人でも企業家たるものは最新の物を消費者たる顧客に提供しなければならない。さうしなければ彼等は相互の競爭に於て劣敗者となるべき危險に絶えず脅かされてゐる。そこで彼等は少くとも『最新型』に後れない丈けの事はしやうと努める随つて爭つて最新型の見本の蒐集に努める。かくて當然流行の劃一が生ずるのである。然し乍ら單に劣敗者となつて競爭場裡に落伍したくないと云ふばかりではなくて、進んで優勝者となる爲めには他に先んじて新奇の物を提供しなければならない。かくて當然流行の慌しい交替が生ずるのである。そして此の新奇な物を案出工夫することは、常に最も生產者の頭腦を苦しめる問題となつてゐる。勿論必らずしも新奇な物を案出工夫しな

くとも同一物の品質をより良好にし、又はその價格をより低廉にすれば、企業家は其の相互の競爭に於てよく優勝者となることが出來る筈である。然し乍ら一の物を一層精巧に一層低廉に造ることよりも、單に形狀其他の小部分を變へて造つて目先きを新しくすることの方が、常に容易である。且つ又新奇の物を供給することに依つて一層購買心を挑發することも出來る。即ち何か新しい物が出來たとすると古い物は未だ充分使用に堪えるにも拘はらず、唯たそれが新式でないと云ふ丈けの理由で棄てゝ仕舞つて新しい物が採用されるのである。それで企業家は爭つて新奇の物を供給して競爭場裡に優勝者たらんとするのである。加之近代人は特に變化を好むことも事實である。神經的な近代人は單調に堪へる力を失つて、常に何かの刺戟を求めて止まない。それで競爭場裡にある企業家が取換へ引換へて矢繼ぎ早やに新奇の物を提供することは、正に消費者の要求に投ずる所以である、隨つて又企業者自身優勝者となる所以である。この原則は單に工業的生產企業に就てのみ行はれるのではなくて、各種の方面に於ても亦同樣に行はれてゐる。チヤーナリズム等はこれである。

八、「流行魔物」

流行、殊に現時に於ける流行は資本的企業家が、社會制度の欠陷に乘じて自己の利益の爲めに作り出して、これを神經的になつてゐる一般消費者に對して强制するものである。私共が新流行の衣服を着け、流行作家の執筆した雜誌を手にして得意になつてゐるのは、巧に企業家の術中に陷つたのである。一般消費者は自ら流行を作り出すことも出來ないで、生產者の作り出した流行の命に屈服しなければならないのである。

凡ゆる進步は利便に從ふものである。流行は利便をも効用をも省みないから進步ではない(Ross, op. cit. P. 924)。而も流行の勢力は甚だ强大であつて醜をも美と化し、悪をも善に變じて見せる。實にも流行は怪物であり魔物である。そして人は單なる『新奇』と云ふことに心を惹かれて、自らを省み物の本質を究める暇もなくなつて行く(Veblen, The Theory of the Leisure class P. 177) かくて又『流行魔物』Mode-teufel は偉大なる社會力を揮つて各個人を威壓して仕舞ふ。隨つて各人は自己固有の趣味と利便とに拘はらず、それ等を全然棄てて、若しくはそれ等を最初から持たないで、何等の批判もなく反省もなく、只管に流行の命ずるまゝに流行を歡迎して、朝に黑色の衣服を着け、夕べに白色の着物を着なければならないのである。

私は今玆に流行の價値を倫理的に判斷しやうとはしない。今

まで流行に就て論じられたことは素より少くはない。然し乍らそれ等の多くは流行を追ふ人々の輕佻浮薄を非難することを主としてゐて、流行そのものの本質を究めやうとしたものは餘り多くはない。殊に流行現象を經濟的原因に依つて說明したのは殆んどないとも云ふことが出來る。唯だ僅かにゾンバルトが之を試みてゐる丈けである。私は玆にゾンバルトの後を追つて流行現象の原因を究めやうとしたのであるが、流行は現時の社會に必然的のものであることを知つた。ゾンバルトも其の流行理論の終りに臨んで『流行、殊に今日の形に於ける流行は、資本主義の最愛の寵兒であつて、其の本質の根本から發生するものである』と云つてゐる（Sombart, a. a. O. S. 345）。然り『流行廢物』は現時の社會組織に必然的に發生する隨伴物である。今日の如く人は流行に支配され、殊に流行の變遷が急激な社會にあつては、何處に自己反省の餘暇があり、何處に批判の餘力がある？流行を追ひ、若しくは流行に支配されること今日の如く激甚なのは、或は現代人が『輕佻浮薄』であるためかも知れないゾンバルトもそれを認めてゐる。唯だ私は更に進んで果して何が故に現代人が『輕佻浮薄』になつたかを知りたいのである。現代人が敦厚沈重な風貌を失つたのは制度の罪である。資本主義の發達は多數の人をして其の鄕里と傳統とを棄てゝ大都會に群居せしめる。そして又都會に群居してゐる者の大多數は、借家から借家へと轉々してゐる。更に自由競爭は彼等の生活から一切の安定と一切の保障とを奪ひ去つたのである。かうした境遇に置かれた現代人が不安になり焦燥に走り、困憊した精神は甚だしく神經的になるのは當然のことである。かうした特徵のある現代人は、又自然持續力が劣しくなり、變化と刺戟とを好んで求むるやうになる。かくて現代人は最も流行に支配され易くなつてゐる。これが制度の罪でなくて何であらう。唯心論とか理想主義とかは如何にもその名が美しくて、無智者を迷はすには充分である。けれども事實は制度が罪を作るものであることは忘れることが出來ない。私は玆に現社會制度そのものを改造することの急務を信ずる者である。果して如何に改造すべきかは他の機會に稿を改めて述べやうと思ふ。（了り）

附言

本篇は主としてゾンバルト及びロッスの研究に基いてゐる。それを助けたのは小泉教授の論文（心理研究百十二號）である。其他は煩を避けて一々書くことを略す。厚く原著者にお禮を述べます。尙御質問及び御叱正は有り難く受けます。

……一〇、九、一四……



惠まれたる性の爲に（二）

醫學博士　永井潜

四

生殖腺——睾丸と卵巣——が、もともと雌雄男女を分つ根本をなすもので、此の主要的性別に對して、所謂第二次性徴・第三次性徴・第四次性徴の如きは附帶的の性別であることは、已に述べた所であるが、而かも最も興味あり最も注目すべきことは、是等種々なる附帶的性別は、主要的性別が原因となつて之を喚び起すことの關係である。語を換へて云へば、男をして男らしからしむる最後の根原は睾丸であり、女をして女らしさの讃美を贏ち得しめるのは、すべて卵巣の賜である。此の事は實に、現代の實驗生物學によつて正さに肯定せられた所であり、而して又あらゆる兩性問題の正しき解決を行ふべき最後の楔子である。

男女の心身の差別の發露する有樣を見るに、胎内生活をして居る時は勿論のこと、幼少なる時期には、性の差別は微弱であるが、年齡が進むにつれて漸く夫れが明瞭になり、一定の年齡所謂年頃に達して、男らしさ女らしさが高潮に達する。而して其の時期は即ち未發の狀態にあつた生殖腺の蕾が、立派に咲き揃ふたときである。更に又老年期になつて、生殖腺の花が凋落すると共に、一旦現はれた性の差別も再び不明瞭になつて、花恥しかりし新郎新婦も、何れを夫れと分ち難き尉と姥になるのを見ても、生殖の發達退行と性徴の發達退行とが如何に密接なる竝行的關係を保てるかを明かにすることが出來る。

更に確實に上述の結論を證明するのは、去勢に關する研究的

事實である。元來去勢は、人間が、動物加之人間自己の上に加へた最も古き手術であつた。蓋し古代の人類が最も原始的なる獵者の生活より、一進して牧者の生活に入り、野生の動物を馴らして家畜となし、斯の尊き天産物を自己の思ふが儘に利用することを始めた際に、雄の動物は、雌に比べると、氣が荒く、食用に供すると肉が硬く、味が劣る缺點があつた。そこで人は何時しか其の睪丸を切り取つて、是等の缺點を除くことに成效した。又た人間自身に去勢を施すに至つた動機を尋ぬるに、二つある。其の一は宗教的觀念であり、他の一は多妻主義であつた。蓋し生殖のことたる最も神秘なるものであり、随つて之に關聯して生殖器其の物を宗教的に崇拜することは、自然の勢であつて實際士俗學上世界各地に亙りて廣く行はれ來つたのである。そこで生殖器に手術を加へて、神に奉仕する表徴とするに至つたものと考へられる。多妻主義に伴つては、後房に出入する男子の危險を豫防する目的から、之に去勢を行ふに至つたのである。

兎に角、實際的若くは宗教的關係から、去勢は非常に舊くより動物及び人間に施こされて居たのであるが、併し其の結果を學問的に研究するやうになつたのは、比較的近い頃のことである。今生殖腺の働がまだ目醒めて居ないで、随て性の特色が發現されて居ない幼少時に於て、去勢を施こすと、終生性の特徴が現はれ來ない。然るに今其の物に相當せる、生殖腺を移植して、失つた所のものを人工的に補償すると、後れ馳せながら立派に其性徴が現はれて來る。加之、場合によつては、敢て生殖腺其の物を移植せずとも、單に其の中に存する有効成分を含める生殖腺の「エキス」を注射した丈けでも、同樣の效果を擧げることが出來る。

蛙の雄は、交尾期に入ると、著明なる心身の變化が起る。即ち平常萎縮して居た睪丸が盛んに增殖肥大する。之に伴ひて前肢の拇指に疣のやうなものが出來る。又前肢を曲げて雌を抱く際に働く屈筋が力強く發達する。是れ皆な雄が確かりと雌を抱擁して之を逃さない樣にする爲に役立つものである。又た精液を貯ふべき精囊が大きくなる。而して又性欲が頗る旺盛となる。然るに交尾期が過ぎると、睪丸が再び萎縮し、之につれて

一旦現はれた心身の變化も退散する。斯くて年々此の變化を繰り返して居るのである。

今交尾期に入るに先ちて、蛙の睪丸を取り去つて見ると、たとひ交尾期に入るも、該雄蛙には上述の心身の變化は起らぬが、此の雄に交尾期にある他の雄の睪丸を移植するか、若くは其の睪丸を食鹽水中に磨り潰ぶして造つた「エキス」を取つて注射して見ると、上述の交尾期に見らるゝ心身の變化が著明に現はれて來る。而かも亦大に興味あることは、去勢せる雄蛙に睪丸「エキス」を注射することの代りに、性欲旺盛なる雄の腦髓のエキスを注射しても、同樣の效果を奏することを見た。即ち生殖腺の有效成分が、腦髓に到達して之を刺戟して性欲を喚び起して居ることが分かる。是れ實にスタイナハ氏の實驗した事實である。

五

蛙の如き下等動物でも、第一次性徴が第二次第三次性徴に及ぼす影響は斯の如く深甚なるものであるが、鷄や其の他の高等動物で得られた實驗成績は、更に注目に値するものがある。就中スタイナハ氏によつて確められた雄の雌性化と雌の雄性化に關する實驗は最も興味あり最も意義あるものである。

スタイナハ氏は、鼠や「モルモット」等の生後僅かに三週間のものを取り、雄には其の睪丸を切除して、其の代りに卵巣を植ゑ、雌には卵巣を剔出して其の後に睪丸を移植して、生長後如何なる状態を現出するかを見た所が、前者は本來雄として生れたにも拘らず、大さ・毛並・乳房・外陰部等が、全く雌の樣になり、加之心の働迄も雌性化して、他の雌に對しては毫も性的傾向を示さずして、却つて普通の雌と同じ樣に、雄から追ひ廻はされる際に、尾を擧げて雄の欲望を挑發したり、又た自己の大きくなつた乳房を、好んで幼兒に含ませて之を愛育することを見た。之に反して後者は元來雌たるべかりしものが、去勢後の睪丸を移植した爲に、心身共に雄性化した。例へば乳房・子宮の如きは發達が沮止せられ、陰核は膨大して陰莖の樣になり、體重・身長・骨格・毛並等も、普通の雄と選ぶ所がなく、又た雌に對する欲望が著しく旺盛となることが見られた。

ス氏の此の實驗的事實によりて、吾等は生殖腺の身體に及ぼす影響が、如何に深甚であるかを一層强く印象することを得たと同時に、雄性の生殖腺即ち睪丸と、雌性の生殖腺即ち卵巢とが、夫れ〴〵特殊の影響を及ぼすものであつて、體細胞と云ふ白紙の頁を、女と云ふ紅い彩筆で染めるのも、男と云ふ靑い繪具で隈取るのも、或る程度迄、斯の生殖腺の隨意の儘であることを覺り得たのである。

六

斯様な關係は、獨り動物に於て見らるゝのみならず、人間に於ても亦疑なく認められた。多妻主義が今猶ほ實行せられつゝある土耳其では、貴族や富豪の子女が婚嫁する時、其の嫁入道具の一として、去勢されたる男子の從者が追隨する。此等の男子は、無慘なる人買ひの手によつて容赦なく製造せられ販賣せらるゝのである。又露西亞の或る地方には、「スコプツエン」と稱せらるゝ宗門があつて、宗教上の觀念から男子に去勢を實行するのである。

斯様にして去勢された男子、若くは先天的に生殖腺發育の不完全なる男子、即ち所謂「エーヌヒョイド」(希臘語で寢臺の番人と云ふ意)なる者を見るに、成育して後も、心身に於て男性的の特徴が現はれないで、一見男とも女とも附かない形貌を呈する。即ち骨格がやさしく細長く出來、腰部が太く、皮下に脂肪が澤山溜まつて所謂曲線美を示すべき丸味を帶び、鬚髭がなく、毛髮が一般に少なく、喉頭が發達しないで、隨つて女や子供の樣に聲の調子が高く、筋力が少く、意志が弱くして感情が强く、性欲が缺如して何勢力(インポテンツ)になる。又た年若くして而かも皮膚に皺が寄つたり、顏附きがませたり、身體の一般新陳代謝機能が衰へたり、記憶力が減じ意氣が銷沈して動もすれば憂鬱になつたりする。即ち或る程度迄老衰の現象と似通ふた現象が起る。茲に於てか老衰するから生殖腺が衰へるのではなく、寧しろ生殖腺の機能減弱の結果が身體を老衰せしむるものであると考へて、何等かの方法により、一旦衰弱した生殖腺の機能を再び旺盛ならしむることによつて、老衰せし者を若返すことが出來ると云ふ樣な考から、夫れに關する研究が行はるゝに至つ

た。夫の近時盛んに喧傳論議せられつゝあるスタイナハ氏若返り法の如きも、全く此の説から出立して研究せられた一新法に外ならぬのである。スタイナハ氏若返り法に關しては、自分は逸早く之を紹介したから（中央公論大正十年一月號）、今重ねて之を叙說するの煩を省くが、自分が先じて之を報導した眞意は、研究者に向ひては斯の興味あり且又た重大なる問題が一新刺戟を與へること、又一般公衆に對しては、生殖腺の機能が如何に美妙なるものであつて、生殖腺の衛生が如何に大切であるかは之によつて十分に會得して貰つて、性道德の向上に資する所あらしめんとした迄であつて、決して斯の未完成の新法を、無批判的に肯定し、宣傳せんとしたのではないこと丈けを、重ねて茲に斷つて置きたい。

扨て斯樣に去勢された爲に起つた心身の變化は、之に睾丸を移植すると、著しく輕減されることは、人間に在りても亦動物の實驗成績とよく一致して居る。殊に性欲生活に於て其の恢復は最も顯著である今其の一例を擧げて見ると、リヒテンステルン氏の報告によれば、二十九歳の一兵士が、睾丸で創傷を蒙つた爲に止むなく去勢した所が、約三週間の後、其の影響が歴然として現はれた。即ち鬚髯が脫け、陰毛の生へ際は男子の菱形をなせるものから變に女子の如く三角形をなすに至り、皮下に脂肪が溜つて全身が丸味を帶び、精神狀態は沈滯して、早老者の徵を呈し、性欲は全く缺損するに至つた。リヒテンステルン氏は、去勢後二ケ月半にして、好個の機會を得て、斯の兵士に他人の睾丸の移植を試むることが出來たが、其の成績によると、移植後僅に十日にして、早く既に一旦失はれた性欲が恢復し來り、四週間後には完全なる性交を行ひ得る樣になり、一般新陳代謝も盛んとなり、皮下の脂肪は減じ、鬚髯も生へ、精神狀態も活潑となつて、九ケ月の後には全く舊時の狀態に復することが出來、間もなく結婚して、夫として幸福なる生活を送り得たのであつた。

七

特に興味あるのは、上述の學理的根據による。同性戀愛なる變態性欲に關する治療である。已に述べた樣に睾丸中には男を

して男たらしむべき心身の性狀を喚び起すべき成分があり、卵巣中には女をして女らしからしむべき機能を有する或る物質が存在することは之を推定するに足る十分なる事實があるのであるが、若し果して左樣でありとするならば、異性戀愛即ち男が女に對して性的慾望を起し、女子が男子に向つて戀愛の對象を求むるのも、全く生殖腺の特種の作用に歸せねばならぬ。然るに今稀なる例外として、睪丸内に普通の睪丸に見らるゝ特殊の成分が見られずして、却つて普通の卵巣に於て存すべき成分がある樣な場合がある。斯かる際には、其の性的生活は、通常の男子の如く、異性たる女を愛せずして、却つて男子を喜ぶ樣になる。斯くて男子の同性戀愛を起すのである。女子の同性戀愛でも、其の關係は同樣である。

そこで若し此の推定が正しいものであるとするなれば、同性戀愛を示せる男子に於て、其の異常の睪丸を切除し、之に代へて健全なる男子の睪丸を移植すると、同性戀愛は退散して、普通の如く異性に對して滿足を感ずることゝなるべき筈である。而して此の豫想を確實なしむる樣な幾多の報告が爲されて居る。殊に本年二月に、リチヤード・ミユザム氏は治療確實なりと信じて居る二例を報告して居る。

八

然らば、生殖腺が身體各種の組織細胞に斯の如き甚大なる影響を及ぼすのは、如何なる手段によるのであるかと云ふに、内分泌の研究によりて始めて夫れが明瞭になつた。元來生活體の機能に美妙なる調和統一が保たれて居るのは、其の各部分が各自孤立して居ないで、互に相連關し憑倚して居るからである。而して遠隔せる組織器官の間に密接なる連絡を司るものとしては、第一に神經系を考へねばならぬが、併し神經以外に第二のものがある。夫れは身體を循環しつゝある液質である。恰度大洋の水によつて世界各地の間に、船舶の往來が行はれ、有無相通して相互に連繫が保たれて居る樣に、一定の器官に於て造られて、組織液血液内に送り出された特殊の化學的成分が、循環して他の組織器官に到達すると、之に向つて一定の影響を及ぼす場合がある。其の際若し該組織器官の機能が增進せらるゝな

らば、其の他の化學的成分に「ホルモン」なる名稱を與へる。「ホルモン」とは希臘語の「喚び醒す」と云ふ意味である。若し又該化學的有效成分の爲に、一定の組織器官の機能が抑制せらるゝならば、之に「シャロン」なる名稱が附せられる。要するに是等有効成分は、腺の樣な構造を有する器官に於て造られて、これが内方血液中に向つて分泌せらるゝのであるから、其の作用を内分泌と云ひ、其の腺を内分泌腺と唱へ、該有効成分即ち「ホルモン」乃至「シャロン」を、内分泌物と總稱するのである。

　生殖腺が遠隔せる組織器官に顯著なる影響を及ぼすのは、全く此の内分泌の作用によるものであつて、決して神經の連絡に待つのではない。何ぜかなれば、去勢した動物に生殖腺を移植すると、立派に其の影響が現はれて來て、遲れ馳せながら第二次性徵が發現するからである。蓋し神經は、一度生殖腺を切り放した後、別の所に他から取つた生殖腺を移植した際、元通りに繋がることは、到底考へられないことである。即ち移植された生殖腺が、體の他の部分に影響を及ぼすのは、神經を手段とするのでなく、内分泌物を手段とすることが分かる　之に關するもつと確實な證據は、去勢せる動物に、生殖腺其の物を移植せずとも、其生殖腺の「エキス」さへ注射すれば、第二次性徵が現はれて來る事實である。此の場合無論神經の與り知る所でないことは明瞭であつて、單に生殖腺内に存する或る有効成分さへあれば、夫れで事が足りるのである。

　之を要するに、雌雄男女に於て見らるゝあらゆる心身の差別は、第一次性徵即ち其の生殖腺の差別に基くものと言つてよい。絶えず古くなりつゝ而かも絶えず若からんが爲に、生物の體内に具備せらるゝ生殖腺。種族の永遠の命を擁護せんが爲め生殖腺。其の生殖腺の内分泌作用こそ、實に廻ぐりて止まぬ兩性問題の小車の、あらゆる輻木を集むべき轂棒である。曠古の大病理學者ウキルヒヤウ氏は、云つて居る。『吾等が婦人の美はしい性質に向つて拂ふべきあらゆる尊敬は、之を卵巣に向つて拂はなければならぬ。婦人をして婦人たらしむべき總ての行爲を喚起すのは卵巣である。（つゞく）



名越一族の最後（一幕）

村松梢風

登場人名

名越遠江守入道
名越兵庫助
家老　進藤帶刀
連歌師花の下宗看
白拍子妙
同　玉琴
同　刈藻
武田二郎
伊賀八郎
生田の翁

其の他

郎黨雜兵大勢
遊君數名

元弘三年三月初め頃。河内國金剛山の麓、鎌倉大名名越遠江守の陣屋二重家體にて正面假襖、上手には簾を掛けて隣室に接す。二方に縁を廻し、庭前より階段にて昇る。左右の口に三本唐松の定紋打つたる幔幕を掛ける。庭の奥には満開の花を附けた櫻の木が二三本立つてゐる。其の間から、金剛山が間近く望まれる。巡邏の武士、遠江守の郎黨武田二郎、兵庫助の郎黨伊賀八郎、何れも廿二三の年配、甲冑を着け、二郎は階段の二段目邊りに腰を掛け、八郎は稍右手へ寄つて切株に腰を掛けてゐる。二人とも少し酒氣を帯びてゐる。それと向き合ひに雜兵三名、思ひ／＼に庭前へ胡坐をかいてゐる。

夕暮れ間近の、靜かな、倦怠を誘ふやうな氣分。

賑やかな今様の音樂が奥の方から聞こえる。

二郎。（奥の方を振り向いて見て）此分ではまだ御酒宴は仕舞ひさうもないな。

八郎。どうして／＼、騒ぎは是れからだ。おほかた今夜も夜徹しの御酒宴だらう。

二郎。（欠伸をする）斯う毎日毎日休み無しの御酒宴だのに、お互ひの御主人はよく倦きないと思ふな。拙者などは、時々のお相伴だけでも、もうそろそろの酒の香が鼻に附いて來た。

八郎。いかにも其の通りだ。近頃のやうに軍はなく、毎日酒浸りになつてゐると、第一身體がだれてしまふわい。何んとか眼の醒めるやうな軍でもして見度いものだなあ。

雜兵甲。八郎様、いつたい軍の方はどうなつたので御座います？

八郎。軍か？軍は當分お休みだ。

雜兵甲。何故で御座います？

八郎。其方達も知つての通り、正月以來百萬の大軍で此の千劍破(ちは)を取り圍んで、寄せつ攻めつして見たがどうしても落ちぬのぢや。で、此の上は遠卷きに取り卷いて氣長に兵糧攻めにするよりほかに仕方がないといふところから、總大將長崎殿の下知で、諸國の軍勢が斯うして便々と永陣を張つてゐるのだ。

雜兵乙。何時頃になつたら敵の兵糧が盡きて降參するで御座いませう？

八郎。そんな事は敵に聞いて見なければ分らぬわい。

雜兵甲。楠といふ大將は、唐土の諸葛孔明にも勝る大智者だといふことで御座いますから、斯うして味方が愚圖々々してゐるうちには、何んとか又計略をめぐらして、容易に降參しないかも知れませんな。

雜兵乙。俺も何んだかそんな氣がするな。早い咄が先達て御當家の軍勢が、城の水道を斷ち切つて敵を弱らせようとした時でも左うだ、楠に計略の裏を掻かれて散々な目に會つた上、お負けに旗指物まで敵に分捕られたではないか。

雜兵甲。あれ以來といふものは當家の評判の惡るさ。名越殿の手の者だと言ふと味方の者まで馬鹿に致しますから、私共は外を歩くのが極まりが惡う御座いますよ。

八郎。(口惜しさうな顏をして)何んだ。味方の奴までが馬鹿にする？ 忌まいましい畜生め、今度そんな事を吐かす奴があつたら此處へ引つ張つて來い、ひどい目に遇はして遣るから。

二郎。はははははは。八郎殿、何もそんなに憤ることはない。不覺を取つたのは當家ばかりではない。藁人形に騙されたり頭の上から熱湯を浴びせられたりした一層大馬鹿者さへあるではないか。それに第一、世間で楠のことを天晴れ智者の何んのと讃めそやすのからして拙者は氣に喰はん。楠が何んの智者なものか。誰れだつてあれ位な謀略はして見せるわ。まづ、譬へて言はふなら——彼奴は蟹かな。味方は油斷をしたばかりにちよいと蟹に挾まれたまでのこと。結局彼奴は此の千劍破といふ小さな穴の中から出られぬではないか。

八郎。はははは、是れは愉快だ、二郎殿は何時も乍らうまい事を云はれるな。いかさま正成は蟹だ。石垣の間から眼玉を飛び出してキヨロ付いてゐる哀れな蟹だ。コリヤ〱、一同よく聞いて置け、此の後そんな事を云ふ奴があつたら、蟹に挾まれたのだと云つて遣れ。宜いか。

雜兵甲乙。(顏を見せ)畏まりました。

其の時、下手峻森の蔭から生田の翁登場。烏帽子を着、賤しき身なり、純白の粗布を著ふ。兩手を背後にて組み合はせ、腰を屈めながら出て來る。

生田の翁。これは皆樣、相變らずお賑やかで御座いますな。

一同そちらを見る。

雑兵甲。誰れかと思つたら生田の翁か。お前今頃何用があつて來たのだ？

生田の翁。私は女子達を迎ひに參りましたのですよ。

雑兵乙。さうか、これア多分無駄足だらうよ。

（と云つて顎で奥の方を示す。稍靜かな樂の音が聞こゑる。）あの音はお前の耳にも聞こゑるだらう。今日もあの通り御酒宴の最中だから、女達にはまだ當分お暇は出ないだらう。

生田の翁。それは困りましたなあ。今日は是非共お暇を頂いて連れて歸るやうにと私は主から云ひ付けられて來たのだから。此の節は軍がお休みのお蔭に、何處のお陣屋からも女子の催促ばかり、江口神崎は勿論京白河迄參つても女子はとんと拂底で御坐います。殊に御當家へ參つてゐる中でもあの妙と申す奴は、江口神崎に數多い白拍子の中でも、一と云つて二と下らぬ賣れつ子で御坐いますから、御贔負は有難い事ながら、餘り永くお留め置きになられますと抱へ主の方では反つて迷惑致しますやうなわけで、はい。

雑兵甲。そんな事を俺達が知つたことか。其の妙とやらいふ白拍子の事では、俺達の御主人の遠江守樣と兵庫助樣と叔父甥のお二方の間に、火の出るやうな競爭が始まつてゐるのだ。

雑兵乙。それが爲めに夜晝なしの御酒宴でろくにお寢みになる間もないくらいだ。たとひ千劍破の城は落ちようとも、あの女がどちらかへ落ちぬ間は、此の場の納まりは付かないだらう、のう兄弟。

雑兵甲。さうだとも〳〵、あの極まりが付かぬうちは、生田の翁が百萬遍足を運んだとて無駄なことだ。

雑兵乙。しかし、考へて見ると今度の事は殿樣方がちつと御無理だな。どちらかお一方が御遠慮なされるのが當り前だのに、叔父御樣と甥子樣の仲で一人の女を張り合ふといふ事は、あんまり淺間し過ぎる咄だ。

雑兵甲。それは仕方があるまい。戀といふ事は、人間でも禽獸でもする事なんだから。

八郎。默れ此奴等、汝等が身の程知らずな、御主君樣に對して彼れ是れと誹謗ヶ間敷い事を申すとは憎い奴だ。もう一度其の通り云つて見ろ。（と立ち上つて威丈高になる）

兩人畏れをなし、顔見合せて少しづつ後退りする。其の時雜兵丙が笑ひながら初めて口を出す。

雜兵丙。もし八郎樣、此奴等も幾らか酒の氣が殘つてゐて、口から出放題を申すので御坐います、どうか御勘辨なされて遣つて下さいまし。（二人の方を顧みて）全體貴樣達も口が過ぎるといふものだ。俺達はな、軍に來たからには、朝から晩まで兵糧や矢種を持つて牛馬のやうに追ひ使はれ、其の上流れ矢に中つて死なうと文句は云へまい。それを思へば斯うして毎日のらくらと半分は寢て暮らし、時々御酒のお餘りでも頂戴してゐれば、とんと花見遊山にでも來てゐるやうなもの、それも是れも皆御主君樣のお蔭だと、有難いと思ふがいい。（それから生田の翁に向ひ）おいおい爺さん、お前も其の年で女の送り迎ひをする程の苦勞人なら、野暮な事は云はずと、此の上ともに御最負を願つて、ちつとも餘計御祝儀を頂く算段でもする方が正直で宜からうぜ。

生田の翁。はははは。（と卑しく笑ふ）お前さんは齡に似合はぬ利口な人だ。それではお言葉に從ふとして、私も此處で暫らく休ませて頂きませうかな。

といつて、雜兵達から少し離れた邊りへ尻を据へる。

二郎。こりや〳〵生田の翁とやら、貴樣はだいぶんの齡らしいな。いつたい幾つだ？

生田の翁。（自身を嘲けるやうな冷たい笑ひを浮かべる。）もう齡などは疾うに忘れてしまひました。

二郎。自分の齡を忘れる奴があるものか。しかし何んだらうな、お前位長生きをしたら、隨分變つた世の中も見て來たことだらうな？

生田の翁。はい、それはもう、此の齡になります迄には、可成り樣々の事にも出遇ひましたよ。

二郎。さうであらう。處でどうだ、其の中でお前が珍らしいと思ふ話を、茲で俺達に話して聽かせては吳れないか？

八郎。それは退屈しのぎに一段と面白い思ひ付きだ。おやじ、話せ〳〵。

生田の翁。はい〳〵、それはもう、此のおやぢのお話しで宜敷ければ手易い事で御坐いますが……。併し、どんなお話が宜

敷う御座いませうな？

二郎。（小首を捻つて）待てよ。ええと、軍の話も面白くなし……

…矢つ張り何んだな、戀の話が一番面白からうな。

生田の翁。畏りました。では何んぞ戀のお話を一つお聽きに入れることに致しませう。いやもう戀に就いては隨分不思議な話が御坐いますよ。人間の致します事では、戀だけがたつた一つ正直なもので御坐いますからな。

斯う云つて翁は少し前へ乘り出す。一同翁の方を向いて耳を傾ける。談話を妨げぬ程度の靜かな樂の音が奧から流れてくる。

生田の翁。私は攝津の國の生田の里の生まれで御坐いますので、今でも人様が私の事を生田の翁と申すので御坐いますが、此の話は、私がまだ極く若かつた時分に、私の故郷に現在あつた事で御坐いますよ。――處でな、是れは或る一人の女子を二人の男が戀したといふ話で御坐いますのぢや。其の頃私の故郷に一人の美しい女子がありました。其の女子の美しかつたの何んのと云つて、今茲で此のおやじがどういふ云ひ方をして見たところで、其の美しさを間違ひなくあなた方にお傳へ申す事は六ケ敷う御坐いますが、先づ雪の肌、丈なす緑の黑髮、星のやうな眼、花のやうな口脣、――其の中のどの一つでも、大ていの男が迷はずには居られなかつた――とまあ、斯う思し召して下さいませ。ですから此の女子が漸う十五六位の時分には、太した世間の評判で、四方八方から毎日のやうに文が來る、贈り物を屆けるといふわけで、其の中には隨分身分の高い人もありましたのぢや。處が、此の女子齡こそ行かぬが仲々利口者で、身分や財寶には眼は呉れぬ。何んでも自分を一番深く戀してゐる男に身を委せると云つて、有象無象を片つ端から撥ね付けてしまつて相手になりません。さて斯うなると男といふものは大概根氣の惡いもの、高嶺の花より里の芋莖が手つ取り早く、つい三日がとこで口說けば落ちる相手を探がすのが世間普通の男の人情、此の女子にも何時となく男が寄り付かぬやうになりました。處が、最後迄殘つた男が二人ありましたのぢや。たとひ此の後何年かゝらうと、命に替へても自分の物にしなければといふ程の熱心で、懲りずに云ひ寄つて參ります。其處で女子の方

でも、此の二人の中のどちらかに決めようと考へましたのだが、年齢から貌かたち、人柄も身分も丁度同じ位で、どつちへ團扇も上げられません。それでは眞實の多い方にしようと思つていろ〱試して見たところが、是れが矢つ張り負けず劣らずで御坐います。さあ斯うなると間へ狭まつて困つたのは女子ひとりぢや。今更どちらを斷るのも義理が悪い、と云つて兩方捨てゝしまふのは猶更惜しいといふわけでずる〱月日が經つ、男達は速く返事を聞かして呉れと矢の催促を致します。と、ある年の夏の事で御坐いました。其の頃は夏が來ると生田川の河べりへ涼み小屋を掛けて、其處で暮らして暑さをしのぎましたもの、女子も其の涼み小屋へ參つて居ると、相變らず二人の若者が何んの彼のと申して來る。女もほと〱途方に暮れた揚句に、或る日二人に向つて斯う云つたもので御坐います。「あなた方お二人のお志には全く甲乙が無いから、わたしにはどちらのお心に隨ふとも申されません。では、あの川にゐる水鳥を弓で射て、射中てた方に隨ふと致しませう」其處で、二人の若者が同時に水鳥を射ると、よくよくの事と見えまして、一人は頭の方、一人は尾の方と二人ながら美事に射中ててしまひました。是れには女子も弱つたで御坐いませうが、其處が女心で一圖に考へ込んでしもうて、物も云はずにザンブリと川の中へ飛び込んだ。すると後から二人の若者も川へ飛び込んだが、丁度其の頃は水勢が速く、到頭三人ながら溺れて死んでしまひました。どうで御坐いませう、死骸を引き上げて見ると、男が二人で、一人の女子の足を捉へ、一人は手を捉へて、引つ張り合つた儘死んで居りましたが、いや其の死に態の怖ろしかつたことは、思ひ出してもぞつとするやうで御坐いますよ。

翁の談話終る。一同は其話から何か不吉な暗示を與へられたかの如く、暫時重苦しい沈默に引入れられる。

雜兵甲。何んといふ無氣味な話だらう。俺の眼には、死に際迄女を引つ張り合つてゐた男達の顔付きが見えるやうだ。

雜兵乙。それにつけても、人間を惡魔と同じにする女子といふものは、罪の深いものだなあ。

生田の翁。いや、女子が罪が深いのではなく、男が罪を作らせるので御座いますよ。

雑兵甲。それは見様でどうでも云へることだ。唯、怖ろしいものは戀だ。

雑兵乙。戀の毒に中てられると、人間は生きながら地獄へ落ちるのだ。

二郎。（八郎と顔を見合はせる。）生田の翁の物語りで思はず時を移したやうだ。八郎殿、一廻り廻つて來るとしようか。

八郎。それが宜からう。

　兩名共の場を起つて下手幔幕の方へ入る。

雑兵丙。（起ち上りながら）どうだ、俺達もお臺所へ廻つて、懐の痛まぬやつでちつと景氣を附けようではないか。

雑兵甲。其の事〱、さア〱出掛けよう。（と立ち上つて生田の翁に向ひ）ぢいさん。お前もたんなら俺達と一緒に行かないか。

生田の翁。有難う御座います。が、まア〱お先きへ。

雑兵甲。さうか、では又後に會はふ。

一同上手幔幕の中へ這入る。此時奥の騒ぎも鎮まり、四邊頓に靜寂になる。金剛山は斜陽を浴びて茜色に染められる。舞台にも、薄紅き光線が漂ひ、日没前の一ときしきり反つて物の陰影が鮮かになる。

生田の翁。（邊りを見廻はしながら）もう今日も日が暮れそうな。奥の方も靜かになつたわい。どれ、（と腰をさすり〱立ちる。）私も向うへ行つて暫らく憩むことにしよう。

と云つて、とぼ〱した足どりにて、櫻の木の方から家のうしろへ這入る。

舞台暫時空隙――。

間もなく奥から白拍子の妙が襖を細目に開けて艶やかな半身を覗かせる、やがて這入つて來る。齢頃は廿位、感情が生き生きと外部に露はれてゐるやうな容貌。髪を後に下げ、緋の袴に、枚林を染めた袿を着てゐる。可成り酒に醉つてゐる。秋の近く迄來て自墮落に坐る。

妙。（扇を使ひながら蓮葉な調子で言ふ。）おゝ苦しい、胸がムカムカするやうだ――お酒が嫌ひなわたしを捉まへて、ヤレ俺の盞だから受けろの、ヤレ何うしろのと、兩方から責め立てら

れるのだもの溜まらない。大名なんて云ふものは、何故あゝ我儘で野暮なんだらう？――（奥の方を見て）御家老の帶刀様が、わたしに用があるから此處へ來て待つてゐろと仰つしやつたが、一體どんな用だらう？ 殊によるとあの眞面目な顔をした御家老様までが、矢つ張りわたしを何んとか思つてゐるのだかも知れない。一寸賴母しさうな方だけれど――おゝ厭だ、厭だ。（フラ〳〵と起つて行つて、柱に凭れながら櫻の木の方を眺めてゐる。）いつの間にか櫻の花が滿開になつてゐる。わたしが此處へ來た時にはまだ蕾も堅いやうだつたが、もうそんなに日が經つのかしら？ 今日も暮れてしまふ。花こそ咲いてゐるけれど、何んとなく寂しい日暮れだこと――。わたしはもう此處にゐるのが厭になつた。一刻も早く江口へ還りたい。日が暮れるほど陽氣になるあの里が戀しくなつた――。

名越家の家老進藤帶刀が襖を明けて這入つて來る。四十五六の年配、頭髮は少しく白き物を混え、分別正しさうな人物。直垂を着す

帶刀。（襖の側から聲を掛ける。）妙、そちは何を見てゐるのだ？

妙。（始めて氣が付いたやうに振り向き。）餘り美しい夕暮れゆへ、思はず見恍れて居りました。御家老様は、何時の間に此處へおいでで御坐いました？

帶刀。拙者は今來たばかりぢや。（と云つて後ろの襖を閉める。）早速だが、そちに話し度い事がある。まづ其の邊へ坐るが宜い

妙は不思議さうな面持ちをして椽の近くに坐る。それと對き合ひに帶刀も坐る。

妙。（稍改まつた調子で）わたしに話しと仰つしやるのは、どんな事で御坐んせう？

帶刀。ほかでもない、御主君様の事に就いてぢや。そちは、お二方の事を、どう考へて居る？

妙。どう考へると仰つしやると？

帶刀。いや、是れは拙者の云ひ方が惡かつた。先づ一と通り拙者の話を聞いて呉れ。（と云つて少し膝を進め、あたりに氣を配つてから）そちなどは詳しい事は知るまいが、そもそも當名越家といふものは、餘程込み入つた六ケ敷いお家筋なのぢや、と云ふわけは、元來兵庫助様が當家の御嫡流で、遠江守様は

其の御後見といふ譯だつたのぢや。處が遠江守様は度び〲戰場の功もお建てなされ、自然鎌倉殿の御覺えも目出度くて、何時となく本統の御主人同様になられたのぢや。が、實際は何んと云つて見ても兵庫助様が御嫡統なのぢや。斯様な次第で、當家には云はゞ御主人が二人おはせられるやうな形で、家臣の者とても其の通り、遠江守に仕へて居る者と、兵庫助様に仕へて居る者と、兩方に別れて居るのぢや。併し、御主人同志が眞の叔父甥のお間柄ではあるし、殊に遠州様にはお子様といふものも無いので、お二人はまるで親子のやうにお睦まじく、永い間何一つ云ふ事もなく通つて來たのぢや。が、どうしたものか、近年は以前のやうに其處が圓く行かぬのぢや。何彼と面白からぬ波風が立ち勝ちなのぢや。つい此頃も城攻めの時楠のために計略の裏を搔かれて當家が思はぬ不覺を取つた事に就いて、遠州様と兵庫助様との間にお互ひに御議論が絶えぬところぢや。丁度其處へそちがお招きを受けて來たわけなのぢや。で、只さへ穩やかならぬところへ、そちが來たために、又一つ爭ひの種が增したのぢや。そちも大凡察しては居らうが、お二方ともそちに御執心なのぢや。で、互ひにそちを離すまいとなされて明け暮れの御酒宴、殆んど狂氣の沙汰としか思はれぬ御振舞ひ、是れも俗に云ふ戀の鞘當てとやらであらうが、今は只意地づくになつて居られるのぢや。斯様な事も、下賤の者にはありがちの事かは知らぬが、假りにも天下の大名たる身分で、陣中に於て白拍子を相手に戀の張り合に憂き身をやつして居るなどと、若し此の事が鎌倉殿のお耳にでも這入つたならば、どの様なお咎めを受けようも知れぬ。左様な事があつては一大事と、吾れ〲も一と方ならず心痛致して居るのぢやが、何を云ふにも、お諫め申してもお取上げがないのでほと〲困却して居る始末ぢや。──其處でぢや、そちに話しといふのはほかでもない、浮き川竹とやらでは、斯様な例しもままある事だらうによつて、何んとか無事に納めるやうな、そちに宜い分別もあらば敎へて貰ひ度いと思ふのぢや。

と云つて凝と妙の顔を見詰める。妙は暫時答へもなく、困つたやうな顔をしてゐる。

妙。これはまあ、何んのお話かと思ひましたら。其の事では、實はわたしの方から御家老様にお願ひ申さうと思つてゐたところで御坐います。あなた様のお話を伺へば、わたしゆへにお家の大事をも惹き起しさうな今の場合、何んとも申譯は御坐いませんが、わたしは呼ばれて來たからにはお客の機嫌を取るのが勤め、大抵の辛抱なら笑つても致しますが、今度のやうに一座に二人のお客様で、片方を立てれば片方が立たず、と云つて兩方御機嫌の宜いようにしようはなし、中へ挾まつたわたしの辛さ、もうもう厭で〳〵溜まらぬので御坐いますそれゆへ先達てから度び度びお暇を頂きたいと云つてお願ひ申しても一向お許しが出ぬので御坐いますもの。わたしに御相談なされても、それは御無理で御坐いませう。

帶刀。(途方に暮れた體) それでは、そちにも宜い分別は付かぬと云ふのか?

妙。分別の付かう道理は御坐いません。是れが色里へ來る客のことなら、好きな方に出て、厭だと思ふお客を斷るといふことも滿更無い譯では御坐いませんが、今の場合共の様な事は猶更出來ない相談、わたしはどうして宜いか分りません。

帶刀。(一寸した興味を唆られたやうに) では、色里の慣ひによつて、そちが好きな方に極めるとしたら、何れのお方をそちは取る?

妙。ほほほほ、そんな事が申されるものですか。

帶刀。いや構はん、此の場だけの事だから云つて見ろ。

妙。厭で御坐います。(と少しむッとする。)

帶刀。(語氣荒く) 厭でも何んでも云つて見ろ。

妙。では申しませうか。お二方とも大嫌ひで御坐います。(とキッパリ云ふ。) 我が儘な、獨り宜がりな、お負けに女の心は石ころや瓦ほどにも思つてゐない、そんな男は誰れにでも嫌はれます。——一體わたし達に、男の好き嫌ひを尋ねてどうするので御坐んせう? (急に感情的になる。) 白拍子遊君に、假りに戀があつたとてそれが何んだらう? わたし達は、世界中で一番厭な男にでも、一生涯に一人の戀人にすると同じ事を平氣でしてゐるでは御坐んせんか。——あゝ、厭だ〳〵、わたしは世の中が厭になつて來た。自分の身が厭になつて來た——

ー。

と云つて、急にヒステリツクになり、其の場に泣き臥してしまふ。帶刀はあつけに取られて其の樣を眺めてゐたが、軈て何事か決心したやうに獨り合點く。稍暫しあつて妙は顏を上げる。酒の醉がさめ感情の嵐の吹き去つた後の靜かな美しい表情。

妙。（極まり惡さうに）まあわたしは、何んといふはしたない女でせう？ 御家老樣、飛んだ失禮を申し上げました、何卒お免し下さいませ。

帶刀。いや何、そんな事は心配致すな。拙者も些か興に乘つて、ちと思ひ遣りの無い事を云ひ過ぎて氣の毒であつた。そち達の勤めも嘸辛い事であらう。

妙。いいえ御家老樣、辛い悲しいもほんの最初のうちだけの事、慣れてしまへば何んでも御坐いません。人間は、さうくよ〳〵してゐたら、生きてはゐられない筈ですもの。（淋しく笑ふ。）

帶刀。そちには親兄弟があるか？

妙。はい子供の時分に別れたきりの双親が、まだ達者で暮らしてゐるさうで御坐います。

帶刀。さうか。では其の親達に會ひたいと思ふであらうな。

妙。はい。（と云つて泪ぐむ。）會ひたいと思つても、遠く離れて居りますから、所詮會はれる時は御坐いますまい。それを思ふと、斯うしてゐても悲しくなるので御坐います。

帶刀。（暗然として）さうであらう。併し、双親は猶更そちを戀しく思つて居るだらう。實は拙者にも丁度そちぐらゐな娘があつて、國元で父の歸りを待つて居るのぢや。其の娘の事を思ふにつけ、そちの親の心も思ひ遣られるわい。（暫し無言。軈て氣を替へたやうに庭前を見遣りながら）思はぬ話に身が入つて氣が塞いだ。妙、あの櫻の花を見い、世は今春の眞盛りぢや。悲しみを捨てゝ、樂しみを求めるのが人の世の法則ぢや。ちと庭へでも下りて、春の夕の風に親しむとしよう。（立ち上つて、階段へ脫ぎ捨ててある草履をはき、一段下りて後を振向く。）妙。そちも一緒に參るが宜い。

妙。はい。

ト帶刀の後に跟いて庭へ下りる。

帶刀。（庭をそゞろ歩きながら）斯うして庭に下りて眺めた風情は又格別ぢや。靜かに咲いた櫻の花は、人間世界の爭ひも知らぬげぢや。

と、景色に見恍れる振りをしながら、鋭く邊りに眼を配る。

妙。（櫻の木の根本へ行く。）おゝ、何んといふ物凄い夕燒けだらう。空一面に人間の血が流れてゐるやうだ。金剛山も血で染められてゐる。あ！ 千劍破城に旗が飜つてゐる。（後を振り返つて）もし御家老樣、あの城はもう直きに落ちるで御坐いませうねえ？

帶刀。それはどうか分らん。

妙。何故で御坐いませう？ 斯んなに澤山の軍勢に取り圍まれてしまつては、どうすることも出來ないでは御坐いませんか。？

帶刀。どれ程の大軍で圍んだとて、軍は時の運ぢや。運の宜い方が勝つのぢや。

妙。楠といふ大將はそんなに强い人なんで御坐いますか？

帶刀。あながち楠が强いといふわけではない。何事も天命に依つて決まるのぢや。軍ばかりではない、世の中の事は皆さうぢや。人間の力などは小さなものぢや。

妙。（解し兼るやうな面持ちをする。）では、何故楠を攻めるので御坐います？

帶刀。楠は鎌倉殿の敵だからぢや。

妙。鎌倉殿の敵でも、朝廷のお爲めには忠義な武士だといふことでは御坐んせんか。それを斯うして大勢で攻め亡ぼすのは、何んだか氣の毒な氣が致しますよ。

帶刀。弱い者を憐れむのは人情だ。が、其の人情を捨てるのが武士の慣ひぢや。諸大名は鎌倉殿の爲めに軍をする。又俺達は、御主君の爲めに軍をする。武士に取つては、主君の外には何物も己れを支配する物はないのぢや。主君の爲めとあれば親も子も殺す、…………………………慈みのない人間の命を奪るのも武士の道なのぢや。

妙はうつとりとして彼方の山の方を眺めてゐる。帶刀は靜かに側へ寄り、刀の柄を握る。其の時、家の後からヒョッコリと生田の翁が顏を出す。

妙。おゝ、生田の翁、お前は何時此處へ來たのだえ？

生田の翁。（歩み寄りながら）こなさん達を迎ひに、私は疾うから來てゐたのぢや。が、妙どの、櫻の木には恐い虫がゐる、刺されぬうちに早う向うへ行きなさるが宜い。

と云つて、帯刀を尻眼にかけ、自身の體で妙との間を遮る。帯刀は横を向いて殘念さうな面持ちをして溜め息をする。「妙は居らぬか。妙は何處に居る」と叫ぶ聲と、大勢のドタバタする足音が近付く。

名越遠江守、同兵庫助、兩名前後して荒々しく入り來る。續いて近侍の武士數名、白拍子玉琴、刈藻、其の他の遊君大勢、連歌師花の本宗看、皆々慌ただしく入り來る。

遠江守は年齡四十餘り、頭を剃め、紺地の水干を着す。虎鬚逆まき見るから精悍な大將。

兵庫助は廿二三、顔の色蒼白く、至つて神經質らしい容貌、白の直垂を着てゐる。

遠江守。（室の中央に突つ立つた儘）妙、そちは何時の間にか脱け出したと思つたら、こんな處へ來てゐたのか。俺達は方々探し廻つたぞ。

兵庫助。帯刀も居るではないか。一體其方達は、其處で何をしてゐたのぢや？

妙。（媚びるやうな笑ひ方をして）何もしては居りません。先刻餘り御酒を頂き過ぎて、頭が痛んでなりませんでしたから、此處で御家老樣とお話をしながら、凉んでゐたので御坐います。

遠江守。はははは、常には堅苦しい事ばかり申す帯刀までが、櫻の下で妙と立ち咄しをするやうになつたとは、人の心もそゞろになる春の夕べにふさはしい出來事ぢや。俺達も、櫻の花を肴にして、此の座で一獻飲み直すとしようか。

宗看。（六十位、墨染めの法衣を纏うてゐる。輕薄な調子で云ふ。）それが宜敷う御坐ります。陣中の花見の宴は、また一と際風流で御坐りませう。これ〱妙どの、そなた早く此處へ來て、殿樣方のお相手をさつしやらぬか。それから皆の女子達、お前方は御酒宴の支度ぢや支度ぢや。

と獨りで騒ぐ。女達、簾の前程よき處へ毛皮の敷物を敷き、脇息を置く。遠江守と兵庫助並んで坐る。一同のものも、ズラリと並んで坐る。妙は静かに階段を昇つて女達の上座に着く。直ぐに高杯銚子な

どが運ばれる。玉琴刈蔑的をする。

帶刀。（庭前から云ふ。）其の御酒宴は、何卒おやめが願ひたう御坐ります。

一同驚いて帶刀の方を見る。

遠江守。（語氣荒く）何んだ、酒宴をやめてくれ？

兵庫助。とは又何故ぢや？

帶刀。（膝を折り、地に手を突いて云ふ。）申すまでもない儀で御坐ります。お二人樣には、此處を何處と思し召してで御坐ります？。天下の大事の掛かつた戰場では御坐りませんか。殊に敵は智謀に富んだ楠のこと、何時逆寄せをして參るかも分りませぬ。是れ程の大事を眼の前に控へて居りながら、遊女を召されて日夜の御酒宴では、世上の聞こゑも穩やかで御坐りませぬ。速かに女共はお歸しなされて、當分の間御酒宴をお差し扣へ遊ばすやう、帶刀是非共お願ひ仕ります。

遠江守。（苦り切つた容子で）又しても其の樣な諫言立て聞きたくない。徒然の折柄陣中へ遊女を呼んで酒宴をしたが何が惡い？（兵庫助を尻眼に掛けて）又、何程の楠が攻めて來ようと、誰れやらのやうな見苦しい不覺を取る遠江守ではないわ。

兵庫助。（顔色を變へる。）叔父上、帶刀への言葉を藉りて、此の兵庫助に當て付けた今の一言、次第に依つては聞き流しに致しませんぞ。

遠江守。（嘲笑的な口調で）是れは又異な事を云はれる。予が何を兵庫殿に當て付けたと云はれるのぢや？

帶刀。あゝもし、何卒其の御口論はお止まり下さりませ。私は、それを見るのが何より辛いので御坐ります。

遠江守。然らば默つて扣へて居れ、（重苦しい調子で）其方の申す位の事が分つて居らぬ遠江守ではないわ、兵庫殿とて同じであらう。人には各々考へがあるのぢや。餘計な差し出口を申すと許さんぞ。

帶刀。それ程迄に何事も御承知の上なら、最早私は何も申し上げますまい。然しお二方樣、名越一族の運不運は、あなた樣方のお心次第だといふ事だけはよく御思案のほどが願はしう存じまする。

と帯刀は諦めたやうに云つて起ち上り。靜かに歩いて上手に入る。
櫻の木の影から生田の翁の姿も消える。後は重苦しい沈默。遠江守と兵庫助はどちらも不愉快さうな顔をして頻りに酒を煽る。妙は冷淡な顔をしてゐる。

宗看。（末座から）これ〳〵女子達、こなた達は何をぼんやりしてゐるのぢや。妙どの、そなたももつとお側へ寄り、御酒のお相手なとしたが宜い。――偖と、何んぞお氣の晴れるやうな面白い遊び事は無いであらうか？ おゝ、さうぢや〳〵、もし、遠洲様、兵庫助様、今日は暫らく振りで、連歌でもされては如何で御坐ります？

遠江守。うむ、それも宜からう。が、兵庫殿、お身はどうぢやな？

兵庫助。（不性無精）お相手を致すであらう。

遠江守。では宗看、其方が題を出せ。

宗看。畏まりました。ええと、何を題に致しませうかな。（と仔細らしく首を捻つて邊りを眺める。）折も折、庭前の山櫻は今が盛りで御坐います。陣中に因んだ山櫻を題に致しては如何で御坐りますな？

遠江守。うむ、時に取つては佳い題ぢや。では予が發句をするから、兵庫殿に脇を頼まう。

一名の遊君が遠江守の前に硯を据える、遠江守筆を執つて暫し默考したる後懐紙にサラ〳〵と認める。遊君其の儘文台を兵庫助の前に運ぶ。兵庫助發句を一覧したる後同じく懐紙へ認める。今度はそれを宗看の前に遣る。宗看一つ宛手に取つて讀み上げる。

宗看。ええ――發句、さきかけてかつ色見せよ山櫻。脇の句が嵐や花のかたきなるらん。――さきかけてかつ色見せよ山櫻嵐や花のかたきなるらん。（ぽんと膝を打ち、仰山に頭を下げる。）恐れ入つて御坐ります。發句と申し、脇の句と申し、何れも勝り劣りの無い、近來稀れなる名歌で御坐ります。

遠江守。いや、其の脇の句は、予は氣に入らんぞ。

兵庫助。何ッ！ 叔父上、何故拙者の脇の句がお氣に入らんのぢや？ 其の譯を承はらう。

と氣色ばむ。一同ハラ〳〵してゐる。

遠江守。氣に入らん譯を、聞き度いと申すなら云つて遣らう。

味方を花に喩へたる句に對して、敵を風に喩へたのは、即ち大の不吉ぢや。それ故氣に入らんと申したのぢや。

兵庫助言葉に詰まつて無念さうに沈默する。宗看も執り成しやうがなくて途方に暮れてゐる。座中は白け切つてしまふ。

宗看。（ふと心付いたやうに）お丶さうぢや、もし殿樣、酒宴の座に連歌などは陰氣で面白く御坐いません。妓は一つ陽氣に妙どのの舞ひなと御覧遊ばすのは如何で御坐ります？

遠江守。うむ。それはひとしほ面白からう。妙、何んぞ一さし舞ふて見せい。

妙。畏まりました。

皆々急に蘇つたやうな顔色になる。妙は扇を持つて中央へ出て舞ふ。遊君數名にて鳴物をしらべる。

歌詞

春の初の歌枕
霞たなびく吉野山
うぐひす佐保姫をきな草
花を見捨て丶歸る雁

妙舞ひ了り、一禮して元の座に戻る。

遠江守。いや美事美事。（と扇を開いて悦に入る。）

宗看。流石は江口神崎でも、一と云つて二と下らぬ名手の舞。世捨人の愚僧でも、思はず恍惚と致しました。

遠江守。（上機嫌で）予は妙の舞ひを見て居ると、さながら極樂淨土に遊ぶやうな心地になるのぢや。（盃をぐツと明けて）こりや妙、此處へ來て、此の盃を受けて與れ。

妙。有難う存じますが、わたしはもう御酒は頂けませぬ。

遠江守。その樣な無愛相なことを申さずと、これ、（と云つてヒヨロ〳〵と立ち上り、妙の側へ行き手を取つて引き寄せる。）妙、そちは實に可愛い奴ぢやな。

妙。（迷惑さうに）あれ、殿樣、何卒そこを放して下さりませ。

遠江守。いや放さんぞ、そちは何時迄も予の側へ置くのぢや。

（と。しなだれ掛る。）

兵庫助。（顔色蒼白になり、狂人の如き眼で叔父を睨む、亂醉の調子）叔父上、いやさ遠江守殿。

遠江守。（憎悪の眼を向ける。）何んぢや？

兵庫助。先刻から默つて居れば宜事いにして、年中娶もない、厭がる女を捉らへて其の態は何んぢや。

遠江守。(俄かに憤激の語調。)女を捉らへたら何んとした、青二才のくせに生意氣な事を云ふな。

兵庫助。何ツ!

と立ち上がる。遠江守も立つ。近侍の武士は騒いでめい〳〵の主人を支える。兩人不性無精座に着く。

妙。(力強い調子。)もし、お二方様、お願ひが御坐います。

遠江守。何んぢや、改まつて願ひとは?

妙。わたしは只今限りお暇を頂きたう御坐います。

遠江守。何、暇を貰い度い? いや、成らん成らん。

妙。それでもわたしは、もう此の上あなた方の淺間しい爭ひを見て居る事は厭で御坐います。わたしは江口へ歸らせて頂きます。

玉琴。妙殿が歸るなら、

刈藻。わたし達も一緒に、

遊君皆々。何卒お歸し下さりませ。

遠江守。(呂律の廻らぬ調子。)成らん〳〵。誰れが何んと申しても、一人も歸すことは罷り成らんぞ。

兵庫助。ははははは。(と突然無氣味な聲をあげて笑ふ。)到頭女共にまで愛想を盡かされたか。そうなくては嘘ぢや。俺も自分ながら厭になつて來た。――叔父上、お互に斯うして何時迄も無益な、見え透いた爭ひに時を移して居るよりは、手つ取り早く、此の場でおん身と拙者と雙六の勝負をして、勝つた者が妙を取ることに決めてはどうぢや?

遠江守。(猛獸が肉を貪る時のやうな眼付きをして)うむ、面白い。では直ぐ樣勝負をしよう。

妙。あゝもし、其の様な無茶な事をなされば困ります。(と騒いで止める。)

遠江守。いや構はん、捨て置け〳〵。誰れか、早く雙六を此處へ持つて來い。

一同顔を見合せて躊躇してゐる。

兵庫助。持てと云つたら、持つて來い。(と呶鳴る。)

一名の武士が仕方なさそうに立つて、雙六の盤を持つて來て兩人の

間に置く。

遠江守。兵庫助、さあ始めるぞ。負けたとて泣き言を申すでないぞ。

兵庫助。それはおん身に云ふ事ぢや。

兩人交る〳〵賽を振り始める。一同呆れて遠くから眺めてゐる。物凄く緊張した沈默が暫時續いた後、突然劇しい罵聲が交換される。

兵庫助。卑怯だ！

遠江守。何が卑怯だ。

兵庫助。おん身は今、賽の目を一つ胡麻化したな。

遠江守。己れ、不埒な事を申すな、此の氣違ひめが？

兵庫助。何、氣違ひだ？　今一度云つて見よ、叔父とは云はさぬから。

遠江守。氣違ひと云つたら何んとする！

兵庫助。斯うするのだ！　（と刀に手を掛ける。）

遠江守。おのれッ！　（と同じく刀を拔く。）

双方の刀が同時に突き出される。あなや、といふ間に二人は互ひに片膝を立てた儘刺し違へてしまふ。そして、恐ろしき叫喚を發しながら、片方の手で激しい摑み合ひをして。其の場へどうと倒れる。倒れた後もまだ格闘を續ける。殆んど一瞬間の出來事である。恐怖な苦悶の聲、血しほの海——。

女達は悲鳴をあげながら室外へ逃げ去る。連歌師宗砌腰を拔かして這りで一番後から逃げる。

近侍の武士。大變だ、大變だ、御主君樣の一大事だ。（と狼狽しながら口々に連呼する。）

數名の武士が奧から驅けて來る。續いて庭前へも、甲冑を着けた武士が大勢、左右の口からドヤ〳〵集まつて來る。そして一同此の場の有樣を見て駭く。

最後に帶刀が驅けつけて來る。

帶刀。（蹣跚めくやうに死骸の側へ寄る。）到頭斯んな事になつてしまつた。行き着く處迄行き着いてしまつたのだ。

と悲痛な聲で云つて、其の場へどつかと腰を落す。軈て一同の者も思ひ〳〵に胡坐を組む。

武士甲。（庭前から）御主君が斯樣な不慮の御有樣になられたとして見ると、吾れ〳〵は是れからどうしたら宜いであらう。

武士乙。それは知れてゐる事だ。御主君同志が刺し違へて死なれたからは、遠江守樣の家來と兵庫助樣の家來とは、只今限り敵味方ぢや。一門の誼みも最早無くなつてしまつたのだ。此の上は、吾れ〳〵は兩方に別れて、互ひに御主君の弔ひ合戰をしなくてはなるまい。

一同合點く。暫時無言。

武士丙。それも一應尤もだ。併し、弔ひ合戰をして勝つたとてどうする。全體吾れ吾れの間には何んの遺恨も無いのだ。昨日まで兄弟同樣に暮らして來たお互ひ同志で軍をしても、おのづから太刀先きが鈍らう。取り亂した振る舞ひをしては徒らに天下の物笑ひを招くばかりぢや。いつそ斯うしてはどうであらう？　御主君達のなされ通り、吾れ〳〵一同も敵味方に別れて刺し違いて、御主君の御跡を追ふことにしようではないか？

武士一同。それが宜い、それが宜い、（と口々に贊成する。）

武士甲。その事が決まつたら、直ぐに此の場で刺し違へよう。（と刀を拔く。）

一同の武士が同時に刀を拔く。そして互ひに敵味方向き合つて身構へをする。

帶刀。まて！一同の者暫らく待てつ！

武士甲。御主君の御供仕らうとする吾れ〳〵を、御家老殿には何故あつてお止どめなされるのぢや。

帶刀。死ぬのを止どめるわけではない。皆々あれを見られよ。（と死骸の方を指さす。）御亡骸もまだ其の儘ぢや。一遍の御囘向も手向けぬうち、御靈の前に血を流しては末代の障り、畏れ多い事ぢや。又、兩殿の亡き後は、萬事は帶刀が差し圖致す。まづそれ迄は、一同詰所へ退つて控へて居られい。

と凛然たる態度で云ふ。一同納得して元の方へ引き返す。近侍の武士二個の死體を引き離して奧へ運ぶ。帶刀獨り後へ殘る。

突然、遙かに鬨の聲が揚がる。

帶刀。あの鬨の聲は？

帶刀起つて下手の柱の側に行き、小手を翳して彼方を眺める。武田二郎、伊賀八郎の兩名下手より慌ただしく驅けて來る。

二郎。（膝を屈し）御家老殿へ申し上げます。只今敵勢不意に山

上より押し寄せ、味方の先陣と合戰最中。

八郎。されど味方は油斷の折柄、旗色惡しく總崩れと見えました。直ぐ樣御出陣あつて然る可く。

二郎。我れ〱兩名御注進に參りました。

帶刀。（憮然として云ふ。）吾れ〱は、最早軍に用は無くなつたのぢや。

兩名意外の體。

二郎。御家老殿には、

八郎。何んと仰つしやる？

帶刀。仔細は奧へ參れば判る。（と云ひ放す。）

兩名不審の體にて顏見合せ、一禮して上手へ行く。帶刀其の後を見送る。

夕映えの色が消えて、灰色の暮色が迫る。閧の聲が續いて聞こえる。

帶刀。（暗然として）日が暮れた。名越一族の運命も今が最後ぢや。（間）惜しき武士を大勢殺さねばならぬのだ。しかも敵を前にして淺間しい屍を曝したなら、嘸天下の人は笑ふであらう。併し、武士の心には主君の他には何物も無いのだ。笑はれるのが、武士の意氣地を立てる道なのだ。

靜かに奧へ入る。

家の後ろから生田の翁が出て來る。

生田の翁。（後ろを振り返り振り返り、歩みながら獨語する。）何んといふ怖ろしい事だらう。御家老樣を始め一族郎黨何百人といふ人が殘らず刺し違へて死ぬといふのだ。此の世が建ち始まつて以來斯んな恐ろしい出來事はまだ一度も無かつたに違ひない。（立ち止まつて）だが、わしにはまだ大事な役目があるのだ。女子達が無事でゐてくれれば宜いが。

妙、奧からよろめき出る。

妙。（うはずつた調子。）おゝ、恐ろしい……わたしのためにあれだけの人が命を捨てるのだ。わたしは自分が恐ろしい……。

其の時奧から異樣な物音が續いて起こる。妙は袖で頭を覆ふて突つ伏す。總て物音が靜まる。陰慘とした沈靜に總ては包まれる。

妙。（フラ〱と立ち上る。）あゝ、恐ろしい。わたしやどうしたらいいだらう……。

と云つて、何物かの幻影を見詰めてゐるやうな眼付きをして、よろめきながら階段の方へ消ゆ。

生田の翁。（庭前からそれを見付けて）おゝ妙どの、こなたは其處にゐなさつたのか。

と喜ばしさうに聲を掛けて近寄る。妙は默つて空を見詰めてゐる。閧の聲が近く聞こえる。櫻の花びらが、夕暮れのうす明りにヒラ〱と散る。

靜かに幕――。

時評

軍備制限は確かに實現し得る

福田徳三

一

華府會議の經過は如何成るかは、到底分らないことであるが、軍備制限と云ふことは確かに實現し得ることゝ、我々は堅く信ずるものである。唯だ其方法の如何に至つては、專門家同志が種々に苦心を重ぬることを要する。が、制限しようと云ふ誠意さへあれば、其等は技術的の問題は決して碍礙を爲すものとは考へられぬ。問題は、誠意の如何にある。殊に日本の誠意如何に在る。

軍備制限を眞面目に實行しようとすれば、太平洋問題とか、極東問題とかを、一緒に會議に上すことは、初めから斷念す可きである。此等の問題は、各國の利害相反すること甚だ多いもので、其爲めに折角の共通問題の進行を害する虞がある。

我々は、心から軍備の制限を切望するものなるが故に、些にても、其實行に近づく機會のあることを歡迎すると共に、聊かにても其進行を害す可き虞ある碍礙は、初めから全然是を撤廢し置かんことを熱求せざるを得ぬものである。

故に我々は、日本の全權委員が先づ會議の劈頭に、此一事を力說して、太平洋問題、極東問題の上程を他の機會に讓る可きことを主張せんことを希望するものである。

二

軍備の制限が眞面目に行はれ得るならば、太平洋問題、極東問題の利害衝突性も、少しは緩和せられる。元より軍備の全廢が實現したとて、國と國との角逐の機會は、イクラも存する。否、世界に於て最も恐る可きは、所謂軍國主義ではない――軍國主義には色々な解釋が附られ得ようが、茲では、陸海軍の力を以て他國の利益を自國に占取しようとする方針の意に解釋して置く――其れよりも遙かに恐る可きは、財力侵略主義――之を資本的侵略主義と名けて置く――であつて、向後の世界に於て其最有力の實行者たる蓋然性と可能性とを持つて居るものは、言ふ迄もなく米國である。日本は武力侵略主義の實行者としては、多少見込みのある國である他方に、財力侵略國としては、遠き將來はイザ知らず、近き將來に於ては、到底問題となる資格を有せぬ國であることは、世界の公認する所であらう。

軍備制限は、先づ世界の表から、武力侵略主義の蔭をイクラかにても薄らげるものである。其れ丈けでも結構である。世界に取つても結構であるが、日本に取つて、殊に難有い次第である。若しも今日の儘に放任して置けば、日本の國力が軍備の爲めに消磨せられることは一小事として問題外に置くとしても、日本の國是民情が、段々武力侵略主義即ち軍國主義の洗禮を受けることになる虞が大にある。財政上の困難、經濟上の損失などは、之に比すれば、寧ろ甚だ小なる害たるに過ぎない。國をあげて軍國的になると云ふことは、人間として向後の世界に於て、到底堪へられないことである。日本は此點に於ては幸にも――他の點では不幸だが――貧國であるから、財力侵略國となる恐は、先々當分はない――全く無いとは云へないが――多少其恐ありとしたとて、少くとも英米を向ふに廻して、相角逐するなどと云ふ大外れた非望を起す恐はない。之に反し武力侵略國たる可能機會が與へられるときは、或は喜んで此機會を捉へるかも知れぬ、軍備制限が眞面目に行はれゝば、全くとは無論云へないが、其非望を起す機會は少くなる。コレ丈でも實に難有い結構な事である。

三

太平洋問題、極東問題は、其性質上、武力侵略衝突の要素も

含むことは勿論ではあるが、其れよりもより多く、財力侵略上の利害衝突の要素が含まれて居る。所謂經濟戰の諸問題が重きを成して居る。其處置は單に軍備制限丈けでないのみならず、財力侵略の問題は、其性質が複雜であつて、軍備制限の樣に技術的に取扱ふこと困難なものである。これは當然後廻しにせらる可きものである。

四

我らの考では、世界が向後若干時期の間アングロ・サキソン民族の財力橫暴時代の下に立つことは、如何しても免れ難い運命と思ふ。一兩日前政教社からコロンバス時代に日本人が米大陸を發見したとしたら、米大陸は今如何になつて居らうかとの問に對する答を徵せられた。之に對して我輩は粗次の如く答へて置いた。日本人がコロンバス時代に米大陸を發見したとしても、米大陸は決して黃色大陸とはなつて居らないであらう。恐らく米大陸に於ける日本人の運命は、西班牙人の其れと大差なかつたであらうと。西班牙と同列に見るは愛國心がないと言はれるかも知れないが、當時の西班牙人は、其侵略性に於て到底日本人の敵ではない、或は西班牙人ほども行かないかも知れぬ。又た反對に善く行つたとしても、和蘭人の如くになり了る外はあるまいと思ふ。日本の所謂武士道、封建制度は、西班牙の『フギダルゴ』と『エンコミエンダス』制度との如くなつたかも知れぬ。我輩が斯く考へるのは、人類の歷史の上に於て、世界を或時期の間財力を以て資本的に支配する運命が、アングロ・サキソン民族の上に在ることは、如何に個々の出來事が異つて居たとしても、渝ゆ可からざる一の約束事ではあるまいかと思ふからである。

五

右は想像談であつて、其當否は、問題とする價値はあるまいが、現實の世界、十六世紀以來成り來つた今日の世界の形勢としては、今後若干の時期、アングロ・サキソン民族の資本的侵略又は支配時代の繼續することは、如何なる工夫を旋らしても、到底之を變ずることは出來ないと思はざるを得ぬ。斯く申

すと、日本人として其れは、如何にも生地のない諦め方だとて戸水先生あたりには叱られるかも知れないが、事實を事實として認めるのが、一番生地のある考方だと信ずる我々は、左樣考へる外はないのである。

軍國獨逸、ザール露國が滅びたとて、武力侵略主義が全く其影を世界の表から消したと思ふのは、早計である。然し世界は今其武力角逐に疲れ且つ飽きて居る。疲れて居らぬ國は、米國一ケ國である。此米國を向ふに廻して貧國日本が、金の莫大にかゝる軍備の競爭をしようなどとは、身の程を知らざるにも程があるし、日米開戰となつたとしても、或は戰爭では勝つかも知れないが、英國海軍に封鎖された獨逸、今猶一部事實上封鎖されて居る露國の悲慘な狀態に余程似た狀態が日本を襲ふことは、鏡にかけて見るが如くであつて、其結果燒打若くは其以上の騷動が起るとしたら、戰には勝つても何にもならないのである。

六

マルクスは、將來の社會革命の有望國として先づ獨逸を、而して稍遠き將來に於ける最有望國として、米國を考へて居た。其稍遠きはマルクス死後益々遠くなつたと共に、マルクスの豫想は裏切られて、米國と正反對の國情を持つ露國に革命が起つた。これはマルクスの違算たること勿論であるが、其違算は、露國に就てよりも、寧ろ米國に就てゞあることを注意せねばならぬ。

米國に於ける社會黨の無勢力は、ゾムバルトが十分之を說明して居るが、戰時中及戰後の模樣を見ると、ゾムバルトの考へたよりも又更らに無勢力であつて、資本主義の隆盛は實に想像にも及ばない程である。日本などは、迚も齒が立たないのみならず、英國も瞠若たらざるを得ない。此米國と財力侵略上の角逐を企てるなどゝは、日本に取つて此位無謀なる事はない。米國征伐論者が眞に米國を抑へ付けることを欲するなら、日米戰爭などを唱へて居る暇に、如何にせば米國に於ける社會黨、無政府黨が有力となり得るかを考へた方が適當であらう。然し其れは考へる丈け無駄な事である。されば、其れよりも猶無意味な日米戰爭を考慮するなどとは、馬鹿々々しくて話にならぬこ

とである。即ち、當分の間は、米國を押へ付けるなどと云ふことは、全く意味を成さぬことである。日本は武力に於ても、財力に於ても、決して米國と衝突は勿論のこと、角逐などすることとを金輪際斷念す可きである。斷念しさへすれば、所謂『國難』は其れで雲散霧消する。

七

日本の『國難』は、米國からは來らず、英國からも來らず。」否、勞農露國からも斷じて來ない、日本の『國難』は、日本から來る。日本の何から來るか、手近い者としては、武力侵略主義から、遠い者としては財力侵略主義から來る。日米開戰となつて、恐る可きものは、東京の空上に翔ける米國の飛行機ではない、東京の、大阪の、或は其他處々の、國民の腦中に飛躍する『スペクトル』である。『スペクトル』は、何萬馬力のモーターよりも大なる力を持つ。此れが飛出すことが、眞の恐る可き『國難』である。其れは決して米國からは來ない、日本から飛來する。

日本の國の使命は、財力侵略文明の爛熟し切つた後にあらねばならぬ。日本は侵略國として殆んど何の歴史をも有せぬ、これは、日本の最大なる誇りたる可きである。將來に向つても、財力侵略國となる見込は甚だ乏しい、其反對に武力侵略國となる見込はある。タトへ僅かの間なりとも、此の熱に浮されることありとしたら、其れこそ兎角非侵略國たりし國體の破壞である、國粹の失墜である。斷じて一切の誘惑を斥けて、世界の表に於ける最非侵略國として立たねばならぬ。

八

軍備制限會議は、此日本に取つての好機會である。我輩の好機會と云ふのは、決して對外的の意味ではない、對外的には好機會でも何でもない、或は『國難』論者の云ふが如くに成るかも知れない、左様成つても決して差支ない。好機會と云ふのは對內的である。桃太郎の花電車を非難する人が出來たと云ふ丈けでも甚だ結構と思ふ、桃太郎電車一向差支ある譯ではない唯だ人心の歸向が、甚だ善い方へ向つた一の表徴として、大い

に喜ぶ可しと思ふ。米國に一杯喰はされるも結構、其れが爲めに、日本人の心が緊縮して、少しでも、非侵略心が力を得るようになれば、得る所失ふ所に遙かに勝れりと思ふ。反對に、日本を抑付け、英國を拘束することに『成効』する米國は、噴火山頭に舞踏するものである。米國の爲めに眞に慮る人は、米人たると外人たるとを問はず、却つて此の所謂『成効』を呪ふ可きである。然しアングロ・サキソン民族の或時期間の――其れは必ず終がある――世界横暴が宿世の約束事としたら、右なるのも亦前世の因緣であらう。然し此『成効』は日本が之を妨げずとも、英國は必ず妨げるであらう。所謂毒を以て毒を制することは、米國に取つては、内からは當分起らないとしても、同じく財力侵略國たる而も同文同種たる英國から起る。これで世界の『平和』は當分維持せられることと思ふ。

九

日本は軍備制限を諾するから、同時に米國の財力侵略制限を代價として取ると云ふ考を懷く人もあるようであるが、これは、餘り性急な考方である。我々の見る所、米國――英國は勿論として――は、今確かに軍備制限を實行しようとする誠意を幾分かは持つて居る。或は日本が會議に參列を拒んでも、軍備の制限丈けは、自發的に實行するかと思ふ。其反對に、財力侵略の制限は迚も考へて居らぬ、否々、更らに手を擴げんと欲して居ると信ずる、此點に觸れられることは、米國の斷じて承知し得ぬことで、其最急所を突く所以である。軍備の制限を最大事と考へて日本が掛ると、飛んでもない大違算をするに相違ない。日本が一指を染めることも六ケ敷いのは、米國の財力侵略制限である。然るに、此を代價としてなら、軍備制限を諾しようと云ふのは、蝦で鯛を釣る程ではなくとも、鯉で鯛を釣らうとする位な虫の善い話である。米國たるもの、決して其んな話に乘る迂濶な國ではない。

十

米國の海軍は、充實したとは云へ、其侵略價値は、到底其の財力の侵略價値と同日の談ではない。而して海軍の制限は決し

て獨り日本目當の提案ではない、否、最大の目當は、英國であらう。日英米均しく海軍を制限すると云ふことは、英國は勿論のこと、米國も之を眞に望んで居るものと思ふ。故に日本にして、眞に誠意を以て相談に乘れば。少くとも海軍制限は——實行の技術問題は餘程困難を釀し、其爲め或は有名無實となるかも知れないが——形式的丈けには、確かに實現され、實質的にも、聊かも知れないが、實現され得ると思ふ。而して其れ丈けでも、結構千萬な事と思ふ。故に我々は、此際日本は、口頭斗りではなく、心の底から、海軍制限、陸軍制限を眞面目に國是として、會議に向ふ可きである。此誠意が唯一問題となる、跡の事は何んでもない。我れ誠意を披瀝して彼に臨む、彼れ必ず之に應ずるものと信ずる。

十一

而して日本としては、遠慮なく言ふ可きである、今日世界の平和を脅す武力の擴張は、其最大の責任は、米國の海軍大擴張にある、故に米國は、眞に之を止め、之を制限する誠意を有することを明示することが、最先決の問題である、米國にして此誠意を端的に示すならば、日本は大なる制限を必ず實行する十分なる誠意を有す、其方法は斯々爾々也と。外交的掛引などは駄目である、眞に誠意あること、懸引のないことを有力に提示して掛からなければ、何事も無駄であつて、全權一行の旅費丈けが損となるのが落である。

故に我輩は斷言する、軍備制限必ず實現し得可し、而して其前提は、日本が其實行の誠意を十二分に有し、之を正直に會議上に披瀝するに在りと。

十二

一兩日來の新聞記事では、日本の全權首坐は現海相之に當ると云ふ。これは甚だ結構な事で、原敬氏の明斷と稱す可しと思ふ、其意は、海相の手腕とか外交術とかを信頼すると云ふのではない、海相を首當事者とすることによつて、日本は、米國の最も懸念する日本海軍の制限を實行する意圖あることを、聊か具體的に示したことを喜ぶのである。これで『國難』論者

も安心して然る可きである、七博士諸君も小田原評定を見合せて宜しい、海相は能く幕僚と議を凝して、海軍制限の具體的實行案をチヤント作り上げて置いて（先方の出次第などゝ兩端を持するは斷じて不可——）之を秘さず包まず會議に提示せよ、」これが何よりである。原氏が海軍の首腦者を全權首座にした所を見ると、氏は此度の會議の意味を可なり能く理解し、其れに對する日本の任務を正しい方向に盡さうとする念が多少あるように認められる、若し左樣でないなら、改めて左樣して貰ひたい、而して向後其調子で進行して欲しいものである。

繰返して云ふ、軍備制限は左迄難事ではない、日本さへ誠意を示せば、或程度迄は必ず實現される、而して其れ丈けでも結構千萬である。（十・九・十一稿）

青年團と大連會議

——小問題の重大意義——

山川均

青年團と任意による『強制寄附』

青年會館建設の『強制寄附』から端なく問題が勃發した。內務省當局者の談によると、之は『自分の家を自費で建てるのと同じ道理』だそうであつて、『強制的にやつてゐるなどゝは以ての外』だといふことである。□□に□□□ラをつき附けられて金よりも□□いふ冷靜な打算から、自由意志で金の在りかを任意に供述する者すらある世の中である。內務省が青年會館の寄附金を集める爲めにも、これ以上の『強制』をする必要があつたとは固より思はれぬ。

此頃問題になつてゐる警察協會の『強制寄附』を引合に出すがものはない。聞るいところでは赤十字社の社員勸誘にしても

苟も半官的の仕事には、此種の遣り方は附き物通り物であり、例外ではなくて原則であつて、民を赤子の如く思つて居る官僚のお役人が、之を以て、『自分の家を自費で建てる』のと同じ、少しも強制的意味の加はらぬ遣り方と思ふのは尤も千萬である。唯だ今度といふ今度だけ、一寸猿も木から落ちたといふまでのことである。それを今度に限つて、こと新しく彼れ是れと『強制』呼ばゝりをされるのだから、官僚のお役人が心外に思ひ、『以つての外』と考へるのは、更らに御無理はない譯である。

そこで青年會館の寄附金が『強制』であらうがあるまいが、少くとも官僚のお役人の關する限りに於ては、どうでもよい事である。唯だ之に何等かの重要な意義があるとしたならば、青年團なるものが、消極的ながらも之によつて自己の存在を示したことである。

地方の青年團に最初に着目したのは、何と云つても官僚軍閥であつた。青年團中央部の設けられたのは大正五年であつて、その主たる計畫者、田中義一、一木喜徳郎、早川千吉郎、岡田良平といふ色彩鮮明な顔觸れを一瞥したならば、此計畫の蔭に、どんな意圖が潜んでゐたかは疑ひの餘地がない。地方青年團には多少の歴史的の起原があつて、必ずしも官僚軍閥の手に成つたものではない。諸君はこの結構な材料の出來て居るのを見て、唯だ之に中央部といふ雁首を附けることによつて、直ちに自己の煙草入れに適合したものにしようとしたまでゞある。そこで諸君の望み通りになれば、要するに青年團は、軍國主義的組織の重要な一部となる。青年團――軍隊――在郷軍人團、これで軍國主義の組織系統は完成する譯である。

政友會内閣は決して官僚軍閥の政府ではない。官僚軍閥とブルジョア階級とが、同一物であつたのは過去の事である。官僚軍閥の庇の下で生長したブルジョアは、今や母屋を取らうとする。既に或は取つたかも知れぬ。原内閣は日本に於ける最初の平民（ブルジョア）内閣である。しかしながら青年團を以て、現狀維持の機關としようとする一點では、平民内閣は必ずしも官僚内閣と異るところはない。官僚軍閥は新興のブルジョアの政權に對して『現在の秩序』を維持しなければならぬ。そして平民政治は、蹴倒しはしたが未だ止めを刺すに至らず官僚軍閥に對して、

『現在の秩序』を維持しなければならぬ。この點に於ては彼等は利害を異にする。けれどもこの□□と□□との爭ひの傍には恐る可き漁夫が目を光らしてゐることが明らかになつて來た。官僚軍閥とブルジョアジーとは、無産者勞働階級の擡頭を看過することは出來ぬ。

そこで謂ゆる『新思想』と『危險思想』とに對して『現在の秩序』を維持するといふ點では、幸ひにして官僚軍閥とブルジョアジーとは利害が一致するのである。

從つて青年團に於ける政友會内閣の方針は、少くとも此一點については、官僚軍閥の計畫を襲踏したものに過ぎぬ。青年團の團員の年齡を二十歲から二十五歲にしたことは、青年團を幾分『自治的』たらしめた損失はあつたが、必ずしも軍國主義的組織系統を破るものではなくて、强める効果がある。何故かと云へば、青年團と在郷軍人團との中間には、勢ひ軍隊に籍を置かぬ三十才以上の青年がある筈だからである。

平民内閣が不滅の功績は、斯ような官僚軍閥の築き上げた組織系統に、更に其傍系の一組織を加へたことである。即ち國粹會、民勞會といふ別動隊がそれである。愈々之で、現狀維持の陣立は完成した譯である。

この時思ひ掛けぬ爆彈が耳元で炸裂した。『强制寄附』に對す反對！之は心外千萬に相違ない。之は『以つての外』に相違ない。

全國の地方青年團は、今は『强制寄附』の贊否を決する爲に投票した。青年團は今ま初めて、其存在を示したのである。しかし同じ全國の青年團、三百萬の青年を包容する一千九百の青年團は、近き將來に於いて、もつと大きな問題に對する贊否を票決するの必要に會せぬであらうか。資本制度の下に於ける、避けがたき商工業資本の壓迫は、今や痛切に農村によつて感じられて來た。米價問題に對する政府の施設は、今や完全に商工業資本が日本を支配して居ることを證明した。そして農村に於ける無産階級分子――小農と小作人――の利害は、半ばは商工資本階級たる大地主の利害と、絶對に相反することが明瞭になつて來た。農村の階級的分化は熟して來た。この階級の對立に對して、全國の青年團が去就を票決しなければならぬ時は、果

して切迫しては居るまいか。靑年團は國粹會民勞會と共に、日本のファスチスチとなるであらうか。それとも無產階級運動の前衛となるであらうか。官僚とブルジョアとは、少くとも全國の靑年に『組織』を與へ、『團體的行動』を敎へて吳れた。日本の無產階級が、自ら自己の墓を堀つた官僚とブルジョアとを笑ふの日は來らぬであらうか。

大連會議を進める力

大連會議は、どうやら順調に進むらしいといふことである。新聞の記事によると、チタ政府と莫斯科政府との關係の眞狀を突き止めることが、日本委員の第一着の仕事であつた。其結果商議が順調に進んで居るところを見ると、チタ政府の實力の後ろには、勞農露西亞の實力が控へて居ることが判明したので、日本の委員も愈々安心して商議を進めることになつたと見える。

三年ばかり前には、レーニンは獨探に極まつてゐた。謂ゆる『賤民政治』は向ふ三週間位で倒れるものと定まつてゐた。それからペトログラードの陷落することと十數回、莫斯科に反亂が起つて勞農政府が逃亡することと之も同じく十數回。緣も因りもない日本が、チェック・スロヴァク救援の義軍をシベリヤに送る必要に迫られ、チェックが無事に歸國すると、今度は却つて增兵の必要に迫られた。當時（昨年十二月）私は西比利亞撤兵の急務を主張した文章を或る雜誌の爲に書いたが、□□□□□□□□□、暗から暗へ葬られた。それから九ケ月經つた。そして形勢は一變した。

この間に全世界のブルジョアと反動運動との望みであり力であつたデニキンが倒れ、コルチャックが亡び、セミョノフ、ウランゲルも泡沫のやうに消え失せた。無產階級獨裁政治の結果旱魃がつゞいて全露の大飢饉が襲來し、每日幾百萬人の農民が餓死してゐる筈の露國では、勞農政治の努力による耕地の擴張と種子の增加の結果、旱魃が二千五百萬プードの收獲を奪ひ去つたにも拘らず、前年に比して尙ほ二千五百萬プードの增收を見た。

反革命軍と大飢饉といふ、二つの救世主も世界の資本主義を

救ふことが出來なかつた。露國には飢饉、然しながら英國には餓死！である。英國と米國とが、その恐ろしい失業者を養ふことが出來なくなつた時は、英國の資本制度といふ經濟組織に、」愈々國民給養の能力のないことが證據立てられる時である。世界をデモクラシーの爲に安全にする爲に獨逸と戰つたほどの理想主義の國であつて見れば、世界をキャピタリズムの爲に安全にする爲には、無產階級獨裁の國と商賣をする位のことは朝飯前のことである。波蘭軍の爲に、ルウマニヤ軍の爲に、デニキン、コルチヤツク、セミヨノフ、ウランゲル軍の爲に、莫大な軍器と彈藥とを無代價で輸出する程に理想主義的な資本主義國が、經濟上の利權と天產物と引換へに、持て餘ましてゐる工業生產品を露國に輸出することに、恥辱を感ぜぬからと云つて別段の不思議はない。之は勞農政府の外交の勝利ではなくて、利潤の前には恥も外聞も國境もない、資本主義の法則そのもの丶勝利に外ならぬ。

そこで神の御心を體して此の人道の敵の前非を宥るし、先づ通商關係を開いたのは、遙かに資本主義の大先進ほどあつて英國であつた。（特殊の地理的關係にある小國は別として）他人の罪を許すこと、之が救ひの第一の條件であつた。この善行に後れたものは、利潤の天國に入ることは出來ぬ。そこで封鎖から通商へ！これを資本主義の天國の國語に直ほすと、レーニンは共產主義を棄てたから、通商を開いてもよい、と云ふことになる。

或人は、列國はチチエリンの外交に翻弄せられてゐると云つた。焉んぞ知らん、世界の資本主義國は、自己の背から生えてゐる資本主義的法則といふ糸に引張られて跳つて居るのである。

支那の國際管理觀

杉森孝次郎

自治、責任、及び創造は、個人として必要であるが如くに、團體としても必要だ。國民は一團體だ。支那國民が、自治力なく、随つて責任なく、創造に至つては尙ほ更らないことは、支那國民自身のため、及び人類のために悲むべき不幸だ。

國民主義は、世界を通じて、近世の發達だ。日本の國民主義も、大體においては、ペリ來浦以來の著大なる成長だ。百年以前に、露の侵略主義が、米の太平洋岸に志を得ずして、退いて北支にむかつた。支那侵略の白人史は、こゝにその端を開いた。

淸日戰後、世界は支那の老弱を確信した。そして、利用しうるおの〱の機會を利用して、或る程度までは、新設しうるあらゆる機會を新設してまで、世界の強大なる國々は、支那侵略を怠らなかつた。支那分割論、支那の國際管理說、これらは要するにその努力の進歩だ。

支那が、このさき尙ほ長く自治、責任不能の狀態を續けるとわかつてをるならば、自治力あり、責任力ある爾餘の國々が、その國々自身のため、及び支那のために、支那を國際管理下に移すことは、正當にして善だ。けれども、支那は、土地でなく人だ。人としての支那は、絕望的に自治不能であるとは、なに人も容易に斷じえまい。われらは、人としての支那が、自治有能である方に、われらの希望と確信をかける。世界は、支那人の自治力を、眞實に、正直に、熱心に開發すべく努力した記憶を持たない。先づその記憶を持つまでは、支那の國際管理は、主張される道德的理由がない。

支那人が要するものは自助だ。その意思だ。世界は、支那人への自助心を觸發すべきだ。敵意にもとづいてでなく、友情にも

とづいてだ。支那國民の上下各階に、自助心を喚起する方法を講すべきだ。言論に依る主張、宣傳、運動は、恐らくは最も肝要だ。

　自治力なき支那は、自治力ある國々の權力伸張の舞臺となる。國は、土地でなく、人だ。それ故に、人が無自治であればその住地は、無人に近い。自治力ある國人が流れ込む道理だ。密壓狀態の下にある空氣が、附近の眞空を馳せ塞ぐにも似た自然現象だ。支那は、昨今漸くにして、その自治力の最後の試驗を受けんとする。

　一と口に支那と呼び、支那國民と稱するけれども、支那は、殆んど一社會をなしてゐない。それは、必らずしも南北の不和をさすわけではない。支那國内の交通手段の不備を、物的條件としては意味するのだ。交通手段の缺乏せる人々の間には、また地方々々の間には、協力がありえない。すなはち社會がありえない。各省の自治は急務だ。それから、總省の組織統一が必要だ。才能と声望を、その各省の自治と、總省の組織統一とに吸收しつくすべきだ。

　支那の國際管理は、支那人の意思であつてはならん。日本人の意思であつてもならん。いかなる遠國人の意思であつてもならん。しかし、そのあつてはならん程度からいふならば、支那人自身が第一だ。日本人はその直ぐ次ぎだ。なぜかといふに、支那の國際管理は、事實上支那滅亡だ。支那の國際管理の手は日本の國際管理に必らず伸びる。日本人は、國際管理を自己、の運命としては否定する。道德的同情ある日本人は、自衛のために支那の自治を必要とする心理を省察しても、支那人が、支那人自身のために國際管理を否定すべきである道理に想到しよう。

近刊豫告

死線を越えて（續篇）　賀川豐彦著

著者が勞働運動中一時執筆を中止したるも、九月末日までには脱稿するに至るべければ十一月早々街頭に其雄姿を現はすに至るべし。

赭土に芽ぐむもの（一千二百枚の長編小說）　中西伊之助著

題材を某植民地に取り、其苦しき體驗を基礎として築き上げられたる雄篇にて、市中の小說と聊か毛色を異にす。著者は交通勞働の牛耳を執れる人なり。

改造社

◆主筆 山川均・山川菊榮

（定價 一部金三十錢 一年三圓卅錢）

十月號 社會主義研究

（第四卷 第三號）

◆ゴータ綱領批評

◆無產階級の哲學

◆日本民衆鬪爭史

マルクスが一八七五年に書いたゴータ綱領の批評は、彼の圓熟せる革命思想の結晶であつて、殊にその中に初めて彼が豫言した共產主義の第一期に於ける無產階級獨裁の必然が、露國革命によつて裏書せられてから、本批評は一層注意せらるゝに至り、一八四八年の共產黨宣言と共に重要なる歷史的文書となつた。本誌は堺利彥氏に囑して、この全文を譯載した。

◆勞農露國勞働法（萬人の勞働義務と生存權とを規定す）

◆第三卷合本（殘部僅少） 定價送料共 一圓八十錢◆

九月號要目

◆社會主義の進化

◆科學の社會主義より實行の社會主義へ

◆勞農露國の憲法

◆無產階級の哲學

◆ 東京大森入新井町 平民大學出版部 振替東京三四一九一 ◆



日曜日

廣津和郞

一

日曜日の朝だつた。

大學教授の磯山幸吉は、いつもの時刻に眼を覺ましたが、今日は講義に出かける必要がないと思ふと、直ぐに寢床を離れる氣にはなれなかつた。

近頃彼は、何も彼もが變に面白くなく、不愉快に思はれてならなかつた。

一體彼は、××大學の教授中では、最も若手で、生徒の間には法科切つての新知識と仰がれ、教授間にも、新進の學者として評判がよかつた。今××大學からは、三人の教授が、外國に留學させられてゐるが、その人々の年限が濟むと、今度は入れ代りに、幸吉たちが派遣される事になつてゐた。やつと三十一になつたばかりの彼は、二三年外國に行つて來て、それから歸つて來れば、××大學の教授會から、博士に推薦される事に內定してゐると云ふやうな噂さへ立てられてゐた。彼の前途は洋々たるものだつた。彼自身も無論、そんな自

負があつたので、今まで此世の中は、ほんたうに生きるに價するやうな氣がしてゐた。

その彼が、近頃急に、何も彼もつまらないと云ふ氣がし始めたのである。彼は一體刑法學者だつたが、最も人間的な學問だと得意に思つてゐたその刑法なんていふものが、此世の中に、ほんたうには何の役にも立たない、無價値な、下らないものなのだと云ふやうに思はれて來た。そんなものを研究してゐるのは、世にも莫迦らしい、無意味なことなのだと云ふやうに思はれて來た。――云ふまでもなく、洋行なんかも厭になつて來た。學生達を前にして講義するのも、つまらない事に思はれて來た。若き大學教授なんていふ言葉に、得意になつてゐた自分が、愚かしいものに思はれて來た。

『何も彼も面白くない。何も彼も退屈だ！』教壇に立つてゐる時も、往來を歩いてゐる時も、書齋に閉ぢ籠つてゐる時も、そんな言葉が、始終彼の頭の中で鳴つてゐた。

彼は天井を眺めたり、硝子戸越しの空を眺めたりしながら、懶惰な氣持で、煙草を吹かしてゐた。もう初秋だつた。空が眞青に澄み切つてゐた。――彼は何を考へてゐるか自分でも解らないやうな事を、ぼんやり考へてゐた。その中に、いつの間にか又うとうととして來た。

誰かが二階に上つて來る足音に、彼は眼を覺ました。妻のすず子が、彼の書齋を覗き込んだ。

『おや、お眼覺めだつたのですか。――中山さんが見えましたよ』

『なに、中山が？』幸吉は不機嫌な顏をして答へた。『今日は會ひたくない。少し調べ物があつて忙しいから、今日の日曜は面會謝絶だと云つて呉れ』

『御氣分でもお惡いんですか？』と細君は良人の言葉の不機嫌をとがめ立てするやうな調子で云つた。『それから、あの、先刻は工藤さんも見えたんですよ。あなたが未だ寢んでいらつしやると申しますと、それでは又後程伺ひますと云

つて歸りましたが……』
『うるさいな。――今日は學生たちが來たら、誰でもみんな斷つて呉れ。忙がしくて、とても會へないと云つて呉れ』
細君は良人の顏をちつと眺めながら、
『どうかなさいましたの？　御氣分がお惡いんですか……日曜のたんびに、ああしてあなたのところに訪ねて來るのを、みんな樂しみにしてゐるんぢやございませんか。いつものやうに、會つておやりになりましたら』
『今日は會ひたくないから會ひたくないんだ。――いいから、斷つて呉れ！』
幸吉は眉をひそめながら、少し強く云つた。細君は尙暫く彼の顏を眺めてゐたが、やがて立上つて、階下に降りて行つた。
『今日は忙がしい調べ物がございまして……折角で、お氣の毒でございますけれども……それでは、又今度の日曜にでも……』そんな事を云つてゐる細君の言葉が、やがて、きれぎれに、玄關から幸吉の耳に聞えて來た。
何と云ふ事もなく幸吉は、いまいましさうに舌打をした。
細君は間もなく再び二階に上つて來た。
『あなた、もうお起きになりましては？』
『……』幸吉は默つてゐた。
『ほんたうに御氣分でもお惡いんですか？』
『さうぢやない、考へ事をしてゐるんだ。もう少し俺は寢てゐたいから、お前はもう默つてゐて呉れ』

今度は細君が返事をしなかつた。

『あなたは近頃どうしてそんなに氣むづかしくおなりですの？……今朝にしたところで、日曜日はわざわざ學生の面會日と、御自分で定めておいでになつたぢやございませんか。ほんたうに氣の毒ですわ。學生たちはあなたを慕つてゐるんぢやございませんか。――御自分でも始終若い者たちに近づいてゐなければならない、と云つてらつしやつたぢやございませんか』

細君がさういふ事は、決して嘘ではなかつた。彼は自分が前途有望な學者であると云ふやうな自負によつて、自分自身を喜ばせる事が出來てゐた時分には、常々自分の先輩、つまり自分より前の時代の人間は少しも恐ろしくない、それよりも、自分がほんたうに何事かを學ぶべきは、自分より年少の者からだ、とそんな事を考へてゐた。自分より先に出てゐる人間の考は、もう大概知れ切つてゐる、けれども、後から來る者は、どんな事を考へてゐるか解らない、さう考へてゐた。だから、若い者達の活氣のある顔付や、議論を彼は愛してゐた。それがたとひ、どんなに見當がはづれ、一寸想像がつかないやうな突飛な論理と、どういふ風に持つて行つたのかてんで解らないやうな結論とを持つてゐようとも、彼は若い者たちの自由に喋つてゐる空氣には、何か自分を活氣づけるものがあると思つてゐた。彼等の幼稚な疑問にも、耳を傾けて聞けば、何か自分を益するものがあると思つてゐた。そこで、彼は毎週、日曜日を以て、彼等のために自分の書齋を提供する日に定めてゐたのである。――『俺は學生と話してゐるのが一番愉快だ。そして有意義な事だ！』細君に向つても、彼は度々そんな事を云つてゐた。

けれども、今となつて考へて見ると、そんな事はみんな、何と云ふ阿呆らしい事だつたらう。學生達は、唯いたづらに、彼を疲らせただけの事だ。彼等の出鱈目な議論と、誇張された大聲と、何か一大事のやうに、下らない事に力味返

つて論じ合つてゐる、疲れる事を知らない熱情とは、むやみに彼の靜かな書齋を亂雜にしただけの事だ。彼はそれ等の事を想像するだに、今は我慢のならない氣持になつてゐた。――そして殊に思ひ出して見て厭なのは、先輩よりも後輩と交はることは、聰明なる人間の執るべき道だ、などと常に口に云ひ、又實行してゐた自分の心持の底に、或不自然と臆とらしさとがあつた事だ。そこには或氣障と云つても差支へないやうな厭味の匂ひさへがした。

それだけ、今細君の口から、若い者に近づいてゐなければならないと、自分から云つてゐたではないかと云はれると、彼は二重の腹立たしさを感じないではゐられなかつた。――ひとつはさうした自分の過去の心持に對する腹立たしさだ。もう一つは、そんな事を、人の氣も知らないで、今持ち出して、彼の心持の底を突つついた細君に對する腹立たしさだ。

『うるさい。――階下に降りて行つて呉れ。俺はもう少し眠るんだ！』

『まあ……』細君は呆れたと云つたやうな表情を大袈裟にして、眼を瞠つて、彼の顏を上から眺めたが、併し、彼女は一寸した良人の言葉のはしにも、少しでも無理なところや感じがあれば、決して見逃して置かないと云ふ或種の勝氣な性質の婦人の一人なので、そのまま默り込んではゐなかつた。『でも、どういふ理由がおありか存じませんが、いきなりそんな風に不機嫌な顏をなさるのは、へんではございませんか』

『うるさい。――うるさいと云つたら、階下に行かないか！』と幸吉は、癇癪を破裂させたやうに怒鳴りつけた。

その途端に、幸吉の頭には、彼女についての氣にいらないいろいろな點が、一時に、ごちやごちやと誇張されて浮んで來た。――こんな不愉快な女とよくも一緒に暮してゐられるもんだ。何と云ふ冷たい、白々しい、高い鼻をした女だらう、と彼は嘔きつぽいやうな氣持になりながら考へた。――『ひとりでゐたい。獨身でゐたい。獨身でゐたら、どん

なに氣樂で、心が輕いだらう！』何かにつけて近頃いつも浮んで來る此考が、今も頭の中に逆つて來た。

細君は尙も暫く、彼の枕許に坐つてゐた。なるほど、彼が考へたやうに、彼女は高い鼻をした、冷たい表情の女であつた。彼女の顏は一體から云へば、美貌と云へるかも知れない。そして品もかなりにあつたけれども、その高い鼻の兩側についてゐる細い、無表情な眼には、女らしい優しみの感情の代りに、理智的な、計算高いと云つたやうな冷たさがあつた。彼女はその締つた口元に、嘲りに似た笑を浮べてゐた。

『それに、あなたは、近頃は昔のやうには御勉强もなさらないのですねえ。……來年は留學なさると云ふのに。——今のやうな風でいらつしやつたら、私申して置きますよ、屹度藤川さんに負けておしまひになりますから』そんな事をおちついた、冷たい調子でぽつりぽつりと喋り出した。『あなたか藤川さんか、どちらか一人がいらつしやる事になつてゐるんぢやございませんか！……そして……』

『莫迦！もう止めろ。俺は外國ゆきなどは眞つ平だ！』と彼は妻の言葉を遮つた『もう好いから、階下に行け！』さういふと同時に、彼はくるりと横向きに寢返りをして、眼をつむつてしまつた。

細君は、それから暫く無言で坐つてゐたが、態とらしくむつつりして、やがて梯子をギイギイと云はせながら、階下に降りて行つてしまつた。

二

幸吉は長い間、寢床の上に横たはつてゐた。今の細君との對話の不愉快が、なかなか彼の心を去らなかつた。——彼は眉をひそめて、じりじりしてゐた。

『莫迦が！』と彼は二度か三度吐き出すやうに呟いた。そして妻と彼との生活を考へてゐた。——最近の彼のいら立

たしい、憂鬱な氣持が何から起つて來たか、その原因が、彼自身にもはつきりと解らなかつたが、考へて見れば、彼の家庭生活の面白くないと云ふ事も、確に重大な原因の一つには相違なかつた。と云つて、實際に、指を折つて數へる事が出來るやうな、そんなはつきりした缺點は、彼の細君の上に見出されなかつた。彼女はコケテイッシュな點などは少しもない女であつた。彼と彼女と結婚してから、もう足掛四年になるが、その間に、彼は唯の一度も彼女を疑つた事はなかつた。又彼は彼女と一緒に往來を歩いたり、電車に乗つたりする場合にも、彼女が若い男の方に眼を送つたり、又は彼女と同年配の若い女たちの服装を注意したりするやうな事を、一度も見た事がなかつた。――彼の友人達は、『君の細君は實に眞面目な、貞淑な人だね』そんな事を云つては、彼女を賞めてゐた。彼も亦心ひそかにそれを喜びもし、誇りもしてゐた。――それから、彼女は始終良人の出世と云ふ事ばかりを願つてゐた。『君の細君は賢夫人だね。他日君が博士にでもなれば、君の細君の内助の功は、世の中に語り傳へられなければならないね』そんな事を彼に云ふ友人もあつた。彼もその事を喜んでゐた。

併し、そんな事は、みんな大して重大な事ではなかつたと云ふ事が、近頃の彼には思はれ出して來た。理窟で推して行けば、別段非難のしようはないにしても、併し、ほんたうの人間生活と云ふものに、好い影響を與へるやうなものではとてもない、どころか、却つて害になるものだ、と云ふ氣がして來た。賢夫人とか貞淑とか云ふ彼女の美點の一切は、今や彼の心には殘らなかつた。『まるで石のやうな女だ、何と云ふ冷たい、味のない奴だ！』そんな考の方が、何よりも以上に、今は彼の心に浮んで來た。

殊に、何かにつけて、彼女は、

『私の申す事は間違つてゐないと思つてゐます。正しくない事は、私は決して申さないつもりです』から云ふのが癖

だつた。

何も彼も自分は間違つてゐない、何も彼も正しい――さういふ時の彼女の表情は、思ひ出すだに、彼には憎々しかつた。何も間違つてゐない、正しい、そんな事が一體此世で何になるのだ、そんな自負が一體何になるのだ、と彼はまるで眼の前に彼の細君がゐるかのやうに腹立たしくなつて來た。そんな事の一切が、實はどうでも好い程、重大でも何でもない事なのだ。――『結局は氣持だ。それが何より重大なのだ。俺の感情を潤ほはせるのが、一番重大な事なのた。あんな冷たい顔をして……』と彼は口に出して呟いた。

若し自分の教養がゆるせば、彼は彼女の白々しい、冷たい、高い鼻を毆りつけてやりたい、と云ふやうな事までを考へた。

幸吉はそんな事を考へてゐる中に、結婚とか離婚とか云ふ事について、彼が書物で讀んだいろいろな記憶が浮んで來た。

『ほんたうに幸福な結婚生活を送つてゐる夫婦が、果して現在に幾らある！』とか、『結婚は忍耐だ』とか云つてゐる詩人の言葉が浮んで來た。亞米利加の或兩性問題についての有名な學者は、『殆んど現社會の夫婦の十分の九の結婚生活は、みんな破産だ。それが表に現はれないのは、彼等の無智がそれに氣がつかないか、或は我慢してゐるからだ』と云ふやうな事を云つてゐた。――そして幸吉が數へ上げる思想家達の多くは、結婚生活の破産を診察した上で、大概、もつと離婚が盛んになるべき筈だと云ふ事を主張してゐた。

幸吉は離婚と云ふ事について考へた。實際自分の結婚生活は忍耐だ。……けれども、若し自分が彼女と離婚するとしたなら、どういふ理由がかぞへられるか？――彼は外國の例だの日本の例だのを思ひ出して見た。日本では妻が姦通し

た場合の外は、男からの離婚の訴訟はめつたにない。彼と彼女との場合などは、一寸日本の法廷では許されさうもない。日本の法廷で離婚の理由として取り上げさうな、結婚生活上での彼女の缺點は、實際どう考へても浮んで來ない。

『併し』と彼はひとりで、自分に向つて抗ふやうに呟いた。『嫌惡と云ふ事が何よりの理由なのだ。嫌惡と云ふ主觀的な理由以外に、外部から、客觀的に推定するやうな理由があつて堪るものか。——嫌惡、それより強い理由は何もない筈だ！』

彼は外國でも誰かがさう云つてゐるのを思ひ出したが、誰だつたか、その名を思ひ出せなかつた。彼は一寸の間、その學者の名を考へようとして、天井にぢつと眼をやつてゐたが、やつぱり思ひ出せさうもないので、『實際、法廷もそこまで進歩して來れば好いんだがな。主觀的な嫌惡を離婚の最大の理由として取り上げるやうになれば、實際どんなに、多くの結婚生活の忍耐者が救はれるか知れないんだからな』と呟いた。

だが、今の學者の名を思ひ出さうとして、天井に眼をやつた中に、彼の頭は何となく輕くなつて來たのを覺えた。つまり、彼の頭の中のいら立たしさが、その間に、一寸方向轉換をし始めたのである。

『若し彼女と離婚したとしたら、どうしよう？』今度は彼はそんな事を考へた。

さうしたら、總ての生活が、根本から改められるかも知れない、と云ふやうな氣がした。——彼は胸がわくわくするやうな氣がした。そして彼の空想はいろいろに飛んで行つた。

幸吉は十五六の少年時分から、學資の豊かな學生ではなかつた。併し彼は唯一念、勉強したいと云ふ心ばかりを抱いてゐた。ほんたうに彼は勉強したのだ。彼は中學を出てから、××大學に入つても、一心不亂に勉強した。最近までも、その一心不亂が引續いて來てゐたのだ。彼のすず子との結婚も、その一心不亂の勉強の間に、定められてしまつた。彼

は彼女を得るまで女を知らなかつた。彼の眼に彼女は美しく見えた。そして彼女の冷たさは彼に彼女の氣高さに見えた。けれども、今となつては・・・

さう云へば、彼にはこんな記憶がひとつあつた。幸吉はそれを思ひ出した。

それは彼が××大學の學生だつた時分だつた。前にも云つた通り、彼はその時分一心不亂に勉强してゐた。彼は豊かな學生でなかつたので、散步の序でにカツフエに入る事も出來なかつた。――が、彼は一週に一度づつ、淺草に活動寫眞を見に行つた。土曜日の晩を、彼はその息拔きの休息日と定めてゐた。

彼はその時分、外國物で評判だつたD館に行く事に定めてゐた。一等や特等は入場料の都合から、彼はいつでも普通席に入つてゐた。彼は普通席の一番後の眞ん中のところで、丁度客席と通路との境のために出來てゐる小さな柵の上に凭れながら、立つて見る事にしてゐた。――すると或晩、彼は自分の直ぐ隣りのところに、十八九の、ひさし髮に結つた女が、彼にはその頃女の著物の事などは解らなかつたが、派手な、贅澤らしいなりをして、やはり彼と同じやうに、柵に凭れながら立つてゐるのに氣がついた。それは顏の、愛嬌のある、豐かな頰をした女で、肩のすらりと撫で肩の、柔かな感じであつた事を、彼は今でも覺えてゐる。彼女の後には、十五六の小間使らしい女が、ちよこんと畏まつたやうにして立つてゐた。その女が、寫眞が映り始めて、場内の電氣が消えると、彼の方に妙に寄添ふやうにした。

次の土曜日に、彼女はやはりそこにやつて來た。そして前と同じやうに彼の隣りに席を取つた。そして同じやうに彼に寄添ふやうにした。その次の土曜日もそれと同じであつた。

彼は彼女が確に自分興に味を持つてゐて、さうして土曜日毎にそこに來るのだと云ふ事が解ると、何となく、彼の方でも土曜日の晩が待たれるやうになつた。そして四週間目の土曜日に、彼は彼女とたうとう手を握り合はせた。そして

又二つ三つ土曜日が過ぎ去つた。その間に、彼は無論さうだが、彼女の方からも一言も言葉をかけなかつた。

或土曜日の晩、彼はさうして、彼女と人知れずそつと手を握り合つてゐる中に、彼女は彼の手の中に、何かを丸め込んだ。彼はそつとそれを取つて見ると、それは白い新しい麻のハンケチであつた。

そんな事に、少しも經驗のない彼は、ハンケチを受取つてしまつてから、いろいろまごついて、ひとりで考へた。一體これを受取つて、そしてどうしたらいいだらうか。彼は次の一週間の間に、思案した末、自分の方でも、やつぱり同じやうなハンケチを買つて、それを次の土曜日に持つて行つて、彼女の手に丸め込んだ。その時、彼女は、

『有難う……』と低い聲で、囁くやうに云つた。その『有難う……』と囁いた聲を、彼は未だに覺えてゐる。

その次の土曜日の晩、彼はやはりそこに行つて、そして彼女と、いつものやうに、何の言葉も交へずに、手を握り合はせてゐた。――それから、彼は歸りかけた、すると、彼女はお伴の女中に一寸何か囁きながら、續いて出て來た。それは雨がびしよびしよと降る晩であつた。彼はいつものやうに、田原町の停留場の方へ歩いて行くと、その後から、彼女は、ついて來た。田原町から電車に乘るので、その停留場で彼は立止つた。すると、彼女は彼の前で、輕く頭を下げて、其まま四五間通り越したが、急に女中をそこに待たして置いて、彼の方へすたすた引つ返して來た。そして彼に向つて、

『あの唐突でございますけれども、あなたに差上げたいものがございます』さう云ひながら、彼の方へ手を出した。ると、彼女は細い狀袋の手紙をさし出してゐた。

その時、幸吉は、急に何とも云はれない底氣味惡さを覺えて來た。彼はそんな事になるまで、うかうかと進んで來見てしまつたが、そこに來て、急に、これは恐ろしい誘惑だ、と云ふやうな氣がしたのである。彼は女の手を振り拂ふやうにして、

『僕は要りません、僕は要りません』と泣き聲で云ひながら、丁度その時に來た電車に慌てて飛び乘つてしまつた。
その後何かの時に、彼は二三の友人にその話をした事があつた。すると、一人の友人は笑ひ出して、
『妾かも知れないな。爺さんか何かを旦那に持つてゐる……。それで若い男を摘み食ひしたいんだよ。』
『それとも美人局かな』と他の男が云つた。
……幸吉は或はそんなものかも知れないと思つた。けれども、さうでもなささうな氣もした。かなり大膽なところもあるが、妙にうぶなところもある女だと云ふ氣がした。

……………………

その話を思ひ出した彼は、
『俺の思ひ出は、實際これつきりだからな。——貧弱なものだな』と天井を見ながら呟いた。
今彼はその女が淫賣婦であつても、妾であつても、美人局であつても、或は何處かの娘であつても、そんな事はどつちだつてよかつた。その記憶は確に彼の氣持を、かなりの程度に柔げてゐる事を彼は感じた。
『あの女はどんな女だつて、そんな事は構はない。併しあの柔かみと、ゆたかな感じとは、實際、人生に必要なものなのだ。たとひ、道徳的には、不完全であつても、ああ云ふ柔かな感じそのものが、人生に或潤ひを與へるのだ』と彼は考へた。『俺の記憶から云つて見ても、あの時、あんなにへんに恐れを感じながらも、今となると、何とも云はれない心の慰めを與へられる。——ほんたうにさうだ、冷たい固い感じの賢夫人よりは、この方がどれだけ、人生に取つて、重大であり眞實なものであるか解らない……』
彼は一種センチメンタルな氣にさへなつて來た。彼はハンケチを渡された時、それに唯ハンケチを貰つて返した自分

の不間さ加減が、をかしくもあり、又惜しい氣もして來た。あのハンケチは、返す時、當然こつちから中に手紙か何か入れてやるべきが、ほんたうだつたのだらう。それをやらないものだから、彼女の方から、更に一歩を進めて、手紙を渡さうとして來たのだ。それを自分が、振り拂つて電車に飛び乘らうとは……

幸吉は苦笑を浮べながら、自分の電車に飛び乘つた時の氣持を、思ひ返してゐた。

三

再び梯子に足音がした。又細君が上つて來たのかも知れないと思ふと、彼はくるりと横向きになつて、眠つてゐる風を裝つた。

が、上つて來たのは女中であつた。

『旦那さま、お客樣がお出でになりました』とおとなしい、十七八の女中は、主人の前に出るといつもの癖で、脅えたやうな聲で云つた。

幸吉は顏をもたげながら、

『誰だ？』と云つて、女中が出した名刺を手に取つた。三崎留五郎と云ふ名が書いてある。知らない名なので、彼は一寸小首を傾げた。

『あの……何でも大槻さんの叔父さんだとか云ふ事で……』と女中は、半分最後を口の中で云ひながら、說明した。

『大槻？』

『はい、時々お見えになるあの學生さんの大槻さんでございます……』

『あゝ、さうか、解つた』と相手が女中なので、彼は言葉を柔げるやうに骨折りながら、『今日は調べ物があつて、少

し忙しいから、又今度來て下さい、とさう云つてくれ』

『はい、實はさう申したのでございますけれども、ほんの一寸の間で宜しうございますから、先生に是非お眼にかからして頂きたいと申しまして。……あの、甥の事で、是非折入つてお話いたしたい事がございますので、と何と云つても歸らないのでございます』

幸吉は名刺を眺めながら、その大槻と云ふ學生を思ひ出してゐた。日曜日に、他の學生たちと、時々幸吉のところにやつて來るが、生眞面目に、熱心に勉强してゐる男であつた。——が、餘り頭の好い男ではなかつた。いつでも、彼が來てゐたかゐないか、後で考へて見て幸吉には解らない程だから、何かにつけて、人眼に着くやうな點を少しも持つてゐない學生であつた。

『よし、會はう、それでは座敷の方へ通して吳れ』

幸吉が顏を洗つて、座敷に入つて行くと、そこに五十五六の、頭の眞ん中がつるりと禿げた、縞の羽織を着た、小商人と云つた風態の小柄な男が坐つてゐた。

『これは先生樣でございましたか。手前は大槻の叔父でございます、大槻が每度御ひゐきに預りまして……』と未だ幸吉が腰を下ろさない中から、その男はぺらぺらとこんな風にしやべつて、ぺこぺこお辭儀をしてゐた。——その顏は、瘠せて、眉が少し下り加減になつてゐて、眼尻の皺の寄つたところに、にこにこ笑ひを浮べてゐた。一見して頗る好人物と云ふ感じを與へた。

『お樂になさい、さあ、座蒲團をお敷きなさい』と幸吉は努めてくつろいだ態度を執つて見せた。

『へい、有難うございます』とその男は、もみ手をしながら、『先生樣の御忙がしいところを、飛んだお邪魔に上りま

して。....實は早速でございますけれども、大槻の身持の事について、少し御相談に乘つて頂きたい、とかう存じまして。....へい、どうも誠に御迷惑樣でございますけれど....』

『なるほど』と幸吉は、相手が喋り易いやうに合槌を打つた。

『實はあの大槻の身の上につきましては、手前が責任を負つてゐるやうな次第なのでございます。へい、あれは私の兄の長男でございますが、兄の家が、子供を大學に通はして置くと云ふやうな境遇ではございませんのですけれども、あれが强つて學問がしたいとかう申しますので....』

『なるほど』

『それで手前が監督すると云ふやうな事で、國からあれが東京に出てまゐりましたのでございますが、....へい、學資の點などでも、手前共でも多少の補助はいたして居りますやうな次第でございまして....』此處まで云つて、三崎留五郎は、人の好ささうなその眼をしよぼしよぼと二三度瞬いて、さも云ひにくさうに言葉を切つたが、やがて突然に、

『女をこしらへたのでございます。實に何とも彼とも申しやうのない不心得者で....』

『なるほど』

『それで....』と小柄な老人は、ハンケチで、もう秋なのに、つるりと禿げてゐる額の汗を拭つた。『手前が度々意見を加へますのでございますが、どうしても女と切れないのでございます。——それで、かねがね大槻が先生樣に大變御ひゐきに預つて居るさうでございますから....へい、實に立派な先生だ、見上げた方だと、いつもあれは先生樣の事を申して居るのでござさいます....そこで、甚だ申しにくい御願ひではございまするが、先生樣から、一つあれに意見をして頂きたい、とかう存じまして....』

『なるほど』と幸吉は合槌を打つた。そして何も相手の言葉を聞くつもりでゐると、相手の老人は、もう自分の云ふべき事はすつかり云つてしまつた、と云ふやうな顏をして、ハンケチで額を扇ぎながら、彼の方を見つめて、彼の言葉を待つてゐた。

『その女の人と云ふのは、どう云ふ人なのですか？』と幸吉は何か云はないわけに行かないので、かう云つた。

『へい、看護婦とかださうでございます。……へい、誠にどうも學生の分際といたしまして、不屆千萬な男でございまして……』

『それで大槻君はどう云つてゐるのですか？』

『へい、私共には解らない事を、いろいろ申しますのでございますよ。自分には自分の考がある、かう云つて、あべこべに逆捩を喰はせるのでございますよ……』

『そんな事と云ふものは、側からどうかう云ふべき種類のものではないと思ひますが……』と幸吉は靜かに口を切つた。『大槻君にしても、もう相當に物の解る年頃なのですから、それはやはり大槻君の思ふままに委せて置いた方が好いでせうな』

『へい』と老人は、吃驚したやうな顏をして、幸吉の顏を見守つた。『學生の分際として、どうもあれのためにならないと思ひますものですから……』

『いや、學生であつてもなくつても、それは同じ事です。若し當人たちの間に、ほんたうの心持さへあれば、さういふ事はそれで好い事なのですから……』

『へい、大槻もさう申すのでございますが……先生樣もやはり同じ御意見で……』

幸吉は老人のその言葉に苦笑しないではゐられなかつた。——が、彼はその時、自分の學生時分の事や、例の活動寫眞内での思ひ出や、それから現在の自分の生活や、そんなものがごちやごちやと心に浮んで來たので、彼はその大槻の戀愛事件と、自分の過去とを引較べるやうな氣持になつてゐた。『それが好いにしろ、惡いにしろ、結局大槻自身が自分でその結果を知るだらう。——何しろ、俺の貧弱な過去から考へれば、今のさういふ大槻の經驗は、羨ましい出來事の一つかも解らない。他から干渉しないのが、大槻に取つては最も好い事だ——』と彼はかなり感傷的な氣持になつて考へてゐた。

『へい、さう致します』と三崎留五郎は、何か考に沈んでゐる若い教授の顔を、恐る恐る見上げながら、『先生の御意見では、つまり二人を添ひ遂げさせてやれと、から被仰るのでございますね』

『添ひ遂げさせる、させないなどと、側から干渉しないで、大槻君自身に委せて置くのが一番好いと思ひますね』

『へい、よく解りました。——手前もね、實は』と老人は、つるりと額を、右の手の掌で撫でながら、『どうせ好きで出來た仲なら、仕方のない事だと思つてゐたのでございますがね、何しろ、學生の分際でございますからね、世間の手前も惡うございますし、又國の兄貴に聞えても、心配させるのが氣の毒だと存じましたので……いや、もう、先生様のやうな御立派な方が、さういふ御意見でいらつしやるならば、もともと生木を割くのは、厭なものでございますから……』とぺらぺら、先刻よりも輕い調子で喋り出した。そして急いで腰を浮かして、

『どうも御忙がしいところを、まことにどうも御迷惑様で』と云つて、ペコペコと何度かお辭儀をしてから、歸つて行つた。

幸吉は、苦笑したいやうな氣持で、客を送り出すと、茶の間に這入つて行つた。が、茶の間の隣りの、細君の居間に

すず子が向う向きになつて寢てゐるのを見ると、急に又堪らなく不愉快になつた。——何か一寸した事があつて少し氣にさはると、彼女は頭が痛いと云つて寢るのが癖だつたのである。

幸吉は顔をそ向けながら、急いで二階に上つてしまつた。

『旦那樣、御飯は階下で召喰りますか、御二階に持つてまゐりませうか？』とその場の光景の險惡さに、はらはらした女中は、幸吉の後から、梯子の下まで來て、そつと訊ねた。

『飯は食ひたくない——』彼は振向きもしないで、書齋に這入つて、ドアの鍵をぴちりと音させて掛けてしまつた。

四

その晩は、麻布の方に住んでゐる、やはり××大學教授のＢ氏のところに、實驗心理研究會と云ふものが開かれる晩であつた。それは月に二回、實驗心理學の泰斗と云はれてゐるＢ氏を中心として、哲學科、文科、法科の教授や、有志の生徒たちによつて開かれるもので、幸吉もその會員のひとりになつてゐた——夕方、幸吉はその會に出席するつもりで外へ出た。けれども神樂坂の通まで來ると、彼は急に厭になつて來た。行つても始まらない、と云ふ氣になつて來た。——針で皮膚をついて見た報告や、ジエエムス、ランゲ、セオリイの賛否や、そんな事が、みんな無味乾燥な事に、彼には思はれて來た。何の奇もなければ、變哲もない。……殊に、そこにがやがやと集まつてゐる研究者達の雰圍氣が、今日の彼には何となく堪へられなかつた。

初秋のひやひやした風が、妙に身に沁みた。彼はぶらぶら賑かな神樂坂を下つて、外濠線の停留場まで來たが、そこで右に乘らうか左に乘らうかと考へた。右に乘れば麻布方面だ。習慣性でＢ氏の宅まで行つてしまふだらう。——左に乘れば？……左に乘れば、どこと云ふアテもない。

併し彼は左の方へ乘つた。車掌が切符を切りに來た時まで、彼は行く先が定まつてゐなかつた。けれども、車掌の顔を見ると、

『淺草』から彼は云つた。彼は自分の言葉に頬笑んだ。そして、久しぶりで淺草の散歩も好いだらうと、後から思つた。

實際、彼は淺草公園と云ふところに、何年來なかつただらう。彼は結婚してから一度も來た事がなかつた。尠くとも、もう四年間は來ないに違ひない。——彼は田原町で電車を降りた。その停留場のところで、六七年前の學生時分の、あの丸顔の女の事を思ひ出した。彼は妙に放たれたやうな氣になつて、自由な心持で、そこの停留場の、自分が彼女の手紙を振拂つたあたりの地點を眺めて見た。そこには鳥打帽子をかぶつた男が、しやがんで、電車を待ちながら、煙草を吹かしてゐた。

彼はそこから公園の中に這入つて行つた。そしてD館の前まで來ると、彼は普通席の切符を買つて、階下に這入つて行つた。彼は數年前、自分が土曜日毎に凭れかかつた、あの看客席の背後の柵のところに行つて見た。そこは好い具合に空いてゐた。彼はそこに行つて、數年前したやうに、凭れかかつた。そして四邊を見渡した。

けれども、彼の側に、あの丸顔の女は、無論見出されなかつた。そればかりでなく、彼が此D館に通つたあの時分には、男女の席が別になつてゐなかつたのに、今はそれが別になつてゐた。彼の隣りには、職人體の男が、腕組をして、柵に凭れかかつてゐた。——そして辯士が、大聲で何か喋つてゐた。中央に映つてゐる映畫の中には、ひとりの女が自働車の内で、ひとりの惡漢と思しき逞しい男と組打をしてゐた。……樂隊がへんに挑發的な、いぶすやうな、やかましい音を立ててゐた。

幸吉はそれを見てゐたが、心は何かの感想にいつぱいになつてゐた。彼はへんに物足らなかつた。無論心に、彼が物足るやうな出來事が、此D館に來たつて、起る筈がないのが當り前だと云ふ事は、十分に解つてゐながら、何かそれでも、こんな筈ではなかつたのだ、と云ふ氣がした。

彼は間もなく、そこを出た。それから雷門の電車通まで來たが、そこに昔はなかつた大きな、明るい感じのするカツフエエが出來てゐるのが、眼に入つた。——彼はそこの明るい感じに引き入れられて、入つて行つた。そして一杯の珈琲を命じて、默つてテーブルの前に坐つてゐた。

そこは內も奇麗で、明るくて、そして給仕女たちも、奇麗なのが揃つてゐた。彼は一隅のテーブルに腰を下ろして、默つて、彼女達の行き來するのを眺めてゐた。彼はその中の一人の、身長はそれ程高くはないが、併し顏の輪廓の整つた、明るい感じのする女を、一寸氣に入つた。その女の後を眼で追つてゐた。——けれども、彼女は少しも彼の方へ視線を返さなかつた。

彼は自分が未だやつと三十才を一寸越えたばかりである事を考へた。未だ自分は、そんなに彼女たちの注意を惹かなくなるやうな年齡ではない。——けれども、屹度自分には何處か、感じの固いところがあるのだらう。長い間、書物と、教室とばかりの世界に住んでゐた自分、それが自分の身體つきや、ものごしに、何か冷たい、親しめないものを附けてしまつたのであらう。

彼は自分のところに珈琲を持つて來た給仕女が、それは細面の十七八の娘であつたが、彼の前では、固い表情をしてゐながら、彼からはなれて、他の客の前に行くと、こぼれるやうに笑つて、冗談の應酬などをやつてゐるのを、淋しい氣持で眺めてゐた、

總ての氣分が違つてゐるのだな。——と彼は考へた。併し彼は、今朝から家の中で感じてゐたあのイヤな氣分は、いつの間にか、霧が霽れるやうに消散して行つたのを感じた。

『散歩に出て來てよかつた』彼はそんな事を腹の中で呟いてゐた。

それから、彼は方々を何と云ふ事もなくぽつつき歩いた。自分の孤獨と云ふやうな感じが、今は一種の快感だつた。——それに、夜が更けるに從つて、頻に冷たくなつて行く秋風が、彼のさういふ感傷的な心持をつのらせるのに役立つた。

彼が牛込若松町で電車を降りたのは、もう十一時近かつた。外の氣分の爽かさが、そこから自分の家の方へ一歩一歩歸つて行くに從つて、又もとの暗い感じに變りかけて來た。——彼は頭を少し前に出して、俯向き勝に、とぼとぼと歸つて行つた。擦れ違ふ人などにも、少しも注意を拂はなかつた。

すると、彼とすれ違つた若い男女づれが、二三間通り過ぎてから、

『先生、磯山先生』から急に彼に向つて、男が聲をかけた。

彼は振返つた。

『誰です？』

『先生、私です。大槻です』さう云ひながら、大槻は彼の方へ駈け寄るやうにして寄つて來た。『今、先生のところに伺つたのです。晩方一寸伺つたんですが、B先生の實驗心理の研究會の方へ御出かけになつたと聞いたものですから、今し方、もう多分御歸りだらうと思つて、又伺つたのです。——今夜は大分遲いやうですね』

『今日は僕はBさんのところには行かなかつた。——久しぶりで散歩をしてゐたものだから』

『さうですか』と大槻は云つて、何かもじもじしてゐたが、『先生、今日は大變有難うございました』と思ひ切つて云ひ出した。

『先生が叔父にすつかり說いて下すつたものですから、實に僕は有難かつたのです。あの叔父は正直な人間なんですけれど、頑固な奴なのです。――ところが、先生の一言で、今度はすつかり態度が變つて來たのです。先生のお宅からの歸りに、いきなり僕の下宿にやつて來て、おいお前はそんなに思つてゐるなら、添へ遂げさせてやらうと云ふのです。先生を實におちついた、立派な方だ、學者は、ああ云ふやうに威嚴がなくつてはいけないつてすつかり感心してゐましたよ。――先生、僕等は今日はそのお禮に上つたのです』

『……』幸吉がすつかり驚いてしまつてゐる間に、大槻はそれだけの事を一氣に喋つた。それから、彼の後の方に、それまでひかへてゐた女の方に向いて、

『おい、一寸此處にお出で』さう云つて、それから幸吉の方へ向つて、

『これがなつ子です、先生。――さあ、お前からもよくお禮を云ふが好い。この方が磯山先生だ……』

『いつも大槻がお世話樣になりまして……今日は又いろいろ御骨折り下さいまして、お蔭樣で……』その女は、はつきりした聲でかう云つた。

『いや……』幸吉は帽子に輕く手をかけながら云つたが、彼は事の意外に呆氣に取られてゐた。

大槻と女とは、幸吉の方をさもなつかしいと云つたやうな樣子で、しけじけと見てゐた。――『先生にお話ししたい事が澤山あるのです。』大槻はかう云つてゐた。

幸吉は自分と一緒に自分の家まで、一應彼等を引つぱつて行かうかと思つたが、今から此若い男女を自分の書齋につ

れて行くのは氣が進まなかつた。と云つて、折角からして二人で喜んで、自分をたづねて來たのだとすれば、すげなく此處で追ひ返すのも、何となく氣の毒なやうな氣がした。

『大槻君。それぢや、その邊に行つて珈琲でも飮まう。未だ十一時だから、何處か起きてゐるだらう』

『は』

幸吉が歩いて行く右側に、大槻は肩を並べて歩いて來た。女は二人の後からついて來た。

今電車を降りたところに出てそれから少し右へ行くと、左側に、いかにも場末らしい感じのする小さなカッフェが起きてゐた。

三人はそこに這入つた。

『君はビールをやるかね？』

『は、やります』

『それではビールを一つと珈琲二つと……』と幸吉は、たしかに坐睡から覺めたらしい、眞赤な眼をした給仕女に註文した。

そこで、彼は初めて、明るい灯の下で、大槻と並んで腰をかけてゐる女を見た。それは看護婦によくある、色の白い、身長の低い、肩あたりの丸つこい女であつた。眼の色も妙に鈍かつた。──幸吉は何か輕い失望を感じた。彼から見ると、その女は餘りに平凡で、何處にも取柄がないやうに見えた。

一二杯のビールに顏をぽつと赤くした大槻は、

『先生、僕等は隨分、苦勞と戰かつたのです。僕は貧乏です。學資も十分にはありません。けれども、此女は職業婦

人です。……僕等はこれから立派にやつて見せます。どうか先生、僕等の生活を見てゐて下さい。』と云ふやうな事を、すつかり感激した、かたはらの給仕女が眼を瞠つて驚いてゐるのにも拘らず、大きな聲で度々叫んだ。そして、

『兎に角、戰ひます。な、お前もその覺悟だな』と時々女の方を振り向いた。

『はい、戰ひます』と彼女はその丸々とした顔をきつとさせて答へた。

幸吉は默つてそれ等の光景を見てゐる中に、哀感が身に泌みて來た。その二人の男女が互に愛し合つてゐると云ふ事は、確に相違ないが、それについての感情は少しも湧かずに、何か氣の毒で、見てゐられないものを見せられた、と云つたやうに、へんに胸のうづく氣がした。――今までそんなにも思はなかつたが、こんな風に感激してゐる場合の大槻の顔には、見ておられない程、みじめな間の延びたところがあつた。――正直で頭の惡い男の、いたいたしさがあつた。

『それでは、又來たまへ』幸吉は彼等にさう云つて、それから勘定を濟まして、外へ出た。

幸吉が彼の家のある横丁の方へ曲つて行つた後、彼の後姿を二人の男女は見送つてゐた。幸吉が暫く行つて振返つた時、二人は佇立つて彼の方を見てゐた。

幸吉は胸がいつぱいになるやうな氣がした。自分が晝間、大槻の叔父の三崎留五郎に向つて、好い加減な事を云つたと云ふ事が、ゆるすべからざる無責任のやうに思はれて、彼はへんに暗い氣持になつた。彼等は彼等並にうまくやつて行くかも知れない。そしてそれが、或は彼等の身相應のものなのかも知れない。けれども……幸吉は感傷的にうづいてゐる自分の氣持を何と云ひ表はすべきか解らなかつた。若し多少でも近い言葉を探せば、それでは人間と云ふものが餘りにみじめ過ぎるとでも云つたやうな、へんに全體的な、胸の中が斜めに掻きまはされるやうな感じだつた。

彼は自分の家の方へ、暗い道を、うなだれながらとぼとぼと歩いて行つた。（九月）



或る男

武者小路實篤

七十

その春、お靜さんはお母さんに迎ひにこられて大阪に歸つた。

その時、彼は學校の見學旅行で大阪博覽會を見に行つてゐた。

彼はお靜さんが歸つて、お貞さんが一人のこることを私かに望んでゐた。しかし見學旅行に出る前、お靜さんと別れて、もう一生逢へないのかと思ふと淋しかつた。淡いながらもお靜さんと話が出來なくなるのは淋しかつた。しかしお貞さんが一人になると云ふよろこびはそれにかつた。お貞さんは御靜さんが居なくなれば淋しがる。相談相手がなくなるその結果としてお貞さんが彼にたよることを空想してゐた。

お靜さんについては、二つの記憶がのこつてゐる。それは或時、お靜さんが、食ひすぎたか何かして、大きなお腹をしてゐた。そして彼に腹をさすつて見せて、「こんなにお腹が大きくなりましたわ。きつと赤坊が出來たのですよ」と云つた。彼はそれを聞いて當惑した。

彼は愛すれば子供が出來るものと思つてゐた。自分はお貞さんを愛してゐるのだが、お靜さんはそれを思ひちがいして、自分を愛してゐるやうに思つたのか知らんと思つた。

之は彼が十七の時だつたかも知れない。彼が默つてゐるのを見て、殊に當惑さうな顏をしたのを見て、お靜さんは笑つて云つた。

「うそですよ。子供ぢやないのですよ」

彼はそれをきいて安心した。

もう一つは彼の家の近處に火事があつた時、彼は兄と一緒に火事を見に出た。すると其處にお靜さんとお貞さんの見に來たのに出あつた。そして四人で火事を見に行つた。

その歸りに彼は、走けてゐる人に足をふまれて、指から血を出した。その時、お靜さんは半けちを出してそれをさいて、彼の血をぬぐつて、簡單に繃帶してくれた。お貞さんはわきに立つてそれを見てゐた。彼の兄はさきに歸つた。その時、彼はお靜さんのかはりにお貞さんがお靜さんの通りのことをしてくれたら、どんなに自分は有頂天になるだらうと思つた。しかしそれだけお靜さんに感謝した。そして人通りのない通りだつたので、さう痛くもないのに二人の肩に手をかけて、もたれ氣味に歩いて歸つた。彼は自分の足をふんでくれたものに感謝した。

七十一

お靜さんと別れをつげて、旅行に出た彼は、或る興奮を感じてゐた。それはお靜さんと別れたからではなかつた。彼の級が侮辱されてゐることを彼は知つたからである。

この修學旅行には彼の三つ下の級の人とゆきたがつた。そして學校で運動した。自分の級だけでは結果が得られない

ので、學校の最上級の彼の兄の級に奔走をたのんだ。それと同時に、彼の下の級の人に奔走をたのんだ。

彼の級がその時中等科の一番上級だつた。だから彼の級にたのんでくるのが至當であるのを、下の級は、彼の級は意氣地のない人間許りのあつまりだから、あんな級にたのんだつて駄目だ、と公然と云つた。そして三つ級の下の人も彼の級にたのむことで、下の級の人の反感を起させるのを恐れた。そして彼の級をたよりにならないものとしてあつかつた。

之は彼の級の人にとつては氣持のいゝ話ではなかつた。殊に侮辱されることの嫌ひな、そして下の級の暴力自慢に反感をもつてゐた。彼には不快だつた。

其處で彼は一部の人とその不平を話した。

そしてその人々の内にある興奮、侮辱をはねのけたいと云ふ勢ひが生れかけた。それのあらはれとして、MとUが髮毛をながくして、出來るだけのハイカラをつけてゐたAに忠告することになつた。Aのやうな奴が同級にゐるのは級の不名譽だと云ふのである。

それでMとAが彼の髮を切ることをすゝめに行つた。處がAが中々きかないので、二人は怒つて歸つて來た。其處で今度は彼が忠告しにゆくことになつた。

彼はAにあつて何と云つたか忘れた。そしてAが髮を切ることになつた。Aはすつかり彼に感心してしまつた。Aは「今迄學校に偉い人がゐるかゐないかをためして見やうと思つて、わざとへんな風して見たが、誰も偉い人にあはなかつた。しかし君に逢つて、僕は實にうれしい、僕はまだ君のやうな人にあつたことはない」と云つた。彼は始めて知己にあつたやうな氣がして、Aとその後何年か仲よしになつた。Aは翌日髮をかることになつたらしい。MやUも彼がAと仲よしになつたことに不服は感じなかつた。むしろよろこんだ。

彼はこの旅行のある日の晩、彼の一級上の有名なならずものと一緒に火ばちにあたつてゐた。彼の級の人も他に二人許りゐた。ならずものの級の人も二人許りゐた。何の話をしてゐたか忘れたが、不意にならずものが彼に火箸で大きな火をつまんで彼の口におどかしに近づけた。彼はその時、口を逃がすかはりに、拳固をかためて、ならずものゝみけんを目がけてつき出した。火をもし彼の口に押しつけたら、彼は同時にその男のみけんを力一杯ついてやらうと思つた。その男は何氣なく火を火鉢にかへした。其處で彼も何氣なく手を膝にもどした。氣のせいか、その男はそれから不氣味な脅迫らしいことは云はなくなつて、そして暫くして席を立つて行つた。彼は組し易い奴だと思つた。

彼は京都の町を木下と一緒にあるいてゐた。すると二つ級の下の人に出逢つた。その人は木下と同じく學校の塾にゐたことがあるので、彼等と一緒になつて歩いた。その時その人は彼の一つ下の級の或人をし切りとほめた。

彼はそれを辛抱して聞いてゐたがとう〳〵辛抱出來なくなつた。それで今まで默つてゐた彼は急に怒鳴つた。

「あれは馬鹿ですよ」

あとでその人は木下に彼のことをふく人だと云つたさうだ。しかし彼は吹いたとは思はない、彼の目から見てその人が利口と思ふ男が馬鹿に見へるのは仕方がないと云ふのが、彼の腹であつた。

「自分はふく人間ではない、今に思ひ知らせる時があるだらう」彼はさう思つた。

七十二

彼は旅行から歸つた時、お靜さんは居なかつた。お貞さん一人のこつてゐた。彼は「第二の母」の内でからかいてゐる。

「このことは自分には淋しかつた。しかし嬉しかつた。自分はお靜さんが居ない爲にお貞さんと許り話が出來るやう

に思へたから。しかし事實はちがつた。お貞さんの不在は以前にまして多かつた。さうしてお貞さんと話す折は以前よりもまれになつた」

しかし彼はある時、隣りの空地で兄や從弟とテニスの眞似をしてゐた。其處にお貞さんが來て彼等のテニヌをしてゐるのを見てゐた。

彼が負けて誰かとかはつた時、彼はお貞さんのわきに行つた。その時、不意にお貞さんが、自分は姉が居なくなつて誰も親身に自分のことを思つてくれるものがないから淋しい、あなたゞけがたよりだと云ふ意味のことを小聲で一人言のやうに云つた。彼はそれを聞きまちがいではないかと思ふ程うれしく思つた。だがその時、彼は何と答へたか、彼は忘れてゐる。しかしあいまいなたよりにならない返事をしたらしい。彼は内からくるよろこびにぢつとしてゐられなくなつて、急に快活になつて歩きまわつたが、話をそれから先きにすゝめる術を知らなかつた。二人はそのことをやがて忘れてしまつたやうな風につきあつた。それは一時の夢にすぎなかつたやうに、彼から消えて行つた。彼には女の運命を荷なう力のまだ自分にないことを知りすぎてゐた。責任のある態度には出られなかつた。

彼はどの位いお貞さんの爲に働きたく思つたらう。しかし彼のなすことはたゞ快樂をぬすみとらうとする犬のやうな態度に出るより他、仕方がなかつた。しかも彼は媚びることは出來なかつた。彼にはある秘密があつた。彼は彼女の赤裸々の美を、讃美したかつた。

彼のお貞さんに對する態度は、臆病であつて、卑しくて、圖々しくつて、しかも小心であつた。内には清い火が燃えてゐて、お貞さんの幸福の爲に祈り、自分の賤しさの爲に祈つたとは云へ。

しかし一方、彼は又、すべての人を見下すやうに彼女をも見下してゐた。自分に仕へることを彼は内心、彼女に要求

してゐた。

彼のから云ふ態度が、どうして無邪氣な彼女をよろこばせやう。

彼女は彼に近づかうとしないことはなかつた。たしかに彼の一面の愛を彼女は無意識に受け入れた。しかしその時、彼の他の一面はそれを再び拒ますことに成就した。

「第二の母」にはこんなことがかいてある。

「或夕のことだつた。自分が伯母の家の格子戸の前でお貞さんが靴をみがいてゐる處へ行つてお貞さんと話をしてゐた。其處へ母が來てそばにあつた山椒の實をとりはじめた。母一人では中々うちがあかないので母は『てい、てい』と女中を呼んだ。その時自家にていと云ふ名の女中が居た。その時お貞さんが、『私をよんでゐらつしやるのよ。私もていと云ふのですから』と笑つて云つた。自分は『こゝにていが居ますよ』と云つて笑つた。母は別にお貞さんにとつてくれとは云はなかつた。しかし自分はお貞さんと母の山椒の實をとるのを手つだつた。自分はその時お貞さんが自分の妻だつたらと思つた」

彼はその時實に幸福だつた。そしてお貞さんをていとよびつけて母と仲よく一緒に仕事をすることの出來る身分にどの位い憧がれたらう。しかし憧がれが強いだけに彼は手のとゞかないものゝやうな氣がした。

七十三

小説にすればもう一息と云ふ處で彼は自信がもてなかつた。彼女の厚意は幻のやうなもので、彼はつかまへることが出來なかつた。彼女はもう一年きり彼のわきにはゐないことを彼は知つてゐた。その一年で彼は彼女の夫になるだけの資格をつくり、又彼女が彼の妻になることを望んでゐることを本當に知りたく思つた。しかし彼はます〳〵彼女が彼からは

なれてゆくことを感じないわけにはゆかなかつた。しかしそれには一つの他の原因があつた。

彼が旅行から歸つてまもなくだと思ふ。華族女學校の卒業生の人々が發起で、下田歌子の爲に、ある催しをして、金をあつめることがくわだてられた。御別宅の福さんはその發起人の一人になつてゐた。そしてその催に福さんが、謡をうたい、お貞さんと康ちやんが、仕舞ひをすることになつてゐた。

お貞さんはそれを大へんよろこんでゐた。

彼の座敷で、その下稽古をした。彼はその時、美しいと思つた。彼女を人中にさらすのは彼のよろこびではなかつた。しかし又皆に彼女の美を知らせたくも思つた處が、彼は華族女學校の人達が康ちやんの舞ふのには厚意をもつてゐたが、他の學校に出てゐた、身體の大きい彼女の出るのはよろこんでゐないと云ふ噂を彼は母から聞いた。彼は腹を立てた。お貞さんがあんなによろこんでゐるのにと思つた。そんな生意氣なことを云ふ奴に見せてやらない方がいゝとも思つた。しかし福さんは斷りにくいので困つてゐると云ふ話も聞いたが幸か不幸か、彼女はインフルエンザにかゝつて、當日は病床に横ることになつた、そして康ちやんだけが舞ふことになつた。

彼女が病氣になつても彼はよく出かけた。母は彼に病氣のうつるのを恐れて、彼に見舞にゆくなと云つた。彼はその時怒つて云つた。

「お母さんは子供が病氣の時に、見舞に行つてはいけないと他の人に云はれたら何と云ひます」

さう云つて彼は、聲あげて泣いてしまつた。

彼の母は彼があまり泣くのでおどろいた。

そして母は意味をとりちがへてかう云つた。

「誰にでもあることだから心配しないがいゝ」

彼は、その意味を、感じた。愛すれば子供が出來ると思つてゐた彼とは、その時は旣にちがつてゐたと見へる。

彼は「お母さん、そんな疑ひをするのをお耻ぢなさい。僕はそんなことでなくのではないのです。僕はどうしても見舞に行きます。子供の病氣を見舞はないではゐられないのと同じです」

「それなら勝手におし」さう云つて母も泣いた。そしてお前があんまりゆくので御別宅でも迷惑に思つてゐると云ふ意味のことを云つた。又、若いからお前は安心だと思つてゐたのにとも云つた。しかし彼は彼女の病氣を見舞に云つた。そして誰もゐない時、そしてお貞さんがねてゐる時、彼は耳元で囁いた。

「私だけはあなたのことを本當に思つてゐる」

それはお貞さんには聞へなかつたらう。

醫者は肺炎になりはしないかと心配した。

しかしお貞さんの身體は丈夫だつた。一ケ月程たつとすつかりなほつた。しかしお貞さんは彼をさけ出した。そして御別宅の伯母さん達はあきらかに彼に無愛想にしだした。

彼は御別宅に行く度にもう來ないでよさうと決心した。しかし彼は、行かないわけにはゆかなかつた。

七十四

その時分、彼の同級の人が彼に、同窓會があるといゝと話した。そんなことはわけないことだと彼は云つた。そしてMとUに話した。二人はすぐ賛成した。そして翌日には同窓會が出來て、MとUともう一人が幹事になつて最初の會をした。二度目に彼は正親町ともう一人の人と幹事に選擧された。彼はそれで始めて正親町と親しく話す機會を得た。

正親町は彼が五年の時かに、入學した。組がちがうので同級だつたが、殆んど話はしなかつた。たゞ畫のうまい、文學に趣味のある人だと云ふことを聞いて懐かしい氣がしてゐた。文學に趣味があると云ふことは、彼には何となく貴いことのやうに思はれてゐた。しかし親しくするおりは來なかつた。會のうちあはせなぞで逢ふ必要が出來た。そして正親町の家にあそびにゆくことになつた。彼は其處で正親町とすつかり親しくなつて、そして正親町のかいた畫を一枚もらつて來た。眞黒な林と原を通つて一つの小川が流れてゐるデッサンだつた。彼はそれを三四年の間大事にしてゐたが、その後蟲に喰はれたかどうかして何處かへ行つてしまつた。

正親町は牛込見附の近所に住んでゐた。彼の家からは十五分か二十分位かゝつた。招魂社の前を通つて行くのだつた。その後その通を彼は何度通つたらう。彼は櫻が澤山植つてゐる下を通つたり、招魂社の塀のわきから鳥居の前を通つて土手に出る道は隨分すきだつた。たゞあの遊就館の裏のガラスの突ささつた高い頑な塀には腹をたてた。ガラスのピカ〳〵光る塀すべてに呪ひあれ。

彼はその時分、彼が厚意をもつてゐた前田が軍人になるのを忠告してやめさせやうとして手紙をかいた。その時分彼は平和主義者だつたとも思はないが、軍人になる人の氣持はわからなかつた。前田からは厚意をもつた。彼を最もたよりになる友の一人と私かに思つてゐたと云ふやうな手紙で、しかし軍人になることは思ひとまれないと云つた。

あの臆病者の、鬼ごつこでもして、おいかけられる時、何とも云へない恐怖？をごまかすやうな表情する前田が、軍人になるとは物好きだと彼は思つた。敵に追ひかけられたらどうするのだ。しかし前田より臆病者も平氣で軍人になつてゐる。たゞ想像力の不足が彼等に勇氣を與へてゐるのだ。

彼は一體にその時分は忠告するのが好きだつたらしい。彼の友人にわりにしつかりしてゐたが、そして腕力も強く

喧嘩にも強い男があつたが、その男にも、あんまり色情にまけないやうに忠告して、感謝されたことを記憶してゐる。その男も軍人になつたが、病氣でやめた。

七十五

しかし彼は本當の友達と云ふものはもつてゐなかつた。MやUとも仲はよかつた。Aとも仲がよくなつた。その他Iとか、Hとか、まだ他にも仲のいゝ氣樂な友達はあつたが、それは學校での友達であつた。親身にいろ〳〵のことを話せる友達ではなかつた。少なくも彼にはお貞さんのことを話せる友はなかつた。又親友らしいものもなかつた。彼は學校がすむと眞一文字に家に歸つた。

小說類をよむのが好きになつた。蘆花の「思ひ出の記」なぞは愛讀した。中學四年か五年の時、讀賣に出てゐた魔風戀風をよんで兄に怒られて議論したことを覺へてゐる。そしてやめずによんだ。彼は怒られてやめられる位いの事なら怒られない前に自分でやめてゐると腹で思つてゐた。自分でやめないことは、他人に云はれたからと云つてやめられない、それが彼の癖であつた。

しかし彼は小說類より論文や、評傳を愛した。しかしその時分何を彼が愛讀したか覺えてゐない。

夏休が來て彼は例によつて金田の叔父の處に避暑に行つた。

彼は朝早く海岸を歩くことが好きだつた。裸足で波のよせては歸る處を歩くのが好きであつた。夏の朝の清い空氣のなかで、彼は波に足をあらはせながら散步するのが好きであつた。力は內に漲つて來て何んでも出來ると云ふ氣がする。彼は歌を唄ふことが出來ないで大きな聲で怒鳴つたりする。天上天下唯我獨尊と云ふやうな氣がする。自分が生てゐたければ蒼生も如何んせん、なぞと云ふやうな感じがする。自然は自分の爲に存在してゐるやうな氣がする。だが彼

は孤獨であつた。

彼のわきに立つべき人が、彼のわきに立つてゐなかつた。

そしてその人は彼を愛してゐるとも思へなかつた。彼は運命にたよりたかつた。しかし運命はそれを彼に許してくれるだらうか。

彼は私かに四方を見て誰もゐないと思ふと、波のくる所に貞と云ふ字をかいて見る、それは彼が日記にさへかくことを憚かる程秘密な字である。

彼は神へ幸福を祈る。

もし今、お貞さんが自分のわきに居て、そしてこの清い朝の空氣を吸ひながら、一緒に濱を歩くことが出來たら。あすこからお貞さんが歩いて來たら。

彼はそんなことを考へると、どうしてもお貞さんを失ひたくないと思ふ。失つてはたまらないと思ふ。あと三分の二ケ年。その內に自分はお貞さんの眞心をつかまなければならない。

同時に又彼は、學校のことを考へる。彼は學校の內の亂暴者に腹をたてる、今にやつけてやらうと考へる。すると力がわいてくる。

腕力だけをたよる、美少年をくるしめてよろこぶ馬鹿者達よ。お前達をいつまでもよろこばしておくわけにはゆかない。

彼は自分より優れた人間が學校にゐるとは思へなかつた。彼は彼の兄がこの秋から學習院を出て大學に入るのをよろこんだ。兄さへゐなければ他にこわい人はゐない。遠慮しなければならない人は他にない、又迷惑を與へる人も他にな

い、安心して、自分の云ひたいことが云へる。

この夏休みに彼はMとUから手紙をうけとつた。それには、MとUとが行つてゐる避暑地で、今度彼の級におちて來る男の、墮落した生活を憤慨したことがかいてあつた。こんな男が僕の級に入つてくるのは面白くない、何とかしなければいけないとかいてあつた。

MやUは彼と學習院の内の空氣を清くする運動をしやうと云ふ仲間だつた。彼も、MやUに返事を出して、贊成の意味を示した。

彼はその夏休みに始めて聖書をよんだ。始め彼は耶蘇を嫌つた。叔父の處にはよく牧師が來た。一里半はなれた三崎からくるのだつた。彼は牧師を輕蔑することが、愛國心のあらはれのやうに思つてゐた。それでよく叔父に耶蘇の惡口を云つた。讀まずに惡口を云つたつて駄目だと或日叔父に云はれた。

「よし、よんで惡口云つてやらう」

彼はさう思つて馬太傳一章からよみ出した。馬鹿々々しいものだ、それ見ろ、と彼は二三章よんだ時は内心得意だつた。處が五章をよんだら、すつかり感心してしまつた。こいつは偉い奴だと思つた。

それから彼はよむに從つて、耶蘇をほめないわけにはゆかなくなつた。しかし牧師、その人は隨分感じのいゝ人だつたが、とは彼は殆んど話はしなかつた。

叔父の處には牧師の他によく坊主が來た。

叔父はその時分、隨分宗教心が強くなつてゐて、坊主になりたいとよく云つてゐた。

彼は叔父の處で、佛經の本にもいく分か近づいた。叔父はその時分よく聖書のなかの不審や、佛教のなかの不審を

兄達と話してゐた。彼はそれを何げなく聞いて、感心した言葉なぞによく出逢つた。トルストイを知つたのもその時だ。叔父のさう云ふ要求は、すべて彼の内に目ざめた。叔父はその後、生活のために俗生活に歸つたが、そして兄もさう云ふ要求をすてゝしまつたが、それ等の一時的の叔父や兄の要求は無意味には消えてゆかなかつた。それは何げなく聞いてゐた彼の心におちて、其處に受け入れられた。

叔父のその時分の生活は、立派な半農的生活であつた。それは明治二十七年頃から始められて四十年頃迄つゞいたらう。彼が十の時から、彼の二十二三の時迄つゞいた。その生活も彼に影響した。

彼は母についでこの叔父から一番無意識に感化を受けた。叔父の家の破産は、叔父を田舍に入こませ、そして眞面目な生活に歸らせた。物質的要求に裏切られた叔父は精神的にのみ生きやうとした。まだトルストイなぞの日本に知られない前ではあつたが、叔父は生活の方から半農生活をし、農民や、漁師と近づき、三浦の殿樣と云ふ名で、皆に愛されてゐた。自分で山をくづし、土を運び、畑をつくり、肥をかついだ。叔母も亦それをよろこんでたすけた。そして誰とも友達づきあいしてゐた。女中は一人つかつてはゐたが。そして畑の世話をする人が一人ゐたが、それもと友達らしくしてゐた。そしてさう云ふ要求をもつてゐる人と近づくやうになつた。之等の影響をいつのまにか彼はうけて居た。彼一人それをまともに受けたと云つてもいゝ。

さう云ふ叔父がトルストイを知つたのは隨分のよろこびだつたにちがいない。トルストイの名はその時分よく叔父の口からもれた。

その時分譯されだしたトルストイの本は殆ど全部叔父はもつてゐた、彼はそれをよろこんでよんだ。しかしトルストイを本當に熱しだしたのは一年のちであつたが、しかしその時分でも隨分尊敬して、影響をうけ出したことはたしかで

あつた。

之はお貞さんとの縁がうまく行かなかつた賜ものゝ一つである。お貞さんが彼をさけてくれたことの賜物の一つである。もう一つ彼は、お貞さんのおかげで、ある女の人のある言葉に心を亂されずにすんだ。

彼は誘惑されたことのない男である。

しかしその夏、彼は從妹達の友達から、ある時、何かでその娘を怒らした時、その娘に彼は接吻したら許してあげると云はれた。勿論彼は聞えぬふりをしてすました。

田舍の風呂は半分男女混浴であつた。湯船にしきりがなかつた。彼は女の裸體にたいして好奇心と云ふか、憧れと云ふかを強くもつ男ではあつたが、お貞さん以外の女に少しでも氣をうごかすことを運命の前におそれたので、その娘の入る前に風呂からいそいで出た時、その娘に、

「いそいでお逃にならなくつたつていゝのに」

と云はれた。之は誘惑ととるよりはもつと無邪氣なものだつたにしろ、そしてその娘を彼は嫌つてはゐなかつた。しかしその可なり美しい娘に少しも心をひきつけられなかつたのは、お貞さんが彼の心を滿してゐたからであつた。

しかし夏休みがすぎて、再び、東京で彼はお貞さんに逢つたが、お貞さんは彼をさけることが彼には益々はつ切りして來た。彼はよく腹をたてた。

七十六

學校が始まるとまもなくだつた。WとUとが彼に報告したのらくら者についての處置について三人で話した。MUは同級の人一部も二部も集めて、―彼とUは一部だつた。Mは二部の一番だつた。彼等は新學期から高等科になつたの

だ。――彼から皆に事實を報告して處置について相談してくれと云つた、

彼はとう／＼承知した。しかし學校へ行つて見たら、彼はそんなことを云ふ氣になれなかつた。何んだか大業で、當人の吞氣にしてゐるのを見ると、ほつたらかしておきたいやうな氣もした。しかし二部の方では既に彼の名によつて晝休みに一部の敎室に集つてくれと黑板にかいて知らせてしまつたので、今更、とりけすのは面白くないやうにMは云つた。

それで一部の人にも晝休に集まつてもらうやうにUが黑板にかいた。

晝休みには皆が集まつた。其處で彼は自分の役目をはたさなければならなかつた。彼は一段と高い處に立つのが氣がひけた。それで、段の上にのらずに話しだした。

皆に集まつてもらつた禮を云つて、そして今度落ちて來た某について面白くない事實を聞いたことを話しだした時、話の當人がひよつと入つて來た。其處で彼はその人を前においてその人についてのよくない噂を話さなければならなかつた。

「そんなことはない」とその男は云つた。さう云はれると彼は證據をあげることは出來なかつた。しかし彼はたしかな人から聞いたことを話した。他にも二三人證人が出だした。しかし當人はそれを否定した。

其處で彼は當人と二人で隣りの室に行つた。そして彼は歸つて來て、

「某君はそんなことはないと云ふのです。もし今後自分にわるいことがあつたらどん／＼忠告してほしい。なほすからと云はれるのです。皆樣も、今後某君にわるいことがあつたら遠慮なく注意をして下さい。之から出來るだけ謹むと云はれましたから、過去の事實についての有無はとはずに、仲よくしてあげてほしく思ひます」

そんなことを云つてしまつた。

あとで、某が知らばくれたことを憎むやうに云つた人もあるが、反つてあの位いの方がよかつたとMやUは云つた。あとで聞いた話だが、志賀は某のあとをついて行つて、某が「彼が何を言つたのかまるでわからない」と云つた時、怒つて某に彼の氣持を說明したことを聞いた。その時分彼はまだ志賀とは親しくしてゐなかつたので、そのことはずつとあと迄、知らなかつた。

それより前の春だつたと思ふ、或はその後の秋だつたかも知れない。學校の校友會雜誌の輔仁會雜誌と云ふのに、六號で新四年生と云ふ匿名の人が、行軍で上級の人達の下等な行爲を皮肉に鋭く生々とかいた記事が出た。

それは學校で問題になつたが、誰がかいたかわからなかつた。彼もそれをよんで更に若い友達を弄ばうとする上級の亂暴者に腹を立てた。その記事に、學習院のなかを淸くするのは、社會を淸くすることよりも容易とは云へないやうにかいてあつた。そしてそれを實現する人の出ることをのぞんでゐた。彼はそれを見た時、その望まれてゐる人は自分だと私かに覺悟した。

その記事をかいたのは、矢張りずつとあとで聞いたのだが志賀だつた。

彼は又MやUと櫻心會と名づけた、興風會のやうなものを起した。そして眞面目な人達を入れることにした。しかしそれは圓滿な質の人を入れることが出來たが、鋭い質の人を入れることが出來なかつた。滿場一致で入れることにきめる人はつまり無難な人ばかりであつた。それであまり効果は上らなかつた。しかし亂暴者の多くは彼の兄の級の人が多かつた。それが學校を卒業してしまうと、今度は中學の最上級になつた。彼の一級下の人達の外はわりにおとなしい級だつた。上の級の亂暴者でも、それは彼の一つ下の級の人と行動を共にすることによつてのみ、孤立から逃れることが

出來た。

下の級は彼の級を公然と無視してゐた。春の輔仁會の時に下の級の人は、彼の級を惰弱だと云つて非難した。彼はトルストイの本をよんではゐたが、彼は下の級をおさへつけることを心がけた。

七十七

彼は依然として誰よりもおとなしく、そして一番呑氣ものと仲がよかつた。それ等は彼の侮辱する人々を侮蔑して、彼を自分と同じく馬鹿者に思つてゐた。しかし彼はさう云ふ人々の間にゐて日向ぼつこしてゐることを好んだ。しかし彼は一方段々、自分の力を自覺して來た。何者も恐れない氣がした。その時分の彼は議論するのが好きだつた。二時間も三時間も議論した。忠君愛國家は彼を死刑にしてやると云つた。しかし仲はわるくなかつた。そして彼の忠君説には誰も反對は出來なかつた。愛するものに精神的にも物質的にも自由を與へないのは愛すると云ふことにはならないと云ふのが彼の議論だつた。

彼の愛國論は、國家と云ふものゝ解釋の不明な所に突込んで、所謂愛國者が眞の愛國者でないことを證明した。國民のこらずが死んでも戰爭すると云ふ愛國論は彼を怒らした。國民を一人でも多く生かしたいが爲に戰爭するのぢやないか、皆死んでもいゝ覺悟が出來れば戰爭しないがいゝ。彼はそんな議論を盛にした。彼の根氣と、ガムシヤラには皆辟易した。

七十八

しかし彼は家に歸ると、お貞さんのことが頭からはなれる時はなかつた。どうかして逢ひたい、氣持ちよく逢ひたいと思つた。

しかし彼の自尊心を傷つけずにお貞さんに逢ふことはつひにむづかしくなつた。

ある夕、幸福が彼にめぐり逢つて、彼は庭を掃いてゐる お貞さんに出逢つた。お貞さんはなつかしさうに彼と話した。彼は有頂天になつた。彼は不意に暴君のやうな氣持になつて云つた。

「私がこの箒をかついで通りを歩けと云つたら、あなたは歩きますか」

「歩きますわ」、と彼女は笑ひながら云つた。

彼はすつかりよろこんだ。その時伯母が出て來た。するとお貞さんは、伯母に笑ひながらかう云つた。

「貴郎さまは私に箒をかついで通りを歩けとおつしやるのよ」

それは悪る氣で云つたのではなかつたであらう。しかし彼は急に腹が立つて來た。人の眞面目を冗談にあつかふ。彼はさう思つた。

彼は侮辱されたやうな氣がした。すぐ室に歸つて、お貞さんに絶交狀をかいた。

彼は前から自分が、お貞さんの前にあまり意氣地がなく、自分がおちつかなくなり、大事な時間を空費することを恥ぢてゐた。そしてお貞さんに無愛想にされる度に、もうお貞さんには逢ふのはよさうと決心したことは何度あつたか知れなかつた。しかしそれはすぐ消えるにきまつてゐる決心だつた。今は怒りが、彼の決心を實行さしてくれた。彼は之から勉強しなければならないから、一さいあなたとはつきあはないことにするとかいて、それをお貞さんに手渡した。お貞さんは氣輕にそれを受けとつた。

翌日の朝になると、彼は又、お貞さんの家のわきに出かけて行つた。お貞さんは彼を見ると、へんな顏して彼の處に來て、そして、

「思ひもよらない御手紙でおどろきましたわ」

と云つて手紙を渡した。それには、おどろいたことゝ、彼に怒られる覺えのないことゝ、彼に厚意をもつてゐる、少くも彼を一番たよりにしてゐることがあつさりかいてあつた。

それを見ると彼は又すぐ夢中になつた。そして、小さい帳面をやぶいて、それに詩のやうなものをかいた。私を兄と思つてくれ、あなたを妹のやうに思はしてくれと云ふ詩だつた。實に通俗な文句であつたが、彼は調子に愛があらはれてゐると思つた。お貞さんはそれをよろこんで受けとつてくれた。彼は大よろこびで學校へ行つた。

お貞さんの手紙は勿論机の抽出しの奥に大事にしまはれた。何度、彼はそれをよんだらう。

その日か、その二三日あとか、彼は覺えてゐない。學校から歸ると、母が顔色をかへて彼に云つた。「お前はとんでもないことをしてくれたね」

「何がです」

「お前はお貞さんに、へんな手紙をやつたさうだね」

「何にもへんなことはかきません」

「兄と思つてくれとかいたさうぢやないか。御別宅の人は皆笑つてゐましたよ」

「どうして見たのです」

「おとしてあつたのを伯母さんがひろつたのだよ」

おとしてあつたと云ふとは彼には致命傷であつた。彼はそれを信じてしまつた。今でもそれを信じてゐる。

彼は彼女の手紙を神聖なものとしてしまつてゐる。然るに彼女は彼の手紙をおとしたかすてたかしたのだ。

しかし彼は母に自分の受けた侮辱を知られることを恐れた。

「笑ふ奴は勝手に笑ふがいゝでせう。私は何にもわるいことはかいた覺えはありません」

「それは別に、わるいことはかいてなかつたと伯母さんも云つてゐた。しかし兄と思つてくれとか、」

「もう默つて下さい」

「お前はあの娘を信用してゐるか」

「私の前で惡口云はないで下さい」

彼は自分の手紙を尊敬しないお貞さんにはもう逢ふのはよさうと思つた。しかし彼は母とわかれて自分の室に歸つた時、お貞さんの手紙をさがした。そしていくらさがしても、何度ひつくり返して見てもお貞さんの手紙を見出すことは出來なかつた。

彼はこの時から、母をも憎惡しだした。

彼はお貞さんがおとしたと云ふこともあてにはならないと思つた。しかしお貞さんを彼はその點で信用することは出來なかつた。彼の氣持を理解するにはお貞さんの氣持は呑氣すぎることを、彼はいくらひいき目に見ても信じないわけにはゆかなかつた。

七十九

秋の運動會の時だつた。お貞さんは運動會を見に來て、其處で以前から知つてゐる人に出逢つた。そしてその人に招待されて、二三度その人の處へ出かけた。

その人は兄の級にゐる人だつた。彼はお貞さんがその人の處へゆくのをよろこばなかつたのは云ふ迄もない。しか

し彼はもうお貞さんのことに自分が拘泥してゐると思はれるのはいやだつた。伯母がその人はどんな人だと聞かれた時に、「温和しい人でしよ」と云つた。伯母があとで彼の兄に聞いた時、兄はほめなかつた。

或日彼が郵便箱を見ると、其處にお貞さんあてのハガキが入つてゐた。彼はそれを讀んだ。其處には、お貞さんが、その男とつきあふので惡い噂が立てられてゐるから用心しろと云ふ文句が賤しいかき方でかいてあつた。彼はそのハガキを伯母に渡した。お貞さんがその時まだ家に歸つてゐないにしろ、伯母にそれを渡したことは、彼は誤解されても仕方なかつた。

お貞さんはそのハガキを見て悔しがつて泣いたと云ふことゝ、そのハガキをかいた人を知つてゐると云つたことを彼は聞いた。

處が彼がお貞さんとわかれて八年のちに、始めて二三度手紙を往復したことがあつたが、その時のお貞さんの手紙に、「あのハガキをおかきになつたことについてはもう何とも思つてゐません」と云ふ意味がかゝれてゐた。彼は之にはおどろいた。自分をあんなハガキをかく程賤しい人間だと、お貞さんは思つてゐたのかと彼はとり返しのつかないはがゆさと、怒りを感じた。彼の當時の氣持は、お貞さんがさう思つてゐるとは夢にも思はなかつた。そして何處かに、自分より賤しい人間が、自分と同じやうにお貞さんを戀して、嫉妬に燃えてゐることを、自分は私かに知つて、そしてお貞さんがその男を知つてゐるのだと許り思つてゐた。彼は今だにハガキのかきぬしについては想像がつかない。當時はその人を想像しやうとも思はなかつた。ハガキにそんなことをかく露骨さに彼は嫌惡を感じたゞけだつた。その後のお貞さんが、彼を嫌つた意味は、その時から九年後に始めてわかつた。

尤も彼はお貞さんにさう思はれても仕方がない程、陰險な人間に御別宅の人達に思はれたかも知れない。伯母が彼に

ついて

「貴殿さまは、氣がつかない顏して、何でも氣がつく方で油斷が出來ない」と云つたのは、その不信用を婉曲に云つたのにすぎまい。少くも彼の戀は用心深い、臆病な、賤しい方面を持つてゐたことは否定出來ない。彼は善事には勇敢であつたにしろ、人に知られることを好まない方面には卑屈であつた。

お貞さんは、一度、ある夕方、彼に厚意を見せて、かう云つたことがあつた。

「私のためにも、冷水摩擦をして頂戴ね」

と云つた。

その時は彼も無邪氣に話が出來た時で、さう云はれた時、彼は有頂天になつて云つた。

「えゝ、きつとします。貴女の爲にも」

しかし冷水摩擦はながつゞきしなかつたが彼女との厚意はもつと早くこわれた。

お貞さんと二人切りになれた時が殆んどなかつたからかも知れない。

だが彼は深か入り出來なかつた。彼は妻子を養へる自信がなかつたから、そして彼女は彼と一緒にならなければ生てゆかれないと云ふ樣子は何處にも見せなかつたから。彼女は彼に逢はないでも快活であつた。

八十

お貞さんのことをつゞけてかいてしまはう。翌年の春、彼が十九でお貞さんの十六の時、お貞さんはお父さんに迎へられて國に歸つた。その時のことを彼は、第二の母の內にかうかいた。

「その晩、お貞さんがいよ〳〵伯母の所を辭して迎へに來たお父さんの宿屋に移り、明朝東京を去ると云ふ日、夕食

前に自分は何げなくお貞さんに逢ひに出かけた。さうして伯母の家の縁側の前に立つて、縁側に出てゐたお貞さんと話をした。幾月の間自分が求めて得られなかつた親しみをもつてお貞さんは自分に對した。自分は今までとざされた心もちが一時に消へた、さうして心の底から嬉れしく御貞さんと話が出來た、しかし三十分許り話すか話さない内に夕食の時が來た。お貞さんは「あとで御挨拶に上ります」と云つた。自分は夕食しに歸つた。

自分は夕食をすませて室にゐた。兄は不在だつた。母は自分のわきに來て何かと自分に話しかけた。自分の心の内はいろ／＼の考へで一ぱいになつてゐた。自分は母からつまらぬことを話しかけられるのを不快に思つて、自分は無愛想な返事をしてゐた。さうしてお貞さんが今にくるか來るかとそればつかり氣にしてゐた。さうして自分は母に自分の室から出て行つてもらひたくなつた。自分はせめて別れる時だけでも二人だけで氣樂に話したかつたのだ。しかし母は意識してゐるやうに故意に自分のわきをはなれなかつた。自分は母が心配して自分を一人でお貞さんに逢はせないやうにしてゐる心持を感じた。自分にはこの母の氣持ちが殘酷のやうに思へた。それと同時に自分は腹を立てた。さうして勝手に居たければ居るがいゝ、自分を悲しませ、苦しませ、さうしていつまでも自分に恨まれたいならば勝手に居るがいゝと思つた。自分は困らない、少くも困つては見せないと思つた。自分にはわざと母が自分を苦しめる爲に其處に居るとしか思へなかつた。それ程その時母がわきに居るのをつらくなさけなかつた。

お貞さんは中々來なかつた自分は、勝手口の格子戸のあく音が今にするか、今にするかと思つた。さうして音がする度におていさんはとう／＼來たと思つた。さうしてあいさつして行つてしまへばそれでもう一生逢へないと云ふ氣が強くしてゐた。自分は何度も胸をおどらせ、お貞さんでないことを知ると一方安心もしたが、失望もした。その内とう／＼お貞さんは來た。母に挨拶し、自分に挨拶した。「ながながお世話になりました。」と云ふやうなことを云つた、自分は殆んど何にも云ふ氣にはなれなかつた、さうして母が世間普通のお世辭を云つて、別れを惜しむやうなことを云つてゐ

るのが、限りなく悄らしかつた。自分はわざとなを默つてゐた。お貞さんは十分もゐないで、挨拶して出て行つた。母が送らうとしないので、自分も勝手口までも送らうとはしなかつた。まもなくお貞さんが從妹や從弟と花やかに笑ひながら門を出て行く音が聞えた。自分は涙の出るのを母に知らさないやうにしてうつむいて下唇をかみながら本を見てゐるふりをした。

母は心配してしつこく自分のわきに居た。自分にはそれがこの上なくつらかつた。

その晩、床に入つて明りが消えると自分は一人で誰れにも聞へないやうに泣いた。自分は淋しく心細く悲しく耐へられなかつた。子を失なつた母でもこんなに淋しくはなるまいと思つた。

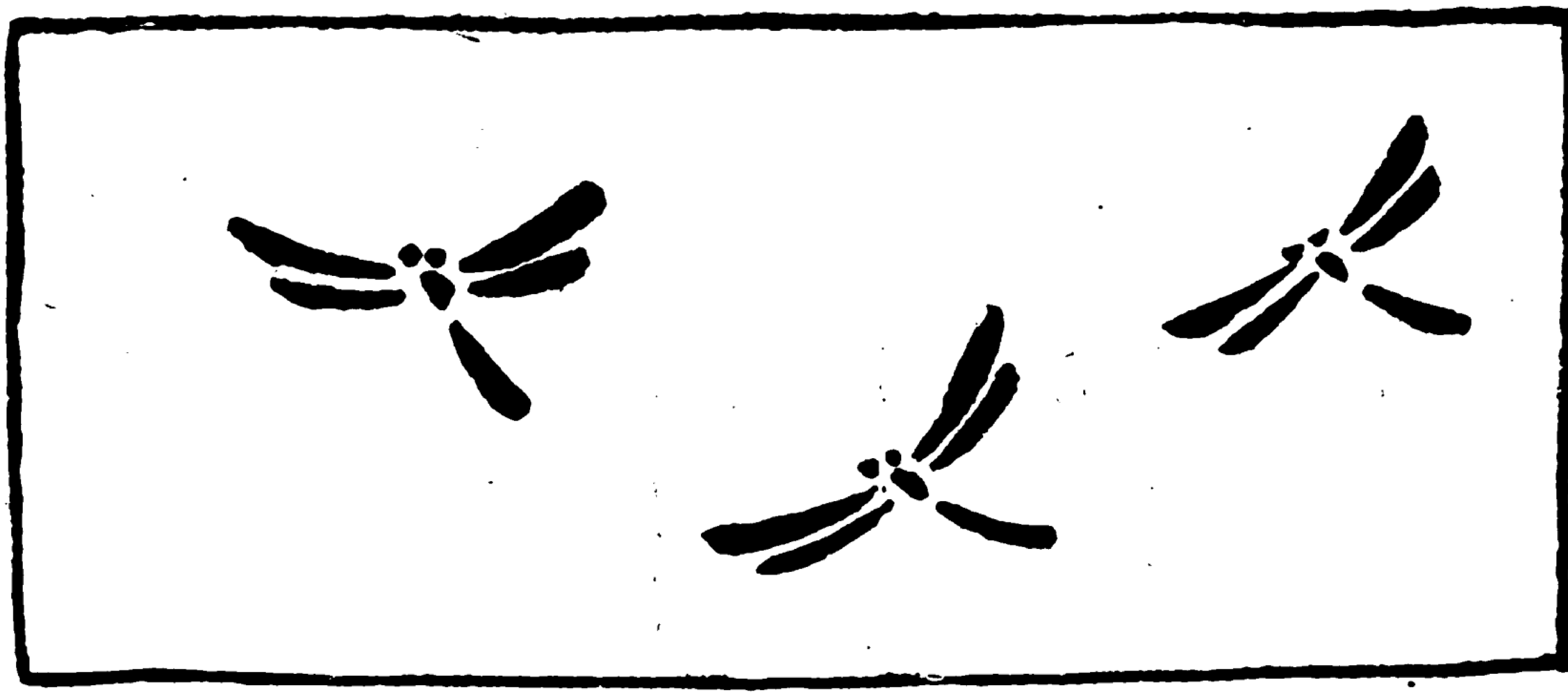
それでも翌日自分は何氣なく起きた、さうして學校に出かけた。學校から歸へつてくると伯母は自分にお貞さんがよろしくと云つて新橋をたつたと云つた。

さうして今朝お貞さんが宿屋の帳場に出てゐたら、僕がその前を通つて學校へゆく姿を見て、呼びとめやうと思うたけれども、わるいと思つてやめたと云つてゐたと云つた。自分はそれを聞いて强く後悔した。さうしてすまなく思つた。

自分はその宿屋にお貞さんが父と一晩とまつてゐることを知つてゐた。そのくせその宿屋の前を通る時は全くそのことを忘れてゐた。ただもうお貞さんと永遠に別れたことだと許り思つてゐた。一寸ふり向けばよかつたのに、さうして笑ひながらお辭儀すればよかつたのに、なぜ自分はそれをし忘れてゐたのだらう。お貞さんはさぞ自分の無情を怒つてゐるだらう。自分はさう思つて耐へられなく自分の愚が腹立しかつた。自分はとり返しのつかない失策をしたやうに、自分に腹立しく淋しかつた。さうしてお貞さんが自分の前を通る時間を見はからつて店に出てゐてくれた親切を喜びながらそれを無にしたことをすまなく思ひ泣きたいほど殘念に思つた。」

その後、彼は呑氣には生きられなくなつた。

(つゞく)



修身の爲に年少の友へ

里見弴

この春の末あたりから、私にはだん／＼實際的な氣持がもち上つて來た。小說など書いてゐると云ふことが、なんとなくまだるツこく思はれ出した。そんなことをしてゐる手間で、日常生活で、實際に、どんな少さなことでもいゝから、一日に一つゞゝでも善行を積んで行つた方が、まだしも世のためになるかも知れない、と云ふやうな氣持になつてゐた。何か大きなものゝ爲にならば、即刻に、命をめされてもいゝ、そんな氣持の時もあつた。——空想的なことから、實際的なことへと興味が移つて行くと云ふ、その年ごろに達したのかも知れない。兎に角私は氣短かになつた。感想文のやうに、胸にあることを片つぱしからドシ／＼さらけ出して行ける仕事ならばまだしも、小說の構想などしてゐることは、ひどく悠長らしくて、少し誇張して云ふなら、どうやら恥じらはれるほどの氣持さへした。文筆を捨てやうかと心私かに考へた晩もある。

天道を知り、之を行ふ、——これよりほかに、人として一日もゆるがせに出來ないと云ふほどの大事はない。どの方面に働くとしても、人はまづこゝに心を潜めな

けれぱならない。――そんな氣持でゐる時に、ふと、貸してくれる人があつて、西郷南洲先生遺訓と云ふ寫本を讀んでみた。

一、道を行ふ者は固より困厄に逢ふものなれば如何なる艱難の地に立つ共事の成敗身の生死抔に少しも關係せぬもの也。事には上手下手有り物には出來る人出來ざる人有るより自然心を動す人も有れ共人は道を行ふものゆゑ道を踏むには上手下手もなく出來ざる人もなし。故に只管道を行ひ道を樂み若し艱難に逢ふて之を凌んとならば彌々道を行ひ道を樂むべし。予壯年より艱難といふ艱難に罹りし故今はどんな事に出會ふ共動搖は致すまじ。夫だけは仕合なり。

一、命もいらず名もいらず官位も金もいらぬ人は仕末に困るもの也。此仕末に困る人ならでは艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり。去共今樣の人の凡俗の眼には見得られぬぞ。

聖賢に成らんと欲する志なく古人の事跡を見て迚も企て及ばぬと云ふ樣なる心ならば戰に臨みて逃るより猶卑怯なり。朱子も白刄を見て逃る者はどうもならぬと云はれたり。誠意を以て聖賢の書を讀み其の處分せられたる心を身に體し心に驗する修業致さず唯今樣の言今樣の事と云ふのみを知りたりとも何の詮無きものぞ。予今日人の論を聞くに何程尤に論ずる共處分に心行き渡らず唯口舌の上のみならば少しも感ずる心えなし。眞に其處分有る人を見れば實に感じ入る也。聖賢の書を空しく讀むのみならば譬へば人の劍術を傍觀するも同じにて少しも自分に得心出來ず自分に得心出來ずば萬一立合へと申されし時逃るより外有る間敷也。

まだいろ／＼結構な箇所もあるが、かう云ふ、一見平凡で、而も實感の充ち溢れた言葉にひどく心を惹かれた。修業と云ふことが、日常茶飯の裏にあるのを、今更ながらつく／＼と感じた次第である。すなはち、修業の第一は、修身で

あることを思つた。修身の第一は己を欺かないことである。「誠實」の心をもつて「處分」することである。南洲翁などは、その意氣で世を處分したのだが、私どもは、まづ自分自身の處分から正してかゝらなければならない。尤らしくはなくとも、南洲翁に「感じ入」らせるだけの權威を體しなければならない。

巷に立つて道を行ふか。

藪に潜んで道を樂むか。

そんな迷は、まだ／＼私には早すぎた。私はまづ靜に自らを養ひ肥やさなければならない。「今はどんなことに出會ふ共動揺は致すまじ。夫だけは仕合なり。」と、人に語れるやうに、十分肚をつくらなければならない。

幸に、と云つては勿體ない次第だが、私は父の喪に服し、きようだい（義理の姉ではあるが）を見送り、子供を失ひまた自らも大患に罹つて、高熱のため昏々たる裡にではあるが生死の境を彷徨した。それらの度毎に、私はこの世に存在してゐるものゝねうちを有難がる心を増した。何事をも、誰でもを、ねうち高く見る癖がついた。が、一方それらの機縁に遠ざかる毎に、一方では「世の中」が、私の買ひ被り屋であることを囁く。もつと踏み倒せ、もつと値切れ、と私に云つて聞かすのである。また私も、お有難屋の爺さん婆さんのやうな心にはなれないので、目前に、ガツクリ／＼と低落する物の、又は人のねうちを見るにつけて、世を甘く考へたり、世を厭はしく思つたりする。と、忽ち一心がゆるみ、まごゝろが失はれる。私がいま心がけてゐる修身の道にとつて、一番恐しいのはこれである。すなはち「艱難」の最たるものがこの「幻滅」である。

——今の世の文化とは、人の心からまごゝろを追ひ出す鞭のやうなものに思はれる。随つて今の世の修身とは、その鞭を堪え忍んで、不退轉のまごゝろを護立て、終には他に及ぼし世に及ぼす立志のほかには何もないと思はれるのであ

る。

ひどく古くさいことを云つて、或はあいついやにちゝいがつてゐやがると、嗤はれるか知らないが、私とても、因より今の世の誰でもがその乳の味を知らないと云ふことのない箇人主義に養はれたものだ。自分の命が誰のためにこゝまで息をしてゐるかと云へば、勿論君のためでもなく、國のためでもなく、また隣人のためでもなくて、たゞ自分自身のためだ、と云ふ立派な道德（皮肉でも反語でもない）によつて成長して來た有難さを忘れはしない。けれども、自分一人がよくなると云ふことが、どんなにつまらない、淋しいものか、と云ふ實感は、必ず箇人主義の道德の行手に私たちを待つてゐると思ふ。そこで、なアんだつまらない、と云ふ氣になれば、永いことかゝつてエッチラオッチラ引きづり上げた車を、急阪に放つた態になる。そこで、いつの間にか自分が登つて了つた峰の高さに安んずれば、下目づかひにものを云ふ人間になつて終る。そこで、あたりを見廻して、尻こそばゆく、我ながら恥しくなるのなどがまづ好ましい。けれども十分ではない。己の道から天の道に乘りかへて、倘も修身おこたらず、靜に養ひ肥すことを心がけるべきであらう。その心がけは、おのづとひとの心に觸れ、柔らげ導くする力をもつだらうと信じる。幾度もつらい幻滅には會ふであらうが、「彌々道を行ひ道を樂」んで行きたいものである。

南洲翁の遺訓を讀んで、感じたことを述べたまゝである。



俊寛

菊池寛

一

治承二年九月二十三日の事である。

若し、それが都であつたならば、秋が更けて、變り易い晩秋の空に、北山時雨が、折々襲つて來る時であるが、薩摩潟の沖遙かなる鬼界ケ島では、まだ秋の初でゝもあるやうに暖かかつた。

三人の流人達は、海を見降す砂丘の上で、日向ぼつこをして居た。ほか〳〵とした太陽の光に浴して居ると、所々破れほころびて居る袷を、着て居ても、少しも寒くはなかつた。

四五日吹き續いた風の夕殘が、まだ折々水沫を飛ばす波がしらに、現はれて居るものゝ、空は一杯に晴れ渡つて、蓮のやうな白雲が、太陽をかすめて、棚引いて居る丈だつた。が、さうした晴れ渡つた蒼空から、少しの慰めも受けないやうに、三人の流人達は、疲れ切つた獸のやうに、默つて砂の上に蹲くまつて

居る。康頼は、先刻から左の手で手枕をして、横になつて居る。

康頼も、成經も、俊寛も一年間の、孤島生活で、その心も氣力も、スッカリ叩きのめされてしまつて居た。最初、彼等は革命の失敗者として、清盛を罵しり平家の一門を呪ひ、陰謀の周密でなかつたことを後悔し、悲憤慷慨に夜を徹することが多かつた。が、一月二月經つ裡に、さうした悲憤慷慨が、結局鬼界ケ島の荒磯に打ち寄する波と同じに、無意味な繰返しに過ぎない事に氣が付くと、もう誰もさうした事を口にする勇氣を無くして居た。その上に、都會人である彼等に、孤島生活の慘苦が、ヒシ／＼と迫つて來た。毎日のやうに、水に浸した乾飯や、生乾きの魚肉のあぶつたものなどを口にする苦しみが、骨身に徹えて來た。彼等は、さうした苦痛を壓倒するやうな積極的な心持は、少しも動かない

彼等は苦痛が重れは重るほど悄氣切つてしまひ、飯を喰ふ外は、天氣のよい日は、海濱の砂地で、雨の降る日は、仕方なくその狹い小屋の中で、たゞ溜息と愚痴との裡に、一日々々を過して居た。その裡に、三人とも烈しい不眠症に襲はれた。その裡では、神經質の康頼が、一番ヒドかつた。彼は、夜中眠られない癖が、付いてしまつたので、晝間よく假睡をする。先刻からも、横になつたかと思ふと、もうかすかないびきを立てゝ居る。長い間、剃刀を當てない髯が、ぼう／＼としてその痩せこけた頰を掩ふて居る。その上、褪せた唇の下端には、涎が今にも落ちさうに湛へて居る。

成經は、成經で、妖怪に憑かれたやうな、キョトンとした眼附で、晴れた大空を、當度もなく見ながら、溜息ばかり吐いて居る。俊寛は、一緒に陰謀を企てた連中の、かうした辛抱のない、不甲斐ない容子を見て居ると、自分自身までが情なくなる。陰謀を企てた人間として、今少しは男らしい、毅然とした所があつてもいゝ。刑罰の下に、かうまで、へこたれてしまはなくつてもいゝと思ふ。彼は、成經がもう一度、溜息を吐くと、それを機會に、たしなめてやらうと思ひながら、ぢつと成經の顏を見据えて居たが、成經はそれと悟つた譯でもあるまいが、クルリと俊寛の方へ、背を向ける

と、海の方へ向いたまゝ、これもしばし、まどろむ積だらう。默り込んでしまつた。

二人の友達が默つてしまふと、俊寛の心も張合が拔けたやうに、淡ひ悲しみに囚はれる。彼にも、島の生活が、堪らなく苦痛になつて來た。都へ歸りたい。さうした渴に似た感情で、胸を責められる。その上、成經康賴等の心持と、自分との心持、日に增しこぢれて來ることを感じた。人間が、三人蒐まるときは、乾度その中の二人丈が、仲よくなり、一人丈は孤立する傾きのあるものだが、今の場合には、それが殊に烈しかつた。康賴も、成經も、彼等の生存が、苦しくなればなるほど、愚痴になつて來る。そして、過ぎ去つた謀反の企てを心の裡で後悔し始める。人間は如何なる場合でも、自分を怨まないで、他人を怨む。そして、陰謀の發頭人であつた西光を怨む。引いては西光と一番親しかつた俊寛を怨む。彼等を、かうした絕海の孤島で、悶えさせるのは、淸盛の責任でなくして、本當は西光が、陰謀を發頭した爲であるかのやうな事を云ふ。西光の人格や陰謀の動機を、よく理解し居る俊寛には、彼等のさうした愚痴が、癪に觸つて仕方がない。彼の神經は、日に增しイラ〱する。さうして、何かの機みから、つひ氣色ばんで、云ひ爭ふ。二人は俊寛を煙たく思ひ始める。そして、剛腹な俊寛に一致して、反抗の氣勢を示す。そして、お互に心持を荒ませ合ふ。

此の頃、俊寛はよく、二人が意識して、自分を疎外して居るのを感ずる。硫黃を採りに行く時でも、海藻を採りに行く時でも、よく二人限で行つてしまふ。その上、三人で居るときでも、二人はよく顏を寄せ合つて、ヒソ〱話を始める。そんなとき、俊寛は堪らない寂寥と、不快を感ずる。三人限の生活では、他の二人に背かれると云ふことは、人間全體から背かれると云ふことゝ、同じことだつた。俊寛は、さうした心苦しさを免かれようとして、自分一人で、行動して見やうかと考へた。が、一日自分一人で、離れて居ると、烈しい寂びしさに襲はれる。そして、意氣地なく成經と康賴との所へ歸つて來る、そして再び、不快な感情の裡に、心を傷けながら生活して行く。

今朝も、鹿ケ谷の會合の發頭人は、誰だと云ふことで、俊寛は成經と、可なり烈しい口論をした。成經は眞の發頭人は、西光だと云つた。だから、西光丈は平相國が、直ぐに斬つたではないかと云つた。俊寛は、いな御身の父の成親卿こそ、眞の發頭人である。清盛が、御身の父を都で、失はなかつたのは、藤氏一門の考へんやうを、憚かつたからである。その證據には、備前へ流されると、直ぐ人知れず殺させたではないかと云つた。父のことを、惡しさまに云はれたので日頃は言葉少い成經も、烈火のやうに激して、俊寛と一刻近くも、烈しく云ひ爭つた。二人が、口論に疲れて、傷けられた胸を懷きながら、默つてしまふまで。

成經と、康頼とが、横になつて居るいぎたない容子を見て居ると、俊寛は意地にも、その眞似をする氣にはなれなかつた。彼は、胸の裡の、寂しさとムシヤクシヤした霽懷とを洩す所のないまゝに、腕組をして、ぢつと考へる。すると、何時もの癖であるやうに、妻の松の前や、娘の鶴の前の姿が、まぼろしのやうに、胸の中に浮んで來る。それから、京極の宿所の釣殿や、鹿ケ谷の山莊の泉石のたゝずまゐなどが、髣髴として想ひ出される。都會生活に對するあこがれが、心を爛らせる。澤山使つて居た下僕の一人でもが、今侍いて居て呉れゝばなどと思ふ。

俊寛が、かうした回想に耽つて居るとき、寢入つて居たと思つた成經が、急に立ち上つた。彼は、悲鳴とも歡聲とも付かない聲を出したかと思ふと、砂丘を海の方へ一散に馳け降りた。

彼は、波打際に立つと、躍るやうに兩手を打ち振つた。

「判官どの。白帆にて候ぞ。白帆にて候ぞ。」

さう云つて、康頼に知らせると、又悲鳴のやうな聲を揚げながら、濱邊を北へ北へと走しつた。

康頼も、あはたゞしい聲に直ぐ起き上つた。俊寛も、白帆だと聞くと、直ぐ立ち上らずには居られなかつたが。白帆

が見えると云つて、成經が濱邊を走しつたことは、これ迄に二三度あつた。彼はよく、白雲の影を、白帆と間違へたり、波間に浮ぶ白鳥から、白帆の幻影を見た。

康頼は、遂に直ぐ後に續いて走しつたが、俊寛は又かと思ひながら、無言のまゝ跡から、隨いて行つた。成經と康賴とは砂濱を根よく走りつゞけた。俊寛も、彼等の熱心な走り方を見ると、自分の足並が、何時の間にか、忙ぎ足になるのを何うともする事が出來なかつた。

その裡に、疑深い俊寛の眸にも、遥か彼方の水平線に、浪に浮んで居る白地鳥のやうに、白い帆を一杯に張りながら、折柄の微風に、動くともなく近づい來る船の姿が、映らずには居なかつた。

俊寛も、狂氣のやうに走り出した。三人は半町ばかり隔りながら、懸命に走しつた。お互に立ち止つて、待ち合せる餘裕などはなかつた。走しるに從つて、白帆もだん／＼近づいて來るのだつた。それは、九州から硫黄を貰ひに來る思のやうな、小さい船ではなかつた。

成經は、感激のために、泣きながら走しつて居る。康頼もさうだつた。俊寛も、胸が著くるしくなつて眼頭が、妙にむづかゆくなつて來るのを感じた。見ると、船の舳には、一流の赤旗が、へんぽんと飜つて居る。平家の兵船だと思ふと、その船に赦免の使者が、乘つて居ることが、三人に直ぐ感ぜられた。

船は、流人達の姿を見ると、舳を岸の方へ向けて、帆をひた／＼と降し始めた。やがて、船は岸から、三反とない沖へ碇を投げる。三人は、岸邊に立ちながら、聲を合せて欣びの聲を揚げた。遂に、俊寛をも除外しないで、三人は、手を取り合つたまゝ聲を揚げて、泣き始めたのである。

二

船は、流人達の期待に背かず、清盛からの赦免の使者丹左衛門文基康を乗せて居た。が、基康の持つて居た清盛の教書は、成經と康頼とを、天國へ持ち上げると共に、俊寛を地獄の底へ押し陷した。俊寛は、狂氣のやうに、その教書を基康の手から奪ひ取つて、血走しる眼を注いだけれども、其處には俊寛とも僧都とも書いてはなかつた。俊寛は、激昂の餘り、最初は使者を罵しつた。俊寛の名が洩れたのは、使者の怠慢であると云ひ募つた。が、基康が、その鋒鋩を避けて、相手にしないので、今度は自分を捨てゝ行かうとする成經と康頼とに喰つてかゝつた。そして、成經と康頼とを卑怯者であり、裏切者であると罵倒した。成經が、それに堪へかねて、一言二言言葉を返すと、俊寛は直ぐ、カッとなつて、成經に掴みかゝらうとして、基康の手の者に、取ひしがれた。

それから後、幾時間かの間の俊寛の憤と悲しみと、恥とは例へるものもなかつた。彼は、目の前で、成經と康頼とがその垢じみた衣類を脱ぎ捨てゝ、都に在る縁者から、贈られた眞新しい衣類に着換えるのを見た。嬉し涙を滾しながら、親しい者からの消息を、讀んで居るのを見た。が、重科を赦免せられない俊寛には、一通の玉章をさへ受くることが許されて居なかつた。俊寛は、砂を嚙み、土を掻きむしりながら、泣いた。

船は、飲料水と野菜とを積み込み、成經と康頼とを收めると、手を合して乗船を哀願する俊寛を、濱邊に押し倒したまゝ、岸を放れた。そして、俊寛をもつと苦しめる爲の故意からするやうに、三反ばかりの沖合に碇を投げて、其處で一夜を明すのであつた。

俊寛は、終夜濱邊に立つて、叫びつゞけた。最初は罵り、中途では哀願し、最後には、タワイもなく泣き叫んだ。

「判官どの。のう！、今一言申し殘せしことの候ぞ。小舟なりとも寄せ候へ」

「基康どの、僧都をあはれと思召さば、せめて九國の端までも、送り屆け得させ給へ」

が、俊寛の聲は、渚を吹く海風に吹き拂はれて、船へは少しも聞えないのだらう。闇の中に、一の灯もなく黑く纜つて居る船からは、應と云ふ一聲さへなかつた。

夜が更くるに付け、俊寛の聲は、かすれてしまつた。おしまひには、傷ついた海鳥が泣くやうな、かすかな悲鳴になつてしまつた。が、どんなに聲が、かすれても、根よく叫び續けた。

その裡に、夜はほの〴〵と明けて行つた。朝日が渺々たる波の彼方に昇ると、船はから〴〵と碇を揚げ、帆を朝風にはた〴〵と靡かせながら捲き上げた。俊寛は、最後の叫び聲を揚げようとしたけれども、聲は少しも咽喉から出なかつた。船の上には、右往左往する水夫(かこ)どもの姿が見える丈で、成經康頼はもとより、基康も姿を現はさない。

見る間に船は、滑るやうに動き出した。もう、乘船の望みは、少しも殘つては居なかつたが、それでも俊寛は船を追はずには居られなかつた。船は、島に添ひながら、北へ北へと走しる。俊寛は、それを狂人のやうにこけつ、まろびつ追つた。が、三十町も走しると、其處は島の北端である。其處からは、翼ある身に非されば追かけることが出來ない。折から、風は吹き募つた。船の帆は、張り裂けるやうに、風を孕んだ。船は見る〳〵裡に小さくなつて行く。俊寛は、岸壁の上に立ちながら、身を悶えた。もう聲は、少しも出ない。たゞ、獸のやうに、岸壁の上で狂ひ廻る丈だつた。

船は、俊寛の苦悶などには、何の容捨もなく、半刻も絶たない裡に、水平線に漂ふ白雲の裡に、紛れ込んでしまつた。船の姿を見失ふたとき、俊寛は絶望のために、昏倒した。昨夜來叫びつゞけた疲勞が、一時に發したのだらう、其儘茫として眠り續けた。

彼は、その岸壁の上で、昏倒したまゝ、何時間眠つて居たかは、自分にも分らなかつた。一度目覺めたときは、夜で

あつた。彼は、自分の頭の上の大空が、大半は暗い雲に掩はれて、そのわづかな切れ目から、二三の星が瞬いて居るのを見た。彼は烈しい渇と、全身を砕くやうな疼痛を感じた。

彼は、水を飲みたいと思ひながら、周圍を見廻した。が、岸壁の背後は、直ぐ磽确な山になつて居るらしく、小川とか泉とかゞ、ありさうにも思えなかつた。それでも、烈しい渇は、彼を一刻も、ぢつとして居させなかつた。彼は、寢て居た岩から、身を剝がすやうにして立ち上つた。立ち上るとき、身體のもろ〳〵の關節が、音を立てゝ軋しるやうに思つた。彼は、それでも這ふやうにして、岸壁を降りることが出來た。彼は晝間（それは昨日であるのか一昨日であるのか分らなかつたが）夢中で、走しつた道を、二町ばかり引返した。彼は、晝間其處を走しつたとき、榕樹が五六本生えて居て、其の根に危く躓きさうになつたのを覺えて居た。彼の濁つてしまつて居る頭の中でも、榕樹の周圍を探せば水があるかも知れないと云ふ考が、ぼんやり浮んで居た。

が、榕樹の生えて居る周圍を、海の水あかりで、二三度探して廻つて見たけれども、其處から一面に、唐竹が蜜生して居る丈で、水らしいものは、少しも見當らない。俊寛は、その捜索に殘つて居た精力を費ひ盡して、崩づれるやうに地上へ横はると、再び昏々として眠り始めた。

二度目に目が覺めたとき、それは朝だつた。疲れ萎びて居る俊寛の頰にも、朝の微風が快かつた。彼が、目を開くと、自分の身體の上に茂り重つて居る蒼々たる榕樹の梢を洩れた、淸々しい朝の日光が、美しい幾條の縞となつて、自分の身體に注いで居るのを見た。適に、暫らくの間は、淨らかな氣持がした。が、直ぐ二三日來の出來事が、惡夢のやうに歸つて來た。そして烈しい渇を感じたので、彼はよう〳〵と立ち上つた。それでも、淼渺と無邊際に廣がつて居る海を、未練にもう一度見直さずには、居られなかつた。が、群青色にはう〳〵と續いて居る太洋の上には、信天翁の一

群が、飛び交ふて居る外は、何物も見えない。成經や康賴を乘せた船が、今まで視野の中に止まつて居る筈はなかつた。

彼が再び地上に身を投げたとき、身を焼くやうな渴と餓とが、烈しく身に迫つて來た。

彼は、赦免の船が來て以來、何も喰つて居ないのだつた。基康は遉に彼をあはれがつて、船の中で炊いだ飯を持つて來て呉れたのであるが、憤恚の火に心を焦して居た俊寛は、その久し振の珍味にも目を呉れないで、水夫の手から、それを地上に叩き落した。むろん、今でも自分の小屋まで歸れば、乾飯も澤山殘つて居る。が、俊寛には一里に近い道を歩く勇氣などは、殘つて居なかつた。

烈しい渴と餓とは、彼の心を荒ませ、自殺の心を起させた。彼は、目の前の海に身を投げることを考へた。そうして、何故基康の船が居る裡に、死なゝかつたかを後悔した。基康や、あの裏切者の成經や、康賴の目前で、死んだならば少しは腹癒せにもなるのだつたと思つた。今死んでは犬死であると思つた。が、死なうと云ふ心は變らなかつた。歸洛の望を永久に絶たれながら、暮して行くことは、彼には堪へられなかつた。二十間ばかり向ふの岸に、一つの岩があり、その下の水が、殊更に深いやうに見えた。

彼が、決心して立ち上つたとき、彼はふと水の匂ひを嗅いだ。それは、眞水の匂であつた。極度に渴して居る彼の鼻は、犬のやうに鋭くなつて居るのだつた。彼は、水の匂ひを嗅ぐと、その方角へ本能的に走り出した。唐竹の林の中を、彼は獸のやうに、潜つた。十間ばかり潜つたとき、その林が盡きて、其處から岩山が聳えて居た。

ふと、其處に、大きい岩を背後にして、此の島には、珍らしい椰子の樹が、十本ばかり生えて居るのを見た。そしてその椰子に掩はれた鳶色の岩から、一條の水が、銀の絲のやうに滴つて、それが椰子の根元で、小さい泉になつて居るのを見た。水は淺いながらに、澄み切つて、沈んで居る木の葉さへ、一々に數へられた。渴し切つて居る俊寛は、犬の

やうに、つくばつて、その冷めたい水を思ひ切り、ガブ〳〵飲んだ。それが、何と云ふ快さであつたゞらう。それは、彼が鹿ケ谷の山莊で飲んだ如何なる美酒にも勝つて居た。彼が、その清冽な水を味つて居る間は、淸盛に對する怨みも、島にたゞ一人殘された悲しみも、忘れ果てたやうに淸々しい氣持だつた。彼は、蘇つたやうな氣持になつて、立ち上つた。そして、椰子の梢を見上げた。すると、梢に大きい實が二つばかり生つて居るのを見た。俊寛は、疲勞を忘れて、猿のやうによぢ昇つた。それを叩き落すと、傍の岩で、打ち碎き、思ふさま貪り喰つた。

彼は、生れて以來、これほどの有難さと、これほどのうまさとで、飲食したことはなかつた。彼は、椰子の實の汁を吸つて居ると、自分の今までの生活が、夢のやうに淡く薄れて行くのを感じた。淸盛、平家の一門丹波少將、平判官、丹左衞門丈、そんな名前や、そんな名前に對する自分の感情が、この口の中の凡てを、いな心の中の凡てを、溶かしてしまふやうな木の實の味に比べて、全く空虛な、つまらないもののやうな、氣がし始めた。

俊寛は、口の中に殘る快い感覺を、樂みながら、泉のほとりの蒼草の上に寢た。そして、過去の自分の生活のいろ〳〵な相を、心の中に想ひ出して見た。都に於けるいろ〳〵な暗鬪、陷擠、戰爭、權勢の爭奪。それから來る嫉妬、反感、憎惡、さう云ふ感情の動くまゝに、狂奔して居た自分の淺ましさが、しみじみ解つたやうな氣がした。船を追つて、狂奔した昨日の自分までが、餓鬼のやうにあさましい氣がした。煩惱を起す種のない、此の絶海の孤島こそ、自分に取つて、唯一の淨土ではあるまいか。康賴や、成經が傍に居たゝめに、都の生活に對する、いな人生に對する執着が切れなかつたのだ。此の島を、假のすみかと思へばこそ、琉黄ケ獄に立つ煙さへ、焦熱地獄に續くもののやうに、ものうく思はれたのだ。玆こそ、つひのすみかだ。あらゆる煩惱と執着とを斷つて、眞如の生活に入る道場だ。さう思ひ返すと、俊寛は生れ變つたやうな、ほがらかな氣持がした。

ふと、寝がへりを打つと、直ぐ自分の鼻の先に、撫子に似た眞赤な花が咲いて居た。それは、都人の彼には、名も知れない花だつた。が、その花の眞紅の花瓣が、何と云ふ美しさと、淨らかさを持つて居たことだらう。その花を、ぢつと見詰めて居ると、人間の凡てから知られないで、美しく香つて居る、かうした名も知れない花の生活と云つたやうなものが考へられた。すると、孤島の流人である自分の生活でさへ、むげに生甲斐のないものだとは思はれなくなつた。彼は、自殺しようとした自分の心の淺墓さを恥ぢた。彼の心には、今新しい力が湧いた。彼は勇躍して、立ち上つた。

そして、海岸へ走り出た。平素は、魂も眩むやうに、ものうく思はれた太洋が、何と美しく輝いて居たことだらう。充分昇り切つた朝の太陽の下に、紺碧の潮が、後から〳〵湧くやうに躍つて居た。海に接して居る砂濱は、金色に輝き、飛び交ふて居る信天翁の翼から、銀の光を發するかと疑はれ、平素は、見ることを厭つて居た硫黄ヶ丘に立つ煙さへ、今朝は澄み渡つた朝空に、琥珀色に優にやさしく棚引いて居る。

俊寛は、童のやうなのびやかな心になりながら、兩手を差擴げ、童のやうに叫びながら自分の小屋へ、馳け戻つた。

三

島に來て以來一年の間、俊寛の生活は、成經や康頼と昔物語から、謀反の話をして、おしまひには、お互の境遇を歎き合ふか、でなければ、砂丘の上などに昇りながら、浪路遥かな都を偲んで、溜息を吐きながら、一日を茫然と過してしまふのであつたが、俊寛はさうした生活を、根本から改めようと決心した。

彼は、努めて都のことを考へまいとした。從つて、成經や康頼のことを、考へまいとした。彼は、成經や康頼が、親切に殘して置いて呉れた狩衣や刺貫を、海中へ取り捨てた。長い生活の間には、衣類に困るのは、解り切つて居た。が、困まつたら、土人のやうに木の皮を身に纏ふても差支ないと考へた。

その上、三人で居た間は、肥前の國加瀬の莊にある成經の舅から平家の眼を忍んでの仕送りで、ほそ〳〵ながら、朝夕の食に事を缺かなかつた。その爲でもあるが、三人は大宮人の習慣を持續けて、爲すこともなく、毎日暮して居た。俊寛は、さうした生活を改め、自分で漁りし、自分で獵りし、自分で耕すことを考へた。

彼は、さう云ふ生活に居る第一歩として、成經や康賴の記憶が、付き纏つて居る今までの小屋を燒き捨て、自分で發見したあの泉の畔に、新しい家を自分で建てることを考へた。

彼は、その日から、泉に近い山林へは入つて、樹を伐つた。彼が、持つて居る道具は、一挺の小さい鉞と二本の小太刀であつた。周圍が一尺もある樹は、伐り倒すのに、四半刻近くかゝつた。が、彼が額に汗を流しながら、その幹に鉞を打込むとき、彼は名狀しがたい壯快な氣持がする。淸盛に對する怨などは、さうした瞬間、泡のやうに彼の頭から消え去つて居る。そして、その樹が鉞の裁落下に依つて、力盡き、地を揺がせて倒れるとき、俊寛の燒けた顏には、會心の微笑が浮ぶ。彼は、さうして伐り倒した樹の枝を拂ひ、一本宛やつとの思ひで、泉の畔へ引いて來る。彼は、その粗な丸太を地面に立て、柱とした。小太刀や鉞で、穴を堀ることは可なり骨が折れた。殊に、さう云ふ仕事に用ゐることで、是から先の生活に、どんな必要であるかも知れない道具の、破損することを恐れねばならなかつた。屋根は、唐竹で葺いた。此島の大部分を掩ふて居る唐竹は、屋根を葺くのには、藁よりも、遙に秀れて居た。樹の枝を、壁に幾つも並べて壁にした。そして、近所から粘い土を見出して、その上から塗抹した。彼は、此の新しい家を建てるために、二十日ばかりも懸つた。が、彼は自分の住む家を自分で、建てることが、どんなに樂しみの仕事であるかゞ分つた。その間、淸盛に對する怨や、妻子に對する戀しさが、燒くやうに胸に迫ることがある。そんなとき、彼は常よりも、二倍も三倍も烈しく働く。無論、島に夕暮が來て、日が荒寥たる硫黄岳の彼方に落ち、唐竹の林に、風が騷ぎ、名も知れな

い海鳥が鳴くときなど、灯もない小屋の中に蹲まつて居る俊寛に、身を裂くやうな寂しさが、襲つて來る。が、晝間の烈しい勞働が産む疲勞は、直ぐ彼を、さうした寂しさから救つて呉れ、そして彼に安らかな眠を與へて呉れる。

新しい小屋が出來たとき、彼はその次ぎには、食物のことを考へた。三人で、喰ひ殘した乾飯は、まだ二月三月は、俊寛一人を支へることが出來た。が、成經が居なくなつた今は、成經の舅から、仕送りがある筈はなかつた。今は、自分で食物を耕し作るより外はなかつた。俊寛は、新しい小屋から、二町ばかり隔つた處に、やゝ潤けた土地があり、硫黄ケ岳に遠いために、硫黄の氣が少しもないことを知つた。彼は、其處を冬の間に開墾し、春が來れば麥を植えようと思つた。が、差し當つては、漁りと獵りをする外に、食料を得る道はなかつた。

彼は、堅牢な唐竹を伐つて、それに蔓を張つて弓にした。矢は、細身の唐竹を用ゐ、矢尻は鋭い魚骨を用ゐた。本土ならばかうした矢先にかゝる鳥は、一羽も居なかつただらうが。此島に住んで居る、里鳩、唐鳩、赤髭、青鷺などは、俊寛の近づくのを少しも恐れなかつた。半日山や海岸を馳け廻ると、運び切れないほどの獲物があつた。

今までの彼は、狩はともかく、漁りはむげに卑しいことだと思つて居た。只管に、都會生活に憧れて居た彼は、さうしたことを眞似て見ようと云ふ氣は起らなかつた。が、現在の彼は、土人に習つて漁りをして見ようと考へた。その頃の島は、鰻を取る季節であつた。永良部鰻は、秋から冬にかけて、島の海岸の暖い海水を慕つて來て、其處へ卵を産むのであつた。土人は、海水の中に、身を浸して、それを手捕りにした。俊寛も、それに習つた。最初は、幾度摑んでも摑み損ねた。土人は、あやしい言葉で、何か云ひながら、俊寛を嗤つた。が、俊寛は屈しなかつた。三日ばかりも、根よく續けて試みて居る中に、魯鈍で、一番不幸な鰻が、俊寛の手にかゝる。五日と經ち、七日と經つ裡に、どんな敏捷な鰻でも、俊寛の手から、逃れることが出來なくなつて來る。彼は、何十疋と獲た鰻のアゴに、蔓を通し、それを肩に

擔ぐ。鰹が、肩に喰ひ入るやうに重い。が、自分が獲つたのであると思ふと、一疋だつて、捨てる氣はしない。小屋へ歸つてから、彼は小太刀で、腹を割き、腸を去つてから、それを日向へ乾す。半月ばかり、鰹を取つて居る裡に、小屋の周圍は乾した鰹で一杯になる。その裡に、鰹の取れる季節は過ぎ去つてしまふ。そして、冬が來た。冬の間、俊寛は畑を作ることに、一生懸命になつた。彼は、先づ畑の爲に、選定した彼の肥潤な土地へ、火を放つた。そして、雜草や灌木を燒き拂つた。それから、燒き殘つた木の根を堀返し、岩や小石を取去つた。彼の鉞は、今度は鍬の用をした。道具がないために、彼の仕事は捗どらなかつた。土人の所に行けば、鍬に似たものがあるのを知つて居た。が、報酬なしに土人が、何物をも借さないことを知つて居た。道具のないために、彼の仕事は、捗どらなかつた。が、彼の精根は、さうしたものに、凡て打ち勝つた。冬の終る頃には、一町近い畑が、彼の力に依つて、拓かれた。彼に、今最も必要なことは、其處に蒔かねばならない麥の種であつた。彼は、麥の種を土人が容易に手放さないのを知つて居た。彼は、それと交易するために、自分の持物の中で、土人の欲しがりさうなものを、いろ〳〵考へて見た。土人の欲しがりさうなものは、自分の生活にも、缺ぐべからざるものだつた。俊寛は、ふと鳥羽で別れるとき、妻の松の前から、形見に贈られた素絹の小袖を、今も尚そのまゝに、持つて居るのに氣が付いた。それは、現在の彼に取つて、過去の生活に對する唯一の記念物だつた。彼は、一晩考へた末、此の過去の生活に對する記念物を、現在の生活の必須品に換へることを決心した。彼は、いとしい妻の形見を、一袋の麥に換へた。そして、それを彼が自分で拓いた土地に、蒔いた。

自分で拓いた土地に、自分の手で蒔いた種の生えるのを見ることは、人間の喜びの中では、一番素破らしいものであることを、俊寛は悟つた。ほのかな、麥の芽が磽确な地殼から、オソ〳〵と頭を擡げるのを見たとき、俊寛は嬉し涙に咽んだ。彼は跪いて、目に見えぬ何物かに、心からの感謝を捧げたかつた。

鬼界ヶ嶋にも春は廻つて來る。嶋の周圍の海が、薄紫に輝き始める。そして、全島には、椿の花が一面に咲く。信天翁が、一日一日多くなつて、硫黄ヶ丘の中腹などには、雪が降つたやうに、集まつて居る。

生れて初ての自然生活は、俊寛を見違へるやうな立派な體格にした。生白かつた頬は、褐色に焼けて輝いた。去年着續けて居た僧侶の平服は、いろ／＼のことをするのに、不便なので、思ひ切つて、それを脱ぎ捨て、思ひ切つて、皮かつらを身に纒つた。生年三十四歳、その壯年の肉體には、原始人らしい凡ての活力が現れ出した。彼は、生え伸びた髮を無雜作に蔓で束ねた。六尺豐かの身體は、鬼のやうな土人と比べてさへ、一際立ち勝つて見えた。

彼は、時々自分の顏を、水鏡で映して見る。が、その變りはてた姿を、あさましいなどと思つたことはない。むろん現在の彼には、妻子が時々思ひ出される丈で、榮盛の事などは、念頭になかつた。平家が、千里の彼方で、奢つて居ようが居まいが、そんなことは、孰ちらでもよかつた。それよりも彼は、自分が植え付けた麥が、成長するのが、一日千秋の思で待たれた。

麥の畑に生ふる雜草を取ることは、彼の半日の仕事として、充分だつた。が、午後からは海岸へ出て、毎日のやうに鰤を釣つた。絲は太い蔓を用ゐ、釣は獸の骨で作つた。三四尺の大魚は、釣を入れると同時に、無雜作に喰ひ付く。それを引き上げるのが、どんなに壯快であつたゞらう。それは、魚と人間との格鬪であつた。俊寛は危く海の中へ、引きづり込まれさうになる。それを、岩角へ足を、ふんばつて、ぐつと持ち堪へる。魚はそのかゝつた釣を脱さうとして、波間で白い腹をかへしながら、身を悶える。さうした格鬪が、半刻近くもつゞく。その裡に、魚の力が弱つて來る。それでも尚、身體を烈しく捻ぢ曲げながら、水面に引き上げられる。

此の豪快な漁釣が、此頃の俊寛に取つては、仕事でもあり、娯樂でもあつた。四尺を越す大魚を、三四疋繋いで、砂

の上を小屋まで引きずつて歸るのは苦しい仕事であつた。が、それを炙ぶると、新鮮な肉からは、香ばしい匂が立ち俊寛の健啖な食慾を、いやが上にも刺戟する。

彼は、毎日のやうに、近所の海角に出て、鰤を釣つた。彼は、その魚から油を取つて、灯火の油にしようと考へたのである。

鰤は、群を成して、島の周圍を廻つて居た。俊寛は、その群を追ふて、自分の小屋から、一里近くも遠方へ出ることもあつた。

その日も、俊寛は、鰤を釣るために、硫黄ヶ岳の直ぐ麓の海岸まで行つた。其處からは、土人の部落が、半里とも隔たつて、居なかつた。土人達は、本土の人間を恐れ嫌つた。三人で居たときは、土人達は三人の姿を見ると、遠方から避けた。俊寛一人になつてからは、恐れはしなかつた。が、一種氣味の惡いもの〻やうに、決して近づいては來なかつた。俊寛も、なるべく土人と交渉することを避けた。土人の部落では、出來る丈近寄らないやうにした。が、その日は、近所の海岸には、鰤の姿が見えないため、それを探しながら、到頭土人の部落近くまで、來てしまつた。

彼の釣に、そこの海岸で、今まで上つた事のないやうな大魚がか〻つた。それは、鰤としても珍らしい五尺を超える大魚だつた。彼は、その岩角で一刻近くも、それを釣り上ぐるために、奮鬪した。彼は魚が逸しようとするときには、それに逆はないやうに、手の中の菱を延ばした。もう延ばすべき菱が、無くなると、菱は緊張して、水を切りながらキイ／＼鳴つた。

彼は、魚が頭を自分の方へ向けたと知ると、その機を逸しないで、菱を手早く手許へ操り寄せる。一間ばかりの水底まで來た魚は、奇怪な姿を見せながら、狂ひ廻る。が、水際までは決して上らない。そして、俊寛の手が、少しでも緩

むと矢のやうに、沖へ逸走する。彼は蔓を延ばしたり、縮めたりすることに依つて、水中の魚を疲らせようとする。半裸體のまゝ岩頭に立つて、活動する。良寛の姿は、目ざましいものであつた。

到頭、良寛は、その五尺を越ゆる大魚を征服してしまふ。岩の上に釣り上げられた後も、跳躍して海に入らうとする魚の頭を、良寛は傍の大石で、一打ちする。魚は尾や鰭を顫はせながら、死んでしまふ。良寛は、その二十貫を越える大魚の腹に、足をかけながら、初めて會心の微笑を洩す。

その時良寛はふと、人の氣勢(けはひ)を感じた。魚を釣るために、夢中になつて居た良寛は、氣が付いて周圍を見廻した。見ると、何時の間に近寄つたのだらう。一人の土人の少女が、十間ばかりの後方に立ちながら、良寛の姿を、ぢつと見詰めて居るのだつた。恐らく、良寛の勇ましい活躍を先刻から見て居たのだらう。

年は、十六七であつたらう。が、背丈はすくすくと延びて、都の少女などには、見られないやうな高さに達して居た腰の周圍に、木の皮を綴つた衣で、よく發達した胸部を惜し氣もなく見せて居た。髪は櫛(くしけづ)らず、蔓草をさねかづらにして居た。色は、黒かつたが、瞳が黒く人なつこく光つて居た。

長い間、女性と接したことのない良寛は、この少女を一目見ると、自分の裸體が、氣恥しくなつて、思はず顔が赤くなつた。が、相手が少しの猜疑もなく、無邪氣に自分を凝視して居るのを見ると、良寛はそれに答へるやうに、輕い微笑を見せずには居られなかつた。少女は、微笑はしなかつたが、その物珍らしげに瞠つて居る眼に、好意を示す表情が動いたことは確かだつた。良寛は、久し振に人間から、好意のある表情を見せられたので、胸がきゆつとこみ上げて來るやうに感じた。

彼は、再び釣を海中に投じた。魚は、直ぐ喰い付いた。その魚を引き上ぐる間、少女は熱心に見物して居る。そして

第三番目の釣を投じても、少女は去らない。俊寛は、少女の方を振向きながら時々、微笑を見せる。少女は、硫黄を採るために來たのだらう。が、硫黄を入れる筥を傍へ置き捨てたまゝ、何時までも俊寛が鰤を釣上ぐるのを見て居る。

到頭夕暮が來た。俊寛は、釣上げた魚を、引きずりながら、自分の小屋への道を辿る。一町ばかり歩いて、後を振返つた。少女も家路に、向はうとして立ち上つて居る。が、歩き出さないで、俊寛の方を、ぢつと見詰めて居る。

俊寛は、その日から自分の生活に、新しい希望が湧いたことに氣が付く。彼は、その翌日も同じ場所に行つた。すると、昨日の少女が、昨日彼女が蹲くまつて居たのと同じ場所に、蹲まつて居るのを見る。俊寛の胸には、湧き上るやうな欣びが、感ぜられる。今日こそ、昨日よりも、もつと大きい鰤を釣り上げて、少女に見せてやらうと思ふ。が、昨夜の間に、鰤は此海岸を離れたと見え、幾何釣を投げても、手答がない。

彼はいら／＼して、幾度も／＼釣を投げ直す。が、幾度投げ直しても、手答がない。彼は、少女が退屈して、立ち上りはしないかと思ふといら／＼して來る。が、少女はぢつと蹲まつたまゝ身動きもしない。俊寛は、外の釣場所を探らうと思ふけれども、少女が若し随いて來なからうと思ふと、此の場所を動く氣はしない。その裡に、俊寛は疲れて、釣を水中に投じたまゝ、手を休めてしまふ。

その時に、突然彼の少女が呼び始めた。俊寛は、最初彼女が、何か自分に話しかけて居るのではないかと思つた。が少女は天の一方を見詰めながら叫んで居る。その裡に、俊寛はその叫び聲の中に、ある韻律があるのに氣が付く。

そして、此少女が歌をうたつて居るのだと云ふことが分る。それは朗詠や今様などとは違つて、もつと急調な烈しい調子である。が、その聽き馴れない調子、意味の全く分らない詞の中に、此の少女の迫つた感情が、漲つて居るのを俊寛は感ぜずには居られなかつた。

俊寛は、やるせなく此少女が、いとしくなる。歌ひ終ると、少女は俊寛の方へ、その黒い瞳の一瞥を投げる。俊寛は堪らなくなつて立ち上り、少女の方へ進む。すると、今まで蹲まつて居た少女は、急に立ち上つて五六間向ふへ逃げるが、其處に立ち止まつたまゝ、それ以上は逃げようとはしない。俊寛は、微笑をしながら、手招きする。が、少女は微笑を以て、それに答へるけれども、決して近寄らない。俊寛は、じれて元の場所へ歸る。すると、少女も元の場所へ歸つて蹲まる。そして、時々思ひ出したやうに歌ひつゞける。

その翌日も、俊寛は同じ場所に行つた。その翌々日も、俊寛は同じ場所へ行つた。もう鰤を釣る目的ではなかつた。幾日も々々も、さうした情景が續いた後、少女は到頭その牝鹿のやうに、しなやかな身體を、俊寛の强い双腕に委してしまつた。

俊寛は、もう孤獨ではなかつた。彼の少女は、間もなく俊寛のために、從順な愛すべき妻となつた。無論、土人達は彼等の少女を拉したのを知ると、大擧して俊寛の小屋を襲つて來た。廿人を越す大勢に對して、少しも怯む所なく、鉞を以て、立ち向つた俊寛の勇ましい姿は、少女の俊寛に對する愛情を増すのに、充分であつた。が、恐しい悲劇が始まらうとする刹那、少女はいちはやく、土人の頭らしい老人の前に身を投じた。それは、少女の父であるらしかつた。老人は、少女から何事かを聽くと、怒り罵しる若者達を制して、事もなく引き上げて行つた。

その事件があつた後は、俊寛の家庭には、幸福と平和の外は、何物も襲つて來なかつた。

手助けの出來た俊寛は、自分達の生活を、いろ／＼な點で、よくして行つた。都會生活の經驗のよい所丈を、妻に敎へた。無智ではあつたが、悧潑な彼女は俊寛のいふことを理解して、少しづゝ家庭生活を愉快にして行つた。

結婚してから、直ぐ俊寛は、妻に大和言葉を敎へ始めた。三月經ち四月經つ裡には、日常の會話には、事を缺かなか

つた。蔓草のさねかづらをした妻が、閑雅な都言葉を口にすることは、俊寛に取つて、此上もない樂しみであつた。言葉を、一通覺えてしまふと、俊寛はよく妻を、砂濱へ連つて行つて、字を書くことを敎へた。淺香山の歌を幾度となく砂の上に書き示した。

妻は、その年の秋に、姙娠した。かうした生活をする俊寛に取つて、子供が出來ると云ふことは、普通人の想像も及ばない欣びだつた。俊寛は、身重になつた妻を嘗めるやうに、勦るのであつた。翌年の春に、妻は玉のやうな男の子を産んだ。子供が出來てからの俊寛の幸福は、以前の二倍も三倍もになつた。

俊寛の畑は毎年よく實つた。彼は子供が出來たのを機會に、妻に手傳はせて、小屋を新しく建て直した。もう、どんな嵐が來ても、ビクともしないやうな堅牢なものになつた。

男の子が生れたその翌年に、今度は女の兒が生れ、その二年目に今度は又男の子が生れた。子供の成長と共に、俊寛の幸福は、限もなく大きくなつて行つた。彼は、鬼界ケ島に流されたことが、自分の不運であつたが、幸運であつたか分らないとまで、考へるやうになつて居た。

四

有王が、故主の俊寛を尋ねて、都からはる〴〵と、九國に下り、其處の便船を求めて、硫黃商人の船に乘り、鬼界ケ島へ來たのは、文治二年の如月半ばの事だつた。

壽永四年に、平家の一門は悉く西海の藻屑となり、今は源家の世となつて居るのであるから、俊寛に對する重科も、自然消え果てゝ、赦免の使者が、朝廷から到來すべき筈であつたが、世は平家の餘類追討に急がはしく、その上、俊寛は過ぐる治承三年に、鬼界ケ島にて、絶え果てたと云ふ風聞さへ傳はつて居たから、俊寛の事などは、何人の念頭にも

なかつた。

たゞ、故主を慕ふ有王丈は、俊寛の最期を見屆けたく、千里の旅路に、憂き艱難を重ねて、鬼界ケ島へ下つたのである。

島へ上陸した有王は、三日の間、島中を探し廻つた。が、それらしい人には絶えて會はなかつた。島人には、言葉不通なため、訊き合はすべき、よすがもなかつた。その裡に、便乘して來た商人船の出帆の日が迫つた。今は俊寛が生活した舊蹟でも見たいと思つて、人の住む所と否とを問はず、島中を縫ふやうに馳け廻つた。

四日目の夕暮、有王は人里遠く離れた海岸で、人聲を聞いた。それが、思ひがけなくも大和言葉であつた。有王は、林の中を潜つて、人聲のする方へ、行つた。見ると、其處は、ひろ〳〵と拓かれた畑で、二人の男女の土人が、並んで耕して居るのであつた。然も、彼等は大和言葉で、高々と打ち語つて居るのであつた。有王は、駭きの餘りに、畑の畔に立ち竦んでしまつた。有王の姿を見た、その男は直ぐその鍬を捨てゝつか〳〵と傍へ寄つて來た。

その男は、ぢつと有王の姿を見た。有王も、ぢつとその姿を見た。その男の眉の上のほくろを見出すと、有王は

「俊寛僧都どのには、ましまさずや」

さう叫ぶと、飛鳥のやうに、俊寛の手許に飛び縋つた。

その男は、大きく肯づいた。そして、その日に燒けて、赤銅のやうに光つて居る頬を、大粒の涙が、ほろ〳〵と流れ落ちた。二人は涙の裡に、暫くは言葉がなかつた」

「なああさましや。などかくは、變らせ給ふぞ。法勝寺の執行として時めき給ひし君の、かくも變らせ給ふものか。」

有王は、さう叫びながら、さめ〳〵と泣き伏した。が、最初邂逅の涙は、一緒に流したが、然しその次ぎの詠嘆には

俊寛は一致しなかつた。俊寛は逞ましい腕を組みながら、泣き沈む有王の姿を、不思議さうに見て居た。

彼は、有王が泣き止むのを待つて、有王の右の手を摑んで、妻を麾ねくと、有王をグン〳〵引張りながら、自分の小屋へ連れて歸つた。有王は、その小屋で、主に生き寫しの二人の男の子と三人の女の子を見た。俊寛は、長男の頭を撫すりながら、これが徳壽丸であると云つて、有王に引き合せた。その顏には、父らしい嬉しさが、隱し切れない微笑となつて浮んだ。

が、有王は凡てをあさましいと考へた。村上天皇の第七子具平親王六世皇孫である俊寛が、南蠻の女と契るなどは、何事であらうと考へた。彼は、主が流人になつたゝめ、心までが畜生道に陷ちたのではないかと嘆き悲しんだ。

彼は、その夜、夜を徹して、俊寛に歸洛を勸めた。平家に對する謀反の第一番である丈に、鎌倉に在る右府どのが、僧都の御身の上を、決して疎そかには思ふまいと云つた。

俊寛は、平家の一門が、滅んだと聞いたときには、遉に會心の微笑を洩し、妻の松の前や鶴の前が、身まかつたと云ふことを聞いたときには、涙を流したが、歸洛の勸めには、最初から首を横に振つた。有王が、涙を流しての勸説も、どうすることも、出來なかつた。

夜が明けると、それは有王の船が、出帆の日であつた。有王は、主の心に物怪が憑いたものとして、歸洛の勸めを思ひ切るより外はなかつた。

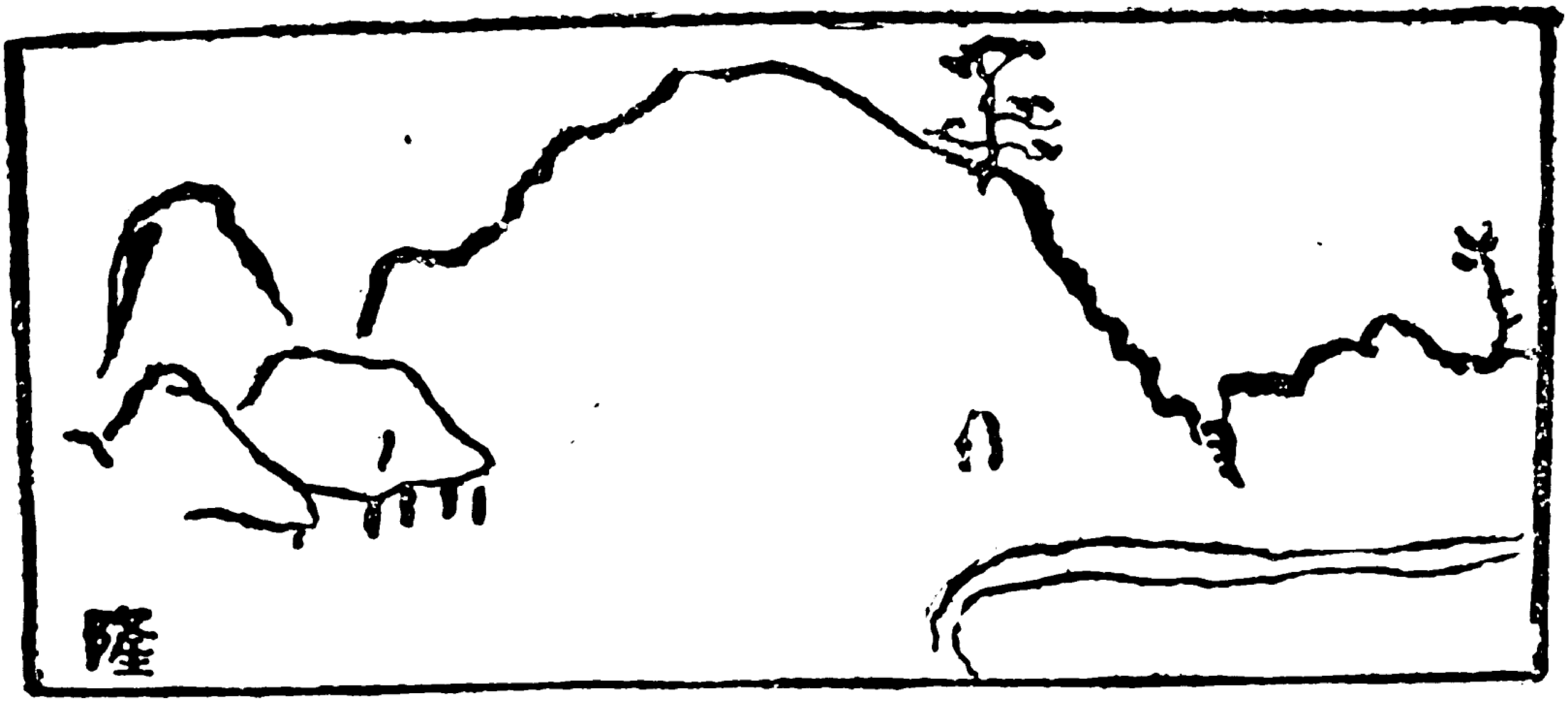
俊寛は、妻と五人の子供とを連れながら、船着場まで、見送りに來た。

そこで、形見にせよと云つて、俊寛が自分で刻んだ、木像を呉れた。それは、俊寛が、彼自身の妻の像を刻んだものだつた。俊寛の歸洛を妨げるものは、彼の妻子であると思ふと、有王はその木像までが、忌はしいものに思はれたが、

主の贈物をむげに斥ける譯にも行かないので、船に乘つてから捨てる心算で、何氣なくそれを受取つた。

別れるとき、俊寛は、「都に歸つたら、俊寛は治承三年に島で、果てたと云ふ風聞を決して、打ち消さないやうにして呉れ。島に生き永らへて居るやうなことを、決して云はないやうにして呉れ。松の前か、鶴の前が生き永らへて居たら又思ふやうもあるが、今はたゞひたぶるに、俊寛を死んだものと、世の人に思はすやうにして呉れ」、そんな意味を云つた。その大和言葉が、可なり訛が烈しいので、有王は言葉通には覺えて居られなかつた。

有王の船が出ると、俊寛及びその妻子は、暫らく海邊に立つて見送つて居たが、やがて皆は揃つて、彼等の小屋の方へ歩き始めた。五人の子供達が、父母を中に挾んで嬉々として、戯れながら歸つて行く一行を、船の上から見て居た有王は、最初はそれを獸か何かの一群のやうにあさましいと思つて居たが、その裡に何とも知れない熱い涙が、自分の頬を傳つて居るのに氣が付いた。（一〇、九、一七）



好色

芥川龍之介

平中といふ色ごのみにて、宮仕人はさらなり、人の女など忍びて見ぬはなかりけり。

宇治拾遺物語

何でかこの人に不會ては止まむと思ひ迷ける程に、平中病付にけり。然て悩ける程に死にけり。

今昔物語

色を好むといふは、かやうのふるまひなり。

十訓抄

一

泰平の時代にふさはしい、優美なきらめき烏帽子の下には、下ぶくれの顔がこちらを見てゐる。そのふつくりと肥つた頬に、鮮かな赤みがさしてゐるのは、何も臙脂をぼかしたのではない。男には珍しい餅肌が、自然と血の色を透かせたのである。髭は品の好い鼻の下に、——と云ふよりも薄い唇の左右に、丁度薄墨を刷いた

やうに、僅ばかりしか殘つてゐない。しかしつやゝかな髮の上には、霞も立たない空の色さへ、ほんのりと靑みを映してゐる。耳はその鬢のはづれに、ちよいと上つた耳たぶだけ見える。それが蛤の貝のやうな、暖かい色をしてゐるのは、かすかな光の加減らしい。眼は人よりも細い中に、絕えず微笑が漂つてゐる。殆その瞳の底には、何時でも咲き匂つた櫻の枝が、浮んでゐるのかと思ふ位、晴れ晴れした微笑が漂つてゐる、が、多少注意をすれば、其處には必しも幸福のみが住まつてゐない事がわかるかも知れない。これは遠い何物かに、憧憬を持つた微笑である。同時に又手近い一切に、輕蔑を抱いた微笑である。頸は顏に比べると、寧ろ華奢すぎると評しても好い。その頸には白い汗衫(かざみ)の襟が、かすかに香を焚きしめた、萩の花色の水干の襟と、細い一線を畫いてゐる。顏の後にほのめいてゐるのは、鶴を織り出した几帳であらうか？　それとものどかな山の裾に、女松を描いた障子であらうか？　兎に角曇つた銀のやうな、薄白い明みが擴がつてゐる…………

これが古い物語の中から、私の前に浮んで來た「天が下の色好み、」平の貞文の似顏である。平の好風に子が三人ある。丁度その次男に生まれたから、平中(へいちう)と渾名を呼ばれたと云ふ、私の Don Juan の似顏である。

二

平中は柱によりかかりながら、漫然と櫻を眺めてゐる。近々と軒に迫つた櫻は、もう盛りが過ぎたらしい。そのやや赤みの褪せた花には、永い晝過ぎの日の光が、さし交した枝の向き向きに、複雑な影を投げ合つてゐる。が、平中の眼は櫻にあつても、平中の心は櫻にない。彼はさつきから漫然と、侍從の事を考へてゐる。

「始めて侍從を見かけたのは、――」

平中はかう思ひ續けた。

「始めて侍從を見かけたのは、——あれは何時の事だつたかな？　さうさう、何でも稻荷詣でに出かけると云つてゐたのだから、初午の朝だつたのに違ひない。あの女が車へ乘らうとする、おれが其處へ通りかかる、——と云ふのが抑々の起りだつた。顏は扇をかざした陰にちらりと見えただけだつたが、紅梅や萌黃を重ねた上へ、紫の袿をひつかけてゐる、——その容子が何とも云へなかつたよ。おまけに輫へはひる所だから、片手に袴をつまんだ儘、心もち腰をかゞめ加減にした、——その又恰好もたまらなかつたつけ。本院の大臣の御屋敷には、ずゐぶん女房も澤山ゐるが、まづあの位なのは一人もないな。あれなら平中が惚れたと云つても、——」

平中はちよいと眞顏になつた。

「だが本當に惚れてゐるかしら？　惚れてゐると云へば、惚れてゐるやうでもあるし、惚れてゐないと云へば、惚れて、——一體こんな事は考へてゐると、だんだんわからなくなるものだが、まあ一通りは惚れてゐるな。尤もおれの事だから、いくら侍從に惚れたと云つても、眼さきまで昏んでしまひはしない。何時かあの範實のやつと、侍從の噂をしてゐたら、憾むらくは髮が薄すぎると、聞いた風な事を云つたつけ。あんな事は一目見た時に、もうちやんと氣がついてゐたのだ。範實なぞと云ふ男は、篳篥こそちつとは吹けるだらうが、好色の話となつた日には、——まああいつはあいつとして置け。差向きおれが考へたいのは、侍從一人の事なのだから、——所でもう少し欲を云へば、顏もあれぢや寂しすぎるな。それも寂しすぎると云ふだけなら、何處か古い畫卷じみた、上品な所がある筈だが、寂しい癖には薄情らしい妙に落着いた所があるのは、どう考へても賴もしくない。女でもああ云ふ顏をしたのは、存外人を食つてゐるものだ。その上色も白い方ぢやない。淺黑いとまでは行かなくつとも、琥珀色位な所はあるな。しかし何時見てもあの女は、何だかから水際立つた、震ひつきたいやうな風をしてゐる。あれは確かにどの女も、眞似の出來ない藝當だよ。……」

平中は袴の膝を立てながら、うつとりと軒の空を見上げた。空は簇つた花の間に、薄青い色をなごませてゐる。

「それにしてもこの間から、いくら文を持たせてやつても、返事一つよこさないのは、剛情にも程があるぢやないか？まあおれが文をつけた女は、大柢は三度目に靡いてしまふ。たまに堅い女があつても、五度と文をやつた事はない。あの惠眼と云ふ佛師の娘なぞは、一首の歌だけに落ちたものだ。それもおれの作つた歌ぢやない。誰かが、——さうさう、義輔が作つた歌だつけ。義輔はその歌を書いてやつても、とんと先方の青女房には相手にされなかつたとか云ふ話だが、同じ歌でもおれが書けば——尤も侍從はおれが書いても、やつぱり返事はくれなかつたから、あんまり自慢は出來ないかも知れない。しかし兎に角おれの文には必ずすぐに返事が來る、返事が來れば、逢ふ事になる。逢ふ事になれば大騒ぎをされる。大騒ぎをされれば——ぢきに又それが鼻についてしまふ。からまあ相場がきまつてゐたものだ。所が侍從には一月ばかりに、さつと二十通も文を書いたが、何とも便りがないのだからな。おれの艶書の文體にしても、さう無際限にある譯ぢやなし、そろそろもう跡が續かなくなつた。だが今日やつた文の中には、「せめては唯見つとばかりの、二文字だに見せ給へ」と書いてやつたから、何とか今度こそ返事があるだらう。ないかな？もし今日も亦ないとすれば、——ああ、ああ、おれもつひこの間までは、こんな事に氣骨を折る程、意氣地のない人間ぢやなかつたのだがな。何でも豐樂院の古狐は、女に化けると云ふ事だが、きつとあの狐に化かされたのは、こんな氣がするのに違ひない。同じ狐でも奈良坂の狐は、三抱へもあらうと云ふ杉の木に化ける。嵯峨の狐は牛車に化ける。高陽川の狐は女の童に化ける。桃薗の桃は大池に化け——狐の事なぞはどうでもない。ええと、何を考へてゐたのだつけ？」

平中は空を見上げた儘、そつと欠伸を嚙み殺した。花に埋まつた軒先からは、傾きかけた日の光の中に、時々白いものが翻つて來る。何處かに鳩も啼いてゐるらしい。

「兎に角あの女には根負けがするよ。たとひ逢ふと云はないまでも、おれと一度話さへすれば、きつと手に入れて見せるのだがな。まして一晩逢ひてもすれば、——あの攝津でも小中將でも、まだおれを知らない内は、男嫌ひで通してゐたものだ。それがおれの手にかかると、あの通り好きものになるぢやないか？侍從にした所が金佛ぢやなし、有頂天にならない筈はないよ。しかしあの女はいざとなつても、小中將のやうには耻しがるまいな。と云つて又攝津のやうに、妙にとりすます柄でもあるまい。きつと袖を口へやると、眼だけにつこり笑ひながら、——」

「殿樣。」

「どうせ夜の事だから、切り燈臺か何かがともつてゐる。その火の光があの女の髮へ、——」

「殿樣。」

平中はやや慌てたやうに、烏帽子の頭を後へ向けた。後には何時か童が一人、ぢつと伏し眼になりながら、一通の文をさし出してゐる。何でもこれは一心に、笑ふのをこらへてゐたものらしい。

「消息か？」

「はい、侍從樣から、——」

童はかう云ひ終ると、匆々主人の前を下つた。

「侍從樣から？本當かしら？」

平中は殆恐る恐る、青い薄樣の文を開いた。

「範實や義輔の惡戯ぢやないか？あいつ等はみんなこんな事が、何よりも好きな閑人だから、——おや、これは侍從の文だ侍從の文には違ひないが、——この文は、これは。何と云ふ文だい？」

平中は文を抛り出した。文には「唯見つとばかりの、二文字だに見せ給へ」と書いてやつた、その「見つ」と云ふ二文字だけが、――しかも平中の送つた文から、その二文字だけ切り拔いたのが、薄樣に貼りつけてあつたのである。

「ああ、ああ、天が下の色好みとか云はれるおれも、この位莫迦にされれば世話はないな。それにしても侍從と云ふやつは、小面の憎い女ぢやないか？今にどうするか覺えてゐろよ。……」

平中は膝を抱へた儘、茫然と櫻の梢を見上げた。靑い薄樣の翻つた上には、もう風に吹かれた落花が、點々と幾ひらもこぼれてゐる。……

三

それから二月程たつた後である。或長雨の續いた夜、平中は一人本院の侍從の局へ忍んで行つた。雨が夜空が溶け落ちるやうに、凄まじい響を立ててゐる。路は泥濘と云ふよりも、大水が出たのと變りはない。こんな晩にわざわざ出かけて行けば、いくらつれない侍從でも、憐れに思ふのは當然である。――かう考へた平中は、局の口へ窺ひよると、銀を張つた扇を鳴らしながら、案內を請ふやうに咳ばらひをした。

すると十五六の女の童が、すぐに其處へ姿を見せた。ませた顏に白粉をつけた、さすがに睡むさうな女の童である。平中は顏を近づけながら、小聲に侍從へ取次を賴んだ。

一度引きこんだ女の童は、局の口へ歸つて來ると、やはり小聲にこんな返事をした。

「どうかこちらに御待ち下さいまし。今に皆樣が御休みになれば、御逢ひなるさうでございますから。」

平中は思はず微笑した。さうして女の童の案內通り、侍從の居間の隣らしい、遣戶の側に腰を下した。

「やつぱりおれは知慧者だな。」

女の童が何處かへ退いた後、平中は獨りにやにやしてゐた。

「さすがの侍從も今度と云ふ今度は、とうとう心が折れたと見える。兎角女と云ふやつは、ものの哀れを感じ易いからな。其處へ親切氣を見せさへすれば、すぐにころりと落ちてしまふ。かう云ふ甲所(かんどころ)を知らないから、義輔や範實は何と云つても、——待てよ。だが今夜逢へると云ふのは、何だか話が旨すぎるやうだぞ。——」

平中はそろそろ不安になつた。

「しかし逢ひもしないものが、逢ふと云ふ譯もなささうなものだ。するとおれのひがみかな？何しろさつと六十通ばかり、のべつに文を持たせてやつても、返事一つ貰へなかつたのだから、ひがみの起るのも尤もな話だ。が、ひがみではないとしたら、——又つくづく考へると、ひがみではない氣もしない事はない。いくら親切に絆されても、今までは見向きもしなかつた侍從が、——と云つても相手はおれだからな。この位平中に思はれたとなれば、急に心も融けるかも知れない。」

平中は衣紋を直しながら、怯づ怯づあたりを透かして見た。が、彼のゐまはりには、くら闇の外に何も見えない、その中に唯雨の音が、檜肌葺の屋根をどよませてゐる。

「ひがみだと思へば、ひがみのやうだし、ひがみでないと、——いや、ひがみだと思つてゐれば、ひがみでも何でもなくなるし、ひがみでないと思つてゐれば、案外ひがみですみさうな氣がする。一體運なぞと云ふやつは、皮肉に出來てゐるものだからな。して見れば何でも一心にひがみではないと思ふ事だ。さうすると今にもあの女が、——おや、もうみんな寐始めたらしいぞ。」

平中は耳を側立てた。成程ふと氣がついて見れば、相不變小止みない雨聲と一しよに、御前へ詰めてゐた女房たちが

局々に歸るらしい、人ざはめきも聞えて來る。

「此處が辛抱のし所だな。もう半時もたちさへすれば、おれは何の造作もなく、日頃の思ひが晴らされるのだ。が、まだ何だか肚の底には、安心の出來ない氣もちもあるぞ。さうさう、これが好いのだつけ。逢はれないものだと思つてゐれば、不思議に逢ふ事が出來るものだ。しかし皮肉な運のやつは、さう云ふおれの胸算用も、見透かしてしまふかも知れないな。ぢや逢はれると考へようか？それにしても勘定づくだから、やつぱりこちらの思ふやうには、——ああ、胸が痛んで來た。一そ何か侍從などとは、緣のない事を考へよう。大分どの局もひつそりしたな。聞えるのは雨の音ばかりだぢや早速眼をつぶつて、雨の事でも考へるとしよう。春雨、五月雨、夕立、秋雨、——秋雨と云ふ言葉があるかしら。？秋の雨、冬の雨、雨だれ、雨漏り、雨傘、雨乞ひ、雨龍、雨蛙、雨皮、雨宿り……………」

こんな事を思つてゐる内に、思ひがけない物の音が、平中の耳を驚かせた。いや、驚かせた。ばかりではない。この音を聞いた平中の顏は、突然彌陀の來迎を拜した、信心深い法師よりも、もつと歡喜に溢れてゐた。何故と云へば遣戶の向うに、誰かそつと懸け金を外した、その音がはつきり響いたのである。

平中は遣戶を引いて見た。戶は彼の思つた通り、するりと閾の上を辷つた。その向うには不思議な程、空焚きの匂が立ち罩めた、一面の闇が擴がつてゐる。平中は靜かに戶をしめると、そろそろ膝で這ひながら、手探りに奧へ進み寄つた。が、この艷いた闇の中には、天井の雨の音の外に、何一つ物のけはひもしない。たまたま手がさはつたと思へば、衣桁や鏡臺ばかりである。平中はだんだん胸の動悸が、高まるやうな氣がし出した。

「ゐないのかな？ゐれば何とか云ひさうなものだ。」

かう彼が思つた時、平中の手は偶然にも、柔かな女の手にさはつた。それからずつと探りまはすと、絹らしい打衣の

袖にさはる。その衣の下の乳房にさはる。円々した頬や顋にさはる。氷よりも冷たい髪にさはる。——平中はとうとうくら闇の中に、ぢつと獨り横になつた、戀しい侍從を探り當てた。

これは夢でも幻でもない。侍從は平中の鼻の先に、打衣一つかけた儘、しどけない姿を横たへてゐる。彼は其處にゐすくんだなり、我知らずわなわな震へ出した。が、侍從は相不變、身動きをする氣色さへ見えない。こんな事は確か何かの草紙に、書いてあつたやうな心もちがする。それともあれは何年か以前、大殿油の火影に見た、何かの繪巻にあつたのかも知れない。

「忝い。忝い。今まではつれないと思つてゐたが、もう向後は御佛よりも、お前に身命を捧げるつもりだ。」

平中は侍從を引き寄せながら、かうその耳に囁かうとした。が、いくら氣は急いても、舌は上顋に引ついた儘、聲らしいものは口へ出ない。その内に侍從の髪の匂や、妙に暖い肌の匂は、無遠慮に彼を包んで來る。——と思ふと彼の顔へは、かすかな侍從の息がかかつた。

一瞬間、——その一瞬間が過ぎてしまへば、彼等は必愛欲の嵐に、雨の音も、空焚きの匂も、本院の大臣も、女の童も忘却してしまつたのに相違ない。しかしこの際どい刹那に、侍從は半ば身を起すと、平中の顔に顔を寄せながら、恥しさうな聲を出した。

「御待ちなさいまし。まだあちらの障子には、懸け金が下してございませんから、あれをかけて參ります。」

平中は唯頷いた。侍從は二人の褥の上に、匂の好い温みを殘した儘、そつと其處を立つて行つた。

「春雨、侍從、彌陀如來、雨宿り、雨だれ、侍從、侍從、……」

平中はちやんと眼を開いたなり、彼自身にも判然しない、いろいろな事を考へてゐる。すると向うのくら闇に、かちり

と懸け金を下す音がした。

「雨龍、香爐、雨夜のしなさだめ、ぬば玉の闇のうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり、夢にだに、――どうしたのだらう？懸け金はもう下りたと思つたが、――」

平中は頭を擡げて見た。が、あたりにはさつきの通り、空炷きの匂が漂つた、床しい闇があるばかりである。侍従は何處へ行つたものか、衣ずれの音も聞えて來ない。

「まさか、――いや、事によると、――」

平中は衾を這ひ出すと、又元のやうに手探りをしながら、向うの障子へ辿りついた。すると障子には部屋の外から、嚴重に懸け金が下してある。その上耳を澄ませて見ても、足音一つさせるものはない。局々は大雨の中に、いづれもひつそりと寐靜まつてゐる。

「平中、平中、お前はもう天が下の色好みでも何でもない。」

平中は障子に寄りかかつた儘、失心したやうにかう呟いた。

「お前の容色も劣へた。お前の才も元のやうぢやない。お前は範實や義輔よりも、見下げ果てた意氣地なしだ。……」

四

「あの侍従と云ふ女には、さすがの平中もかなはないさうだね。」

滑原の義輔は太儀さうに、打ちやんだ碁盤を押しやると、豕のやうな鼻息を洩らした。平中の友達は大勢あつても、義輔程肥つたのは一人もゐない。それが今日の蒸暑さに、縹の水干も滴る位、額中に汗を滲ませてゐる。

「さう云ふ噂だね。」

相手の平の範實は、その反對に頰のこけた、淺黑い顏の持ち主である。これは坐大の池を見ながら、退屈さうな返事をした。平中の友達は大勢あつても、範實程依怙地な男はない。が、流行はこの男にも、派手な羊齒の葉の模樣を拔いた、薄青い水干を纏はせてゐる。

「あいつには好い見せしめだよ。あいつは女御更衣でなければ、どんな女にでも手を出す男だ。ちつとは懲らしてやる方が好い。」

「へええ、君も孔門の御弟子か？」

義輔は苦い顏をしながら、黃紙の扇に胸を煽いだ。

「孔孟の敎なぞは知らないがね。どの位女が平中の爲に、泣かされたか位は知つてゐるのだ。もう一言次手につけ加へれば、どの位苦しんだ夫があるか、どの位腹を立てた親があるか、どの位怨んだ家來があるか、それもまんざら知らないぢやない。さう云ふ迷惑をかける男は、當然鼓を鳴らして責むべきものだ。君はさうは考へないかね？」

「さうばかりも行かないからね。」

範實はさつきに比べると、やや興味が減じたやうに、皮肉な微笑を漂はせてゐる。

「成程平中一人の爲に、世間は迷惑してゐるかも知れない。しかしその罪は平中一人が、負ふべきものでもなからうぢやないか？」

「ぢや又誰が負ふのだね？」

「それは女に負はせるのさ。」

「女に負はせるのは可哀さうだよ。」

「平中に負はせるのも可哀さうぢやないか？」

「しかし平中が口說いたのだからな。」

「男は戰場に太刀打ちをするが、女は寢首しか搔かないのだ。人殺しの罪は變るものか。」

「妙に平中の肩を持つな。だがこれだけは確かだらう？我々は世間を苦しませないが、平中は世間を苦しませてゐる。」

「それもどうだかわからないね。一體我々人間は、如何なる因果か知らないが、互に傷け合はないでは、一刻も生きてはゐられないものだよ。唯平中は我々よりも、餘計に世間を苦しませてゐる。この點はああ云ふ天才には、やむを得ない運命だね。」

「冗談ぢやないぜ。平中が天才と一しよになるなら、この池の鯰も龍になるだらう。」

「平中は確かに天才だよ。あの男の顏をよく見給へ。あの男の聲を聞き給へ。あの男の文を味讀し給へ。もし君が女だつたら、あの男と一晩逢つて見給へ。あの男は空海上人だとか小野道風だとかと同じやうに、母の胎内を離れた時から、非凡な能力を授かつて來たのだ。あれが天才でないと云へば、天下に天才は一人もゐない。」

義輔は何とも答へずに、二三度大きな吐息を洩らした。高々と簾を上げた軒には、時々燕の影が見える。範實はそれを眺めながら、又冷やかに言葉をついだ。

「その點では我々二人の如きも、到底平中の敵ではないよ。」

「しかしだね。しかし天才は君の云ふやうに、罪ばかり作つてはゐないぢやないか？たとへば道風の書を見れば、微妙な筆力に動かされるとか、空海上人の誦經を聞けば、——」

「僕は何も天才は、罪ばかり作ると云ひはしない。罪も作ると云つてゐるのだ。」

「ぢや平中とは違ふぢやないか？　あいつの作るのは罪ばかりだぜ。」

「それは我々にはわからなからうな。假名も碌に書けないものには、道風の書もつまらないぢやないか？　信心氣のちつともないものには、空海上人の誦經よりも、傀儡（くぐつ）の歌の方が面白いかも知れない。天才の功德がわかる爲には、こちらにも相當の資格が入るさ。」

「それは君の云ふ通りだがね。平中尊者の功德なぞは、――」

「平中の場合も同じぢやないか？　ああ云ふ好色の天才の功德は、女だけが知つてゐる筈だ。君はさつきどの位女が、平中の爲に、泣かされたかと云つたが、僕は反對にかう云ひたいね。どの位女が平中の爲に、無上の歡喜を味はつたかどの位女が平中の爲に、しみじみ生き甲斐を感じたか、どの位女が平中の爲に、犧牲の尊さを敎へられたか、どの位女が平中の爲に、――」

「いや、もうその位で澤山だよ。君のやうに理屈をつければ、案山子も鎧武者になつてしまふ。」

「君のやうに嫉妬深いと、鎧武者も案山子と思つてしまふぜ。」

「嫉妬深い？　へええ、これは意外だね。」

義輔はむつとしたやうに、水干の膝を組み直した。

「君は平中を責める程、淫奔な女を責めないぢやないか？　たとひ口では責めてゐても、肚の底では責めてゐまい。それはお互に男だから、何時か嫉妬が加はるのだ。我々はみんな多少にしろ、もし平中になれるものなら、平中になつて見たいと云ふ、人知れない野心を持つてゐる。その爲に平中は謀叛人よりも、一層我々に憎まれるのだ。考へて見れば可

哀さうだよ。」

「ぢや君も平中になりたいかね？」

かう云ふ義輔の聲の中には、嘲るやうな調子があつた。

「僕か？ 僕はまあなりたくない。だから僕が平中を見るのは、君が見るよりも公平なのだ。

範實は平氣な顔をした儘、飽かずにまだ饒舌りつづけた。

「平中は女が一人出來ると、忽ちその女に飽きてしまふ。さうして誰か外の女に、可笑しい程夢中になつてしまふ。あれは平中の心の中には、何時も巫山の神女のやうな、人倫を絶した美人の姿が、髣髴と浮んでゐるからだよ。平中は何時も世間の女に、さう云ふ美しさを見ようとしてゐる。又實際惚れてゐる時には、見る事が出來たと思つてゐるのだ。が、勿論二三度逢へば、さう云ふ蜃氣樓は壞れてしまふ。その爲にあいつは女から女へ、轉々と憂き身をやつして行くのだ。しかも末法の世の中に、そんな美人のゐる筈はないから、結局平中の一生は、不幸に終るより仕方がない。その點では君や僕の方が、遙かに仕合せだと云ふものさ。しかし平中の不幸なのは、云はば天才なればこそだね。あれは平中一人ぢやない。空海上人や小野の道風も、きつとあいつと似てゐたらう。兎に角仕合せになる爲には、御同樣凡人が一番だよ。…………」

五

平中は獨り寂しさうに、本院の侍從の局に近い、人氣のない廊下に佇んでゐる。その廊下の欄にさした、油のやうな日の色を見ても、又今日は暑さが加はるらしい。が、庇の外の空には、簇々と綠を抽いた松が、靜かに涼しさを守つてゐる。

「侍從はおれを相手にしない。おれももう侍從は思ひ切つた。――」

平中は蒼白い顔をした儘、ぼんやりこんな事を思つてゐる。

「しかしいくら思ひ切つても、侍從の姿は幻のやうに、必眼の前へ浮んで來る。おれは何時かの雨夜以來、唯この姿を

忘れたいばかりに、どの位四方の神佛へ、祈願を凝らしたかわからない。が、加茂の御社へ行けば、御鏡の中にありありと、侍從の顔が映つて見える。清水の御寺の内陣にはひれば、觀世音菩薩の御姿さへ、その儘侍從に變つてしまふ。もしこの姿が何時までも、おれの心を立ち去らなければ、おれはきつと焦れ死に、死んでしまふのに相違ない。——」

平中は長い息をついた。

「だがその姿を忘れるには、——たつた一つしか手段はない。それは何でもあの女の、淺間しい所を見つける事だ。侍從もまさか天人ではなし、不淨もいろいろ藏してゐるだらう。其處を一つ見つけさへすれば、丁度女房に化けた狐が、尾のある事を知られたやうに、侍從の幻も崩れてしまふ。おれの命はその刹那に、やつとおれのものになるのだ。が、何處が淺間しいか、何處が不淨を藏してゐるか、それは誰も敎へてくれない。ああ、大慈大悲の觀世音菩薩、どうか其處を御示し下さい。侍從が河原の女乞食と、實は少しも變らない證據を。……」

平中はかう考へながら、ふと懶い視線を擧げた。

「おや、あすこへ來かかつたのは、侍從の局の女の童ではないか？」

あの利巧さうな女の童は、撫子重ねの薄物の衵（あこめ）に、色の濃い袴を引きずりながら、丁度こちらへ歩いて來る。それが赤紙の畫扇の陰に、何か筥を隠してゐるのは、きつと侍從の大便を捨てに行く所に相違ない。その姿を一目見ると、突然平中の心の中には、或大膽な決心が、稻妻のやうに閃き渡つた。

平中は眼の色を變へたなり、女の童の行く手に立ち塞つた。さうしてその筥をひつたくるや否や、廊下の向うに一つ見えた、人のゐない部屋へ飛んで行つた。不意を打たれた女の童は、勿論泣き聲を出しながら、ばたばた彼を追ひかけて來る。が、その部屋へ躍りこむと、平中は遣戸を立て切るが早いか、手早く懸け金を下してしまつた。

「さうだ。この中を見れば間違ひない。百年の戀も一瞬の間に、煙よりもはかなく消えてしまふ。」

平中はわなわな震へる手に、ふはりと筥の上へかけた、香染の薄物を擧げて見た。筥は意外にも精巧を極めた。まだ眞新しい蒔繪である。

「この中に侍從の大便がある。同時におれの命もある。」

平中は其處に佇んだ儘ぢつと美しい筥を眺めた。遣戸の外にはさつきから、女の童の泣き聲が續いてゐる、

「蓋を一つとるが最後、命を懸けた侍從の姿も永久に目前を立ち去るのだ。さう思へばおれも、今更のやうに、愛惜の涙が浮んで來る。侍從。侍從。これが戀しいお前とも、もう一生の別れなのだぞ。」

平中は暫くためらつた後、とうとう筥の蓋をとつた。筥には薄い香色の水が、たつぷり半分程はひつた中に、これは濃い香色の物が、二つ三つ底へ沈んでゐる。――と思ふと夢のやうに、丁字の匂が鼻を打つた。これが侍從の大便であらうか？いや、吉祥天女にしても、こんな大便はする筈がない。平中は眉をひそめながら、一番上に浮いてゐた、二寸程の物をつまみ上げた。さうして髭にも觸れる位、何度も匂を嗅ぎ直して見た。匂は確かに紛れもない、飛び切りの沈(じん)の匂である。

「これはどうだ？この水もやはり匂ふやうだが、――」

平中は筥を傾けながら、そつと水を啜つて見た。水も丁字を煮返した、上澄みの汁に相違ない。

「するとこいつも香木かな？」

平中は今つまみ上げた、二寸程の物を噛みしめて見た。すると齒にも透る位、苦味の交つた甘さがある。その上彼の口の中には、忽ち橘の花よりも涼しい、微妙な匂が一ぱいになつた。侍從は何處から推量したか、平中のたくみを破る爲に、香細工の大便をつくつたのである。

「侍從。お前は平中を殺したぞ。」

平中はかう呻きながら、ぱたりと蒔繪の箱を落した。さうして其處の床の上へ、佛倒しに倒れてしまつた。その半死の瞳の中には、紫磨金の圓光にとりまかれた儘、嫣然と彼にほほ笑みかけた侍從の姿を止めながら。…………

しかしその時の侍從の姿が、何時か髮も豐かになれば、顏も殆玉のやうに變つてゐた事は事實である。(終)

現代文化人の心理

文學博士

◇◇四六版箱入背皮全文字入　最新式機械綴約參百五拾頁◇◇

定價金貳圓五拾錢

◇◇送料金拾六錢◇◇

日本社會學の泰斗たる米田博士苦心の勞作にして、現代文化人の考察から現代社會問題の文化的意義を究明せし重要なる著書、篇中文化の學問的主旨を闡明し、現代文化の各國に於ける特異を較べ、而して其心理を解剖し、文化問題としての現代社會問題を說明すること詳細を極む。現代に於ける文化發達の概念、民族主義、國家主義、人道主義、世界主義其他苟くも近代文化の百般の事象を知らんとする者の必讀すべき良書である

化哲學叢書」の姉妹叢書

文明の魁となり、且つ完璧せる新世界創成に貢献せんが爲めてある。

科學の研究者は多い、而も一代の權威として深奧幽遠なる科學を指導するの大家として、西に、桑木彧雄氏あり、東に、石原純氏がある。兩氏は我が科學界に於ける、二大權威である。この兩者が愼密、周到たる用意を以て、茲に「自然科學叢書」刊行の大業を監修し、又自ら執筆さるゝことゝなつた。隨つてその內容の嚴正なるは喋々を要せず。拾數冊の各書何れも現代を指導し得る權威の所產である。

尙ほその內容は次號にて詳報すべし。

編輯を了へて

□太平洋會議とか、軍備制限とか、くだらぬ夢ばかり見て短かい夏の夜も去つてしまつた。さて、締つたからだで今度は何地の方へ驀進しやうか。

□我が陸軍から、血の道を入れ擧げたと稱するセメノフも遂に沒落して、大連ではその敵役たるユーリンやペトロフと日露通商再開を協議しておる陸軍のお歷々、いかに世の中が廻り燈籠とて、こんな皮肉はタントあるまい。主義や主張を以つて立つ日本魂ある日本人なぞがこんな双股的のとが出來るものであろうか—

□しかし、こんな揚足取りはせぬこととして、奈落の底で塗炭の苦しみにモガイて居る隣人は一日も早く救つて遣りたい。

□一號は一號と本誌は世界的に權威あるものとして扣蓄する、日本に雜誌「改造」の存立することが世界的文化に重大意義を齎らすやうに、そんな責任感を以つて雜誌「改造」は經營して行く。

□婦人參政權提唱の鼻祖として世界的一人者たるパンカアースト女史は十一月號に「婦人參政より共產主義へ」の趣味あり、有益なる大論文を寄せられた、婦人參政權提唱當時の女史の思想と、現在の赤化せる活躍振りとは、亦今昔の感を以つて見らるる抱負と勇氣に富める名文である、改造期の先覺男女への捧物として第一の好物。

□世界第一人者として世界人崇拜の中心たるアインスタイン氏もロマン•ローラン氏も雄篇を寄せて戴くつもりだ、新春とともにラッセル教授も數百枚の構想になる大論文をいただける約束になつておる。氏の著書は本社によつて總て翻譯の任に當る、隨つて出版權も當方にあると思つて戴きたい。

□賀川豊彦氏は東京に於ける日曜學校講演のため九月十九日上京、廿三四日まで滯京して各地の講演に應ずるはづだ、「死線を越えて」の續篇も九月三十日までに脱稿の筈

□それから十月早々、新らしき村の武者小路氏も出京して二三旬滯京するとの通知が來た。賀川氏にせよ、武者氏にせよ、我黨の珍客だ、我々は兩氏の上京をして社會改造にも意義あるものとしたい。

□大杉氏苦心の力作たる「自敍傳」は十月號より本誌に掲載さして戴くことになつた、氏の鋒のある名文は氏の閲歷と、性格との反映である、定めし江湖に多大の歡呼を受けることだろう。

□石原純氏十月號所載「アインスタイン印象記」の九十六頁十五行目過ぎないノ下に一の「です、アインスタインは大概自分の考へて居る」の二十一字脱字があることを發見した、筆者及讀者に謝辭する。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八十錢	二錢
半ヶ年	四圓八十錢	不要
壹ヶ年	九圓六十錢	不要

註文の注意

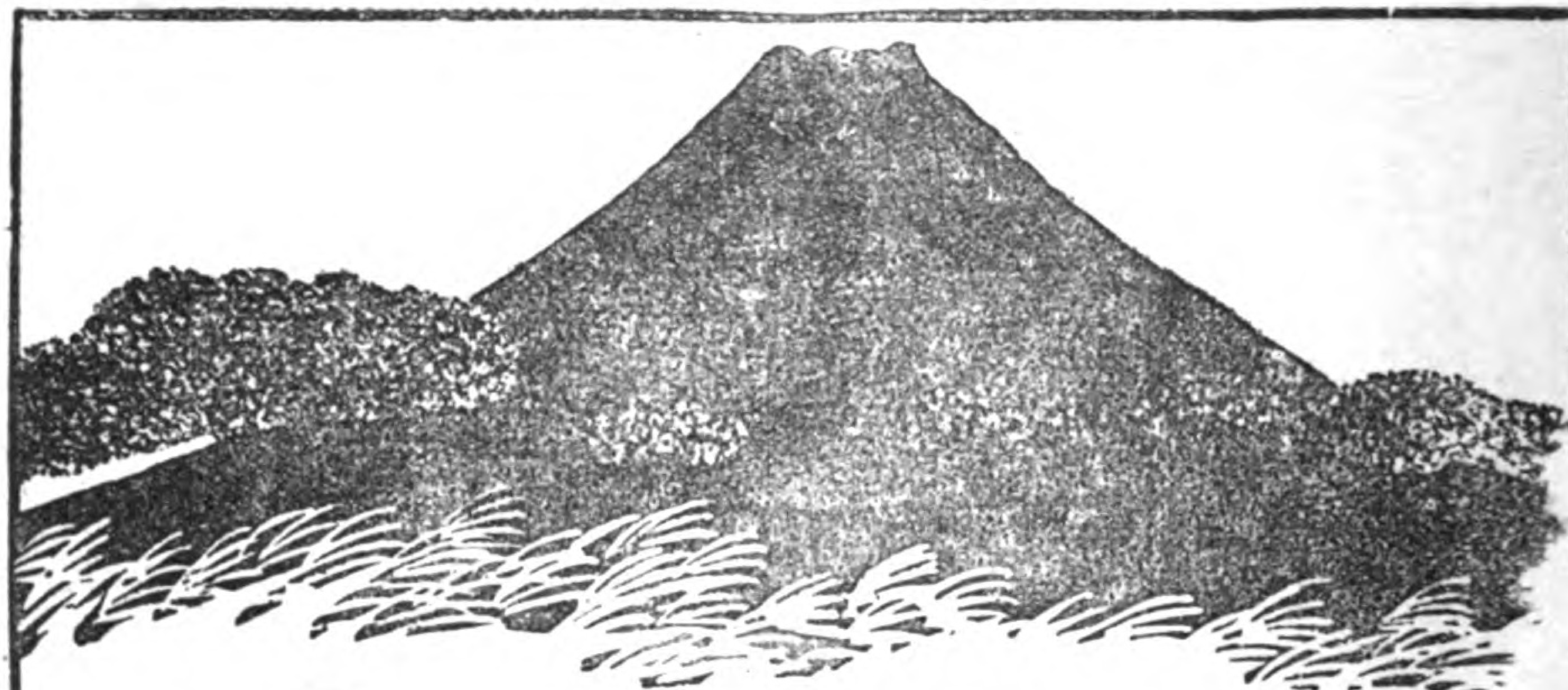
▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割增の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正十年九月廿日印刷納本
大正十年十月一日發行

（特價壹圓）

編輯兼發行人　東京市芝區伊皿子町四拾番地　平田貫一郎
印刷人　東京市京橋區西紺屋町二十七番地
印刷所　秀英舍

發行所　東京芝區櫻田備前町一　改造社
電話銀座二九五四
振替東京八四〇二



THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS ETC.
PRICE : EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
OFFICE : KAIZOSHA, 1 SAKURADABIZEN-CHO SHIBA, TOKIO

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可
大正拾年拾月一日發行（毎月一回一日）
大正拾年九月廿日印刷納本
第參卷第拾壹號
拾月特大號
特價金壹圓